

雷鳴は光り轟く、仲間と共に

あーくわん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小学生の頃からサッカーに触れ、全国大会にまで出場した少年、加賀美（かがみ）柊弥（とうや）。柊弥はサッカーバカ、円堂守と共に雷門中へ入学。そこから柊弥のサッカーはより色濃いものに・・・

イナイレ見返してたら創作意欲が湧いて止まらなかつたというのと、イナズマイレブンの小説がハーメルンでは多くないことから「よし、書こう」と思い切りました。

他作品と並行して執筆するので更新頻度は遅めになるかと思いますが、お付き合い頂けると幸いです。

評価・感想お待ちしております。

<https://twitter.com/arkonehameln?s=09>

Twitterアカウント開設しました。使うか分かりませんが更新などについて呟きます。よろしければフォローお願いします。

12月27日

なんか違うな、と思い小説タイトル変更。

12月30日

あらすじを変更。

1月5日

Twitterアカウントを追記。

5月23日

生きてます、もう少しで一段落つけるので今しばらくお待ちください
い・・・い！

目次

F F編

第1話	来たぞ雷門中！と思ったら何処だここ？	1
第2話	プロトコル・オメガ	9
第3話	集え雷門、来たれ帝国	21
第4話	弱者と強者、勝者はどちらか。	36
第5話	次なる試合と猛る龍	56
第6話	打ち破れ、呪いのサッカー！	70
第7話	降り注ぐ稲妻と貫く稲妻	82
第8話	晴らせ屈辱、イナビカリ修練場！	105
第9話	データを超えろ、予測を上回れ	115
第10話	オタツキー・トリツキー・サッカー	136
第11話	見える敵、見えざる敵	153
第12話	影を祓って堂々と	170
第13話	因縁の戦いに終止符を	187
第14話	伝説のイレブン今再び	197
第15話	全国初舞台は忍者と共に	211
第16話	まさかの報せは一度ならず	225
第17話	壁破るはイナズマ魂	235
第18話	復活のペガサスと次なる相手	248
第19話	不死鳥は羽ばたいて	259
第20話	神への挑戦、目指せ高みを	272
第21話	絶望を前にしても諦めず	289
第22話	光り轟け仲間と共に	306

第23話	宇宙人の襲来	319
第24話	地上最強を求めていざ	331
第25話	悪意に満ちた策略	346
第26話	失われた雷と炎	363
第27話	新たななるストライカー、吹雪士郎	371
第28話	速さを求めて雪国特訓	383
第29話	星雪の嵐が吹く頃に	396
第30話	イレギュラーの参戦と決着	407
第31話	新たな敵と次なる目的地	422
第32話	漫遊時の問題児	433
第33話	3 minutes later	448
第34話	陰謀と暗躍	464
第35話	狂気の代償	473
第36話	懐かしき雷門町にて	487
第37話	衝突する紅と蒼	500
第38話	再び相見える為に	512
お知らせ		520
蛇足その1		522

FF編

第1話 来たぞ雷門中！と思つたら何処だこころ？

俺の名前は加賀美^{かがみ} 柊弥^{とうや}。今年からここ、雷門中に通うことになる
新中学一年生だ。

桜が舞う校門を前にすると、ようやく俺も中学生なのか・・・という
ことを実感させられる。

「遂に来たぜー！ツ！！」

「おい馬鹿、恥ずかしいからやめろ！」

そして隣のこいつは^{えんどうまもる} 円堂守。ご近所ということもあり、小さい頃
からの仲だ。ちなみにいうと極度のサッカーバカだ。

かくいう俺も、幼い頃から地元のクラブチームに所属してサッカー
を今までやっていたが、守はそうではない。

そういつた所に所属することはなく、亡くなったおじいさんが残し
たサッカーボール一つをひたすらに蹴っていた。時折俺と二人で
やったりはしていたな。

「だって、ようやくちゃんとしたサッカーが出来るんだ！しかもあの
雷門で！テンション上がってくるぜ！」

「まあ、無理もないか・・・」

ずっとこの時を待ってたしな・・・俺もこいつと同じチームでサッ
カーするのが楽しみで仕方なかったけど。

「じゃあ、行くか！」

「おう！」

校舎の中に入り、早速入部届を出すべく職員室へ向かう。入学式や

らなんやらが終わったあとでもいいとは思うんだが・・・守がどうしてもって聞かないから諦めた。

さて、サッカー部顧問の冬海先生の席は・・・あそこか。

「失礼します！」

守が我先にと職員室の中に足を踏み入れる。頼むから少し落ち着きを持ってくれ本当に、周りの目が結構痛い。

「サッカー部入部希望です！」

「同じく、入部希望です。」

叩きつけるように入部届を取り出す。

が、その直後帰ってきた返事は、予想の斜め上すぎる一言だった。

「はあ？この学校にサッカー部はありませんよ。」

「え？。」

今なんて？なんておっしやいましたか先生。

「あの・・・本当に？」

「何回も言わせないでください。この学校にサッカー部はありませんよ。」

守と視線を合わせ、数秒の沈黙の後――

「ええええええええ!!」

職員室に大声が響く。我ながら恥ずかしい。

「まさかサッカー部が無いなんてな・・・守?」

サッカー部はない。その衝撃の事実を告げられた俺たちは、浮かぬ気持ちのまま入学式、その他諸々を終えた。

全ての日程が終わり、さあ下校と言うところで何やら俯きっぱなしの守に声をかける。

「・・・サッカー部がないなら、作ればいいじゃないか! そうと決まれば早速部室に行ってみようぜ! 終弥!」

「沈んでると思ったら何だ・・・全然そんなことないじゃないか。」
「へ? そう見えたか?」

そんなやり取りをしていると、前方にある人影を見つける。

「あ、円堂君、加賀美君!」

「お、秋か。」

「サッカー部の件、どうだった?」

事の顛末を秋に説明する。開いた口が塞がらないといった様子でこちらを見てくる。

「そっか、サッカー部、ないんだ・・・」

「けどな、ないなら作ればいいと思って! とりあえず今からサッカー部の部室に行ってみようと思うんだ。」

というわけで秋と合流し、少し歩いてサッカー部の部室へと向か

う。使われていないだろうが。

「——ここが、雷門中サッカー部の部室か。」

「歴史を感じるね・・・」

「よーし！まずはサッカー部結成への第一歩、部室掃除からやるぞ!!」
「部じゃないのに掃除していいものなのだろうか・・・」

流されるがままに部室の掃除を始める。まず言おう、埃が凄まじいことになっている。何年使われていないんだろうか・・・
3人で手分けして掃除していると、突如守が声を上げる。

「あーっ!!」

「なんだ、どうした？」

「見てくれよ柊弥、秋！」

これは・・・サッカー部の看板か。

俺ら二人にそれを見せると守は外に飛び出し、部室に取り付ける。晴れてサッカー部室の完成というわけだ。もう一度言う。まだ部として認められてないはずだが。

「よーし！雷門中サッカー部の始動だ!!」

「部員、沢山集まるといいね。」

「俺、サッカー部が出来たらさ、フットボールフロンティアっていう大会に——」

守が熱く語りだした、その時だった。

「無駄だ、雷門にサッカー部は出来ない。」

「「?!」」

突如として現れた声の方向に目をやると、変な男が立っていた。なんかこう、変なのだ。まず服装。やたらぴっちりとした服を着ている・・・そういう趣味なのだろうか？

そして脚元にあるもの。一見してサッカーボールのようだが、変な色をしている。

「・・・誰だ、お前。」

「サッカー部は出来ない。確実に。」

こいつ人の話を聞いていない。誰だと聞いているのによく分からん意見を押し付けてきやがる・・・

「どうしてそう決めつけるんだ！分からないだろ！雷門にサッカー部は作れるさ！本当にサッカーが好きなヤツらが集まれば！」

そこから謎の男と守の論争が始まる。サッカーが好きな奴はいないと主張する男。そんなことないと反論する守。

「俺はサッカーを嫌いになんてならない！」

「そうか・・・」

『ムーブモード』

男が脚元の物体を押すと、その物体から機械的な音声が鳴る。するとどうしたことだろう。光ながらその物体は浮き、SF映画のように謎のフィールドのようなものを展開し俺たちを包み込む。

「なん——だ？」

光に包まれ、目を開けるとそこには知らない光景が広がっていた。

ここは・・・サッカースタジアム？

目の前を向くと、先程の男に加え、同じような服装をした奴らが何人もいる。一人だけ違う服装・・・これはまるで、サッカーチームのようじゃないか。

「ここは、お前らがサッカー奪われるのにふさわしい場所だ。」

「何を言ってる・・・ん？」

辺りを見渡すと、変な集団とは別の人間に気づく。制服を着た男の子、変な服を着た男の子、そして・・・熊？は？どういうことだ？

「今からお前たちにはサッカー・・・試合をしてもらおう。」

「は？意味が分からないな。唐突にこんな場所に連れてきて。」

「加賀美さん！円堂さん！そいつらはサッカーを消そうとしているんです！」

制服の男の子・・・特徴的な髪型をしている。彼が突如声を掛ける。誰だ？

「えっと・・・君は？」

「あ、俺は松風^{まつかぜ}天馬^{てんま}って言います。えっと・・・色々説明が難しいんですけど・・・とにかく、俺は大好きなサッカーを守るためにここに来ました！このままじゃ大変なことになるんです・・・信じてください！」

男の子・・・天馬が必死に訴えてくる。とても嘘をついているようには見えないな。

守と顔を見合わせ、しばらく考え込む。

俺たち二人の答えは、言葉を交わさずとも決まっていた。

「分かった！」

「君のさっきの言葉・・・嘘をついているようには思えない。」

「サッカーが好きだつて言うやつのは信じるさ。大好きなものには、嘘が付けないからな！」

「・・・信じてくれるんですか！」

天馬が顔を輝かせながらこちらを見てくる。守の理論は分からないくもないがよく分からない・・・まあ、天馬を信じられるという点では同意だ。

「おいお前！サッカー消すつて本当なんだな？」

「雷門にサッカー部が無いのもお前らの仕業か・・・返してもらおうぞ！」

「あ、それは元々だよ。」

「あれ？」

変な服装の・・・緑髪の男の子にそう指摘される。滑り出し悪いなオイ。

「さあ、勝負だ！」

守がそう意気込んだ瞬間、どこからともなく男性が現れる。一体どうなってることやら・・・

「おーつと!?!店の厨房かと思っいたらいきなりどこかのサッカー場だ！」

見知らぬ男性が来たと思ったら、謎の男・・・アルファというらしい。アルファが「頼むぞ」と声を掛けると「任せとけ！」と意気込み始めた。どうやらこの試合の実況をしてくれるらしい。うむ、分かん。

「とは言ったものの・・・こっちは人数足りてないが。」

「大丈夫、いるよ！」

緑髪の・・・フェイという少年の方を向くと、先程までいなかったはずの人達がいた。ご丁寧にユニフォームまで着て。フェイが指を鳴らすと、俺と守も同じユニフォームになる。もうツツコミ疲れた。ノーコメントで。

全員が配置につく。守はキーパー。俺はフォワードだ。

「さあ、サッカーやろうぜ!!」

中学入学後初のサッカーをこんなよく分からない状態で行うことになるとは・・・まあいい。

サッカーはサッカーだ。やるからには本気で行くぞ。

「応!!」

試合開始だ。

第2話 プロトコル・オメガ

「さあ！サッカーやろうぜ！」

試合開始のホイッスルがなる。ボールは相手チーム、プロトコル・オメガからだ。

その後、相手選手達が突如として飛び出し、フェイを囲んで視界を遮る。何をしたかと思えば、今度はこっちのチームの選手・・・フェイの分身であるデュプリ？達に向かって乱暴なプレイをし始めた。

開始早々、やってくれる・・・！

「ぐっ——！」

分身であるデュプリ達が傷付けられると、どうやらその元となっているフェイにも負担がかかるようだ。デュプリを出すこと自体それなりの負担になっていると聞いた。このままではフェイが潰れてしまう。

「待てよ・・・サッカーは、サッカーはそんなんじゃないぞ!!ボールは・・・人を傷付ける為のものじゃない！」
「そうだ・・・サッカーが泣いてるよ！」

守と天馬が切実に語る。

「サッカーは滅ぶべき物。よって円堂守。サッカーによってお前自身
が滅べ。」

アルファは何かをぼそぼそと呟いた後、ボールを蹴りあげる。落ちてきたところをもう一度蹴り、ボールは守が待ち構えるゴールへと迫る。

「絶対に止める・・・ゴツドハンド!!」

守の手からエネルギーが溢れ、一際大きな掌の形を作る。迫り来るボールを正面から受け止め、数秒の拮抗の後ボールは守の手の中に収まる。

ずっと練習してたあの必殺技・・・ここで完成させたか!

「出来た・・・とうとう出来たぞお!」

「・・・・・・・・・・イエス。」

アルファが何か呟くが聞き取れない。

「みんな!反撃開始だ!」

天馬の指示で全員が動き出す。守のゴールキックから試合は再び動き出す。天馬に向かって蹴られたそれは、相手選手に取られてしまう。パスを回し、再び相手の攻撃になるかと思われたが・・・

「行かせない!」

後ろから天馬が凄まじい速さで追いかける。なんて速さだ・・・恐らく、俺よりも全然速い。

「——ワンダートラップ!!」

背後から相手のボールを奪い取り、そのまま前線に上がっていく。それを確認して俺も切り込んでいく。

それを相手が黙って見逃す訳もなく、天馬に二人の選手が向かっていく。

「アグレッシブビート!!フェイ!」

だが天馬は難なくその二人を抜く。凄いな、天馬・・・
そしてボールはフェイへ。ディフェンダーがフェイに襲い掛かるも、なんの問題も無い。何故なら・・・このチームのフォワードはフェイ一人ではないから。

「加賀美君！」

「ナイスパスだ！フェイ！」

フェイからボールを受け取り相手キーパーと一対一。キーパーの守も、キャプテンの天馬も頑張ってるんだ。俺もやってやる——！

「来い・・・！」

相手キーパーを見据え、一呼吸置く。身体に力が満ちていくのを感じながら、回転を与えるようにボールを爪先で踏みつける。踏みつけられたボールは、回転しながら段々と雷を帯び、上昇始める。俺の身体の真ん中ほどの高さまで上昇した所で、一際強く放電する。ここだ——！！

「轟一閃!!」

僅かに引いた右脚を、居合切りの様なモーションでボールに向かって一瞬で振り抜く。力を加えられたボールはその方向に向かって轟音と共に真っ直ぐに突き進む。相手ゴールに目掛けて。

「キーパーコマンド03!!」

キーパーの両手にエネルギーが集まり、キーパーはそれを咆哮と共に発散させる。放たれたエネルギーはボールに打ち付けられ、勢いを殺そうと粘るが——

「ぐああああああああ!!」

「――よし。」

「凄い、あれが柊弥さんの轟一閃・・・!」

「すごい速さだったよ、加賀美君。」

天馬とフェイが駆け寄ってくる。

「ああ・・・不思議な感覚だ。いつも以上の力を出せている。」

「恐らく、共鳴現象だろうね。」

共鳴現象・・・?一瞬どんなものなのか聞こうとしたが、理解出来
そうで理解出来なさそうだからいい感じに流した。

中央から試合再開。長い髪の女のループを追いかけるように相手
チームが前線へ上がっていく。こいつらも速いな。

ボールは相手チームキャプテン、アルファへ。

「シュートコマンド01!!」

高くから回転と共に打ち出されたそのボールは、凄まじい威力であ
ることが分かる。空を切りながらゴールへと迫る。頼むぞ、守・・・
ん?何だあれは。守から光が・・・

「はああああああ!魔神グレイト!!」

光が溢れていると思ったら、今度は背中から影が爆発するように溢
れ出し、魔神・・・?を形作った。凄まじいエネルギーを肌で感じる・・・
あれは一体?

「円堂さんが・・・化身使いに!?!」

「グレイト・ザ・ハンド!!」

先程のゴッドハンドの何倍ものパワーでアルファの必殺シュートを難なく受け止める。あのシュート……俺の轟一閃以上のパワーだったはず。この土壇場でどこまで成長しやがる……守！

技の反動からかへたり込む守。が、すぐさま立ち上がりアルファに向かって声を掛ける。

「どうだ！俺はサッカーを嫌いになんてならないぞ！」

再び試合再開。ドリルみたいな髪をしたデュプリがフェイに向かってパスするも、相手にカットされる。

天馬が心配して駆け寄るも、「大丈夫。」と返すフェイ。デュプリのコントロールだけでも大変だろうに……俺が何とかしなければ。

「おーい、この試合、俺も入れてくれないかな？」

突如スタジアムに声が響く。声の主はフィールドまで降りてくる。

誰だ……？

「剣城！来てくれたんだな！」

天馬が駆け寄る。が、近付いたところでどうやら別人であることが分かったらしい。

「俺は君の知っている京介では無い。京介の兄、剣城優一だ。」

「……誰だ？」

「どうやら、パラレルワールドから強い味方が来たようだよ。」

パラレルワールド……平行世界？ダメだ、分からん。

「あはは……ちよつと複雑だからね。試合が終わったらちゃんと説明

するよ。」

本当に何者なんだフェイ達は……

何はともあれ、優一さんは俺たちと一緒に戦ってくれるようだ。デュプリを一人出さなくても良くなるからフェイの負担も少なくなる。どうやらポジションはフォワードのようだから、攻めの手数も増える。

「加賀美さんや円堂さんとプレイできるなんて、光栄です。」

「えっと……なんの事ですか？」

「守りは任せてくださいーい！」

「……まあ、その話も後で。まずは奴らを倒しましょう。」

何だか尊敬されているようだが……分からないな。初対面のはずだし優一さんの方が年上の筈だが。

とりあえず試合再開だ。スローインで相手チームからだったが、一瞬で優一さんがボールを奪い、前線へ駆け上がる。凄まじい技術だ。負けてられないな。

後ろから天馬が追従しているので、俺は反対側、レフトから万がーのため上がっておく。

「天馬君、化身だー！」

そう言うと、優一さんの背中からさつき守と同じように影が吹き出す。その影が形作ったのは守とは全く別の、剣士のような姿だ。が、守のそれ……化身より凄まじい力を秘めている。

「魔戦士ペンドラゴン!!」

そして……

「アームド!!」

化身は再び影となる。そして優一さんの身体にまとわりつき、再び影から実体へと変わる。そこには、先程の化身と似た風貌の鎧のようなものを纏った優一さんがいた。

・・・なんて圧力、一体どれほどの力を秘めているんだ・・・!

「天馬!キミにもできるよ!やってみて!」

フェイの声を受けて天馬の背中からも影が吹き出す。

「はあああ!魔神ペガサスアーク!!アームド!!」

優一さんと同じように化身を身に纏う。ダメだ、頭が追いつかない・・・が、何だこの感覚は。身体の中で何かが暴れている・・・!

「天空の支配者 鳳凰!!アームド!!」

自身の内の何かを知覚していたら、なんとアルファまで化身を身に纏った。天馬と優一さんの2人に、アルファが1人で立ちほだかる。蹴りあげられたボールに2人は同時に蹴る。俺の轟一閃よりも、アルファの必殺技よりも遥かに強い威力のそのシュートがゴールへと迫る――!

「キーパーコマンド03!!」

相手キーパーが必殺技で対抗するも、一瞬で破られる。ゴールへと突き刺さろうとしたその瞬間、アルファが凄まじい速さで間に割り込みシュートを阻む。

「ぐ・・・おおおおお!」

いかにも冷静と言った感じのアルファが唸り声を漏らしながら脚に力を込める。その甲斐あってか、ボールは次第にアルファの脚にめり込む。そしてそのままアルファが脚を振り抜くと、凄まじい勢いでボールがこちらのゴールの方まで飛んで行く。

「——ッ!?!はあああ!!」

予想だにしていなかった守は一瞬反応が遅れるが、咄嗟にパンチングで弾く。ボールは中盤のフェイに渡り、そのフェイはこちらに声を掛けてくる。

「加賀美君！君も化身だ!!」

「俺も——!?!」

フェイのパスを受け取る。急に化身を出せ、と言われても困るが・・・先程から俺の中で何かが蠢いているのを感じる。俺の身体を突き破ってまで外に出てきそうな程の何かが。

なら、望み通り出してやる!!

「はああああああ!!」

咆哮。

簡素かつ原始的だが、この動作により自身の内なる何かを解放しようとする。その試みは成功したようで、内に蠢くそれが一気に開放されるのを感じる。

「星王ネビュラス!!」

ふと、その名前を口に出していた。特に考えてもいなかったはずの化身の名前がすんなりと。

「行かせない！」

相手ディフェンダーが全員こちらに向かってくる。が、化身の凄まじい力を持つてしてそれら全てを薙ぎ払う。

「行くぞツツ!!」

手を空にかざす。すると、遥か高くに光り輝く十字型のエネルギーが刻まれる。その十字と同じくらいの高さまで飛んで、化身が手を持つ槍と共にボールを十字の真ん中に叩き込む。

ボールと同化した槍は十字に突き刺さると同時に、十字と共に回転し始める。一瞬で十字のエネルギーは槍にまとわりつき、その力をより高める。エネルギーが最高潮まで高まると、槍は天より相手ゴールへと突き刺さる。

「——グラントネビュラ!!」

壮大な星雲、という名を関するそのシュートは、この試合で放たれたどのシュートよりも凄まじい威力を感じさせた。

化身を纏った状態でアルファが胸で受け止めようとするも、拮抗する間もなくキーパーを巻き込んでボールと共にゴールに叩きつけられる。

「——ふう。」

着地と同時にその場に座り込む。凄まじい力だが、消費が激しいな・・・

「柊弥!!すっげえシュートだったな!!」

ゴールからこつちまで声を掛けてくる守に手を振って答える。
アルファが立ち上がったと思ったら、相手全員が一箇所に集まる。
何のつもりだ――

「撤退だ。」

そう言うと、上空にUFOのような物体が現れ、アルファ達は光に吸い込まれるように姿を消す。もうUFOだろうがなんだろうが驚かない自信がある。

「何が何だか分からないが・・・勝ったってことでいいのか？」

プロトコル・オメガが撤退したので、天馬の、フェイの、優一さんの事情を一通り聞く。

プロトコル・オメガはサッカーを歴史から消そうとしていて、天馬もサッカーを奪われ、未来からやってきたフェイの協力の元サッカーを取り戻す為に戦っている。

うん、時間を超えるってどういうことだ？分かるけど分からないな。

そして優一さん。優一さんは本来の歴史ならば脚を怪我し、サッカーを続けることは出来なかったようだ。が、プロトコル・オメガが歴史を書き換えたその余波で歴史が変わり、今こうしてここにいる。そしてサッカーを手放した弟にサッカーを返してやるためにここにやってきた、という訳らしい。

「そういうことなら、俺も戦うぞ！」

「よせ守。俺達がやるべき事は、本来の歴史通りサッカー部を作ることだ。・・・それが、お前たちのためにもなるんだろう？天馬。」

「はい！・・・お二人の力を借りたいのは山々ですけど、お二人のやるべき事をやってください！」

天馬がそう同調する。

「・・・そっか、分かった！」

「約束する。雷門中サッカー部、必ず作ってみせる。」

「・・・はい！俺もサッカーを守るため、頑張ります！」

「おう！それで、また会えたら・・・」

守が手を突き出す。俺も手を合わせる。それにつられて天馬も手を突き出して・・・

「「サッカーやろうぜ!!」」

そして天馬達は、更なる戦いへ身を投じるために帰って行った。

「・・・まだ夢みたいだね。」

秋がふと呟く。

「・・・松風天馬、か。またいつか会う気がするな。」

「・・・そうだな！」

既に辺りは真っ暗だ。

「——なあ、俺ら、歩いて帰るの？」
「あ。」

オーマイガー……

第3話 集え雷門、来たれ帝国

今日も今日とて終業のチャイムが鳴る。それと同時に勢いよく教室を飛び出したサッカーバカを追いかけるのは私、加賀美柊弥でございます。どうもどうも。

周りの目線が痛うございます。

「柊弥ー！早く早く！」

「分かった分かった・・・」

サッカーバカこと円堂守はいつもこうである。授業を終え、清掃を終えるとすぐ部活。正しく天性のサッカーバカである。せめて授業中に寝るな起きろ勉強しろ。俺達もう二年生なんだから・・・

さて、守を追いかけ部室までやってくる。サッカー部が無かった入学当時からうってかわり、部員がある程度集まったことによりサッカー部としての活動が可能となった今、来たるフットボールフロントティアに向け、徹底した練習が求められる、のだが・・・

「さあー練習だー！」

守の声に答える者は誰一人いない。ゲームをしている者、漫画を読んでいる者、トランプをしている者。選り取りみどりというやつだ。

ここ、サッカー部の部室だよな・・・？拳法してる奴もいるし・・・

「さあー練習！！」

再度守が声を上げるが、相も変わらずである。

「どうしたどうした！もうずっと練習してないんだぞ？」

「グラウンド、借りられたのかよ。」

「うっ・・・」

痛いところを突かれてしまった、と言わんばかりに守が肩を疎める。

「これからまたラグビー部に交渉して——」

「だろうと思った。」

「どうせ笑いものになるだけでやんす！」

無気力極まりである。

アフロヘアの宍戸が、七人ぼつちならテニスコートで十分だと言われるだけだ、と呟く。実際そう言われたからなあ……

次々に部員達からの無気力を投げ掛けられた隣から、ふつつつと何かが煮えたぎるような音がする……ただの比喩だが。

「俺達はサッカー部なんだ!!フットボールフロンティア、今年こそこれに出ようぜ?な?」

一人一人に同意を求めに行くが、何処吹く風と言った様子でちらんぽらんな返事しか返されない。

哀れ守よ……

「お前らなあ!サッカーをやりたくて入部したんだろうが!」

とうとう守が怒声をあげる。

「サッカー部がサッカーやらなくてどうすんだよ!」

と言って部室から飛び出してしまふ。

「お前ら……守の言う事も最もだろう?少しはやる気をだな……」
「人も足りない場所もない。そんなんじゃないだろ」

うよ。」

「染岡さんの言う通りっス。」

ダメだ、何言っても無駄だこれは。

・・・守を追いかけるか。

外に出てすぐのところまで守とマネージャーである秋が話していた。

「あ、加賀美君。」

「柊弥、皆は？」

首を横に振ると、やっぱり。と言った表情で項垂れる二人。分かる、分かるよその気持ち。

「仕方ないな。柊弥、河川敷行こうぜ！」

「おっけー。」

河川敷では、ちびっ子達がよくサッカーをしているのだ。場所がない時はそこに混ぜてもらっている。

相手していて中々楽しいからな、サッカーも出来るし一石二鳥つてやつだ。

「小学生相手に練習になるの？」

「あいつら、結構やるんだぜ？」

秋の最もな疑問に守は即答する。

・・・言っただけのことではないが、練習にはならないだろう。それを口に出すような野暮なことはないが。

河川敷にてサッカーを始め、気づけばもう日が沈み掛けていた。夕日に照らされた河川らきらきらと光り、中々どうして美しい。

ちびっ子達が帰る準備をしている横で、俺と守はPK形式で練習をしている。

「ふっ!!」

「ナイスシュート、柊弥!」

もう何本も全力で打ち込んでいるが、俺にも守にも疲労の色は見えない。

やはり、守を相手に打ち込むのは楽しいな。

「柊弥、必殺技ありでやらないか?」

「いいね、俺もそんな気分だ。」

守の申し出を受け、少し気合いを入れ直す。

一年前、天馬やフェイと共にプロトコル・オメガと戦った時に引き出せた化身を始めとするあの力・・・

どういう訳か、彼らと別れたらまた元通りになってしまったが、あの時の感覚は身体が覚えている。それに近付くため色々試しているが、実力は向上こそすれど、あのレベルまでは至らない。

とはいえ、俺も守も地区大会ではトップレベルなのでは、と思う。それを確かめる機会が無いのが残念だが。

「行くぞー守。」

「よし来い!柊弥!」

一呼吸。

俺の意識は集中の極地へと至る。

ボールを踏みつけ、回転を与えると共に電気を帯びさせる。上昇しきって強くボールが輝きを放ったタイミングで蹴り抜く。イメージは抜刀術。

「轟一閃!!」

空気を切り裂きながらゴールへと突き進むシュート。

対する守は、エネルギーを手に集中させ、そのエネルギーで大きな掌の形を作り、それを持ってしてシュートを受け止める。

「ゴッドハンド!!」

火花を散らしながら雷と神の手がぶつかり合う。

数秒の拮抗の後、ボールは勢いを失い、守の手の中に収まる。

「くうううー! やっぱり柊弥のシュートはビリビリ来るな!」

「電気帯びてるしな・・・しかし流石だな。いつもより手応え、いや足答えか? があつたのにしっかり止められた。」

「へへっ。でも確かに、いつもよりドーンって来たぜ!」

この男、時折こうして謎の表現を使ってくるのである。

お爺さん譲りのようだが、ご両親もそうなのか? いや、あの人は至って普通だったような・・・

「誰だアー! これ蹴ったの!」

突如河川敷に怒号が響く。

声の方向に目を向けるとデフォルメ的な不良がいた。うわあ・・・関わりたくない。

ちびっ子が青ざめてることから、その中の誰かがやってしまったこ

とが伺える。

「大丈夫ですか！すみませんでした・・・」

気付いたら守がその二人の前に飛び出していた。

謝罪を述べ、ボールを返して貰えるよう頼んだ。その時だった。

チビの方が守の腹に蹴りを入れやがった。

介入すべくそこに歩み寄ろうとしたら、こちらを見ているある視線に気づく。灰色の髪の毛の、どこかクールさを感じさせつつも熱さも感じさせる。そんな男だった。

俺は、この男を知っている・・・

「ヤスイさん、お手本見せてあげたらどうです？」

「いいねえ・・・やってやろうじゃねえの。」

ヤスイ、と呼ばれた長髪の男がボールに唾を吐きかけた。こいつ、タダじゃおかねえ・・・

そしてその男は、ボールをハチャメチャな方向に蹴り飛ばす。そこには、ちびっ子・・・マコちゃんがいた。危ない！

「ふッー！」

間に合う距離だった為、ボールとマコちゃんの間割り込もうとした。が、それより早く、この状況を見ていたさっきの男が割り込む。ヤスイの顔面に向かって正確にボールを蹴り返す。あの速さ、正確さ、威力。やはりこの男・・・！

「ヤスイさん！」

チビの方がぶっ倒れたヤスイに声を掛ける。そして激昂してボールを蹴り返した男に怒鳴り散らす。

俺は特に危害を加えられていないが、不愉快だったのでチビの方に
向かってボールを蹴る。当てはしない。鼻の先を掠める程度だ。

「ヒッ!?」

「そいつを連れてさっさと失せな。・・・次は当てるぞ?」

面白いくらいの速さで方向転換し、ヤスイを連れてチビは退散す
る。

何から何までデフォルメだな。奴ら。

マコちゃんの安全を確認して、男はこの場を去ろうとする、が。守
が引き止める。サッカーやってるのか、どこの学校なのかを根掘り葉
掘り聞こうとする。

「初めまして・・・木戸川清修のエース、豪炎寺修也。」

男・・・豪炎寺に俺も声をかける。

そう、この男。全国レベルの学校である木戸川清修のエーススト
ライカーである。去年のフットボールフロンティアの中継を見た。

「・・・」

が、豪炎寺は何も答えることなく階段を登り、去っていく。

何も語らず、って訳か。

「あ、おい・・・」

「まあまあ。」

少し残念そうな顔をする守を宥める。もう日が沈むし、明日も学校
だからここいらで引き上げないとだしな。

それにしても豪炎寺修也が何故ここに・・・?考えても分からない
な。

だが、何故だろうな。近いうちにまた会う気がする。

「あああああああああああ!?!」
「守、うるさい。」

翌日、朝のホームルームにて転校生が紹介される。

・・・近いうちにまた会う気がする、とは言ったものの。再会早過ぎないかね、豪炎寺さんよ。

「何だ、知り合いか?」

担任の先生が守に問いかけるも、しどろもどろな返事を返す。
豪炎寺の席は空いていた一番後ろ。隣は俺だ。

「やあ昨日ぶり。・・・よろしく。」
「ああ・・・よろしく。」

手を差し出して握手を求めると、特に拒むことなく応じてくれる。
昨日みたいに無視されたらどうしようかと思っただが、そんなことは無かった。

昼休みになると、守が熱烈な勧誘を仕掛ける。が、豪炎寺の表情はいまいち優れない。

・・・何か事情があるとみた。

「・・・サッカーは、もうやめたんだ。」

「辞めたって、どうして・・・」

「よせ守。下手に他人に介入するのは良くないぞ。」

無神経な守を止めに入る。豪炎寺が目線でありがとうと言ってきたのを見逃さなかった。

「円堂！冬海先生がお前を呼んでる。校長室に来いってさ。」

半田が突如声を掛けてくる。校長室に呼び出し・・・？

「守・・・お前万引きでもした？」

「してない!!人聞きの悪いことを言うな!」

顔を真っ赤にして否定する守。あー面白い。

半田に促されるがまま校長室に向かう守。はて、なんの用やら・・・冬海先生が呼び出した、ってことは部関連の話だろうか。

「とうとううちも廃部かね?」

「廃部・・・どうしてだ?」

「部員、足りてないんだ。この頃廃部の噂が出ててな。俺も薄々そんな予感がしてたんだ。」

豪炎寺が疑問に思ったのだろう、問いかけてくる。

隠すことなく話すと、豪炎寺の表情に少し揺らぎが見えた。ほんの少しだが。

少しすると守が帰ってくる。

「守、先生はなんて?」

「……………帝国と練習試合、だつてさ。」

……は？

「待て待て、帝国つて、あの全国王者の帝国？」

「そう、あの帝国。」

Why? ワターシ、リカイデキナイネ、H A H A H A !!!

じゃねーよ。おかしいだろ、なんで帝国なんだよ。

「それまでに部員が集まらない、もしくは試合に負けたら……廃部だつて。」

「……オーマイガー。」

「加賀美君が壊れた!」

秋が悲鳴じみた声を上げる。すまない、本当に今思考がフリーズしている。

流石に、急すぎやしないか……?

「とにかく、今日から部員を何としても集めなきゃ。そして特訓して、勝たないと俺達は廃部だ! そんなことは絶対にさせない!!」

「……はあ、頑張らないとな。」

部活の時間になり、部室でその話をすると案の定と言った反応だった。「終わりだ。」「廃部だ。」などなど。

それを聞いて守が再び激昂。本気で勝ちに行く気なのだろう。

無論、俺も同じだ。だが、部員がいないんじゃないやなあ……

そして鬼の勧誘大会が始まった。

他の部活にバカにされながらも、俺と守、秋の三人で部員を集める

べく奔走する。

ま、めぼしい成果は得られなかったが・・・途中、新聞部からインタビューを受けたりもしたが、それっぽいことを言って部員の宣伝を頼んでみた。ずっこけられた。デスヨネー・・・

今日の部活は勧誘だけで終わってしまった。既に空はオレンジに染っている。

これから守は鉄塔広場で練習するらしいが、俺は今日はパスだ。久々に親が帰ってくる日なんだな。自慢じゃないが、家がでかいのだ。

会社の経営者である父、プロのピアニストである母。どちらも国内、あるいは世界を飛び回っている人だ。

そんな人達だから、常に一緒にいられる訳では無いのだが、二人共俺がサッカーをやりたいと言った時も否定することなく応援してくれた。金銭面でも苦労しないし、感謝感謝。

「ただいま——」

「お帰りなさいませ、柊弥様。」

家のお手伝いさんだ。両親が留守の間も泊まり込みで家の世話をしてくれている。

「柊真様と弥生様は既にお帰りです。さ、こちらへ。」
「ありがとうございます。」

ふたりが待つ部屋に案内される。扉を開けると、良い匂いが鼻腔にくすぐり、空腹感を掻き立てる。

「柊弥、お帰りなさい。」

「ただいま、母さん。父さん。そしておかえり。」

「ああ、ただいま。」

そこから親子の他愛もない会話が始まる。近況報告が主であるが。

「ところで柊弥、部活はどうなったんだ？部員が足りないと言っていたが・・・」

「ああその事・・・未だに足りないよ。そんでもってさ、全国王者との練習試合が急に決まったんだ。それに負けたら廃部って・・・あまりに急だよなあ。ま、部員は集めるし、試合にも勝ってみせるけど。」

「流石私たちの息子！逞しく育ったわ！」

「よせやいよせやい・・・二人は次はいつ発つのか？」

「いや、しばらく家に入れることになったんだ。もし大会に出る時は応援に行けるな。」

珍しいこともあるものだ。二人揃ってフリーの時期が来るとは。

「そっか、それは良かった・・・大会、楽しみにしててよ。」

そこからも親子の時間は続く。

時は飛んで試合当日。

サッカー部室にて、戦いに赴く部員達がミーティングをしていた。足りなかった部員も、勧誘の甲斐あつてか11人ピッタリまで揃った。

「ちよつと!!聞いてないですよ、僕を抜いて11人揃えるなんて！」

突如部室の扉が開き、眼鏡をかけた少年が鬼の形相で訴えてくる。あまりの剣幕にその場いた全員がたじろぐが、我に返ると全員一様に「なんだこいつ」と言った表情を浮かべている。

「はいこれ入部届。背番号は10番でいいですよ。」

「んだとテメエ・・・10番は柊弥の——」

「まあまあ染岡。俺は構わないよ。」

染岡が目金に掴みかかろうとするが、柊弥が制する。

(試合に出す出さないは別だし。)

柊弥は内心ほくそ笑んでいた。

ミーティングを終え、雷門サッカー部は外にて来訪者を待ち構える。

すると、次第に風が強くなり、地響きが鳴る。

辺りには不穏な空気が漂い、その場いた全員が気圧されつつあった。

そして現れる帝国。

黒煙を巻きながら、装甲車にも見える大型車を雷門中校門前に停車させる。

中から現れるのは帝国の面々。その様はさながら軍隊のよう。

「・・・あれが帝国。あれが、鬼道有人。」

柊弥がふと呟く。

先頭を切るドレッドヘアーの男、鬼道有人。帝国サッカー部キャプテンだ。

彼の出す指示は一流のそれ。チームの流れを滞らせることなく作

るプロとも呼べる所業である。

そして車の上に姿を現したのは帝国サッカー部監督であり、帝国学園総帥である影山零治。

鬼道を育て上げたのは彼の手腕のところによるものだ。

帝国の面々がグラウンドにてウォーミングアップを始める。

そのレベルの高さに雷門は声を失うが、それを見ても堂々とした態度を崩さない者が二人。キーパーでありキャプテン、円堂守とフォワードにして現雷門のエース、加賀美柊弥。

「守、帝国をどう見る。」

「やっぱりすげえ奴らだ！あんなのと試合できるなんて楽しみだな！柊弥！」

「ああ、心が躍るな。」

（あの二人・・・中々できるな。）

鬼道は横目で二人の様子を伺っていた。

（特にあの男・・・加賀美柊弥。奴は小学生の頃からサッカークラブに所属していて、全国大会にまで行っていたはず。先程データに目を通したばかりだが、中々期待できそうだ・・・まさか豪炎寺の他に、こんな奴が潜んでいたとはな。）

鬼道が指を鳴らす。すると突如として、パス回しの速さが段違いのものとなる。そして高く打ち上げられたボールを鬼道が鋭く蹴り飛ばす・・・二つ。

「・・・!?!」

一つは円堂に、一つは柊弥に向けられたものだった。突如のことに驚きこそすれど、円堂はそれを難なくキャッチする。

柊弥はというと、迫るボールを空高く打ち上げ、落下に合わせて蹴りを叩き込み、直線を描きながら鬼道へと打ち返す。

(ほう・・・反応、威力共に申し分ない。しかも全力じゃないな。)

円堂と柊弥は少し呆けたが、二人揃って同じ反応、同じ言葉を口にする。

「面白くなってきた！」

それを聞いて帝国はさらに獰猛な笑みを浮かべる。

獲物を喰らう狩人となるのは帝国か、はたまた雷門か。

第4話 弱者と強者、勝者はどちらか。

雷門と帝国、互いが整列し試合前の挨拶を行う。

鬼道がコイントスをパスしたため、ボールは俺たち雷門からのスタート。強者の余裕って訳か……

そして知らぬ間に、ベンチには先日の新聞部の子がいた。確か……音無と言ったか。そしてもう一人、将棋部の角間。実況してくれるらしい。何で？

それぞれがポジションにつき、試合の開始を今か今かと待ち侘びる。

ちなみに、目金はベンチである。「エースであるボクが——」と喚んでいたが、右から聞いて左から流す。

「さあ皆！頑張って行こうぜ!!」

帝国の圧力に気圧されているメンバーに守が発破をかける。

俺は別に何ともないが、今一度気を引き締める気つけになった。

『さあ！試合開始です！』

開始のホイッスルが鳴り響き、キックオフ。

隣の染岡にボールを渡し、俺は一気に駆け上がる。そして染岡もマックスにボールを下げ、前線へと上がる。

まずは1点取って、チームの士気を高める！

「染岡！」

マックスが今一度染岡にボールを戻す。帝国の佐久間と寺門によるダブルスライディングを飛んで躲す。

左から上がってきた風丸にボールが渡り、受け取って風丸はぐんぐん上がっていく。流石元陸上部、敏捷性はピカイチだ。多分俺より早

い。

けどお前、DFだよな？まあいいや。

「加賀美!!」

「おうー!」

相手DFに囲まれ、突破は困難と見たのであろう、風丸がこちらにボールを回す。

ボールを受け取りこそすれど、当然俺にもマークがついているわけ
で。

おかつぱ頭の万丈と巨体を誇る大野が俺の前に立ち塞がる。

必殺技を使うつもりは無さそうだ。

様子見なのか何なのかは知らないが、好都合。こいつらを抜いてま
ずは1点もぎ取らせてもらう。

「ジグザグスパーク!!」

ジグザグ状に移動し、刻んだジグザグから放電。二人をきっちりと
抜いてみせる。

「何?!」

帝国のデータを集める際に、相手チームが使っていた技を幾つか参
考にさせてもらった。言い方を変えればパクった。

俺は雷を主流にした技を多く使うのでね、ピツタリというわけだ。

さあ目の前にはゴールのみ。キングオブゴールキーパーと呼ばれ
る相手キーパー、源田が立ちはだかる。

「ふん、来いッ!!」

「それじゃ、遠慮なく。」

ボールが回りながら帯電していく。俺の気迫に答えるようにその勢いはどんどん増していく。

さあ、行くぞツツ!!

「轟一閃!!」

観客から歓声が上がる。照れるじゃないか。

一瞬で蹴り抜いたボールは真っ直ぐに相手ゴールへと襲い掛かる。こんなシュートを打つてくるとは思っていなかったのだろう、源田は少し驚いた表情を浮かべている。他の帝国の面々も同じだ。

「——ツ、パワーシールド!!」

守のゴッドハンドのように拳にエネルギーを集中させ、それを逆立ちのような形で拳を地面に叩き付ける。するとゴールを守る盾のようにエネルギーが展開され、シュートとせめぎ合う。

「う、おおおおお!!」

手間取っているな。舐めてるからそうなるんだ。

が、次第に源田のエネルギーは高まっていき、俺のシュートは勢いを失っていく。

俺の轟一閃はスピードに重点を置いている分、イマイチパワーに欠ける。恐らくこれが源田や守以外ならばぶち抜けるのだろうか・・・俺の狙いは、ここからだ。

やがて、源田のパワーが勝って俺のシュートは空高く弾かれる。

ここだ!

「ふッ!」

「何ッ!?!」

『何とフォワード加賀美! 弾かれた自分のボールを空中で再び捉え

たーッ!?』

「喰らえエエエエ!!」

そのまま相手ゴールへボールを叩き込む。

源田のパワーシールドは、全国でも通じるような技だ。

だが、弱点はある。

エネルギーを展開する方法故に、すぐさま体勢を立て直すことが出来ない。

そう、これが俺の狙いだ。あえてシュートの力を弱めることによつて、あえて簡単に弾かせる。その弾いたボールを――

「ぐ――ッ!?」

『ゴ、ゴオオル!!何と加賀美、帝国から先制点をもぎ取ったアア!!』

よし。見事に刺さってくれたな。

帝国の皆様方は呆気にとられていらっしやる。

源田に鬼道が近づいて行く。

「すまない鬼道・・・!」

「構わん・・・あんな奴がいることを事前に見抜けなかった、俺の責任でもある。安心しろ、すぐに離すさ・・・帝国のサッカーで。」

背筋に悪寒が走る。

何か、嫌な予感がする・・・警戒しなければ。

センターサークルから試合再開、ボールは帝国。

佐久間が寺門にボールを渡すと、何と寺門はそこからシュートした。

誰も反応することが出来ず、そのシュートは守へと突き刺さる、が!

「させるかッ!!」

「馬鹿なッ!？」

守はしっかりと反応して受け止める。

まずはこの一本を取るつもりだったのだろう。だが残念だったな。うちの守は・・・強いぞ。

「よーしみんな、もう一本!!」

守がボールを投げ飛ばす。受け取ったのは半田、辺りの様子を伺い、どこから攻めるべきかを分析する。

が、そんな半田に暴力的なプレイが襲い掛かる。

「キラースライド!!」

連続蹴りを伴うスライディングで寺門がボールを奪い取る。

そこから、暴力の嵐が吹き荒れる。

ラフプレーすれすれのタックルやスライディングを仕掛けたり、明らかに故意で雷門にボールを蹴り飛ばしたり。

「させるかア!!」

風丸がその餌食になろうとしている直前に割り込み、ボールを奪う。

幸いにして、先程から何本も打ち込まれているが守はまだゴールを破られていない。

俺がボールをキープし続けてやり過ぎせば・・・!

「15番からボールを奪え!!」

15番、俺のことである。

鬼道の指示を受けて、次々と帝国メンバーが襲いかかってくる・・・

4人か。そう簡単にはやらせないがな。

雷を帯びたボールを蹴って相手との距離を詰めていく。ある程度出力が高まったところで、相手の頭上を狙ってボールを蹴り上げ、回転しながら俺も跳躍する。

回転は風を纏い、外界から俺とボール、対象を遮るように渦を巻く。竜巻のように暴れるその風に雷を乗せ、敵を殲滅する！

「スパークウインド!!」

「——4人同時に抜いただとツ!?!」

鬼道が驚きの声を上げ、再び歓声が沸く。

そのまま駆け上がると、鬼道が単身俺の前に立ちはだかる。

「予想外だ、お前のような選手がこんなチームにいるとはな!」

「お褒めに預かり光栄です、とでも言っておこうか!」

『激しいボールの奪い合い!互いに一步も譲らないぞオ!!』

こいつ、全然隙がない……しかもパスコースも全て潰されている。

「貰った!!」

「——しまった!!」

鬼道をどう抜くか考えていたら、背後から佐久間にボールを奪われてしまった。

そのまま駆け上がる佐久間。誰もそれに追い付けず、ゴールを見据え守と一対一。

「させるかアアア!!」

風丸がスライディングを仕掛けるも、読んでいたかのような跳躍で躲かされてしまう。そしてそのままシュート。

「ふッ！」

が、守はしつかりとボールを止める。かなりの力を込めたのだろう。グローブと擦れた際に焦げ、黒煙が上がっている。

と、ここで前半終了のホイッスル。1―0の1点リードだ。

「これが、帝国学園……」

そう誰かが呟く。

不味いな……全員潰れかかっている。そこまでダメージが深くないのは俺と守だけか。

「1点リードスけど……後半も何とかなるんスカねえ……」

「……帝国はまだ、余力を残しているぞ。」

そう、奴らは未だに源田と寺門以外必殺技を使っていない。

源田に使わせたのは俺のシュートだが、一本決めてからはまるでゴールを狙えなかった。恐らく、今の帝国に切り込んでいけるのは俺一人……不味いな。

「安心しろよ、俺と加賀美で点を取って、円堂が守れば良いだけだ！」

そう意気込む染岡の顔色はどこか優れていない。

……まさか！

「染岡、脚を見せてみる。」

「え？何——」

「いいから。」

半ば無理やり染岡のソックスを剥ぎ取る。

その脚は、見るからに痛々しく腫れていた。

帝国のボールを脚で無理やり受けた時だろう……この様子で後半も戦わせる訳には行かない。

「……目金、染岡と交代だ。」

「ああ!?俺はまだやれるぞ!!」

「いや、ダメだ。そんな状態でさらに激しくなる帝国の球を脚で受けても見ろ……サッカーが出来なくなってもおかしくは無いんだぞ。」

無理やりに染岡を納得させる。

「ふふ、このエースの出番がようやく来たようですね……」

「目金、震えてんぞ?」

半田がそう指摘すると、目金は一層振るえ上がる。

「武者震い」と強がるも、ビビっているのがバレバレだ。染岡の圧もあり、目金の震えは止まることを知らない。

それでも、やってもらおう他ないが。

しかし不味いな、染岡が欠けたら俺の他に点を取れそうなやつは……いや、源田が本気を出したら染岡でも厳しいか。

さて……どうしたものか。

「……ん?」

ふと、辺りに視線を巡らせる。

数多の観客の中から、木の影に隠れてこちらを見ている者を見つける。

……豪炎寺。あいつが力を貸してくれば……!

が、視線が会った瞬間に完全に姿を隠してしまう。

ダメ、か。

「どうした？ 終弥。」

「……いや、何でもない。さあ後半だ……気張って行くぞ！」

ハーフタイムが終わり、再びピッチ内に戻る。

こちら側の士気はイマイチ優れない。

この状態で後半を乗り切れるだろうか……

『さあ、後半開始です！ 雷門が1点リード、ここからどう試合が展開していくのでしょうか！』

帝国からキックオフ。

ボールは鬼道へと渡る。

「行くぞ……デスゾーン、開始。」

デスゾーン……？

あの技か!! あの技を使うつもりだ!!

だが、今の守ならば……

鬼道が鋭いパスを前線に送る。それを受け取った佐久間、寺門、洞面が空高く回転しながら飛ぶ。

紫の禍々しいエネルギーを纏いながら、ボールを中心に三角形を作り出す。

紫に包まれた破壊力を、三人同時にドロップキックのような形で送り出す。

「デスゾーン!!」

死、という名を冠するそのシュートは、凄まじいパワーを秘めてい

た。触れるもの全てを破壊する、そんな畏怖すら感じさせる。

が、俺たちのゴールを守るのは神の手。奴なら・・・守なら!!

「うおおおおー!」

迫るボールに対し、守は右手に力を集中させる。デスゾーンとは真反対の、光のエネルギーが集約する。

そして守が掌を上に向けると同時に、巨大な神の手は顕現する。

「ゴッドハンド!!」

突き出された神の手は、死のボールと競り合う。

守は咆哮と共に、込める力をより強くする。

激しい力のぶつかり合いは火花を散らす。

「——ふう。」

——守の勝ちだ。

その手の中では先程まで暴れ狂っていたボールが大人しくなっていた。

『と、止めたアアア!!雷門中キャプテン、円堂が止めました!神々しいその手で、帝国のスーパースhootを止めたアアア!!』

「キャプテン!!」

「円堂!!」

「いっけええええ!!」

守がボールを投げる。それを受け取ったのは風丸。風の如く駆け上がっていく・・・が。

「サイクロン!!」

「ぐああ!?!」

万丈が脚を振るうと、風が渦を巻きながら風丸に襲い掛かる。風に巻かれた風丸は、空高く打ち上げられて地に叩きつけられる。そのままボールは寺門へ。

「百烈ショット!!」

ボールに何度も何度も蹴りを叩き込み、力を増幅させたボールを放つ・・・ゴールではなく、選手に。

「うわあああ!!」

帝国のターンは続く。どんどんボロボロになっていく雷門。それを阻止すべく駆け出そうとしたが・・・

「おっと、お前は行かせないぞ。」

「ぐッ——!」

鬼道と大野に徹底マークされ、その場を動けない。技巧派の鬼道の口添えのせいで、身体がデカイ大野の壁がより高く感じる・・・クソッ、このままじゃ——

「百烈ショットオ！」

「ゴッドハンドオ！」

打つ寺門、止める守。

守はしっかりと止めるも、そのボールを受け取れる者はいない。

「円・・・堂オ！」

風丸がフラフラと立ち上がる。

が、佐久間のタツクルにより弾き飛ばされ、再びその場に踞る。そのままボールは何度も何度も守に打ち込まれる。守のキャッチ力は凄まじいものだが、体力は無限ではない。

あんなに打ち込まれたら、いずれ限界が・・・！

「——クソオオオ!!」

「何ッ!?!」

がむしやらにマークを振り切り、自陣へ駆け出す。

が、相手DFである五条のタツクルに弾き飛ばされる。

「ぐッ・・・まだまだア!」

今度は左右から同時にチャージされる。また倒れる。そしてまた立ち上がる。

こんな所で、止まってられないんだ。

「加賀美・・・!」

半田が苦しそうな顔をしながら立ち上がろうとするも、上手く立ち上がれない。脚をやられているんだろう。

「柊弥ア!」

守がこちらに声をかけてくるも、次々と帝国のシュートが打ち込まれている。

反応速度が段々と鈍くなっていき、かなりギリギリのセーブとなっていく。

「そろそろか・・・佐久間!!」

「おうー！」

佐久間に声をかけて鬼道が上がっていく。

パスを受けた鬼道は、ボールを上へ。

すると、鬼道の真上に飛んでいた佐久間がヘディングで軌道にボールを戻す。

勢いを得たボールを、鬼道はゴールへ叩き込む。

「ツインブースト!!」

二人の力が込められたボールが守に襲い掛かる。

「——させるかアアア!!ゴッドハンドオオオ!!」

しかし、また反応が遅れた守。

十分に力が籠っていないことと、疲労が重なり合い、十分なエネルギーを放出できない。

光がいつもより弱いゴッドハンドは、ツインブーストに触れた瞬間に砕け散り——

『ゴール!!帝国、1点奪い返したアア!!雷門は満身創痕!このまま帝国がペースを握るのかア!?!』

センターサークルから再び試合再開。

怯える目金からの弱々しいパスを受け取り、単身相手陣地へ切り込んでいく。

「サイクロン!!」

「喰らうかア!!」

こちらに向けられた暴風を掻い潜りながらゴールへと迫る。

1点取られたなら、また取り返せばいいだけ！

ここで決められなければ士気はまた崩れる、そうしたらこの試合は負けだと思え——！！

DF陣が寄って集って襲いかかってくる。

「良い！打たせろ！」

源田がそう指示する。

恐るるに足りないってか・・・その余裕、後悔させてやる！！

「轟・・・閃ツツ!!!」

持てる力の全てをボールに注ぎ込む。

空気を切り裂きながらゴールへ迫るそのシュートは、間違いなく俺が出せる最大出力。

これなら——

「ふん・・・フルパワーシールドオ!!」

そんな隠し球を持っていたのかよ・・・！

パワーシールドの何倍もの力を秘めるであろうそれは、俺の全力の轟一闪を簡単に弾いて見せた。

「ふッ、この技を出させたのはお前が久しぶりだ・・・」

帝国のキーパーに全力を出させた、と考えれば上出来かもしれないが、生憎そうはいかない。

「そんな・・・加賀美さんのシュートが・・・」

「もう終わりでやんス・・・」

更なる士気の低下、恐れていたことが起こってしまった。
加えて――

「――がッッ!!」

脚に激痛が走る。

元々かなりの負担が掛かっていた脚に無理をさせ、全力でシュートをしたのが祟ってしまった。

動けこそするが、あまり激しいプレーは期待できそうにない。

「も、もう嫌だアアアア!!」

目金がユニフォームを脱ぎ捨て走り去っていく。

クソッ・・・本当に不味い。

「ほおらよッ!!」

「うわッ!!」

『ゴール! 帝国2点目だ! キーパー田堂、もう必殺技を出す余裕もないか!?!』

もう、ダメなのか・・・?

全員ボロボロだ、これ以上の被害を避けるためには、棄権も視野に

「おい、あんなやつうちのチームにいたか?」

「誰だあいつ・・・」

一筋の光が刺す。

声の方向を見ると、目金が脱ぎ捨てた10番のユニフォームを身に

つけてフィールドに脚を踏み入れる一人の男。
その男は、誰よりも静かに、熱く燃えていた。

「——豪炎寺！」

「待ちなさい！君はうちのサッカー部では……」

「俺達は構いませんよ。」

笑みを浮かべながら豪炎寺の参戦を認める鬼道。

そういう事か……今分かった。帝国が雷門に試合を申し込んだ理由。

豪炎寺の偵察だ。必要以上に俺達を傷付けたのも、豪炎寺を炙り出す為。

目金と豪炎寺が選手交代し、1―2から試合は再開。

後ろの穴戸にボールを渡した瞬間、帝国が穴戸からボールを奪い去る。

「デスゾーン……開始！」

不味い、またデスゾーンか……！

「あいつは必ず止める。ボールを俺に回してくれ。」

「……分かった！」

豪炎寺がすれ違いざまにそう囁く。

あいつは守が止めると信じているんだ。そして、そのボールを俺が回すことも。

その期待に答えるのが筋つてもものだな……守、頼むぞ！

「「デスゾーン!!」」

『おーつと!?豪炎寺、円堂を全くフォローせず上がっていく! 反対に加賀美は、デスゾーンを追いかけるように後退していくぞーッ!?』

放たれるデスゾーン。圧倒的暴力が再び守に迫る。

が、守は決して諦めたなどいない。寧ろ、豪炎寺の参戦によってその闘志は先程以上に燃え上がっている!

「絶対に止める………ゴツド、ハンドオオオ!!」

最初のゴツドハンドよりも、今までのゴツドハンドよりも一際強く輝く。神々しくも力強くもあるその手は、真っ直ぐに迫るボールへと向けられる。

再びぶつかり合う神の手と死のボール。が、神の手が放つ輝きの前に、死のボールはその力を失う。

「何ッツ!?」

『何と円堂! 満身創痍ながらも帝国のデスゾーンを止めたアアア!』

「終弥ア!!」

「おオー!」

守からのボールを受け止める。

このボール、無駄にはしない!!

「行かせるか!!」

鬼道を中心として、ボールを奪わんと俺に雪崩込んでくる。

ならば、全員纏めて薙ぎ払う!

「スパークウインドオ!!」

雷を纏った暴風が全員吹き飛ばす。

俺の前に立ちはだかるものは誰一人していなくなり、俺のパスを待ち構える豪炎寺の姿が見える。

ボールを踏みつけ、力を込める。

脚がやられているせいで十分な威力は出ない。だが構わない。

ゴールを決めるのは俺じゃない。アイツだ!!

「轟一閃ツツ!!豪炎寺イ!!」

本来直線を描きながらゴールに突き刺さる轟一閃を、ゴールではなく空へと斜めに打ち上げる。

そう、これはパスだ。

我らが炎のストライカー、豪炎寺修也への!!

「ファイアトルネード!!!」

炎を纏いながら豪炎寺が空へ舞う。

雷を帯びたボールを、回転と共に打ち出す。

雷に加え炎を纏ったそのシュートは、帝国ゴールへ凄まじい速さで迫る。

「な——ツ!!」

『ゴール!!炎のストライカー豪炎寺修也!!鉄壁のゴールキーパー円堂守と雷のストライカー加賀美柊弥の想いを受け取り!そのシュートで1点もぎとったアア!!』

歓声が沸きあがる。観客からも、俺達からも。

やってくれたな・・・豪炎寺!!

「……ここで終わりだ。スーパーストライカー、豪炎寺のシユートは全く錆び付いてはいない……そして円堂守、加賀美柊弥……ククツ、面白い事になりそうだ。」

離れたところでそれを見ていた影山は嗤う。

本来の目的を果たした上、面白い物が見れて非常に満足している。

「……はい、分かりました。」

鬼道が審判の方へ歩み寄り、何かを告げる。

すると審判はホイッスルを鳴らし、声を上げる。

「ただいま帝国学園から試合放棄の申し出があったため、試合終了!!」
『何とここで帝国学園試合を放棄!!点数は引き分けですが、これは実質的に雷門イレブンの勝利でしょう!!』

「円堂守に加賀美柊弥、思わぬ収穫だったな。」

そう呟いて鬼道は大型車に姿を消す。

「よく来てくれたな、豪炎寺!これで新生雷門イレブンの——」
「今回限りだ。」

そう言つて豪炎寺はユニフォームを円堂に渡す。

「——豪炎寺、助かった。ありがとう。」

柊弥が去りゆく背中にそう伝える。

壁山が止めないのか、と聞くが円堂は良いんだ、と答える。

「さあ皆ー……ここからが始まりだ!!俺達、雷門イレブンの!!」

雷門イレブンは声を上げる。

喜ぶ彼らを、誰が敗者と呼ぼうか。

フィールド内に残った戦士達は、確かに勝っていた。

第5話 次なる試合と猛る龍

「——というわけで、我が部は廃部を免れたという訳で。次に向けて課題を解消していこう。」

放課後、先日の帝国学園との試合を受けての反省会をする事にした。

幸か不幸か、皆あれだけボロボロになりこそすれど、チームとしての課題やら反省点は浮き彫りになった。マックスの「基礎体力無さすぎ。」という鋭い指摘には全員顔を俯かせることになったが。

「あのー、キャプテン、加賀美さん。この間の豪炎寺さん……呼べないんですかね?」
「ッ……」

穴戸がふと声に出す。

それに乗じて、他のメンバーも豪炎寺を褒め称える言葉を口にする。なあ、俺も一点決めたんだけど……?

と、その様子を見て染岡の眉間にしわが寄り出したのを俺は見逃さなかった。

「あんなのは邪道だ……俺が本当のサッカーを見せてやる!」

染岡がいきり立つ。全員驚きつつも染岡の方に自然反射で視線をやる。

「豪炎寺はもうやらないんだろ?」

「それは分からないけど……」

「円堂までアイツを頼りすぎだ。豪炎寺なんか居なくなつてな、俺も、加賀美もいる!俺達にだってできるさ!もつと、俺たちを信じろよ

！」

染岡の嘆きにも似た訴えが部室内に響く。

頼りすぎ、という訳でもないだろうが、全員心のどこかで豪炎寺を当てにしているところはあるんだと思う。

現に俺も、あいつが居てくれたらそれはそれで頼りになると思っているしな。

そこで、不穏な空気が漂う部室の扉が突如開かれる。

外から顔を出したのは秋。お客さん、とのことだが・・・はて、こんな所に顔を出すような人、いたのだろうか。

「・・・臭いわ。」

「開口一番でそれ言う？」

思わず口に出さずにはいられなかった。

人様の部室に入ってきて真つ先に「臭い」は些か失礼というものではないでしょうか、夏末お嬢様。

「・・・帝国学園との練習試合、廃部だけは逃れたわね。」

「お、おう。これからガンガン試合していくからな！」

夏末お嬢様は怪しげな笑みを守に向ける。

お嬢様って付けるのやめよ、なんか面倒臭いしどうせタメだし。

「次の対戦校を決めてあげたわ。」

部室内にどよめきが走る。何かから何まで急ですこと・・・

曰く、相手は尾刈斗中、試合は1週間後とのこと。あの胡散臭い学校か・・・

「因みに、今度負けたらこのサッカー部は直ちに廃部よ。」

簡単に我々サッカー部の命運を決めないでいただきたい。

まあ、こいつ理事長の娘だし、この学校の運営任せてるから決定権こいつにあるんだけどさ……

でも冷静に考えて、中学生で学校の運営っておかしいよな。

「ただし勝利すれば、フットボールフロンティアへの参加を認めましょう。」

廃部というデメリットに対して告げられたメリットに、全員沸き立たずにはいられなかった。

いいね、燃えてきた……！

「こうしちゃいられない！皆、練習しようぜ!!」

気合いに満ちた声が、部室の中にも外にも響いたという。

今日はグラウンドのローテが割当てていないため、河川敷のグラウンドで練習である。

皆さっきの報せを受けてやる気に燃えているのだが、少し行き過ぎいなやつが一人。

「おらああああああ!!」

染岡である。

何を焦っているのか、見当はつくが、それにしたってラフプレーが目立ちすぎる。この前の帝国と何ら変わらない。

「落ち着け染岡。気持ち分からなくもないけどそのままじゃ何も得るものはないぞ。」

「クソツ、俺も必殺シュートを……！」

ダメだ、ムキになってる。

恐らく染岡は、俺や豪炎寺に自分を照らし合わせているんだろうな。

帝国の試合で、俺と豪炎寺は必殺シュートで点を取った。ストライカーとして。

だが染岡は、ストライカーであるにも関わらず、必殺技はおろか点を取れなかったことに負い目を感じているんだろう。それが豪炎寺へ負の感情を向けることにも繋がっている。

少し休憩にしよう。

ドリンクとタオルを取りにベンチに向かうと、先程までいなかった存在に気づく。

「あ、加賀美先輩！お疲れ様です！」

「ありがとう。確か……新聞部の音無さん、だったよね。この前は宣伝どうも。」

部員勧誘の時にインタビューをしてきた人だ。確か学年は一つ下。音無、というよりやかまし？なんて失礼なことを口にするはずもなく、そっと胸の内に閉まっておく。

「加賀美先輩は知ってますか？尾刈斗中の怖い噂。」

「怖い噂か。あれだろ？尾刈斗中と試合した生徒は全員3日後に高熱で倒れるだとか、そんな。」

「なんスかその噂……怖いっス。」

壁山、お前後ろいたのか……

すると、徐々に全員集まってきたので、ちょうどいいから音無に尾刈斗中について説明してもらおう。

尾刈斗中に纏わるオカルトな噂の数々。それを聞いて主に1年組が震え上がる。壁山に至ってはトイレに行った。

「あの・・・やっぱり豪炎寺さん。」

「なんだお前ら！豪炎寺なんか頼らなくても、俺と加賀美がシュートを決めてやる！FWならここにいてるぜ！」

染岡が意気込む。

うーむ、いい心掛けではあるけど、そこまで豪炎寺にヘイトを向けなくても良いんだがなあ。

だがそれでも、1年達の不安は拭えず。皆豪炎寺の名を口にする。

「豪炎寺が凄いやつなのは異論ないさ。けど、今いるこのメンバーで戦わないことには何も始まらないだろう？」

「それはそうでやんすけど・・・」

「大丈夫だって。俺と染岡でバシバシ点取ってやるからさ。ほら、また帝国とやる訳でもないんだし。」

宥めるように声を掛ける。

事実、帝国以外のチームならそうそう遅れを取る気はしないんだけどなあ。

攻めの俺、守りの守。ここに他のメンバーが力を貸してくれれば、俺達はより強固なチームになれるはずだ。

豪炎寺がいれば攻めがもっと強くなる、ただそれだけの事だ。

「皆、人に頼りすぎても強くはなれないぞ！さあ、練習再開だ！」

空気を払拭するように守が練習再開の指示を出す。

走りゆく1年達の顔は、どこか曇っていた。

皆の気持ちが無処と無く晴れないまま、昨日の練習は終わってしまった。

豪炎寺を渴望する1年達、それを見て更に焦り、無茶をする染岡。

このままではチームとしての雰囲気も悪くなってしまう。どうかしなければならんだが・・・

因みに、今日も部活はあるのだが俺はその前に通院だ。

ローテの影響で部活開始まで少し時間があるからその時間を利用して来ている。

放課後になってすぐ来たから、まだ予約までに時間があるんだよなあ・・・と思いつつ、病院内を少しふらついている。

すると、だ。

「あれ、守に豪炎寺。こんな所でどうした？」

「加賀美。」

「柘弥、ここの病院だったんだな。」

「まあな・・・で、二人は何を？」

二人の様子を見ると、守はどこことなくバツが悪そうにしていることが分かる。

「加賀美も入ってくれ。・・・少し、話をしよう。」

「ん？お、おう。」

豪炎寺に促されるまま病室に入る。

”豪炎寺夕香・・・か。

中に入ると、ベッドに一人の少女が横たわっている。

「・・・妹さんか。」

「ああ・・・もうずっと眠り続けている。」

ずっと・・・か。

あまりに他人が干渉していい話では無さそうだが・・・豪炎寺本人が話を切り出したんだ。聞いても問題ないだろう。

そして豪炎寺から語られたのは、重く、苦しく、痛々しい話だった。去年のフットボールフロンティアの決勝。木戸川清修の選手として参加するはずだった豪炎寺。そしてその試合を楽しみにしていた夕香ちゃん。

試合開始前に、豪炎寺に一つの報せが飛び込む。

それは、夕香ちゃんが試合観戦に向かう途中、事故にあったこと。

豪炎寺は試合を放り出し、病院へ向かった。が、夕香ちゃんの意識が戻ることは無かった。

それ以来、豪炎寺は夕香ちゃんが目覚めるまではサッカーをしない、と戒めのように決めたらしい。

だが、この前の雷門対帝国の試合。そう決めていたにも関わらず、身体が勝手に動いたそうなの。

「・・・俺、何も知らないでしつこく誘って・・・ごめんな。このこと、誰にも言わないよ。じゃ。」

そうやって守は病室を後にしようとする。

去り際、豪炎寺が守に問いかける。

「サッカー部、あれからどうなった？」

「ああ、次の対戦校が決まったんだ。お前のシュートがきっかけでみんな練習頑張ってるぜ・・・ありがとな。」

と、伝えて守は完全に去る。

「そうか、上手く行っているようで何よりだ……」
「まあな……なあ、豪炎寺。」

俯いていた豪炎寺は、顔を上げこちらに目線を合わせてくる。

「あまり知ったような口は聞けないんだけどさ、この前の試合……勝手に身体が動いてたっことは、やっぱりお前はサッカーが好きなんだよ。その気持ちだけは、誤魔化さなくてもいいと思う。」

「……そうだな。」

「もしも、の話だぞ。お前がまたサッカーと向き合うつもりになったなら……俺達は歓迎するぜ。じゃあな。」

そう言つて俺も病室を後にする。

豪炎寺にここまで重い事情があるなんて、思つてもいなかった。

あいつが背負っているものを少しでも軽くしてやればいいが……下手に干渉するのはやはりよそう。

これは……あいつの問題だからな。

診察を終え、そのまま真っ直ぐ部活に向かう。

さつき携帯を見たら、大会前だから、とラグビー部が使わせて欲しいと頼んできたため今日も俺達は河川敷で練習するらしい。大会前なら仕方ないな。

荷物を部室に置き、用意をして河川敷へと向かう。

グラウンドと同時に、雷門イレブンが練習に励んでいるのが見える。

染岡が、昨日と同じようにムキになっているのも。

・・・少し、口出ししといた方が良いかもな。

「あ、加賀美君。」

「お疲れ様。・・・あれ、音無さん今日も来てたんだ。」

「加賀美先輩、こんにちは！実は今日からですね、サッカー部のマネージャーになりました！」

随分急だなおい。

まあ、部員も増えて本格的に活動し始めたし、秋一人では大変だろうし、丁度良いか。

「そっか。今日からよろしく頼む。」

「はい！よろしくお願いします！」

手を差し出すと快く握手に応じてくれる。

さて、俺も練習に参加しよう。

「よう染岡、頑張ってるな。」

「加賀美・・・へへっ、全然ダメだ。これじゃ、お前みたいなストライカーにはなれないな・・・」

「・・・少し、休憩にしようぜ。な？」

染岡を半ば無理やり連れ出す。

河川敷の傾斜となっている芝生部分に腰掛け、一対一で話をする。

「段々と俺らもサッカー部らしくなってきたよな。全員で足並み揃えて練習して、この前なんかは皆で試合してさ・・・俺、楽しかったんだよ。染岡はどうだ？」

「俺・・・羨ましかったんだ。加賀美や、豪炎寺が。」

「・・・というっ？」

染岡はぼつりぼりと言葉を紡ぐ。

俺が先制点を決め、良い流れを作ったこと。豪炎寺がやって来て、崩れかけた士気を再び高めたこと。ゴールを決めたのが自分だったら、どれほど良かっただろう・・・と。

「俺はお前達に負けたくない。俺も、あんなシュートが打てるようになりたいんだ・・・」

「そっか・・・でもな染岡。お前じゃ俺や豪炎寺にはなれないぞ。」

染岡があんぐりとしてこちらを見つめてる。

ここまでストレートに言われるとは思っていなかったのだろう。だが、当然のことだ。

俺がこれから言うことも。

「お前は」染岡竜吾 だからな。お前が俺や豪炎寺になれないように、俺や豪炎寺もお前にはなれないんだ・・・自信を持てよ。お前はお前だ。お前自身のサッカーで戦えば良いんだよ。」

「俺の、サッカー・・・」

手をグー、パーと開きながら見詰める。その表情は、段々と軽くなっていく。

・・・もう、大丈夫そうだな。

「よし、やってやる！俺のサッカー、俺のシュートを！」

「いいぞ染岡、その意気だ！さ、行くぞ！お前のシュートを完成させるの、手伝うぜ！」

「おう！」

すっかりやる気になった染岡と共に再びグラウンドに入り、皆に交じって練習を始める。

次々と繋がれたパスはやがて染岡に渡り、染岡はそのボールを全力

でゴールに叩き込む。

そのボールは蒼いオーラを纏いながら守の手の中に収まった。
あともう少し、だな。

「染岡！より強いイメージを、点を取るためのインスピレーションを具現化させるんだ！」

「インスピレーションで何だよ！」

「瞬時に思いつくような自分のシュートの形とか、そんな感じだ！」

「おうよ！」

守がボールを送り出し、再び振り出しに。

染岡は何度も、何度もボールを打ち込む。徐々にボールに込められる力は、想いは強く、より強くなっていく。

・・・そして！

「行け！染岡！」

「うおおおおお!!」

俺が打ち出したボールを、ダイレクトで染岡がシュートする。

その瞬間だった。ボールの蒼い輝きはより一層強くなり、先程まで見えることのなかった龍が現れる。

染岡の想いに呼応するように咆哮したそれは、ボールと共にゴールへ突き刺さる。

守は突如のことに反応出来ず、ノータッチでゴールを許してしまった。

「———すげえ。」

誰かがそう呟いた瞬間、炎が広がるように歓声が上がる。

「染岡！すげえシュートだったな!!」

「これだ・・・これが俺のシュートだ！」

染岡を囲んで全員が賞賛の声を送る。

そして今度は、このシュートに名前をつけようということになった。

おい、誰だ竜吾シュートとか言ったの。

盛り上がる皆をよそに、俺は近づいてくるある人影に気付く。

「豪炎寺。」

全員の視線が一気に豪炎寺へ向けられる。

「円堂、加賀美・・・俺、やるよ。」

「——豪炎寺!!」

そう声を出さずにはいられなかった。

染岡の必殺シュートが完成し、豪炎寺が正式にチームに加入する。

これはいい流れだ。チームの攻撃力が一気に高まった。

これなら、次の尾刈斗中戦も・・・!

「おい。」

「・・・?」

染岡が豪炎寺に歩み寄る。

こいつまさか、まだ豪炎寺の事を快く思っ——

「よろしくな、豪炎寺！」

「・・・おう！」

そんなことは無かった。

ストライカーとしての矜持が損なわれて怒ってるものかと思った

が、俺がいるし今更感あったな。まあ、何よりだ。

「よーし！尾刈斗中との試合に向けて、仕上げていくぞー！」

『さあ遂にこの日がやって参りました、雷門中と尾刈斗中の練習試合！どのような試合を見せてくれるのでしょうか！』

雷門中にて、尾刈斗中との練習試合が始まろうとしていた。

この前の帝国との試合を見た観客がさらに噂を広めたのか、心做しか以前よりもギャラリが増えている気がするな。壁山なんか完全に緊張している。

「ふう。」

「準備は万端か？染岡。」

「おう！俺のシュートでバンバン点を取ってやるぜ！」

染岡のやる気も十分だ。

勿論、俺と豪炎寺もだ。新しい雷門の攻め、見せてやるぜ。

「来たぞー！尾刈斗中だ！」

誰かがその声を上げる。

現れたのは紫を基調としたユニフォームに身を包んだチーム。事前に音無が入手してくれたデータで見た選手達のままだな。

それにしても、メンバーの個性が強すぎる。キャプテンは目隠ししてるし、キーパーはジェイソンみたいな仮面をつけてるし、バンダナに口ウソク突き刺してるやつもいる。・・・それでサッカー、できる

の？

「不気味だ・・・」

「お前が言うなよ。」

ボソリと呟いた影野に半田がツツコミ入れる。その通りである。何ならお前もあつちに混ざってても違和感無いからな？

「よし、行こうぜ!!」

守の一声で気合いを入れ直す。

両チーム揃って、センターで整列する。

すると、あつちの監督が守と豪炎寺と俺に声を掛けてくる。明らかに俺たち3人しか興味がない口ぶりだった。するとそれを聞いた染岡が、「お前らの相手は俺たち全員だ。」と口を挟む。それに対して相手の監督は、まるで興味無さげに流す。

「野郎・・・!」

「落ち着け染岡。その怒りは言葉じゃなくてプレーでぶつけようぜ・・・俺たちのサッカーでな。」

「・・・おう!」

チームメイトを軽視されて、俺だって内心苛立ってはいるさ。

けど、仮にも相手は目上の人だしな。試合結果で分かせてやるさ。

第6話 打ち破れ、呪いのサッカー!

雷門対尾刈斗。

この試合に勝てば、学校からフットボールフロンティアへの出場が認められ、負ければ廃部。俺たちの今後を左右する大事な試合だ。

何としても勝つぞ。

豪炎寺が加入したことにより、今回から俺、豪炎寺、染岡の3トップだ。MFには半田、少林、マックス。DFには風丸、影野、栗松、壁山。そしてゴールを守るのもちろん守。

万全の布陣で挑む。

『さあ試合開始だ!ボールは尾刈斗中から!』

ホイッスルが鳴り、試合が始まる。

キャプテンである9番幽谷が、吸血鬼みたいな風貌の11番にボールを渡す。

そこに素早く少林が切り込み、スライディングでボールを弾く。が、ボールは相手の10番へ。

「さ、させないっすー!」

壁山が立ちはだかるも、相手の巧みなドリブルに抜かされてしまう。そしてあつという間にゴール前へ。

大丈夫だ、俺達のゴールには守がいる。

「喰らえー!フロントムシュート!!」

ボールが紫色に光り輝いたと思ったら分裂し、不気味に揺らめきながらそれぞれゴールへ襲いかかる。おそらく実体は一つのみ。

対する守は、手に力を集中させ――

「ゴツドハンド!!」

対照的に、神々しい光を放ちながらその手は顕現する。

正確にボールを捉え、見事止めてみせる。流石だ。

『おっと！月村の豪快なシュートをキーパー円堂、見事にキャッチ!!』

止めたボールを守は風丸へ。

風丸は尾刈斗のマークをもともせず、その自慢の脚力でボールを前線へ運んでいく。

風丸は少林にパス。そして豪炎寺に回そうとするも、豪炎寺には徹底マーク。次に俺の方を見てきたが、俺にもマークがついている。が、一人フリーのストライカーがいる。

「染岡さん!!」

「おう！」

ボールを受け取った染岡は、真っ直ぐにゴールへ向かっていく。

行け、染岡!!

「行くぜ・・・ドラゴンクラアアアツシュ!!」

蒼く光り輝くボールは、獰猛な龍と共にゴールへ。

ジェイソンのような面をつけた相手キーパーは、ボールに飛びつくも触れることは出来ず、染岡の必殺シュートはゴールネットを揺らす。

『決まったア！染岡のシュート炸裂!!』

「ナイスシュート、染岡!!」

「よっしやア!!」

染岡を中心に湧き上がる。いい流れだ。

それにしても目金がつけたあの名前、中々いいな。俺が新しい必殺技を作った時は命名を頼もうか・・・

再び尾刈斗ボールから試合再開。

パス回しの瞬間を見極め、マックスがボールを奪い取る。

さて、染岡に負けてられないな。

「マックス、こつちだ！」

「加賀美！」

マークを振り払ってボールを受け取る。

当然、俺からボールを奪い取ろうと数人襲いかかってくるが――

「ジグザグスパーク!!」

雷のマークを描くようにジグザグに移動、その後放電し相手を抜き去る。

さて、豪炎寺は依然とてがつつりマークされている。が、再び染岡はフリーだ。

先程一点取られてなおフリーにするとは・・・まあいい。

「もう一本だ、染岡！」

「任せとけ！ドラゴンクラッシュユ!!」

再び蒼き龍が相手ゴールへ襲いかかる。またも相手キーパーは反応出来ず、俺たちの得点に。

・・・何かが妙だな。こう、やけにすんなり行き過ぎというか・・・点を取れるに超したことはないのだが。

「加賀美。」

「豪炎寺か・・・なあ、何か感じないか。」

「ああ・・・奴ら、まだ隠してそうだ。」

豪炎寺も同じ意見で安心した。念の為染岡にも伝えたと、心地よい返事を返してくれる。

そしてセンターから2―0で試合再開、だったのだが――

「何時までも雑魚が調子に乗ってんじやねえぞオ!!」

相手の監督が豹変する。

心做しか顔の模様も変わっている気がする。怖いな、この連中は・・・

「テメエらー！そいつらに地獄を見せてやれ！」

「おうー！」

選手達がそう返すと、監督はブツブツと呟き始める。呪いでも唱えてるのか？

まあいい、ボールに集中しよう。

と、ここであることに気づく。ボールを持った幽谷を中心に五人で列を組み前線が上がっているのだが、目まぐるしくその配置が入れ替わっているのだ。・・・何が狙いだ？

「来るぞー！」

風丸が後ろから指示を出し、それに応じて中陣がマークにつく、はずだった。

何と、味方のマークにつき始めたのだ。おかしい、そんなミスをするはずがない・・・

前進を許してしまったものの、後陣がまだ残っている。守の声掛けを受けて動き出した、が！

「無駄だ・・・ゴーストロック!!」

「マーレマーレ、マレトマレ!!」

幽谷がその声を上げたと同時に、監督の眩きが大声に変わる。

その瞬間、DF達・・・いや、俺達もだ。雷門全員が動けなくなる。

「何だこれ・・・!?!」

染岡が声を漏らす。豪炎寺も表情に驚きが滲み出ている。

どうやら、ポジション関係無しに動けなくなっているようだ・・・
待てよ、だとしたら守も!?

「これがゴーストロックだ・・・ファントムシュート!!」

「・・・ツ、クソツ!!」

やはり守も脚が動かないようで、必死に手だけを伸ばすが幽谷の
ファントムシュートに触れることが出来ない。

そのまま、シュートはゴールに突き刺さる。

『幽谷のシュート炸裂! 2-1、尾刈斗中1点を取り返しました!』

「何なんだ、今の・・・」

「分からない・・・とにかく、取られた分は取り返したいが俺達も警戒
しよう。」

「ああ、奴らを観察してみよう。」

FW陣で少し集まり、意思疎通をする。

変わらず攻め込みはするが、油断はせずに相手の出方を伺う方向性
だ。

「加賀美!」

「おうー！」

染岡からのバックパスを受け取り、上がっていく。が、尾刈斗は誰も止めようとしない。妙だ、明らかにおかしいぞ、これは。だが、打たないことには始まらない。

「染岡！やってやれ!!」

「おうよー！」

染岡がゴールを見据えたところで、キーパーが妙な動きをしだす。手を回転させるような、なんとも言えない動きだ・・・何が狂っている。

「ドラゴン、クラッシュュ!!」

「ゆがむ空間。」

染岡がドラゴンクラッシュュを放つも、ボールはキーパーの手の中にあっさりと収まってしまう。

さっきあんな簡単に失点したキーパーが、いとも簡単に染岡のシュートを・・・？

キーパーがロングパスで前線にボールを回す。

「ゴーストロック!!」

「マーレ、トマレエ!!」

再び幽谷がゴーストロックを発動する。するとやはり、俺達は脚が動かなくなる。

守も同じで、何とかしようともがいてるうちにゴールを決められてしまう。クソツ、これで同点・・・!!

こちらボールから再開するも、直後ゴーストロックを使われ、また

身動きの取れないまま失点を許したところで前半終了となる。

「クソツ、一体あれは何なんだ？」

ハーフタイム、部室にて作戦会議だ。

急に脚が動かなくなる技、ゴーストロック。簡単に染岡のシュートを止めて見せた技、ゆがむ空間。この2つを攻略できなければ、俺たちに勝ちはない。

「あれが、尾刈斗の呪いだっていうのか・・・？」

「ヒィィィ!!」

ふとそう呟くと、壁山が悲鳴をあげる。失言だったか？だが、そうとは思えない。

考えろ、何かしらのタネがあるはずなんだ。

「あの監督が変なこと言い始めてからだよな、尾刈斗中が変な動きし始めたのって。」

「言われてみれば確かに・・・」

「じゃあ、あの呪文に秘密が・・・？」

守が疑問を口に出すと、マネージャー陣も同調する。俺も同意見だな。あの監督が何かしたように思える。

その他に、もう一つだ。

「もう一つ気になるのはあのキーパーの技だ。最初染岡のボールにろくに反応出来なかったやつが急に簡単に止めだした・・・妙だとは思わないか？」

「確かに・・・」

謎は晴れないまま、後半戦を迎える。
ボールはこちらから。

「染岡！こつちだ！」

「加賀美・・・？おう！」

恐らく、シュートを打つてみれば俺にも何か分かるはずだ。
途中何度も道を阻まれるが、一緒に上がってきた染岡、豪炎寺とパスを回しながら駆け上がる。

そしてゴール前。よし、やってみるか。

予想通り、キーパーは例の動きをしてきた。よく見ろ、よく観察しろ！！

「轟一閃!!」

俺の必殺の一撃を叩き込む。

・・・何もおかしなところはないな、いつも通りの轟一閃だ。

「ゆがむ空間。」

が、ボールはやはり簡単に取られる。

何故だ・・・何がおかしい。単純にあのキーパーが最初は手を抜いていただけなのか？

「なあ加賀美のシュート、前はもっと強くなかったか？」

「だよな、何かこう、勢いがないというか。」

後ろに戻り際、観客からこんな声が聞こえる。

意味が分からない、俺はいつも通りの感触だったが・・・

待てよ、もし俺がそう思い込んでいただけとしたら？

何らかの理由で、いつもより弱い威力でシユートしているにも関わらず、自分ではいつも通りと錯覚している・・・いや、錯覚させられているのか？

もしこれが本当に相手の仕業だとしたら・・・催眠術、だとも言うのか？

確かにそう考えると辻褃が合う。アイツらのサッカーのタネが催眠術なのだとしたら、催眠の導入はおそらくあの前線に上がる際の変な動き。そしてシユートの際のトリガーがあのキーパーの動きだとしたら、ゴーストロックのトリガーは――

『じゃあ、あの呪文に秘密が・・・？』

――これだ!!

あの監督の言葉、あれがゴーストロック発動の鍵!ならば!!

「――うおおおおおおお!!」

「ゴロゴロゴロ、ドツカアアアアアン!」

俺と同じタイミングで守が叫ぶ。あいつも気づいたか!

そう、言葉による催眠術なら、その言葉を遮ってしまえばいい!

「脚が動く!?!」

誰かがそう驚く声が聞こえた。俺の脚も動く、攻略の道筋は見えた

!!

「フアントムシユート!!」

「させるか!熱血パンチ!!」

ゴツドハンドでは間に合わないと判断し、守はパンチング技で迫る

シュートを上に弾いてみせる。

『と、止めました円堂！幽谷のファントムシュートを止めました!!』

守の周り、俺の周りにみんなが集まってきてなぜ動けたのか聞いてくる。

俺はそれに加えて、ゆがむ空間を破る方法を添えて説明する。

「そうか、そんな仕組みだったのか！」

「やはり、催眠術か・・・」

「ああ・・・だが、タネが分かった今、もう恐ることは無い！俺達で突き放すぞ！」

守が少林にパスを回し、そこから目まぐるしくボールが飛び交う。やがて俺たちFW陣にパスが渡る。

ボールを受け取った俺はすぐさま染岡にパスする。が、染岡の前にはDFが。

「——豪炎寺イイ!!ドラゴオオン、クラアアツシュ!!」

染岡がドラゴンクラッシュを放つ。

ゴールに向けてでは無く、はるか上空へ。

「ふん、ミスキックだ!!」

「それはどうかな？」

高く昇る蒼龍。それに追いつくように、豪炎寺が炎を纏いながら上昇。

そして、豪炎寺が火炎をボールに叩きつける。

「ファイアトルネード!!」

蒼き龍は炎を纏いて赫への変わる。

染岡と豪炎寺の連携シュートが相手ゴールへと襲いかかる！

「ゆがむ空——ぐわあああああ!?!」

『ゴオオル!!豪炎寺の強烈シュートでキーパーごとゴール!!』

放たれたシュートはキーパーごとゴールに突き刺さる。これで同点!

相手ボールから試合再開、すぐさまボールを奪い、前線へと再び上がる。

「加賀美!さっきの屈辱晴らしちまえ!」

「行け、加賀美!」

「染岡、豪炎寺——任された!!」

自分達の絶対的強みが破られたことで激しく動揺している尾刈斗中の面々を抜き去り、雷の如くゴールへと向かう。

さて、さっきの礼をしてやる——!!

「轟け・・・轟一閃!!」

一直線に雷を纏ったボールがゴールに突き刺さる。

相手キーパーは触れることすら出来ず、ただただ唾然としている。これが本来の轟一閃だ、思い知ったか!

その後も俺達がゴールを決めまくり、最終的に大差で試合は終わる。最終スコアは何と9—3。3倍差である。

「勝ったんスね、俺達・・・」

「ああ、これでフットボールフロンティアに出場できる！」

歓喜の声上がる。夢みたいだな、いざこうして目標を前にする
と。

入学したてのあの頃からは、到底考えられなかった。

「よおし皆！フットボールフロンティアに乗り込むぞ！！」

「おお！！」

俺達は確実にチームとして強くなりつつある。

もっともっと、皆で強くなって全国取ってみせる。

第7話 降り注ぐ稲妻と貫く稲妻

「皆！分かってるなあ!？」

「おお!!」

いつもの如く学校が終わり、部室に全員集まっている。

守を中心に部室はかつてないほどの熱気に包まれている。それも当然。ようやくフットボールフロンティアが始まるのだ。

「相手は何処だ」と風丸が尋ねるも守は「知らない!」と声高らかに答える。全員ずつこける。よくもまあ堂々と云えたものだ。

「野生中ですよ。」

「野生中・・・確か、去年の地区大会の決勝で帝国と戦ってます。」

突如入ってきた冬海先生が次の対戦校を教えてくれる。それに反応して音無が野生中について話す。

嫌味のように先生が「大差で初戦敗退はしないように」と告げる。その先生仮にも顧問なんだからもう少しやる気出してくれても良いのでは？

「ああ、それから。」

「チーッス。俺、土門飛鳥。一応ディフェンス希望ね。」

外から高身で少し色黒の男が顔を出す。見ない顔だな・・・転校生か？

冬海先生がまた嫌味を言って去っていく。それに対して土門は指差しながら怪訝そうな表情を浮かべる。正しい反応だ。

その後、秋と土門がかねてよりの仲であることが分かり、守が土門に歓迎の意を表す。

「それにしても相手は野生中だろ？大丈夫かなあ。」

急に土門がそんなことを口にする。どうやら前のチームで戦ったことがあるらしく、どんなチームなのかを教えてくれる。

瞬発力、機動力共に大会屈指。特に高さ勝負にはめっぼう強いのが特徴だそうだ。

高さ、ねえ。こちらのシュート技はドラゴンクラッシュ、轟一閃、ファイアトルネード、そして尾刈斗中で編み出した豪炎寺と染岡のドラゴントルネード。

後半二つ何かは上から抑え込まれるかもしれないな。

「俺も戦ったことがあるが、空中戦だけなら帝国をも凌ぐ。」

どうやら俺の予想は当たっていたらしく、豪炎寺がそう口にする。

「・・・と、来たら。」

「新必殺技だ!」

思考を共有していたかのように守が俺が考えていたことを声に出す。

恐らくは、地上から放つドラゴンクラッシュ、轟一閃もその機動力によって蹴る前に奪われるかもしれない。

「なら、相手よりも高く、より高く飛び空中を制するしかないな。」

こうして、新必殺技の開拓が始まった。

「よーし行くぞ!」

外に出て、守が高いところからボールを投げ、それをひたすらに皆

で蹴り始める。

空中を制するなんて提言した俺だが、一つ考えがあるのでそれを優先させてもらっている。一人でひたすらに練習しているんだが・・・中々上手くいかない。

途中、古株さんがやってきて皆が集まり何かを話していたが、俺はひたすらにボールと向き合う。

「あー・・・クソ。」

「加賀美先輩、お疲れ様です！」

「音無、ありがとう。」

行き詰まってしまい、半ば投げ出すように寝転がると音無がタオルとドリリンクを持ってきてくれる。

「新必殺技の開発、なかなか大変そうですね。」

「そうなんだ。どんな技にしたいかっていう構想は練れてるんだけど、それをどう実現するかっていうのがイマイチ掴めないんだ。」

「なるほどなるほど・・・」

古株さんを中心に何やら盛り上がっている守達を横目に溜息をつく。

しばらくそうしていると、音無が口を開く。

「少し考えすぎなんじゃないですかね？ほら、加賀美先輩だつてこの前染岡先輩に言つてたじゃないですか。インスピレーション・・・でしたっけ？少し直感的になってみてもいいのかもしれないよ。」

「直感的・・・か。」

どうやって轟一閃以上のエネルギーを込めるのか、どうやって轟一閃以上のパワーを引き出すのか・・・

「例えば、強いシュートを打ちたいなら片脚じゃなくて両脚で蹴る！とか……」

両脚。それだ!!

片脚での全力キックでも威力が足りないなら、両脚で全力キックすればいい!

「そうだ、それだよ音無……! 見えた、俺の新必殺技!」

「ええ!? 今ので良いんですか!?!」

「ああ良いんだよ! 早速やってみる、ありがとな!」

浮き立つ気持ちと同時に身体を起こし、早速ボールを抱えてゴール前に向かう。

これで、野生中に対抗出来る!

「秘伝書オ?」

俺の新必殺技は八割程は仕上がった。後はもう一つの課題をクリアすれば完成だ。

皆の方はというと、なかなか行き詰っているらしい。新必殺技のしる字も見えてこないだとか。

そんな中、守が”秘伝書”とやらの存在を口にする。

「なんでそんなのがこの学校に? しかも理事長室。でもって、それをなんで雷々軒の響木さんが知ってるんだよ。」

「それは……知らん!とにかく、探してみようぜ! そのイナズマイレブンの秘伝書ってやつをさ!」

と言つて皆理事長室へ向かつてしまう。

「……豪炎寺、新必殺技の練習付き合つてくれない？」

「……ああ。」

見つかったらまずいだろ、と同じ考えを持っていたらしく豪炎寺は部室に残っていた。

同じストライカーの豪炎寺の意見があれば、俺の新必殺技は完成まで持つていけるかもしれないからな。

「さ、見せてくれ。お前の新必殺技。」

「おう！」

横で見ている豪炎寺に、未完成の必殺技を見せる。

未完成と言えど、そのパワーは既に轟一閃を凌駕している。これも音無のおかげだな。今度ジュースでも奢ろう。

「——すごい威力じゃないか。ドラゴントルネードにだって負けてない。だがこれで完成ではないと……何が足りないんだ？」

「それはだな——」

「そうか、じゃあ——」

豪炎寺の意見を仰いで何度も何度もボールを蹴ること数十分。守達がノートを片手に戻ってくる。

案外早かつたんだな……

「あつたのか、秘伝書。」

「ああ！今から見るから柊弥と豪炎寺も来いよ！」

全員の前でさあ秘伝書を御開帳……が、読めない。全く。

これ・・・大介さん、守のお爺さんの字だな。小さい頃から守が持っていたお爺さんのノートを何度か見せてもらったことがあるが、何を書いているのかサツパリだ。

暗号に見えるほど汚い字で書かれているからな・・・逆になぜ守は内容を理解できるのか。

「相手の高さに勝つにはこれだ——イナズマ落とし！」

「イナズマ落とし？」

「ああ！読むぞ・・・一人がビヨーンと飛ぶ。もう一人がその上でバーンとなって、グルつとなってズバーン！これぞ、イナズマ落としの極意！」

・・・なるほど。とりあえず、皆言いたいことは同じだと思う。

せーので言うぞ？せーの——

「分かるかア!!」

悪い冗談なのか？守以外には読めないような字でその内容はよく分からん内容だなんて。守ですらクエスチョンマーク浮かべてるぞ？

「でもさ、爺ちゃんは嘘はつかないよ。ここには本当にイナズマ落としの極意が書かれているんだ。あとは特訓さえすればいいんだよ！」
「ビヨーンと飛んで・・・」

頭をフル回転させて考えるが、殆ど理解出来ない。

そうだ、こんな時こそ直感的に・・・

ビヨーンと飛ぶ、もう一人がその上でバーン・・・まず、2人の連携技ということは分かるな。

そしてグルつとなってズバーン・・・回転と共に打ち込むという意味か？

あれ、意外と分解して考えると分かる・・・？

「今日のメインイベントはこれだ!!」

と言って染岡がぐるぐる巻きにした毛布を穴に詰めたタイヤを見せびらかす。

相手の技を受ける特訓・・・らしいが。これ考えたの絶対守だろ。

「円堂、加賀美。ちょっといいか？さっきの必殺技のことだが・・・」
「ん？」

豪炎寺が土に絵を描きながらこういうことじゃないか、と説明する。その内容は俺がさっきの考えていたものとほぼほぼ同じだった。こいつと俺はもしかしたら思考が似てるのかもしれない。

「俺も同じ考えだ。」

「——柊弥、豪炎寺。お前らすごいな！」

「・・・お前は分からなかったのかよ。」

特訓してる奴らの悲鳴をBGMに、俺達3人は必殺技の話を進める。

「そんな不安定な足場でオーバーヘッドキックが出来るのはお前ら2人しかない！」

「あー、俺は自分の新必殺技があるから豪炎寺頼めないか？さすがに2つ掛け持ちはキツイ。」

「そうだな、加賀美は自分のを仕上げてくれ。俺の踏み台になれるやつは・・・壁山か？」

屈強な身体を持つ壁山で間違いないだろうな。だが、問題は壁山がそんな高いところまで飛べるかだが。人一倍ビビりな壁山のことだ、震え上がるに決まっている。

まあ、後のことは後で考えればいいか。

日が暮れるまで練習は続いた。

壁山は守と一緒にタイヤを二つ身につけ、ジャンプ力を鍛える特訓。豪炎寺は染岡、風丸を踏み台に空中でオーバーヘッドキックの特訓。そして俺はひたすらに打ち込む特訓。全員、既にボロボロだった。

「う、オオオオオオオオオ!!」

咆哮と共にボールにエネルギー込める。すると、先程よりも一際強くボールが光を放ちながら帯電する。だがまだ足りない。この程度では……!!

もどかしさをボールにぶつけるように両脚を叩き込む。が、俺の集中力が切れてしまったのか、接触の際にボールに込められたエネルギーが激しく波打つように放出され、俺は吹き飛ばされてしまう。痛え……受け身ミスった。

「加賀美先輩! もう今日はやめておきましょうよ! ボロボロじゃないですか!」

「そうはいかないさ、壁山も豪炎寺も、ほかの皆も頑張ってるんだ。俺だって——!!」

音無の心配はありがたいが、立ち止まる訳にはいかないんだ。

俺一人逃げ出すなんてこと、絶対にしたくない!

「でも、そんな義務感を感じながらやっただって何にもなりませんよ！
焦るばかりじゃ、何も掴めないんですから！」

「――義務感？」

「そうだ、俺は焦りすぎていたんじゃないか？」

様々な試練を乗り越え、ようやくフットボールフロンティアに出れる。そこでまた点を取らなければ、勝たなければという固定観念に縛られていた。

サッカーは楽しむものじゃないか、こんな苦しい思いでやったところで――

「また、助けてもらったな。」

「・・・え？」

「音無の言う通りだ。焦るばかりで楽しむ気持ちを忘れていたよ。大好きなサッカーを。」

「やってて苦しいなんて、そんなのサッカーじゃない。楽しんで勝つてこそ、本当のサッカーだ。」

「一流のプレイヤーは、誰よりも強い選手なんかじゃない。誰よりも楽しんで強くなれる選手だ！」

「――よし。」

「加賀美先輩！」

ボロボロになりながらもまだ続けようとする俺を音無が引き止めようとする。

「もう大丈夫だ、心配ない。」

「込めろ、サッカーへの想いを。強くイメージしろ、俺のサッカーを！」

「はアアアアア!!」

ボールに込めた思いがエネルギーとなって辺りに迸る。先程までの危なっかしい雷よりも、さらに強く、もっと強く。

あまりの力強さに自分ですらボールに近付くのが難しい。それでも、やってみせる。

エネルギーに包まれたボールは打ち出されるのを今か今かと待ち侘びているように感じる。

「いつけええええええ!!」

跳躍と共に両脚をボールに突き刺す。力を全てボールに流し終えると同時に、宙で一回転して着地する。

ボールが打ち出される瞬間、雷のような轟音が辺りに響いた。

打ち出されたボールは閃光を伴いながらゴールへ突き刺さり、暫くの間ネットを揺らし続ける。

「——出来た、出来たぞ!!」

思わずその場でガッツポーズを取る。ようやく完成した、俺の新必殺シュート!

轟一閃を習得したのは小学生の頃だから、この雷門中でサッカーを初めてから初の新シュートだ。

「加賀美先輩!! やりましたね!!」

「ああ! ってあれ……」

急に足元が覚束なくなり、顔から転んでしまう。音無が駆け寄ってきて身体を起こしてくれる。

「もう、きつきから心配させないでくださいよー!」

「悪い悪い……けど、このシュートが完成したのは音無のおかげだよ。」

本当にありがとう。」

そう音無に感謝を述べると、急に黙り込んでしまう。・・・俺、なんか変なこと言っただろうか。

するとそこに守や豪炎寺達もやってくる。

「柊弥！さっきのすっげー音は何だよ!？」

「完成したんだ、俺の新必殺シュートがな！」

「そうか・・・結構離れていた俺達のところまでパワーが伝わってきたぞ。これは期待出来るな。」

このシュートと、豪炎寺達のシュートでまずは目の前の野生中に勝つ。そしてその次もそのまた次も勝って目指せフットボールフロンティア優勝だ！

『さあ！間もなくフットボールフロンティア地区大会1回戦、雷門中对野生中の試合が始まります！』

そうして迎えた試合当日。

あれから俺の予想通り、壁山は飛んだ際に下を見てしまい、恐怖でそれどころではなくなってしまう遂にイナズマ落としが完成しないまま試合を迎えてしまった。

いざとなれば俺のシュートもあるが・・・

「頑張れー！兄ちゃん!!」

会場は野生中であるため、俺達の応援はほぼほいほいない。

が、その中でも壁山の弟とその友達が応援に来てくれている。

「良いところ見せないとな？壁山。」

「は、はいっす!!」

さて、どうなる事やら。

『雷門中からキックオフです!』

スタメン、フォーメーションは前回の尾刈斗中と同じ。今回はセントーは俺と豪炎寺だ。

一旦ボールを半田まで下げ、俺達FWはすぐさま前線へと駆け上がる。

「他山先生がこの試合に勝ったらおやつ食べ放題だつてよ!皆!やるコケ!!」

鶏頭のキャプテンがメンバーにそう呼びかけてボールを奪いに来る。そんな動機で良いのかよ!?

ボールをキープしていた風丸に、相手の7番が襲いかかる。風丸は素早くロングパスを出し、染岡へ回す。

「野生中の実力、見せてもらおうか・・・豪炎寺!!」

染岡が空高くパス。豪炎寺は追いかけるように上昇し、ファイアトルネードの構え。さあ、どう来る・・・?

「はああ!!」

「コケー!!」

『野生中キャプテン、鶏井も飛んだ!高い!なんというジャンプ力だー!』

なんと豪炎寺より高く飛んでみせ、ボールを奪ってしまおう。

話に聞いていた通りのジャンプ力だ。まさか本当にファイアトルネードを抑えられるとはな。

こうなれば、やはりイナズマ落としと俺の新必殺技で対抗するしかないだろう。

相手キャプテンはロングパスで一気にボールを回す。受け取ったのはチーターのような見た目の11番。

あつという間にマークに着いた半田を引き剥がす。早い。風丸すら抜かれるとは・・・

11番は先程の染岡のように高いパスを出す。ファイアトルネードにも引けを取らないその高さまで相手7番は跳躍、そのまま頭からボールに突き刺さる。

「コンドルダアイブ!!」

「ターザンキック!!」

シュートチエインか!

7番のシュートに9番が勢いを乗せる。シュートコースも急に変わったが、守はすぐさま体勢を立て直し――

「熱血パンチ!!」

――見事弾いてみせる。だがかなりギリギリだ。

『雷門中円堂防いだ!だが恐るべし野生中の個人技!雷門中誰一人ついていけない!!』

全くもってその通りだ。新必殺技だけでなく、基礎能力の向上もすっかり取り組んだがそれでもこの差だ。

ボールは守から風丸へ。取られないように細心の注意を払いながらパスを回し、豪炎寺へ。

しかし、豪炎寺の周りには3人のマークが。

「染岡!!」

フリーだった染岡へパスを出す。

・・・待て、あいつあのまま打つ気だ!

「待て染岡! 気をつけ——」

「ドラゴンクラッシュ!!」

呼びかけ虚しく、染岡はドラゴンクラッシュの構えに入る。

が、相手DFのアルマジロのようなタックルでボールごと染岡は吹き飛ばされる。

「染岡ア!!」

「ぐウ・・・!!」

すぐさま染岡の元へ駆け寄る。

マネージャーの治療を受けるが、足を捻っていて試合の続行は不可能と判断された。選手交代だ。

染岡に代わって土門、そして壁山はFWに。イナズマ落としを狙いに行く。

「すまねえ、加賀美・・・!」

「良い、気にするな。俺達で何とかするから見ていてくれ。」

相手のスローインから試合再開。

駆け上がる相手6番に、新しく入った土門が立ち塞がる。お手並み拝見と行こうか。

「いっちょやりますか・・・キラースライド!!」

連続蹴りのスライディングでボールを奪い取る。あれは・・・帝国のDF技。あいつ、帝国出身なのか・・・？

そのまま上がっていく土門。ある程度上がったところでボールを高く上げる。それに対して壁山と豪炎寺、相手キャプテンが飛び上がる。

「ヒイイ!!」

案の定、壁山が恐怖に耐えきれず体勢を崩してしまう。それにより豪炎寺が飛べず、相手にボールを取られてしまう。

そこからは明らかなこちらの劣勢。守にシュートの嵐が降り注ぎ、何とかそれを防いで前線に回しても壁山のミスで点は取れずまた相手ボール。その繰り返しだ。

「豪炎寺、俺が・・・」

「いやまだだ！イナズマ落としが成功しない限り、お前の新必殺技は打つな！」

「・・・分かった。だが、このまま決まらないようなら最後の最後で俺がやる！いいな!?!」

恐らく豪炎寺はこの先を見越し、壁山の成長を狙っているのだろう。

俺という後ろ盾を完全に封じた状態でなければ、壁山はきつとイナズマ落としを成功させることが出来ない。

逆に恐怖に打ち勝ちここでイナズマ落としを成功させることが出来れば、この先壁山はDFでもさらに活躍出来るだろう。

「ターザンキック!!」

「モンキーターン!!」

「スネークショット!!」

打たれ、抜かれ、また打たれ。されどもこちらは打てず。もう守の消耗も厳しくなってきた——

『ここで前半終了!!両チーム無得点、だが試合を支配しているのは野生中だ!!』

ナイスタイミング、と言ったところか。このまま打たれ続けたら守が持たなかったからな。

ベンチに戻り、水分補給をする。さて、壁山をどうしたものか。

「後半も俺は必ずゴールを守る!二人のイナズマ落とすと加賀美のシュートで、勝ちに行くぞ!!」

「キャプテン・・・俺をDFに戻してくださいっす。」

壁山がぽつりぽつりと懇願する。戻すのがダメなら、交代してくれと。

だが守はそれを拒む。壁山に皮剥けて欲しいと思っているのは豪炎寺だけではない。無論、俺もだが。

「加賀美さん、あんな凄いシュートを作ったじゃないっすか!じゃあ俺じゃなくても、加賀美さんが決めれば——」

「断る。自分から逃げる奴の頼みなんて俺は聞かないぞ。」

「加賀美さん!?!」

な。少林や栗松から驚きの声上がるも、気にとめない。事実だから。

「まだまだ地区大会の1回戦だ。こんな所で逃げ出そうとする奴が、この先勝てるはずがないんだ。」

「そんなこと言わなかったって——」

「何度失敗したっていい、ただ諦めるな。俺は、全員で勝ちに行きたいんだよ。」

思っていることをそのまま壁山にぶつける。

俺の言葉を受けて、壁山の目には僅かに光が点る。もう一押しだな。

「お前は1人じゃない・・・俺達全員が付いてる。何度でも挑戦してみろ、頑張ったその先にあるものはきつと何にも変え難い物だ。」

そう言っただ俺はグラウンドに戻る。

後ろから小走りで豪炎寺も付いてくる。

「言うじゃないか。」

「・・・あいつに成長して欲しいと思っただ俺もだからな。」

やがて全員がポジションにつき、間もなく後半開始だ。

大きく息を吸い、声を上げる。

「まだまだここからだ!!全員、気張って行くぞ!!」

「おう!!」

こういうのは普段守の役回りなんだけだな。

仮にも副キャプテンだし・・・たまには、な。

『エンドチェンジして、野生中のキックオフで後半開始!ボールは水前寺にパスされ、高速ドリブルだ!!』

チーターみたいな奴がボールを持ってどんどん上がっていく。俺達がやるべきは後ろの仲間を信じ、いつでも攻撃に転じられる準備をしておくことだ。

果敢に守るも、誰もボールを奪えずに相手の10番へ。

「スネークショット!!」

蛇のように曲がるシュートが守に襲い掛かる。守は熱血パンチで上に弾くが、やはり消耗は回復しきっていないし腕へのダメージもあるのだろう。顔を歪める。

「痛くなんか・・・ねえぞお!!」

守が前線にパス。それを見て豪炎寺と壁山が上がるも――

「やつぱり、俺には無理っス・・・」

「くっ・・・!」

壁山はその場から動かず。一人豪炎寺はボールを受け取るべく飛ぶも、やはり相手キャプテンには叶わない。

再びボールは相手の前線へ。守が待つゴールへ何度も何度もシュートを叩き込む。

やがて腕の限界が訪れ、守は顔面でボールを弾く。

「ゴールは・・・割らせない!!」

守だけに頼る訳には行かない、とDF陣が士気を高める。一人では抑えきれない相手も2人で、2人でもダメなら3人でと複数でプレスをかけ始めた。

有効ではあるが・・・相手よりも動くせいでどんどん消耗してしま
う。

・・・どの道、俺は今ゴールを決める訳には行かない。なら、アイツらがイナズマ落としを成功させるまで俺も下がるとしよう。前半はシュートチャンスもなかったしそこまで消耗していないからな。

「壁山。目を開けてよく見ておけよ……！」

「へ……？」

下がり際、壁山に一声かける。豪炎寺、あとは任せたぞ。

段々と動きが鈍くなってきた皆に混ざって俺も相手に立ち塞がる。守の負担を少しでも減らしてみせる。

「おおおおお!!」

ゾーンプレスによって相手11番が下げたボールが相手に渡る前に割り込み、ボールを奪い取る。そのままキープを試みるがすぐ奪われる。が、また奪い返してパスを回す。それが取られてもまた奪う。

「まだまだアアアア!!」

野生中一の瞬足である11番に必死に追いつき、ボールを奪う。驚いている11番をよそに前線を見据える、が10番にスライディングでボールを奪われる。その拍子に転んでしまう。

ボールは9番へ。シュートの構えだ。

「守ツツ!!頼むツツ!!」

縋り付くような思いで声を荒らげる。

既に限界を超えた守は、それでも迫るボールに対して立ち向かう。

「ゴッドハンド!!はあツツ!!」

苦痛に顔を歪めながらも守は守りきる。そしてそのボールは――

「壁山アア!!」

——壁山へ。

壁山は臆することなく、ボールを追いかける。それに追従して豪炎寺も上がる。よし、これなら！

再び壁山と豪炎寺、相手キャプテンは跳ぶ。一瞬躊躇う壁山……だが！

「これが俺の、イナズマ落としイイ!!」

壁山は地に背を向け、上を見据える。そして豪炎寺は壁山の腹を踏み台にさらに高く。

そうか、下を見なければ——！

高さを得た豪炎寺はそのままオーバーヘッドキック。打ち出されたボールは紫電を纏いながら一直線に相手ゴールへ降り注ぐ。

『ゴール！ついに野生中のゴールをこじ開けた!!豪炎寺と壁山の新しい必殺技だ!!雷門中、一点先制!!』

「——よっしゃア！」

遂に決めてくれた。やったな、壁山——!!

全員が沸き立つ。疲労も痛みも忘れて、喜び舞い上がる。

そして相手キックオフから試合再開、残り時間はあと僅か。

「はああ!!」

引き続き前陣からスタートの壁山が、相手のボールを奪い取る。

勢いに乗っているせいか、ディフェンスのキレも増している、いい傾向だ。

「加賀美さん!!」

「おう！」

壁山のパスを受け取り、相手ゴールへ切り込んでいく。容赦のない
デیفエンスが待ち構えるが、全て躲して更に前へ上がる。

アイツらが魅せたんだ・・・俺だつて！

「行くぞ・・・！」

スパークウインドの要領で何度かボールを蹴りながら雷を帯びさせる。そして俺のサッカーへの熱意を、想いをボールに乗せ前へ蹴り飛ばす。

蹴り出されたボールは並々ならぬエネルギーを放出し、迸る雷で相手を誰一人して寄せ付けない。

そう、これが俺が考えた野生中対策・・・ボールを奪われるなら、近付かせないほどのエネルギーをボールに込める。

「ライトニング・・・ブラスターアア!!」

俺の全力を両脚で叩き込む。

雷鳴のような轟音と共に、雷と閃光を従えたボールが相手ゴールへと放たれる。相手キーパーは止めようと腕を前に突き出すが、抵抗虚しくボールと共にゴールへ突き刺さる。

『ゴール!!雷門中2点目!!加賀美の自然の怒りを体現したかのような
新必殺技が、野生へと襲いかかったアアア!!と、ここで試合終了
だアアアア!!』

「加賀美さん！ナイスシュートっス!!」

「おう！ナイスパスサンキューな、壁山！」

礼を言うべきは壁山だけじゃない。

このシュートを完成させるのに何度も助言してくれた音無にもだ。その場でベンチの方を見て、音無に手を振る。すると音無も手を振り返してくれる。

『2―0で雷門中の勝利!! 2回戦へと駒を進めましたアア!!』

ベンチに戻り、守とハイタッチすると守は小さな悲鳴を上げる。グローブを外させると、守の手は真っ赤に腫れていた。

それもそうだろう、あんなに何度も打たれては守つてを繰り返したんだからな。

冷やすものを準備しようとしたら、誰かが守の手に氷袋を押し付ける。誰か、と思つたらまさかの夏末お嬢様だった。あ、お嬢様呼び辞めたんだった。

「サッカーなんかでそこまで熱くなるなんて・・・バカね。」

「バカってなんだよ！おい!？」

そのままその場を去る夏末。素直じゃないねえ・・・

「昨日の試合は凄かったな！けどまだ次がある、また練習頑張るぞ!!」
「おうー!」

野生中との試合を終えた次の日の放課後。俺達はいつものように部室へやってきた。

守が扉を開くと、そこには！

「・・・何でお前がここに?」

「私、雷門夏未は今日からサッカー部マネージャーになりましたので、よろしく。」

「・・・マジ?」

1番有り得なさそうな人が来たなオイ。

あれだけサッカー部を卑下していたお嬢様がマネージャーとは・・・俺達の熱意が届いたのかね。

ま、何にせよ次は2回戦だ。気合い入れていこうかね。

第8話 晴らせ屈辱、イナビカリ修練場!

フットボールフロンティア地区予選1回戦、野生中との試合に勝利し、ますます勢い付いてきた俺達雷門イレブン。

次なる試合・・・対御影専農中に向けて今日も今日とて練習だ。

はて、心做しかギヤラリーがいつもより多いな。皆揃って「ファンが出来た」なんて言ってるが、絶対に違うだろうな。

他校の制服を着ているし、カメラやらノートなんかを持ち出している。どう考えても他校の偵察だろうな。

そんなことを考えていると、河川敷の傾斜から高級車がグラウンドに突入してくる。そんな馬鹿なことをする金持ち・・・何故だろう心当たりしかない。

「必殺技の練習を禁止します。」

そう、雷門夏未である。

先日、新たに俺達のマネージャーとなった夏未は、秋や音無のように毎回は顔を出さない。時折顔は出すのだが、それにしたってこんな登場してくるとは誰も思わないだろう。

「いきなり何を言い出すんだよ! 必殺技無しで、どうやって勝ち抜くんだよ!」

「まあ落ち着け守。あれは俺達のファンなんかじゃない・・・他校の偵察隊だ。」

「て、偵察隊イイ!」

先程まで彼らに向けていた喜びの目線が恐れ目線に変わる。忙しいヤツらめ。

「まあそんな訳だ。必殺技を研究されたら不利だろ?」

「それに必殺技だけがサッカーじゃない。パス回しやドリブル、

シユート練習。やることは山ほどあるぞ。」
「そういうことよ。」

が、守はおかしなことを言い出す。「誰にも見られない練習場で必殺技の練習をしよう」・・・ねえ。そんな都合のいい練習場あるはずないだろうに。

ほら見ろ、豪炎寺も夏末も頭抱えてるじゃないか。

日にちを跨いでも、他校の偵察は減ることは無かった。むしろ増えている。勘弁してくれよ・・・

必殺技の練習をせずに、基礎的なものを固める練習をひたすらにしている、2台の大型トラックが目付いた。リーダーなんか備え付けちゃって、戦争でもするんだらうか。

中から2人の男が出てくる。確かあれは・・・

「御影専農の奴らだな。」

「ええ、その通りです。キャプテンでありキーパーの杉森。エースストライカーの下鶴です！」

ボソリと呟くと、横から音無が顔を出して集めた御影専農のデータを見せてくれる。知らぬ間にこんなものも準備してくれていたとは・・・本当に頭が下がる。

「徹底的に観察する気でいやがる・・・嫌な感じだぜ。」

「気にせず行こう・・・さあ、シユート練習だ！」

豪炎寺の声掛けで全員が再び練習に意識を向ける。

数十分程そうしていると、急に杉森と下鶴が降りてきてグラウンド内に入ってくる。

練習中に入ってくるな、と憤慨する守に対し、何故必殺技を隠す、と質問してくる杉森。いや、むしろ何故見せてもらえると思っただけだ？

「君達では我々に100%勝てない。」

「勝負はやってみなくちゃ分からないだろう？」

「勝負？これは害虫駆除に過ぎない。」

下鶴のその一言で全員キレた。雷門メンバーから二人に投げかけられるブーイングの嵐。ま、当然だろう。

「そうだそうだー、頭に電極なんかつけてんじゃねーぞー。」

「加賀美・・・それは関係無いんじゃないか？」

誰にも聞こえないように言ったつもりだったが横から豪炎寺にツッコまれてしまった。不覚。

追い出してやる、と2人に迫る染岡を守が制する。思いのほか冷静だなと思ったら、そんなこと無かった。

何か守の周りにメラメラも炎が燃えているのは俺の幻覚だろうか・・・？

実際のところはブチギレていた守が、御影専農の二人に勝負を挑む。形式はPK。互いに二本ずつ撃ち合うことになった。

「では始める。」

「よし来い！」

秋が開始のホイッスルを鳴らすと同時に、下鶴はボールを踏み付ける。縦に回転を得たボールはそのまま上昇・・・次第に電気を帯びる。

・・・おい待て、あれは――

「轟一閃!!」

「ええええええええええ!!」

ギャラリィから驚きの声上がる。正真正銘、俺の轟一閃だ。マジかよ・・・!?

俺のそれと寸分違わぬ軌道でゴールへと向かっていく。

反応が遅れ、尚且つ随一の速さを誇る轟一閃を前に守は為す術なくゴールを許す。開いた口が塞がらないの言った様子だ。

一番驚いているのは俺だが。

「あれ、加賀美さんのシュートつすよね・・・?」

「・・・ああ。100%、完璧な轟一閃だ。認めたくないがな。」

「こちらの能力を解析したと言っていましたか・・・まさか必殺技までコピーしているとは。」

目金がそう呟く。

1本目は俺達の負け・・・次は俺だ。

轟一閃よりも遥かに高い威力を誇るライトニングブラスターでいこうかと思つたが、あんなものを見せられてはこちらも轟一閃で勝負するしかないだろう。

ライトニングブラスターを研究され、試合でも止められるなんてことは避けたいからな・・・もしかしたら既に手遅れかもしれないが。

「加賀美!お前の轟一閃を見せてやれ!」

「柊弥!頼むぞ!」

仲間の期待を背に、フィールドに足を踏み入れる。ゴールで待ち構えるのは杉森。

・・・まさかとは思うが、ゴッドハントをコピーしていたりしないだろうか。

ホイッスルが鳴る。
深呼吸。集中しろ。
必ず決めてやる。

「・・・轟一閃ツツ!!」

敵を斬り裂く黄雷の閃がゴールに向けて放たれる。
これが俺の轟一閃だ・・・! さあ、どう出る杉森。

「シュートポケット!!」

両腕を広げ、半透明のバリアを展開する。そのバリアとシュートが
触れた瞬間、激しく火花が散る。

が、数秒の後にシュートは勢いを失い、ボールは杉森の手の中に収
まる。

・・・マジか。

「そんな・・・加賀美のシュートが。」

「言っただろう。我々の計算は揺るがない・・・次だ。」

戦慄が走る中、杉森は二週目への突入を促す。

再び守と下鶴の対決。守は今度こそゴールを割らせないと意気込
むも・・・

「ファイアトルネード!!」

「何ッ!? 熱血パンチ——」

今度は下鶴は豪炎寺のファイアトルネードを撃つてみせた。轟一
閃同様、オリジナルと全く同じクオリティで。

動揺を隠せなかったものの、今度こそ守は反応してみせる。が、そ
の拳はボールを捉えることはなく、再びゴールネットは揺らされる。

続いて豪炎寺が杉森にファイアトルネードを撃ち込むも、同じようにシユートポケットでセーブされる。

俺達の完敗である。

「証明は終わった。」

そうやって杉森と下鶴は去っていく。

グラウンド内に残ったのは、ボールと齒軋りの音だけだった。

翌日、音無が撮影してくれた昨日の対決の映像を見ながら作戦会議を行う。

「恐らく、俺達のデータを全て把握しているというのは本当のことだ。」

「ああ・・・俺のファイアトルネードに加賀美の轟一閃だけではない。染岡のドラゴンクラッシュ、ドラゴントルネード。イナズマ落としにライトニングブラスター・・・全てが通用しないかもしれない。」

部室内の空気は重い。次の試合に向けて意気込んでいたところに、こんな差を見せつけられたんだ。無理もない。

何か作戦を考えなければ・・・と思慮に耽っている中、守が新必殺技の練習を提案する。

「それが出来ないから困っているんじゃないか。」

「河川敷や铁塔広場で練習なんてしたら、あつという間に知れ渡っちゃうぜ。」

風丸と染岡の言うことは最もである。新しい必殺技と云えど、またそれを研究されたら何の意味もない。

「新必殺技よりも、基礎能力の向上に重点を置くべきだ。そうすれば、アイツらのデータを上回れるかもしれない。」

「だが、その様子も観察されたら結局同じじゃないか？」

解決策は一向に見えてこない。

御影専農との試合までは約一週間。一体どうすれば・・・
部室の沈黙は突如として破られる。

「皆、夏末さんが呼んでるわよ。」

秋が外から現れ、要件を伝える。

夏末が・・・？なんの用だろうか。とにかく行ってみないことには始まらないか。

秋の案内に従い、指定された場所へやってくる。

校舎からは離れ、辺りには木々が生い茂っている。何ともまあ不気味な場所である。こんな場所があるとは知らなかったな。

「ここは・・・雷門中学七不思議の一つ、開かずの扉・・・！」

突如、目金が妙な事を口ずさむ。それを聞いて全員顔を青くする。

・・・そんな七不思議なんて、うちの学校にあったんだな。

と、その時！音を立てながら扉が開いた！

「開かずの扉、開いてるけど？」

「ヒイヒイヒイヒイ！」

全員俺の後ろに隠れてしまう。
なあ、十数人が一人の背中に隠れたところで、身を守れるのか？
中から一人の生徒が顔を出す。

「皆揃ったわね？」

「夏未。」

夏未に中に入るよう促され、薄暗い階段を下に降りて行く。どこまで続いているんだろうか。

金属製の扉に着いているセンサーが俺達に反応し、音を立てて開くと明かりが灯る。

「ここは？」

「伝説のイナズマイレブンの秘密特訓場・・・イナビカリ修練場よ。」

そんなものがあつたのも驚きだが、何より学校の地下にこんな場所があつたのが驚きだ。今日は驚きの連続だな。

何故こんな場所を見つけられたのか、と夏未に尋ねると「見つけたの。」としか返してくれなかった。

・・・まあ何にせよ、今の俺らには好都合だ。ここなら誰にも見られることなく練習が出来る。

夏未曰く、必殺技の練習場としてリフォームしたらしいが、この様子なら必殺技の練習だけでなく、単純なトレーニングにも使えそう
だ。

早速練習開始だ。

マネージャー達は外に出て、扉を閉める。どうやらタイムロック式らしく、一定の時間練習をこなさない限りは開かないらしい。なるほど、逃げ道はないと。

それぞれが持ち場につき、機会が作動する。

さあ、やるぞ!!

「……もう無理死ぬ。」

自分の口からそんな言葉が零れるとは思ひもしなかった。他の皆もボロボロで倒れ伏しており、その様子は正に死屍累々と言ったところだろう。

扉が開かれた時、マネージャー達は悲鳴を上げて俺達を迎えていたからな。

サッカーボールを次々発射するガトリングガン。少しでも止まったら後ろの人にぶつかる巨大ルーレット。走らなければ後ろの車に轢かれる動く床。避けたら存在を消されそうなレーザー銃。他にも人を殺す為に作ったんじゃないかとする思える設備が選り取りみどりだ。

「元氣出せ……あのイナズマイレブンと同じ特訓を乗り越えたんだ。」

「その通りだ……この特訓は無駄にはならない。」

「試合まで1週間……毎日続けるぞ……！」

自分でそう言ったものの、なんか死ぬ気がしてきた。

だがこれ乗り越えれば確実なレベルアップが見込めるだろう。だったら苦しくてもやるしかない。

楽しんで強くなれるはずがないからな。

そうして1週間が過ぎた。お母様、お父様、私は生きています。試合当日を迎え、俺達は会場の御影専農中へやってきた。グラウンドにはアンテナが何本も立っており、異様な光景を醸し出している。

「アンテナがあろうがなかろうが、サッカーには関係ないさ！行くぞ！」

「おう！」

控え室でユニフォームに着替え、ベンチで最後の作戦会議だ。

今日は珍しく冬海先生も来ている。正直、いたところかどうかという話だが。

「この前の対決は俺達の負けだった。けど試合は、チーム同士の戦いだ！」

「力を合わせれば絶対にチャンスはある・・・ガンガン攻めていくぞ!!」

グラウンドに力強い声が響く。

あの特訓を乗り越えた俺達には、確かな自信がある。御影専農を相手にしても勝てるという自信が。

この試合を乗り越えれば次は3回戦・・・準決勝だ。その次に待ち構えるのは決勝戦。間違いなく帝国との戦いになるだろう。

帝国に今度こそ勝つ為にも、こんな所では負けられない。

「気張って行くぞ!!」

グラウンド内に足を踏み入れた、勝利への誓いと共に。

第9話 データを超えろ、予測を上回れ

『さあ、フットボールフロンティア地区大会2回戦の開始です!!』

実況のその一声に、会場全体が興奮の渦に包まれる。

投げかけられる声援、フィールドに満ちる闘志。肌をひりつかせるようなこの感覚・・・やはり堪らないな。

『本日は雷門中と御影専農中の対戦！御影専農のその強さは帝国に匹敵するとも言われています！それに対し雷門中はどうか戦うのか!?!』

集中、集中。

あのイナビカリ修練場での特訓を乗り越えた今、「勝てる」という絶対の自信が俺、いや俺達全員に芽生えている。

奴らの取ったデータ、予測。その全てを越えて行ってやるぞ。

『審判によるキックオフのホイッスルが・・・鳴ったアアア!!試合開始です!!』

「・・・染岡。」

「よし、行くぞ!」

センターサークル内で豪炎寺から染岡、また豪炎寺にボールを回し、そのまま上がっていく。数人のMFを引き連れ、その後ろを追いかけるように俺も上がっていく。

目の前に立ちはだかるのは先日、俺達をボロボロに打ち負かしてくれたエース下鶴。

「何ッ!?!」

染岡が驚きの声を漏らす。

一瞬にしてボールを奪われたとか、そんなことではない。下鶴は動かないのだ。

出てくるだけ出てきてスルーされたら、それは驚くというもの。奴ら、俺達のシュートなんて止められるという確信があるんだろうがそうはいかない。

「ディフェンスフォーメーション、ガンマ3。発動!!」

キャプテンでありキーパー、杉森がそう指示を出すと、全員が素早く動いて陣形を組む。その様はさながら機械のよう。

映像でも見たが実際に見ると圧巻、とでも言おうか。サッカーサイボーグと呼ばれるのも納得の統率だ。

パスを受け取った豪炎寺がゴールを目線をやると、目の前には徹底されたマークが。

「豪炎寺こつちだ!!」

染岡が豪炎寺からのパスを受け、そのままシュート体勢をとる。特訓を経てパワーアップしたお前のシュート、見せつけてやれ!

「ドラゴオオオン・・・クラツアアシユ!!」

蒼龍がボールと共に暴れ回る。向かう先はゴール。

が、ゴール前には4人のDFが真ん中に道を開けるように待ち構える。その4人はボールとすれ違いざまにボールに蹴りを加える。DF達を抜ける頃にはシュートの威力は完全に殺され、杉森は苦勞することなくボールをキャッチする。

・・・なるほどな。角度、力加減全て計算して脚に負担の掛からないシュートブロックをしたという訳か。

結果としてキーパーの杉森の負担も軽くなる。

「何だ・・・今の守備は!？」

「当たり前だ。君達のサッカーなど、全て予測出来ている！」

「染岡! 次の攻撃に備えろ！」

恐らく、この煽りも染岡の冷静さを欠くために狙ってやっていることだろう。

それが分かっているのだから黙ってやらせるはずがない。次へ備えることを呼びかけ、杉森から引き剥がす。

杉森は顔色一つ変えることなくロングパス。相手は一気に前線へと上がる。

こちらのゴールまで迫る御影専農FW陣。だが、こちらのDF陣がそれを見逃してはくれない。

風丸が一瞬で接近、スライディングでボールを奪い取る。

そのままボールを持って上がっていき、宍戸へパスを出す。

「うわッ!？」

すぐさま御影専農がボールを奪い返す。速いな、計算だけじゃなくフィジカルも整っている。

マックスと栗松が相手の進行を許してしまう。迫る10番は自分に任せ、下鶴のマークに着くように風丸達に指示を出す守。

が、10番はサイドから走り込んできていた9番にパスを出す。完全にフリーだったようだ。

そのままゴールを狙ったが、守が飛び付いてしつかりとキャッチ。反応速度が良くなっている。流石だ。

すぐさま攻撃に転じるためボールを投げようとしたが、付近のDF、MF達は全員マークにつかれている。

が、特訓したあいつらならすぐさま引き剥せるだろう。だがそれをしてしない。何故か？

「柊弥!!」

「任せろ！」

答えは俺が下がってきているからだ。

あのイナビカリ修練場での1週間に渡る特訓の中で、俺が特に磨いたのは脚力だ。素早い攻勢に耐えきれぬ、シユートを何本打つても疲れない脚を目指してひたすらに鍛えまくった。

その成果が見事に現れ、前陣から後陣まですぐさま戻れるほどの敏捷を実現してみせた。

元々俺の売りは雷の如き速さ。それを更に磨いたことで風丸にも匹敵する瞬足へと昇華した。

「上がれ！」

前進の指示を出して誰よりも速く俺が上がる。

後ろから豪炎寺達が追従してくるのを確認し、更にその速度を上げる。

杉森と一対一。

「——轟一閃。」

以前の比ではないエネルギーがボールに込められ、それを鍛え上げた脚で解き放つ。

そう、新必殺技こそ生まれなかったものの、基礎能力の向上によって既存の必殺技の威力が底上げされたのだ。

雷鳴が轟きながら更なる力を得たボールが杉森へと向かっていく。恐らく、この程度なら——

「シユートポケット・・・ぐッ!!」

シユートがゴールを貫くことはなかった。

が、予測より速く、力強いシユートだったのだろう。杉森はセーブ

しきれずボールを弾く。

ボールが弾かれたその先にいるのは豪炎寺だ。

「行け！豪炎寺!!」

「おう！ファイア・・・トルネード!!」

豪炎寺の想いに呼応するように勢いを増した火炎が脚に宿る。

空高く上げられたボールに回転しながら迫り、同じ高さまで上昇すると同時に勢いを乗せて蹴りを叩き込む。

打ち出されたボールは火炎を纏い、敵を打ち破らんとゴールへ迫る。

「シュートポケット!!」

先程と同じく、腕を大きく開いて溜めた力をバリアとして展開する。

が、またしても止めきることは叶わずボールは弾かれてしまう。

それを再びキープするのは豪炎寺、背後から上がってきた染岡と共にゴールへ向かう。

染岡が蒼い龍を使役し、豪炎寺が龍に炎を吹き込む。

「ドラゴオオン!!」

「トルネエード!!」

炎に染められた紅龍が容赦無く牙を剥く。

杉森は再びシュートポケットを展開し迎え撃つ。苦悶の声を上げながら杉森は耐える。ひたすら耐える。

それでもドラゴントルネードの勢いは殺しきれず、ボールは前に進もうとする。それを咄嗟に弾いて何とかやり過ごす杉森。

だが。

「豪炎寺さん!!」

「――よし!!」

後陣から上がってきた壁山が豪炎寺と合流すると同時に大きく飛ぶ。豪炎寺は壁山を踏み台にさらに高くまで跳躍。オーバーヘッドキックで放たれたボールは、稲妻の様に降り注ぐ。

「イナズマ落としイイ!!」

「ロケットこぶしツツ!!」

杉森は今まで見せてこなかった技でイナズマ落としに抵抗する。守のゴッドハンドのように拳にエネルギーを集約させ、それをそのまま拳の形で打ち出した。

打ち出された拳状のエネルギーは襲い来るイナズマ落としを真正面から弾き飛ばす。

「オフエンスフォーメーション、デルタ5!!」

杉森がオフエンスの指示を出すと、御影専農は一気に攻撃的なプレイへと転向する。

ボールの奪取を試みるも、あっさりと躲されてしまった。クソツ、デイフエンス練習を軽く見すぎたか!

そのまま一糸乱れぬ連携で御影専農は前へ前へと上がっていく。当然全員タックルなりスライディングなりを仕掛けるが全てやり過ぎられる。

一気にゴール前へ。

「デイフエンス囲め!!」

風丸と土門が10番のマークに着く。が、先程同様サイドから走ってきていた9番にパスを出し、そのままキック。

迫るボールに守が飛び付くが、ボールはその前で曲がる。

狙いはゴールではなく、そのまた逆サイドから上がってきていた下鶴へのパスか！

守が踏ん張って耐え、下鶴のシュートをパンチングする。が、そのボールにも回転がかけられており、拳に触れた瞬間9番の方向へと曲がっていく。

そのまま9番がヘディングでボールを押し込んで――

『ゴール!!決まっちゃった!!御影専農、これで1点先取だ!』

守の健闘むなしく、無情にも失点を告げるホイッスルがなる。

ヤツら、あんな所まで計算して狙っていたというのか・・・?

「クツソオオ・・・!!」

守が地面に拳を叩き付けて悔しがる。

だがまだ1点だ、大丈夫だ。まだ俺達FW陣が攻め立てれば取り返せる。

まだまだ前半だ。

が、その想いは虚しくも打ち碎かれることとなる。

ホイッスルでこちらのキックオフから試合再開。すぐさま染岡から9番がボールを奪い取り、下鶴へ。下鶴は――ゴールの杉森まで。

「バックパスだと・・・!?!」

まさか、コイツらの狙いは・・・!

不味い、それだけは何としても阻止しなければならぬ。

「皆!何としてもボールを奪うんだ!!・・・ヤツら、このままキープ

してやり過ぎすつもりだ!!」

「何!?!」

ずっとキーパーがボールを持っている訳にも行かず、杉森は一番近いDFへパスを回す。

そのパスコースを読んでいた俺は、そいつが次にパスを出しそうな選手のマークに着く。

が、俺の予想と反して別の選手へとボールは渡る。皆が必死にそのボールを奪おうとするが、御影専農はボールをひたすらに回し、しまいにボールを持っていている選手を囲むようにして立ち、こちらの動きを阻害する。

完全に逃げ切るつもりだ。

「お前ら・・・こんなサッカーで良いのかよ!?!」

半ば無駄だと分かっているても、そう呼び掛けずにはいられなかった。

御影専農の選手達は、一切表情を変えることはない。無論、プレイスタイルも。

無理やりあの陣形を崩しに行こうものならば、ファウルを取られ最悪の流れを自分で作ることになるかもしれない。

何か、何か手はないのか――

『ここでホイッスル!!御影専農、1点リードのまま前半終了だアア!!』

そんなことはお構い無しに、ホイッスルは鳴る。

「あいつら・・・あんな汚いサッカーしやがって!!」

ハーフタイム、控え室にて染岡が声を荒らげる。無理もない、あんなプレイされたら誰だって不快感を覚えるだろう。

「俺、アイツらのところに行ってくる。」

守がそう言って控え室を出る。それに便乗して皆が御影専農の元へと向かう。

万が一の時、止める役割がいないと試合の外で敗けるなんてことになる。それだけは防ぐために俺も後を追う。

「何で攻撃しないんだ！あれじゃ、サッカーにならないだろ!？」

守が杉森及び御影専農イレブンを見付け、どこか悲痛さを孕んだ声で杉森に訴える。

それに対し杉森、「監督命令だ。」と答える。

「10点差でも1点差でも同じことだ。リスクを侵さずタイムアップを待つ。」

「・・・何もかも計算通りに行くと思っっているのかよ!」

俺達のデータは全て把握している。故に杉森からはゴールは奪えない。俺達は既に負けている。そう淡々と語る杉森。

もう、黙って聞いてなんていられない。

「本当にそうかな。俺達は、まだお前達に明かしていない手の内があるぞ。」

「・・・何?そんなはずはない。それなら何故先程の前半でそれを出して来なかった?」

「ふん、計算でしか物事を捉えられないお前達には理解出来ないさ。」

そう吐き捨てる。

「見てろ、俺達がお前らに本当のサッカーを見せてやる。」

「本当の、サッカー……」

杉森が何か呟いたが、お構い無しに控え室へ皆を連れて戻る。

部屋に入った瞬間、皆が俺を囲んで訊ねてくる。

「加賀美、明かしてない手の内って何だよ？新必殺技もないし、そんなもの特訓した覚えがないぞ？」

「そうでやんす。俺達がやったのはあの地獄の特訓だけでやんすよ！」

次々と声を上げる。

……皆、まるで気付いていないな。

「栗松、今なんて言った？」

「え……地獄の特訓って……」

「そうだよ、俺達はあの特訓を乗り越えたんだ。その結果、得られたものは何だ？もう一度振り返ってみろよ、前半の自分達を！」

そう返してやると、皆黙り込む。

キリがないし時間もないので口早に問い掛ける。

「風丸、前までのお前はあんなに離れた相手に追い付けたか？」

「……いや、無理だな。」

「そうだろう？じゃあ豪炎寺、お前の、俺のシュートは前杉森と対決した時と同じだったか？」

「……違う。前は簡単に取りられた。だが今回は、かなり惜しいところまでいった。」

徐々に皆の表情から疑問の色が消える。分かっていたようだな。

「その通りだ・・・分かるか？俺達はあの特訓を乗り越え、飛躍的に身体能力が、基礎能力が上昇したんだよ！このまま冷静さを欠くようなら、それを活かし切れずに終わるぞ！」

「基礎能力の、向上・・・」

「ああそうだ。皆、切り替えようぜ？得たものを存分に活かして、相手の予測を上回れば絶対に勝てる。それに・・・秘策もあるしな。」

思いついてしまった。手っ取り早く、相手の予想斜め上を行き、ペースを崩す良い策をな。

『あーっとー後半早々、御影専農は全員下がったのディフェンス！これでは雷門中守りを崩せない!!』

やはりと言うべきか、御影専農はボールを下げ、前半の最後同様守りに徹するつもりだ。

が、何やら司令塔である杉森の表情には曇りが見える。何故かは知らないが・・・こちらにとっては好都合だ!!

「上がれ!!・・・守!!」

「おう!!」

ヤツらの予測を超える俺の秘策。

それは守を前線に押し出すこと。

守は普段からGKだからな、フィールドプレイヤーとしてのデータ

はお前らも取ってないだろう。

まして、攻めてこないのなら別にキーパーが攻撃に参加しても問題は無い！

『何とキーパー円堂が上がっていくぞ?!これはどういうことだ?!』
「何だと!」

守がボールを奪い取る。

予想通りだ。ヤツらはデータにない事例、いわばイレギュラーへの対応力は目に見えて落ちる！

誰も守を止められないまま、啞然としている。守はお構い無しに上がっていきゴール前。

「行くぞ!!うおおおお!!」

「君のシュートは・・・データにない!!」

悲鳴に近い叫び声を上げながら杉森は守のシュートをキャッチする。

守は心の底から悔しがる。

「なぜお前が攻撃に参加する。」

「点を取るために決まってるだろ！それがサッカーだ!」

守が堂々と告げる。

僅かに杉森の表情が揺らいだのを俺は見逃さなかった。・・・よし。

「守！十分だ!」

「おう！久々のシュート、楽しかったぜ!」

と言って満足気にゴールへ戻っていく。

さあ、キツカケは与えた。

監督の駒としてサッカーをするか、自分達の意味でサッカーをするか・・・それを決めるのはお前らだ、杉森。

「オフエンスフォーメーション、シルバーだ！」

「ま、待て！命令違反だぞ！」

杉森は「オフエンス」を指示した。ベンチの監督は「命令違反」と声を荒らげた。

それがお前の答えだな、杉森！

「おい加賀美・・・何笑ってんだよ？」

「悪い悪い・・・嬉しくってな。」

隣にいた染岡にそう指摘される。

知らない間に口元が緩んでしまっていたようだ。

だって、こんなの喜ばずにはいられないだろう？自分の手で、本当のサッカーの何たるかを教えることが出来たんだ。

「変な奴だな・・・相手が攻めてくる、俺達も点を取るぞ！」

「おうよ！」

杉森が蹴ったボールを追いかける。

ここからは、楽しいサッカーの時間だな。

ボールを持った相手の前には壁山。すると、突然壁山は倒れ込む。倒れ際に頭でボールをマックスにパスしてみせる。

「松野さん！」

「へえ、やるじゃん壁山！」

すぐさまボールを奪いに来るが、マックスは華麗なターンで躲してみせる。

良い、しっかりと活かしているな。

豪炎寺にパスを回そうとした瞬間、下鶴のスライディングでボールを零してしまう。

こちらのデイフェンス網を掻い潜り、下鶴はゴール目前まで迫る。待機していた風丸と土門がボールを奪いにかかるが――

「パトリオットシュート!!」

突如下鶴は高くボールを蹴りあげる。ファイアトルネードか、と警戒したが下鶴自身は跳躍する素振りを見せない。

その時だった。ボールは突如煙を吐きながら急降下。その様子はさながらパトリオットミサイルの様。

「熱血パンチ!!」

拳でボールを弾く守。弾かれたボールはラインの外へ。相手のコーナーキックだ。

蹴られたボールは再び下鶴へ。空高く蹴り上げ、再びパトリオットシュートを放つ。

「豪炎寺!!このままシュートだ!!」

「何!?!」

突然の提案に豪炎寺も戸惑う。だがもうシュートは目前までせまっている。

半ば強制的に豪炎寺は守と共にボールを迎え撃つ。

「うおおおおお!!」

2人のキックがボールに触れた瞬間、雷が辺りに迸る。

あれは・・・新必殺技!?

2人のカウンターキックで打ち出されたボールは、そのまま真っ直ぐ相手ゴールへと稲妻と共に進んでいく。

「有り得ない……有り得るかアアアア!!!」

これも予測していなかったのだろう。杉森が雄叫びと共に腕を前へ突き出す。

稲妻は守護神の守りを突き破り、ゴールネットを揺らす。

『遂に、雷門中のゴオオオオ!!!』

あいつら……この土壇場でやりやがった!

1-1、スコアはこれでイーブンだ!

「やったぜ! 守備と攻撃が同時なら、ヤツらも対応出来ないんだ!」

「ああ! あんな技が決められるなんてな。」

「ほんとだ。何か身体が軽いとは思っただけだ。」

それも特訓の成果だろうな。

守のキック力が豪炎寺にグツと近づき、あの連携シュートを可能にしたんだ。

命名は……目金に任せるか。

「まだ同点だ! もう一点取ってくぞ!!」

相手のキックオフ。染岡がすぐさまボールを奪ってみせる。

そのまま一緒に上がっていき、俺はサイドに逸れる。

「加賀美!!」

「おう!」

俺の前にD F陣が群がってくる。が、無駄だ！

ボールを前に蹴ると、それにD F達は飛びかかる。

その瞬間、ボールの内側からエネルギーが溢れ出し、雷と共に辺りを支配する。

それにD F達は吹き飛ばされ、ボールの近くには俺一人。それと向かい合う杉森。

「噛み締めろよ杉森、これが今の俺の全力だ……ライトニング、ブラスタアアアア!!」

両脚で力一杯ボールを送り出す。野生中の時より遥かに強い轟雷を従えてボールは杉森へと襲い掛かる。

これこそが、お前が知る俺を超えた、俺の全身全霊の必殺シュートだ!!

「ロケットこぶし!!ぐ、オオオオオオオオオオ!!!?!」

獣のような咆哮を発しているのは、目の前の男だと誰が想像出来ただろう。

先程までは機械そのものと形容すらできた杉森が、人間らしさを剥き出しにボールに拳のエネルギーを叩き付ける。

が、ボールに触れた瞬間、雷に吞まれその拳は霧散する。

まだまだ、諦めるわけにはいかないといった表情で杉森は両腕でボールに触れる。

踏ん張った脚が地面を抉りながら杉森の身体は後退していく。

やがて、杉森の限界を上回ったシュートは杉森諸共ゴールへ突き刺さる。

『ゴオオオオ!!雷門中2点目!加賀美の全力シュートで逆転だアアア!!』

「よっしやアア!!」

本日初の得点、喜びに打ち震える。

空高く拳を突き上げ、天を仰ぐ。

全力と全力のぶつかり合い。嗚呼、これ程楽しい瞬間があるだろうか。

「さあ皆!!残りも油断せずにガンガン行くぞ!」

「おお!!」

後ろからの守の声を受けて、全員が今一度気を引き締め直す。闘志に充ちた雷門側とは対象に、御影専農側は何やら絶望しきった表情。

力無いキックオフ。すぐさま染岡がボールを奪い全速前進。

御影専農は誰一人として動かない。

否、一人。今だその瞳に闘志を宿し続けている者がいた。

「来いッツ!!」

「うおおおお!!ドラゴオオン・・・クラツアアシュ!!!」

染岡全身全霊のドラゴンクラツシュ。試合序盤で繰り出したそれよりも明らかに強力だ。

「シュートポケットオオオオオオ!!!」

再び守護神は吠える。

展開したバリアが打ち砕かれようと、決して諦めずに腕を突き出す。

暴れる蒼い龍を抑え込み、守護神はボールをその手に収める。

「キャプテン・・・!」

「皆!俺は負けたくない・・・皆も同じなんじゃないか!?最後まで・・・」

戦うんだ!!」

杉森が頭に着けていた電極を剥がす。
恐らく、あれでデータの管理、情報の共有を行っていたのだろう。
それを見て、フィールドプレイヤー達も全員電極を剥がす。
その眼には、俺達と同じ闘志が満ちていた。

「最後の1秒まで・・・諦めるなアアア!!」

杉森の豪快なスロー。ボールは高く、遠くへ飛んでいく。
それを追いかけていく御影専農イレブン。

彼らは今この瞬間、自分達の意志に従ってボールを追っていた。

「面白くなって来た!!」

不意に、後ろにいる守と声が重なった気がした。遠すぎて実際のこ
とは分からないが。

そこから全身全霊全力のぶつかり合い。

攻めて守って、また攻めて。

先程までとは別のような空間へと変貌を遂げる。

観客達の声も、次第に熱が籠っていった。

「行けー豪炎寺!!」

誰かが豪炎寺へ高いパスをだす。

誰が出したのかは分からない。味方と敵が入り乱れてごちゃご
ちやになっっているから。

それでも豪炎寺は飛ぶ。仲間の想いを確かに繋ぐため。

「ファイアトルネード!!」

「うおおお!!ファイアトルネード!!」

全く同じタイミングだった。
下鶴が同時にファイアトルネードをボールに叩き込む。
行き場を失った力は、近くにいた豪炎寺と下鶴へ襲い掛かる。
体勢を崩した2人はそのまま転落、身体を痛めたのか顔を歪めている。

「改^{あらた}アアアアア!!」

杉森が下鶴の名前を呼ぶ。
それに答えるように、下鶴は頭でボールを杉森に。

「——オオオオオオオオオオ!!!」

杉森は咆哮と共に駆け出す。
守護神が、護るべき場所から飛び出した。
そう来たか……!

杉森はどンドン上がっていく。キーパーにも関わらず、雷門のデイ
フェンスを潜り抜けて。

「行くぞ!! 円堂オオオオオオオオ!!!」

放たれたシュート。
空気を斬り裂きながらゴールへと迫る。

「ゴッドハンドオオオ!!!」

杉森の全力に、守も全力を持って答える。
この試合で初めて顕現した神の手。
好敵手の全力を、真正面から受け止める。

砂煙が晴れた時、そこにあつたのはボールを受け止めた守の姿だつた。

『試合終了オオオ!!準決勝進出を果たしたのは、雷門中だアアア!!』
「よっしやアアアアアアア!!」

全員が歓喜に叫ぶ。

準決勝進出、全国大会へまた近付いたんだ。
辺りには拍手喝采が飛び交う。

「杉森!」

守が自陣へ戻った杉森を追いかけ、声を掛ける。

「またサッカーしような、サッカー!」

「・・・ああ、また!」

2人のは握手を交わす。そこでまた拍手喝采の勢いは強くなる。
紛うことなきサッカー選手が、そこにはいた。

「・・・はい、はい。必ずそれは何としても——んなっ!?!」

人知れず、誰かと電話でやり取りを交わしている者がいた。

雷門中サッカー部顧問、冬海である。

そしてそのやり取りを遮った男・・・刑事、鬼瓦。

携帯の画面には「影山」の文字が。

「何をするんです!? 誰ですか、貴方は!?!」

「俺は・・・サッカーを汚したお前達を許さない・・・!」

鬼瓦の脳裏に浮かぶのは、先程の試合。

それだけでは無い。今まで見てきた数々の雷門中の試合。

何を恐れたのか、冬海はその場を足早に去る。

その場に佇む鬼瓦の眼は、深い闇を見据えていた。

第10話 オタツキー・トリツキー・サッカー

「・・・すまん」

そう言つて松葉杖を片手に、脚を包帯で巻かれた豪炎寺はタクシーに乗り込む。

先日の御影専農との試合で下鶴との空中戦を繰り広げた結果、体勢を崩したまま落下したせいで脚を痛めてしまったようだ。

つまり、次に控える準決勝は豪炎寺抜きで勝ち抜かなければならぬ。

「気にすんなつて!!準決勝は俺達に任せとけつて!!」

「そうだけ。安心しろ、お前が不在の分俺と染岡で暴れてやるからな?」

「そうだけ豪炎寺、任せろ!」

それを聞いて豪炎寺は、どことなく安心したような笑みを浮かべてタクシーで去っていく。

「せっかく、凄いシュートを編み出したのにな。」

「イナズマー1号、だろ?」

そんな名前だったのか。

守曰く、お爺さんのノートに全く同じ内容のシュートが記されていたらしい。FWとGKの連携シュート。

全く同じことを考えていた、と守は嬉しそうだ。

全体の雰囲気は何となくだが、豪炎寺が欠けたことにより落ち込み気味だ。

「豪炎寺がいなくなつて、お前達なら大丈夫だろ?いざとなつたら、俺も出るしな。」

「土門の言う通りだ。豪炎寺抜きでも、必ず準決勝勝つぞ。さ、練習だ！」

豪炎寺が抜けたことにより、連携を見直す必要があるしな。何時までもこうしてはいられないさ。

「準々決勝の尾刈斗中对秋葉名戸学園。この戦いに勝った方が、次の準決勝で私達と戦うことになるわ。」

「アイツらかあ・・・催眠術抜きにしたらそこまでって感じだったがな。」

「それがね、猛特訓で大分戦力を強化したらしいわよ。」

どよめきが走る。

あの呪いのサッカーが強くなったのか・・・術の強度が上がったのか、はたまた単純なサッカーの技術が強くなったのか。

前者だったら厄介だな、と思いつつ秋の話を聞く。

「それで、秋葉名戸学園っていうのはどんなチームなの？」

夏末が秋に訊ねる。

秋が手にしている音無のノートによると、学力優秀だが少々マニアックな選手が集まった学校。フットボールフロンティア出場校中、最弱の呼び声が高いチーム・・・だそうだ。

頭は良いけど最弱、ねえ・・・頭脳サッカー主体だけどフィジカルが追いついていないとか、そんななんだろうか？

それでも1回戦は勝っているから尾刈斗とやってる訳で。

そんなことを考えていると、秋の顔が急に赤くなり、素っ頓狂な声を上げる。

「どうした？」

「尾刈斗中との試合前にメイド喫茶に入り浸っていた……ですって。」
「メイド喫茶ですと!?!」

「……目金?」

久々に口を開いたと思ったら、そんな所に反応するな目金よ。

しかし、メイド喫茶ね……あれだろ? お帰りなさいませーご主人様ー的な感じの。

面白そうだし1回位行ってみたい気もするが、周りの目線痛そうだし、単純にこの時期に行こうとは思えない。

その情報を聞いて、一部は「次は尾刈斗」と確信を持ったようだが、さてどうなるかね。

「大変です!!」

「どうした音無、そんな焦って。」

部室の外から息を切らしながら音無が走って来る。大分焦り、驚きの色が強い。

「今、準々決勝の結果がネットにアップされたんですけど……1―0で、秋葉名戸が準決勝進出だそうです!」

「―尾刈斗が、負けた!?!」

これはなんとというサプライズだろうか。

強くなったらしい尾刈斗を下して勝ち進んでくるとは……秋葉名戸。

ヤツらの催眠術にどう対応したんだ……? ルールに違反している訳でもないからやめるなんてことは無いだろうし。

「これは行ってみるしかないようですね……メイド喫茶に。」

やけに凜々しい表情で目金が立ち上がる。

・・・お前、自分が行きたいだけなのでは？

目金は尾刈斗に勝った理由はメイド喫茶にある、と豪語する。

俺達は秋葉名戸のことを何も知らない、これは情報収集といかにも真つ当な理由を述べる。が。

「目金・・・お前ニヤケてんぞ。」

「はて、なんの事やら・・・」

最終的に、目金に丸め込まれた守が行くことを決意する。

普段そういうのに縁がない皆は顔が赤くなっている。思春期だね

え・・・

え？俺？俺はそんなんでもないぞ。

結構ネットサーフィンとかするし。

「お帰りなさいませー！ご主人様！」

派手な装飾のドアが開くと、中からメイド服に包んだ女の子が出てきて出迎えてくれる。

すげえ、本当に言ったよお帰りなさいませ。

「13名様ですか？こちらにどうぞ！」

導かれるがままに店内へ足を踏み入れる。

店内も外装と同じような派手さで、見るからにオタク、と呼ばれるような人達が屯していた。

・・・初めて生で見た、デフォでハチマキ巻いてる人。バンダナ巻いてるやつなら隣にいるけど。

「ご注文はお決まりですか？」

「え。あの・・・」

独特なメニューを前に、みんな固まっている。

しょうがない、ここは俺が・・・

「では・・・パチパチろとみゆのジンジャーエールと、天使と女神のふわとろパンケーキをお願いします。パンケーキにはこのあまあまハチミツ増量で。」

「かしこまりました！ご主人様！」

「加賀美君・・・メイド喫茶に来た経験はあるんですか？」

「いや、これが初めてだ。興味はあったがな。」

「初めてでその・・・素晴らしい、合格ですよ我が同士。」

「お、おう。」

目金が壊れた。まあ元々か。

他の皆はおどおどしながら何とか注文を終える。

少しすると、注文の品が運ばれてくる。

「それではご主人様！最後の仕上げを私と一緒にお願いしますー！」

「仕上げ？」

「はい！私に続いて・・・美味しくなあれ♡もえもえきゅん♡とお願いしますー！」

「なるほど・・・では、せーの・・・」

「美味しくなあれ♡もえもえきゅん♡」

「二か、加賀美イイイ!?」

郷に入っては郷に従え。この郷のしきたりに触れることが出来て俺は満足だ。

予測出来ている事態には対応出来るのでね・・・
さて、おまじないをかけたパンケーキを口に運ぶ。

ふわとろ、の名に恥じない柔らかさ。ハチミツの甘さも丁度いい。口の中に残った甘さは次に備え、このジンジャーエールで流す……うむ、良い。

「キミ達、なかなか見所があるね。」

「ん？貴方は？」

「キミ達に見せたいものがある……それを食べ終えたら着いてきたまえ。」

緑髪の大柄な男が話しかけてくる。

制服を着ている……ということは学生だろう。おそらく中学生……のはず。

パンケーキを食べ終え、会計を済ませるとその男に案内されて同じ建物の地下に連れられる。

さて、何を見せるつもりだろうか。

「着いたよ、入ってくれたまえ。」

「ここは——」

その階には、机や棚が広がっていた。

おい待て、あれは——

「バンプレのみで販売された仮面騎士イチゼロのアークベルト……!?!」

「……君、知っているのか？」

「ああ……確か受注開始から1分で売り切れたんだよな。俺は二次受注も逃したからこうして実物を見るのは初めてだ……」

こんな代物に触れられる日が来るとは……

暫くの間そこにあった様々は物を見て回る。俺が知っている物もあれば、初めて見るような物もあった。

思わずここに連れてきてくれた2人……目金が愛してやまない漫

画の作者である2人と友情を交わしそうになったその時、守が間に
入ってきて俺達はサッカーの試合があるから、と止めてくれた。

危ない、忘れるところだった……

「キミ達もサッカーをやっているのかい？ボク達も結構大きな大会に
出ているね……えっと、何だっけ。」

「フットボールなんか。だっけか。」

まさか……フットボールフロンティア？

メイド喫茶に入り浸っている……待て、まさか。

「もしかして君達は……秋葉名戸学園のサッカー部？」

「ん？ああ、そうだよ。僕たちのことだよ。」

地下に驚きが木霊した。

「何してんだ！ちゃんとトラップしろ！」

「す、すみません!!」

「皆気が緩んでるな。」

「1番羽目を外していたお前は気緩んでないんだよな……不思議だ。」

横から風丸にそう言われるが涼しい顔で流してやる。涼しい顔に
なっているかは知らんが。

先程あった彼ら、秋葉名戸が本当に次戦うチームと思うと油断して
しまうのだろう。

打ち解けた俺から見ても、彼らはそこまで強いチームには思えな
い。ああして趣味に没頭していたしな。

「染岡。」

「何だよ?」

集中出来てないヤツらにイライラを募らせていた染岡に話し掛ける。

「今回豪炎寺はいない。次は俺達2人で点を取りに行く必要がある・・・だが、御影専農程とはいかないが次の相手も俺達の対策をしてくるかもしれない。そこで、だ——」

「——おお、いいなそれ! やってやろうぜ!」

乗り気なようだ。

俺としては初の試みだからな、少し楽しみでもある。

『フットボールフロンティア地区予選準決勝! 雷門中と秋葉名戸学園の試合は間もなく始まります!』

「・・・これを、着ろと?」

「我が校における試合では、マネージャーは全員メイド服着用という決まりになっております!」

とあって、秋葉名戸のマネージャー・・・この前のメイドさんじゃないか。が、こちらのマネージャー陣にメイド服を手渡す。

夏未は激しく取り乱し、猛抗議。

が、押し切られて結局メイド服を着ることになった。

「ど、どうして私がこんな格好を・・・」

「いえーい！」

夏末とは反対に、秋と音無は結構乗り気である。

秋葉名戸の選手が3人の周りをグルグルと囲んでいる。

写真を撮られている間、夏末の顔は死んでいた。人つてあんな顔出
来るんだな。

「加賀美先輩！どうです？このメイド服！」

「良いじゃないか、可愛いぞ。秋も夏末も。」

と褒めると、少し音無は何か気付いたような顔をする。

え、俺なんか変なこと言ったか？

「加賀美先輩って、マネージャーの中で私だけ苗字呼びですよ
ねえ……」

「確かに言われてみればそうだな。」

「そうですよねえ……何ですかねえ……？」

何処と無く不穏な物を感じ取る。

まさか怒ってる？1人だけ呼び方が違うことに、怒っているとても
言うのか？

「……じゃあ、これからは春奈と呼ばせてもらおうかな。」

「はい！是非そうしてください！」

名前で呼ぶ、と言ったら不穏な物が霧散する。

何だったんだ……まあ、機嫌を直してくれたならそれでいいが。

「今回の豪炎寺の枠は……」

「俺かな？」

「いいえ、ここは切り札の出番でしょう。メイド喫茶に行ったおかげ

で彼らのサッカーが理解出来ました。僕が必ず勝利に導いて見せましょう！」

豪炎寺本人の推薦、土門の了承もあつて豪炎寺の代わりは目金に決まった。

本人はやる気に満ちているし、俺もいいと思う。

というわけで今回の控えは豪炎寺、土門、そして御影専農との試合での負傷を少し引き摺っているマックスだ。

目金をFWに据えることに疑問を口にした奴もいたが、守の一言で何も言わなくなる。流石キャプテン。

「よし、一発噛ましてやろうぜ、染岡！目金！」

「おう！」

「勿論です！」

『さあフットボールフロンティア準決勝!!試合開始です!!』

俺達のキックオフからスタート。染岡にボールを任せ、2人で攻め上がる。目金も後ろから追いかけてくる。

「ここは通さないぞ!!魔王め!!」

「ああん!？」

「貫った!!」

染岡を魔王と称して立ち塞がる相手選手。

確かに染岡は厳つい顔をしているが、魔王と言うよりはヤがつく者だろう。

おかしな相手ペースに吞まれ、染岡はボールを奪われてしまう。

「しまった!？」

「ドンマイ染岡、すぐ取り返すぞ。」

ボールを奪いにかかるも、やけに素早いパス回しで躲かされてしま
う。しかもヤツら、一向に攻めに転じない。

変なテンションでこちらのペースを崩し、ひたすらにボールを回し
ている。

以前の御影専農と違い、1点リードしている訳でもないからな…
単純に攻め方が分からないだけか？

「この前ぶりだな、我が同士よ！」

「その節はどうも！」

仮面騎士のベルトを俺に触らせてくれた4番と一対一。

他にパスを出そうとしたのだろうか、全員マークにつかれている。

よし、これなら…

「お前を止められるのはただ一人、俺だ!!」

「それ、ボールを奪う側のセリフじゃないか!？」

思わずツツコミを入れてしまう。

すると、1人マークから外れて飛び出してくる。ソイツにボールを
パスし、再びボールは相手を転々とする。

このままじゃ前半が——

『ここで前半終了のホイッスル!!得点は0—0のまま!!』

——本当に何もしままま前半が終わった。

何だろうな…やる気がない訳ではないようだが。

「まるで攻めてこないですね…この僕にも予想外でしたよ。」

「お前、アイツらのサッカー理解出来たんじゃないのかよ？」

ベンチでハーフタイム中に作戦会議だ。

相手の妙なノリに調子を狂わされ、ボールが取れないことを嘆くメンバー達。

「得体がしれない・・・」

「・・・お前もな！」

尾刈斗の時といい、影野のツツコミってなんでこんなに自分に返ってくるような物ばかりなのだろうか。面白いからそれはそれでいいが。

このハーフタイム中にも、ヤツらはゲーム機片手に勤しんでいる。

「とにかく、ボールを奪ってチャンスを作るんだ!!」

ハーフタイムが終わり、後半開始のホイッスルが響く。

「よし、行くぞ!!」

「何!?!」

相手からのキックオフ。

すると、前半が嘘のように攻め込んでくるのではないか。動きがまるで違う!

・・・前半は力を温存していたというわけか。

が、攻めてくれるならこちらとしてもやりやすい。

風丸がボールを奪いにかかる。

「変身！フェイクボール!!」

4番が半田とすれ違う。

半田は何も気付かずそのまま走り続けるが・・・

「つて、あれえ!？」

半田がボールと思つて蹴つていたのはなんとスイカだった。なるほど、だからフェイクボールつて訳だ。

4番が一気に駆け上がり、ゴール前の6番にパス。

6番は10番の脚を掴み、持ち上げる。10番は面白い程にピンとしたおり、バットのようには持たれている。

「ど根性バットオ!!」

「何ツ!？」

10番をボールに叩き付け、ゴールを狙う。

全く予想出来ず、固まっていた守はゴールを許す。

『決まったアアアア!?!後半開始直後、秋葉名戸が先制点をもぎ取ったアアア!!』

こんなシュートを隠してやがったのか……!!
ボールはこちらからキックオフ。

「あんな奴らに先制点を許すとはな……!!」
「気にするな……俺達で取り返す!」

染岡にパスを出し、2人で攻め上がる。

それに対し秋葉名戸、全員でディフェンスの構えだ。
が、染岡は襲い掛かる数多のディフェンスを避け切り、ゴール前まで。

「加賀美!まずは俺が1点取る!」

「ああ、任せた!」

染岡が単身ゴールを見据える。俺たちの奥の手はまだ温存というわけだな。

その時、秋葉名戸DF陣は砂煙を発生させる。

「五里霧中!!」

「こんな目眩しで俺のシュートが止められると思ったか!喰らえ、ドラゴンクラアアッッシュ!!」

染岡のドラゴンクラッシュが砂塵の中に突っ込む。

砂塵が晴れる頃、ボールはゴールの後ろに転がってきた。

妙だな、確かにゴールの真ん中を捉えていたはず。それが後ろに・・・バレーのアンダーハンドの要領で空に弾いたのか?

その後もこちらのシュートは尽く決まらない。

次第に焦りが募っていく。

「どうなっている・・・?」

ここで負ける訳にはいかない、何としてでも点を返さなければならぬ。

だが幾ら撃つてもゴールネットを揺らすことは無い。

不安、焦燥に駆られるように染岡が無我夢中にシュートを放つ。が、またボールは枠の外。

「何故、あの砂煙に包まれるとシュートが逸れる・・・」

「――まさか!?!」

目金が声を上げる。

「目金!何か気づいたか!?!」

「ええ!!僕に任せてください!」

そう言うと、目金は砂煙の中に突撃していく。
染岡が雄叫びと共にシュートを放とうとしたその時。

「シュートを撃ってはいけません!!」

「この、離せ!!」

砂塵が晴れた時、そこにあつたのはゴールを押ししている秋葉名戸の姿。

・・・なるほどな。砂塵を発生させ姿を隠し、その隙にゴールの位置を変える。

ゴールをずらしたから、シュートが決まらなかったわけだ。

半田のスローインから試合再開、そこで目金がボールを渡すように要求する。

並々ならぬ目金の熱意に押され、半田は目金へとボールを投げる。
目金は自分の前に立ち塞がる選手達を、言葉で退ける。

オタクを説き伏せるオタク。

なんと目金はゴール前まで上がってきた。

ゴールをさせまいと砂煙を起こすDF陣。

「まだこんな事を続けるつもりですか!!」

「これが・・・オタクの必殺技だ!!」

「キミ達など・・・オタクではありません!オタクとは、1つの世界を真摯に、真っ直ぐに極めた者!ゲームのルールを破ってまで勝とうとする貴方達に、オタクを名乗る資格などありません!!」

その一言に砂煙を起こすのを辞める秋葉名戸。

GKは1人でゴールをずらそうとする。隠そうともしやがらない。

「加賀美君!染岡君!あのシュートを!!僕に考えがあります!!」

「目金・・・」

「分かった!!頼むぞ!!・・・行くぞ染岡アア!!」

染岡がドラゴンクラッシュを放つ。

猛猛な蒼い龍は襲い掛かる・・・離れて待ち構える俺に。

すれ違いざま、雷を帯びた右脚でドラゴンクラッシュに轟一閃を上乗せする。

これが、俺達の連携シュート!!

「らいりゆういつせん雷龍一閃!!」

雷と共に龍が雄叫びを上げながらゴールへ迫る。

「ゴールずらし!!」

腹でゴールを押し、ずらしてしまうキーパー。このまま行けば、俺達の新必殺技はラインの外へ。

その時だった。目金が身を呈してシュートの軌道を調整する。ずらされたゴールにずらされたシュートが襲い掛かる。

『ゴオオオオル!!目金に加賀美と染岡の新必殺シュートの軌道を変え、雷門中点!!土壇場で追いつきました!!』

「目金!!大丈夫か!」

「これぞ、メガネクラッシュ・・・」

技名じゃなくて本当にメガネがクラッシュしてんだよ!

そのままベンチに下がり、土門と交代する目金。

あいつの想い、無駄に出来ないな。

「どうして、どうして君はそんな姿になってまで・・・」

「目を覚まして欲しかったのですよ、同じオタクとして・・・」

寄ってきた秋葉名戸の選手達にそう言葉を返す目金。

彼らは目が覚めた、と言ってフィールドに戻っていく。

「目金が身体を張って同点にしてくれたんだ!!皆、絶対に逆転するぞ!!」

「おお!!」

あと1点をもぎ取るために、互いがボールを必死に追いかける。激しいパス回しを土門が遮り、前線へ送ったボールを俺は空中で受け取る。

「染岡!行け!!」

「染岡君!ドラゴンクラッシュです!!」

「おう任せろ!!ドラゴンクラアアッシュツツ!!」

空中から染岡へパス。染岡はダイレクトでドラゴンクラッシュをゴールに叩き込む。

キーパーごとボールはゴールネットに突き刺さり、俺たちの得点に。

『ここでホイッスル!!試合終了直前、パスを受けた染岡がシュートを決め雷門中逆転!!決勝戦進出だアアア!!』

俺達の勝ち・・・決勝へ駒を進めた、つまり。

「次は帝国・・・!!」

因縁の相手へリベンジする機会がやってきた。

喜びで身体が震えてきた・・・

終了後、目金と秋葉名戸の間には奇妙な友情が生まれていた。

戦った後に仲良くなるのも、サッカーの醍醐味だよな。

第11話 見える敵、見えざる敵

「行ったぞ!! 囲め!!」

「少林!!」

「よし! サイドの風丸に出せ!!」

「風丸さん!! 早すぎでやんす!!」

全員熱が籠ってるな、いい雰囲気だ。

あれから俺達に届いた報せは、予想通りのものだった。帝国の決勝進出。つまり、正式に帝国へのリベンジが決まったのだ。

あの時から俺達は見違えるほどに強くなった。今なら・・・

「皆、お疲れ様!」

「どうぞ、加賀美先輩!」

「ありがとう、春奈。」

タオルとドリンクを受け取る。

もう辺りは夕暮れに包まれ、部活終了を知らせるベルが鳴り響いた。大分動いたからな、俺達も切り上げてまた明日に備えるべきだろう。

「あー腹減った!! 皆、雷々軒に行こうぜ!!」

「ナイスアイデア。響木さんのラーメン、久々に食いたいわ。」

ボールやら何やらの片付けを終え、部室で制服に着替えて複数人で雷々軒へと向かう。

道中、先に控えた帝国戦への想いを語らないながら。

「あー悪い、俺帰るわ。」

「そうか、気をつけて帰れよ?」

「おう、また明日。」

到着したタイミングで土門は帰ってしまう。引き止める理由もないからな。

さて、今日は何にしようか……

翌日、いつものように放課後を迎えて部活に入る。

気の所為か、最初のランニングにも気合いが入りペースが速い気がする。その所為か後ろの壁山なんかは既にバテているぞ。

と、気付いたら土門が列から外れていた。それを見て春奈が後を追いかける。

何があつたんだ？昨日の今日でテンションが違いすぎる。

途中で春奈が帰ってきて、その少しあとに土門も戻ってきて練習に合流する。

何をしていたのか、と訊ねる守にあやふやな回答をする土門。何かを隠しているな。

そして気になるのは春奈。目に見えて浮かない表情をしている。

……部員の精神状態を管理するマネージャーの精神状態を管理するのも、副キャプテンとしての務めだろうか。

「次！各自課題練習に入るぞ！」

「加賀美、良いか？」

「ん？どうした？」

豪炎寺に声を掛けられる。

「次の帝国戦、あの強固なゴールを打ち破るために練習したいことがあるんだ……頼めるか？」

「ああ、良いぜ。俺ももう一つくらい手札を増やしておきたかったし

な。」

こうして、豪炎寺との特訓が始まった。

豪炎寺が想い描くアイデアを聞き、それに沿って動く。が、これが中々上手くいかない。

「・・・タイミング云々以前か、これは。俺の理解が足りていないようだ。」

「すまない・・・急すぎたかもしれないな。」

「いや、いい・・・俺も何としてでも完成させたい。だから、1度じっくりと見てみようと思う——」

「——お前の、ファイアトルネードを。」

「よし！今日の練習は終わりだ！皆お疲れ様！」

「クソツ、最後までダメだったか・・・」

「だが、最初より明らかに進歩した。大丈夫だ、俺達なら完成させられる。」

中々上手くいかず、このやり場のない気持ち地面に叩き付ける。

それを見兼ねて豪炎寺が声を掛けてくれる。不甲斐ない。

そうだ、こんな自分の情けなさに落ち込んでいる場合じゃないんだ。

「すまないな豪炎寺・・・明日、必ず何とかしてみせる。」

「ああ。だが無理はするな・・・帝国戦、お前が欠けたら勝率はグンと下がるからな。」

手早く片付けを済ませ、春奈の姿を探す。

もう既に制服に着替えを済ませ、校門を出るところだった。

「春奈!」

「加賀美先輩?どうかしましたか?」

「ああ、少し気になることがあつてな・・・一緒に帰っても良いか?」

「えっ、ええ!?!一緒に!?!」

驚きの声を上げられる。

「ダメか?」

「あ、いえ大丈夫です!すみません、急でちよつと驚いちやつて・・・」

「ゴ最もだ。」

急に異性に2人で帰ろうと言われたらそれは焦るし驚くか。

切り替えて横並びに歩き出す。

本来の目的を果たすため、口を開く。

「練習中・・・土門を追いかけていったら?そこから帰ってきた時、

どうにも浮かない表情をしていたな・・・何があつた?」

「・・・加賀美先輩になら、話してもいいかな。」

と言つて話してくれる。

「まず・・・帝国の鬼道つて知ってますよね?」

「ああ、勿論。」

「実は・・・私と鬼道は、血の繋がった兄妹なんです。」

・・・マジ?

今世紀1番の驚きかもしれない。

「・・・そうか。それで、鬼道がどうしたんだ?」

「はい、土門さんを追いかけていったら、そこにお兄ちゃんがいたんです。土門さんと2人で話していて・・・雷門の情報、帝国のやり方なんて言葉が聞こえてきて、いてもたってもいられなくなって声を掛けたんです。」

引き止める春奈を引き剥がしてその場を去って行った鬼道。

それにしても、土門が鬼道と・・・いや、帝国と繋がっていたとはな。しかし話を聞く限り、土門は今、自分のやっていることに疑問を抱いている。

何とか、してやればいいんだが。

「私とお兄ちゃんは昔、血の繋がった両親を亡くして孤児院にいたんです。そして私達は別々の養父に引き取られて行きました。」

「そうか、それで・・・」

「お兄ちゃんは、変わっちゃったんです。昔は優しい人だったのに、今ではあんな事をするようになって・・・」

あんな事、というのは土門を唆したこと、帝国の名の元乱暴なサツカーをするようになったことだろう。

あいつが変わったのにも、何か理由がありそうだ。

「私、どうすればいいか分からないんです。お兄ちゃんとどう接していけば良いのか、何か事情を抱えた土門さんをどうしてあげればいいのか・・・」

俯く春奈。その目には涙が溢れそうになっており、必死に耐えているのが伺える。

俺はそれに触れない。

「・・・土門の件は、大丈夫だ。あいつは今抗おうとしている。俺もその手助けをしてやるさ。・・・鬼道の事だ。俺はあいつと関わったのはこの前の試合だけだが、1つ分かったことがあるんだ。」

「分かったこと・・・何ですか？」

「・・・あいつもサッカーが好きってことだ。守の言葉を借りるなら、心からサッカーが好きならやつに悪いやつはいないんだ。あいつにもきつと、何か理由があるんだよ。だから、信じてやろうぜ。鬼道を・・・春奈のお兄ちゃんを。」

そう声を掛けると春奈はふと立ち止まる。

どうしたのかと思い振り向くと、その目から涙が零れ落ちていた。

・・・何か泣かせるようなことを言ってしまっただろうか。

「・・・そうですよね、妹である私がお兄ちゃんを信じないとダメですよね・・・」

「ああ・・・だからどうか泣かないでくれ。」

「違います、お兄ちゃんの事で泣いているんじゃないですよ・・・」

じゃあ何に？という疑問を口にするより早く、春奈が話してくれた。

「加賀美先輩の優しさが嬉しかったんです・・・助けを求めた訳でもないので、こうして気にかけてくれて・・・それがただ嬉しくて。」

「・・・見方によつては、俺が泣かせたようなものか。」

「ふふっ、そうですね。」

無理に涙を拭ったのか、春奈の目元は少し腫れている。

が、いつもの無邪気な笑みが戻っていた。

もう、心配なさそうだな。

「私の家ここです、送ってくれてありがとうございますー!」

「そっか。それじゃ、また明日な。」

「はい!・・・あの、1つ良いですか?」

春菜を家まで送り届け、俺も家に帰ろうとしたその時春菜に呼び止められる。

「どうした?」

「・・・あの、柊弥先輩、って呼んでも良いですか?」

「そんなことか・・・ああ、別に構わないぞ。」

そんなこと、いちいち確認を取らなくても良いのに・・・と思いつつ春奈に手を振って背を向ける。

俺も少しは副キャプテンらしいこと出来たかね。

「ただいま。」

「あら柊弥、お帰りなさい。ご飯出来てるわよ。」

「ごめん母さん。後から食べる。」

夕飯を作ってくれていた母さんを横目に、階段を登り自室へ。手に持つDVDを機器に挿入し、モニターと睨めっこを始める。そこに映し出されたのはサッカーの試合・・・豪炎寺が映る試合だ。

『ファイアトルネード!!!』

豪炎寺の代名詞、ファイアトルネードを見る、ただひたすらに見る。高さ、角度、力加減。その全てを目に焼き付ける。

目の前の豪炎寺をイメージの中の自分に照らし合わせる。何が違うのかを炙り出せ、問題を解決しろ。

気が付いた時、時計の針はすでに1を指していた。

翌日、練習にはさらに熱が入る。

穴戸と土門が必殺シュートを編み出し、それに続かんと全体の士気もより高まっていった。

今日は珍しく冬海先生も練習を見に来ているようだ。何故かニヤついているが。

と、そんな先生の元に夏未がやってきて何かを話している。

「ファイア・・・トルネード!!」

俺が放ったファイアトルネードが守へと襲い掛かる。

熱血パンチで応戦した守は、ファイアトルネードに力負けして弾かれる。

「いてて・・・凄いいじゃないか柊弥、完璧にファイアトルネードをものにしてる!」

「俺から見ても完璧なファイアトルネードだった・・・その目の下の隈が原因なんだろうな。」

「ははっ、まあな。」

没頭した甲斐があったというものだな。

本人からのお墨付きを貰ったんだ、今ならあの技も成功するだろう。

「バ、バスをですか!？」

「ええ。」

唐突に先生が甲高い声を上げる。

バス? 何のことだろうな。気になって全員が足を止めてしまう。

何かを焦る先生に、遠征用のバスを動かすことを頼む夏未。いや、あれはもはや命令に近いな。理事長の名を盾にしてるからこそ出来る事だろう。

先程から顔色が悪い先生を引き連れてバスが止まっている場所へ向かう。俺達も来るように、とのことなので練習を中断して着いていく。

「さ、早く動かして見せてください。」

「は、はい……」

鍵を差し込み、エンジンをかけようとする先生。が、バッテリーが上がっていると言う。

嘘だな。あんなに浅い回し方でエンジンがかかるはずは無い。

夏未に巫山戯るな、と一喝される先生。

夏未は何故あんなに先生を囓し立てるんだ?

次第にエンジンが動き出し、次はバスを動かすように促す夏未。

「出来ませんツツ!!」

だが先生はそれを拒む。そこに夏未はある紙を懐から取り出す。

あれは……?

「ここに手紙があります。これから起こる恐ろしい犯罪の内容を告発する手紙です。」

「は、犯罪……?」

夏未が言うには、先生が自分でこのバスに細工をしたから動かせないと言う。

・・・そうか、だんだん分かってきたぞ。

すると、先生が狂ったように笑い出す。

そして、自分がやったことを認める。自分がこのバスのブレーキオイルを抜いたと。俺達が決勝戦に出られないように細工をしたのだと。俺達が決勝に出ると、困る者がいるのだと。

「帝国の総帥、影山だな。」

「帝国の為なら・・・生徒がどうなってもいいと言うのか!」

「君達はある方の恐ろしさを知らないんだ!」

「知りたくもないな。」

「貴方のような教師はこの学校から去りなさい!この言葉は理事長の言葉と思って頂き結構です!」

そう言われ、捨て台詞を吐き捨てる先生。

去りに・・・

「帝国のスパイが私だけと思わないことです・・・ねえ、土門くん?」
「なッ!」

最後の最後に爆弾落としやがって・・・!

その事は部活終わり、土門と一対一で話すつもりだった。それをコイツ・・・台無しにしやがって!

皆が土門に疑いの目を向け、疑いの声を投げる。

「待て皆、土門には事情があるんだ!」

「加賀美、お前知ってたのか!」

土門の前に立ち、皆の言葉を遮ると土門が驚いて俺に訊ねてくる。

土門に自分で説明させる、もうこれしか手はない。

「土門、話してくれ・・・何があったのかを。」

「——悪イ!!」

そうやって土門がこの場から逃げ出してしまう。

おい、それじゃ何も解決しないだろうが——!!

「土門ツツ!!」

「待って加賀美君!」

後を追いかけようとしたら秋に止められる。

この間に土門は完全に俺達の前から姿を消してしまった。

「離せ秋!俺は、あいつを——」

「私に任せて!土門君とは前からの仲だつて知っているでしょう?」

力強くそう答える秋。

そう言われちゃ、任せるほか無いな。

「分かった、頼むぞ。」

うん、と短く答えて秋が後を追う。

俺達に出来ることは、この時間も練習に費やすこと・・・なのだが。

「俺も行ってみるよ・・・土門とサッカーにしに。」

「俺も行こう。」

「この話の原因になったのは私の行動。私も行くわ。」

と言って守、豪炎寺、夏未が後を追う。去り際に夏未は俺に手紙を渡して。

「加賀美さん、土門さんのこと知ってたでやんスか？」

「ああ知っていた・・・と言っても、昨日知ったばかりだが。」

「何で俺達に言わなかったんだ？伏せておいて良いことではないだろ
!？」

「待ってください！柊弥先輩は、土門先輩が気に病まないようにつて
――」

春奈がそう口を挟んでくるが、手で制する。

「皆、俺の話を聞いてくれ。頼む。」

頭を下げて頼むと、皆口を閉じてくれる。

礼を言つて俺は皆に話す。

「土門は・・・知つての通り帝国から派遣されたスパイだ。帝国のディ
フェンス技が使えたのはそういうことだ。最初はいつとも何とも思
わなかっただろうな。だが、今のあいつは自分のやって来た事を確か
に悔いていた、反省していた！・・・これを見てくれ。」

と言つて夏末から預かった手紙を皆に見せる。

「これは・・・」

「そう、土門の字だ。あいつは俺達の危険を感じ取り、こうして手を
打ってくれたんだ！分かるだろ？あいつは恐ろしい帝国の圧力より、
俺達を優先したんだ！」

「土門さんが、俺達を・・・」

「ああそうだ。だからさ・・・受け入れてやってくれ。あいつを俺達の
仲間として。」

そう話し終えた時には、誰もが頷いてくれていた。

後は土門本人に話をさせれば、真の意味であいつは俺達の仲間になってくれるはずだ。

「皆、すまなかった!!」

秋達が土門を連れて帰ってくる。

俺のお膳立てを無駄にせず、土門はこれまでの行いに対する謝罪を皆にした。誰もそれを攻めたてるようなことはせず、迎え入れる。

「顔を上げろ土門・・・ようこそ、雷門イレブンへ。」

「——ああ!!」

差し出した手を力強く握り締める土門。

これにて一件落着か・・・

「あの・・・このフットボールフロンティアの規約を見てください。」
「ん?どうした目金。」

目金が肩を叩いて書類を差し出してくる。

それを受け取り目を通す、そして声に出す。

「えーっと、監督不在のチームは出場を認めない・・・だつてさ。」

「なるほど、それがどうしたんだ?」

「だな、俺達には冬海先せ——あ。」

口に出そうとした人物は今しがた追い出したばかりだった。

つまり、今このチームには監督がない。

よって、決勝戦への出場は認められないということになる。

「オーマイガー・・・」

「「ええええええええええええ!!」」

「夏未、お前知ってたのかよ・・・?」

「・・・勿論よ?だから早く新監督を捜しなさい!」

ダウト。声が震えているぜお嬢さん。

しかし不味いな、このままじゃ試合に出ることすら出来ないぞ。

「なあ、あの人なら——」

豪炎寺が手を挙げて発言する。

そうか、確かにあの人ならやってくれるかもしれないな。

円堂のお爺さんを知っていたあの人、雷々軒の響木さんなら。

「諦めるなって!監督になってくれる人はきつといるから!!」

えー、はい。見事に断られました。

監督がいない、見つからない今全員が焦って練習に身が入っていない。無理もない。

響木さんなら、と思ったんだが・・・どうしような、他に心当たりなんてないぞ。

「・・・鬼道さん?」

「え?」

河川敷のグラウンドから橋の方を見上げ、突如鬼道の名前を口にする土門。

それにつられて視線を上げると、本当にいた。

こちらの視線に気づき、近づいてくる鬼道。

俺と守が階段を登り、鬼道の元へと向かう。

「冬海の件、謝りたかった。それに土門のことも。」

「ああ、その事はもういいんだ。」

その言葉に鬼道が少し驚いた様子を見せる。こいつが驚いているの意外だな。

「羨ましいよお前達が・・・それに比べてお前達が・・・」

と言って自嘲気味に笑う鬼道。

・・・こいつも、今の帝国に不満を持っているのかね。

やはり、根はまともなやつなのかもしれない。

自分達が頂点に立ち続けたのは影山の力であり、自分達の力ではないと言う鬼道。それに対しそんなことないと返す守。

「今まで俺達が掴んできたのは・・・全て偽物の勝利だった！」

「いや、そんなことないだろう。」

「その通りだぜ鬼道。」

「・・・何？お前達に何が分かる!？」

「分かるさ！俺はお前達のシールドいっぱい喰らってるんだぞ！帝国の強さは、俺の身体が知ってるぜ！」

守にそう押され、再び笑みを浮かべる鬼道。

「お前達との試合、楽しめそうだな。」

「ああ！」

「次は俺達が勝つぜ。首洗って待ってるんだな。」

守がそのまま鬼道を練習に誘うが、鬼道は誘いに乗らず、そのまま帰っていく。

守のサッカーバカさに感化されたかな。

「さ、練習に戻るか。」

「おう！絶対帝国に勝つぞ！」

「皆！新監督だ！」

帝国戦前日。守は練習前に全員を部室に集める。
部室の扉を開けると、そこにはなんと雷々軒の響木さんがいた。

「え．．．本当に？」

「ああ。響木正剛だ。よろしく頼む。」

驚いたな．．．一度は完全に断られたのに引きずり込むとは。

一体どんな手を使ったんだろうか。

「円堂の熱意に負けちまってなあ．．．こんな歳で恥ずかしいが、心に火が点いちまった。」

「そうですか．．．守は、凄いやつでしょう？」

「ああ、さすが大介さんの孫だ．．．だが俺が期待してるのはあいつだけじゃない、このチーム全員だ。失望させるなよ？」

「ははっ、望むところですよ．．．響木監督。」

そう呼ぶと響木監督は豪快に笑う。
これで俺達も決勝戦に出れるな。待ってる帝国、待ってる鬼道!!

第12話 影を祓って堂々と

「いよいよ地区大会決勝だ！またあの帝国と戦えるんだ、特訓の成果を見せてやろうぜ!!」

「おお!!」

「みんな張りきってるね、私も頑張らなきゃ!」

「雷々軒のおっちゃん!・・・じゃなくて、響木監督!!」

列車による移動中、俺達はかつてないほどの熱気に包まれていた。

激戦を勝ち抜き、フットボールフロンティア決勝戦に進出、最初にボコボコにされた帝国と再戦できる機会が回ってきたのだ。それは燃えてくるというもの。

勿論、俺も先程から心が昂って仕方ない。

「俺からはたった1つ、全てを出し切るんだ・・・後悔しないために!」

守に呼ばれ、立ち上がって俺達にエールを送る響木監督。

この人が監督を引き受けてくれなければ、今こうして帝国学園に向かうこともなかったんだ・・・感謝してもしきれない。

「あれ、夏未さんは・・・」

「電車は嫌いなんですって。」

春奈の疑問に秋が苦笑いしながら答える。お嬢様だねえ・・・

「お、帝国学園が見えてきたぞ。」

「な、なんスカアレ・・・」

「まるで要塞じゃねえか・・・」

練習試合に来た時も戦争にでも行くのかって聞きたくなるような

装甲車で来たからなあ・・・

何処と無く軍隊のような雰囲気を感じさせられたな、あの時は。

そのまま電車で揺られ、目的の駅へ着く。

そこから少し歩くと、先程電車の中から見えた帝国学園の校門に辿り着く。

近くで見るとこれまた壮観だ・・・

「くうううっ・・・燃えてきたぜ!!」

「ああ・・・速く試合したい。」

守の熱意に同調する。

守のことを散々サッカーバカだなんて呼んだが、俺も大概だな。

「気をつけろ！バスに細工してきたヤツらだ、落とし穴があるかもしれない！壁が迫ってくるかもしれない!!」

響木監督のその一言に、1年組が壁や床に警戒を向ける。

ジョークも言えるんだな、この監督・・・雷々軒の時から気さくな人だとは思っていたが。

響木監督のジョークで少しリラックスした俺は、改めて周囲を伺う。

・・・ジョーク、とは言ったが、帝国・・・というより影山ならなにか仕掛けて来る可能性もあるからな。警戒するに越したことはない。

が、俺の目に飛び込んできたのは帝国の罨などでは無く、イマイチ浮かない顔をしている春奈だった。

「・・・鬼道のことか?」

「はい・・・やっぱり、まだ。」

「無理もない。だけど顔を合わせる以上、話す機会があるかもしれないから準備はしておくんだぞ。」

そつと近づき、前の皆に聞こえない程度の声で話しかける。
余計なお世話かもしれないが、見て見ぬふりは出来なかった。

「ここが俺達のロッカールームか。」

守がドアを開けようとしたその時、内側からドアが開かれる。
中から出てきたのは鬼道。

「無事に着いたみたいだな。」

「何だど？事故にでもあえば良かったみたいない言い方じゃねえか。」

「よせ染岡・・・鬼道はそんなヤツじゃない。」

「・・・安心しろ、この部屋には何も無い。・・・勝手に入ってすまなかつたな。」

この部屋には、か。

まるで他にはあるかもしれない、みたいな言い方だな。

・・・遠回しに忠告しているのかもしれないな。鬼道のことなら。
去りゆく鬼道の背中を見送り、中に入る。

すると皆揃いも揃って中の点検を始める。疑り深いねえ。

「そんなことしなくても大丈夫だって。鬼道はそんな事しないさ。」

「ああ！俺には分かる！」

それでも納得出来ない、と言った表情を浮かべる。

「さあ！この話はおしまい！決勝なのよ、試合に集中しましょう!!」

「・・・そうだな。連中がどんな手を使おうが勝ちや良いんだ！」

「そうツス！」

秋の一言で皆の意識が切り替わる。やるなあ秋。

着替えを終え、軽く身体を解しながら帝国内を歩き回る。

「加賀美、準備は万端か？」

「はい監督。何時でも行けます！」

そうか、と笑いながら背中を叩いてくる響木監督。

内に秘める緊張を解いてやろうという細かな気遣いだろう、ありがたい。

そのまま話をしながら2人で歩く。

曲がり角に差し掛かったその時だった。

「影山……！」

守と影山が何か話していた。

こちらに気が付くと影山は守の肩に手を置き、何か呟いたと思っただらこちらに歩いてくる。

「雷門中副キャプテン、加賀美君だね。」

「……どうも。今日はよろしくお願いします。」

「はは……噂は聞いている。期待しているよ。」

と言って去っていく。

噂は聞いている、ねえ。散々映像で見えてきただろうに。

「守……影山と何を？」

「それは……その、試合をお互いに頑張ろうって。」

拳を震わせながら俯く守。

その瞬間響木監督と目が合い、言葉無しで会話が出来たような気がした。

何かされたな、と。

グラウンドに入っのウォーミングアップが始まる。

スタジアムの雰囲気呑まれ、何処と無く全員動きが硬いように感じる。

豪炎寺と組んでアップをしていると、ふと豪炎寺が近づいてきて訊ねてくる。

「なあ加賀美、円堂は何があつたんだ？」

「アップが始まる前、影山と接触していた。恐らく何か吹き込んだんだろう。」

「・・・何処までもあの男は！」

「俺達がムキになっても仕方ないさ。出来る限りのサポートをしてやろう。」

そんなやり取りを交わしつつ、段々と身体が温まるのを感じてアップの強度を上げていく。

が、そんな中守は顔を洗ってくる、と抜け出す。それとほぼ同じタイミングで春奈もグラウンドを出る。

そんな2人を秋は追いかけていく。

・・・俺は俺に出来ることをやるか。

「皆！硬くなるなよ！俺達は俺達のサッカーを楽しめばいい！楽しんで勝つことが大事なんだからな！」

「・・・加賀美さん。」

「ああ、加賀美の言う通りだな！」

「よし、やってやるでやんすよ！」

僅かばかりに空気が和らいだような気がする。
うんうん、これでいい。サッカーは楽しまなきゃな。

次第にスタジアムには観客が増えていく。決勝戦ともなるともはや満席だな。

そんな観客の中に両親の姿を見つけ、軽く手を振る。

直接見に来てくれるのは小学生以来だな。

増えた観客を見てまた壁山は体が強ばる。

それを見兼ねた穴戸がくすぐりにかかり、無理やり壁山の緊張を解こうと試みる。

それに耐えかねた壁山は勢いのままボールを高く蹴り上げる。随分高くまで蹴ったな、屋根まで届いてるぞあれ。

「ギャアアアアア!?!」

「!?!」

突如穴戸の悲鳴が響き渡る。

何事かと思つて近付くと、倒れた穴戸の身体を上手く避けるようにボルトが芝生に突き刺さっていた。危ないなオイ。

全く、帝国はちゃんと整備を――

「待てよ?。」

ふと疑問に思う。あの帝国だぞ?ましてや強豪であるサッカー部が使う設備の点検を怠るなんてことは想像出来ない。

いくら考えても疑問は晴れないまま、試合開始前の整列の指示が出た。

帝国のメンバーと正面から向かい合う。

こうしてまた戦える日が来るとは思わなかったな。

不安要素が晴れたわけではないが、考えても一向に答えは浮かんでこない。なら、切り替えて試合に集中するべきだろう。

順番に全員と握手を交わす。全員が闘志に満ち溢れており、握手の度に腕を通してそれが伝わってくる。なんて心地良いんだ。

鬼道と握手を交わしたその時だった。

「加賀美、そのまま聞け・・・試合が始まったらすぐ全員を真ん中から下げるんだ。良いな。」

「・・・分かった、お前を信じよう。」

鬼道が小さな声でそう言ってくる。

何かに気付いたような表情だ。信じて間違いないだろう。

そのまま鬼道は守にも同じことを言ったようだ。

「守。」

「ああ・・・皆聞いてくれ!!」

ポジションに着く前に皆を集めて説明する。

「何でそんなことをするんだ？それじゃ帝国に好きにされるだけじゃねえか。」

「頼む、聞き入れてくれ・・・このままじゃ俺達は危険かもしれないんだ。」

「かもしれないって・・・ああもう分かったよ、お前らが嘘着いたことなんてねえもんな。」

最初は反発されたが、何とか説き伏せる。

さて、一体何が起るといふんだ？

『さあ、フットボールフロンティア地区大会、決勝戦の開始です!!』

試合開始のホイッスルが鳴る、今だ!!

「全員引けエ!!」

「!?」

帝国の面々が驚きの表情を浮かべる・・・鬼道以外。その瞬間だった。

轟音と共にはるか高くから鉄骨が降り注ぐ。何本も、何本も。

あれに触れれば、一溜りもなかっただろうな。

「全員無事か!?!」

後ろを振り返り確認する。

俺を除き10人、全員の顔が見えた。良かった、無事なようだ・・・

「何だよ、これ!?!」

「鬼道の言うことを信じて良かったな・・・」

目の前の惨状にそう呟かずにはいられなかった。

鉄骨はグラウンドに突き刺さり、生えているようにすら見える。

砂塵が晴れると、鬼道は血相を変えてグラウンドを飛び出していく。その後ろに響木監督、守、帝国のメンバーが続く。

俺もその後を追う。

「総帥！これが貴方のやり方ですか!!」

鬼道が影山に詰め寄る。

「言っている意味が分からんな。私が細工したという証拠はあるのかね?」

「あるぜエ!!」

「・・・貴方は?」

「俺は鬼瓦、こういうもんだ。」

と言つてて警察手帳を見せてくる。刑事さんが、この人。

影山のテーブルに投げ出されたのは、先程穴戸に降り注いだボルト。

鬼瓦さん曰く、影山は業者に依頼し意図的に鉄骨のボルトを緩めたそうだ。

「俺はもうあなたの指示では従いません!」

「俺達も同じ意見です!」

「お前達・・・!」

源田が鬼道の後続く。

「勝手にするといいい、私にもはやお前達など必要ない。」

そう言つて影山は鬼瓦さんに連れていかれる。

「響木監督、 円堂、 加賀美。 本当にすみませんでした。」

鬼道が頭を下げて謝罪する。後ろの源田と寺門もそれに続く。

お前達は悪くないだろうに。

「総帥がこんなことをしたんです。試合をする資格はありません。責任は取らなければいけない。」

「・・・円堂、 加賀美。 お前達に判断は任せる。提案を受け入れるも試

合をするも、お前達の自由だ。」

響木監督が俺達にそう告げる。

俺達の答えは・・・既に決まっている。

「やるに決まってるだろ！」

「その通りだ。俺達はサッカーをしに来たんだ、お前達帝国学園とな。」

「・・・感謝する！」

グラウンドの整備が終わり、試合は再開となる。

「見せるぞ！生まれ変わった帝国のサッカー！」

「俺たちの熱い雷門魂、全力でぶつけてやるんだ!!」

両チームのキャプテンがそう声高らかに宣言する。

そして試合開始のホイッスル・・・さあ、サッカーやろうぜ!!

『試合開始！さあ、初めに攻め込むのは雷門だ!!』

染岡のキックオフから試合開始。すぐさまボールは豪炎寺に。そのまま豪炎寺は染岡と共に駆け上がる。

大野と成神がダブルスライディングでボールを奪おうとするが、豪炎寺はそれを跳んで回避。

「染岡!!」

「おう!!ドラゴオン!!」

「トルネエエド!!」

先手必勝。

染岡と豪炎寺によって放たれたドラゴントルネード。
灼熱の龍が帝国ゴールへと襲い掛かる。

「パワーシールド!!」

源田が拳を叩き付けると、地面から衝撃波の盾が展開される。
衝撃波の盾に真っ向から突っ込む灼熱の龍。

やがてその力は衰えていき、ボールは盾に弾かれる。

「何!?!」

依然のパワーシールドならドラゴントルネードで確実に破れたはず。・・・帝国もまた、俺達同様に進化しているというわけだ。

いいね、益々燃えてきた。

弾かれたボールをすぐさま鬼道が受け取り、前線へ上がっていく。
そんな簡単にはやらせないがな!

「ここは通さないぞ鬼道!!」

「ふっ・・・止めてみる、加賀美!!」

あの時のように一対一で激しく攻め合う。

鬼道はボールは目まぐるしく転がし、俺はそれを必死に追いかける。

「ふっ!」

「しまった!?!」

鬼道に抜かれてしまう。クソっ、やられた!

そのまま雷門のライフエンスを掻い潜り、鬼道は単身ゴールへと向かっていく。

「行くぞ!! 円堂!!」

鬼道がボールを高く蹴りあげ、跳躍と共に指笛を鳴らす。

それと同時に地面から顔を出した何頭かのペンギンがボールに嘴を突き刺し、ドリルのように回転を始める。

次第にボールは薄紫色の輝きを放つ。それを鬼道はオーバーヘッドキック。

「オーバーヘッドペンギン!!」

蹴り出されたボールにペンギンが追従する。

あいつ、あんな凄いシュートを……!

頼むぞ、守!!

「熱血パンチ!!」

守の拳がボールに触れる。……何だ、何か違和感を感じる。

拳とボールはせめぎ合うかと思いきや、あっさりと拳が弾かれて――

『ゴオオル!! 帝国キャプテン鬼道!! 颯爽と先制点をもぎ取ったアアア!!』

「嘘、だろ!?!」

「守……」

今の熱血パンチ、何時もより威力が無かった。

やはり、迷いが……!

「取られたものは仕方ない。俺達で取り返すぞ!!」

「ああ！」

こちらのキックオフから試合再開。

先程鬼道がやって見せたように、今度は俺が帝国を抜き去ってゴールへと上がる。

「ライトニングブラスタアアア!!」

雷鳴が轟き、万物を打ち砕く稲妻が源田待ち構えるゴールへと迫る。

源田は先程以上に力を込め、地面を叩きつける。

地面から現れたのはパワーシールドよりも広範囲かつ巨大な衝撃波。

これは――

「フルパワーシールドオオ!!」

強大な衝撃波と強大な稲妻とが火花を散らしながらぶつかり合う。

「うオオオオオ!!!」

「はアアアアア!!!」

雄叫びと共に稲妻より強く。雄叫びと共に衝撃波はより強くなる。

数十秒にも渡り、周囲を力の奔流が襲う。

遂には、俺の稲妻は守護を打ち破ることは無かった。

「ふ．．．流石だな、加賀美！」

「クソツ、次は決める．．．!」

源田のロングパス。

ボールは再び雷門ゴールまで運ばれる。

全力と全力がぶつかり合い、一進一退の攻防が繰り広げられる。寺門のシュート、守は上手く弾けずボールはラインの外へ。佐久間のヘディング。守はフアンブル、ボールを一瞬取り損ねるが何とか胸に抱え込む。

・・・目も当てられないな。まんまと何かに気を取られている。

守からのパスで再び試合は動く。少林へ出されたそのパスを、鬼道が空中でカット。

そのまま上がる鬼道。立ち塞がる壁山をヒールリフトで華麗に抜き去る。

「円堂オオ!!」

雄叫びと共に足を振りかぶる鬼道。

その脚がボールを捉えた瞬間、豪炎寺が両足で滑り込むようにしてボールを抑える。

暫しの拮抗の後、ボールは洞面まで弾かれる。

「ぐッ・・・!?!」

座り込む鬼道。今ので脚を痛めたか!

それを見た洞面はボールを外に出し、試合を止める。

グラウンド外に出て靴を脱ぐ鬼道。

そこに春奈が氷袋を持っていく。そのまま手当てをする。

手当てを終えると、鬼道は立ち上がり春奈に背を向ける。

ピッチに戻り際、何か言葉を交わしたようだ。春奈の顔に笑みが戻る。

春奈は、もう問題なさそうだな。

鬼道が入ってきたことで試合再開。

すぐさまスローインから攻め上がる。

「ドラゴンクラッシュ!!」

染岡のシュート。だが蒼き龍は衝撃波の盾の前簡単に弾かれる。弾かれたボールに直接豪炎寺がシュート。

「ファイアトルネード!!」

しかし、ファイアトルネードもパワーシールドに弾かれてしまう。あの技、連発が効くようだ。何とか打ち破る術を考えなければ……だが源田にはフルパワーシールドもある。

いや、大丈夫だ。俺達にはまだとっておきが残っている。

ボールは鬼道へ。脚を痛めてもそのプレイのキレは衰えず。

一瞬のアイコンタクトで佐久間と寺門を引き連れて鬼道が攻め上がる。

3人で同時に……デスゾーンか!?

いや違う、あれは!?

「皇帝ペンギン!!」

「2号!!」

鬼道は指笛で先程と同じようにペンギンを呼び出し、ボールを前に蹴る。それを佐久間と寺門が同時にキック。

先程の鬼道のシュート以上の力を秘めた必殺技が守へ迫る。

不味いな、今の守では……

「止める……ゴットハンド!!」

顕現した神の手とペンギン達がぶつかり合う。

それぞれの指にペンギンが襲い掛かり、ゴッドハンドを喰い破らんとする。

次第に、守が押されていき――

「うわッ!？」

ゴツドハンドは碎け散り、シュートは守諸共ゴールへ突き刺さる。
・・・2点差、かなりまずいぞ。

しかもここで前半終了のホイッスル。

完全劣勢のまま、ハーフタイムを迎えることになった。

「おい守・・・大丈夫なのか。」

「ああ・・・すまない。守りきれなかった・・・」

「一体どうしたんだよ・・・」

「俺にも分からないんだ・・・」

ベンチは暗く落ち込んだ空気に包まれている。

2点の先制を許し、こちらのシュートは尽く源田に止められた。

「今の貴方には、私をサッカーに惹き付けたあの輝きが無くってよ。」

「・・・影山に何か言われたか。」

「・・・いえ。」

頑なに否定する守。

何なんだ、お前は何を抱え込んでいるんだ・・・？

風丸がDF陣と目配せをする。不調の守のカバーに入るつもりなのだろう。

「守。1つだけ言っておくぞ・・・俺は真剣にサッカーと向き合わないヤツはキャプテンとは認めない。絶対にだ。」

「・・・」

そう守に声をかけてドリンクを取りに行く。

「柊弥先輩……」

「……この試合、何としてでも俺達が勝つ。それが帝国に……鬼道に対する礼儀だと信じてな。」

「……はい！柊弥先輩なら、雷門ならやれますよ！」

心配してくれたのか春奈が駆け寄ってくる。

鬼道とのやり取りを経て、完全に暗さが払拭されたのを確認してそつと胸を撫で下ろす。

「加賀美、後半の事だが……」

「ああ。あのシュートを使う。……正攻法で源田を破るには、あれしかない。」

「そうだな……だが1つ、分かったことがある。あの技の弱点は薄さだ。シュートとぶつかり合っているその瞬間を狙えば……」

「……なるほど、そういう事か！」

染岡も呼んで情報を共有する。

雷門が勝つには、俺達が点を取るしか無いんだ。

後ろは……任せるしかない。

後半がまだ残っている。こんな所で、諦める訳にはいくかよ。

第13話 因縁の戦いに終止符を

『後半戦開始だア!! 2点のリードを持つ帝国! 雷門、これに追いつけるか!?』

開始早々、鬼道を中心に帝国が攻め上がる。

少林とマックスのマークを振り払い、勢い衰えぬまま守が待ち構えるゴールへと攻め上がる。

それを見て佐久間と寺門も前線へ。

今の守では皇帝ペンギン2号を止められないだろう、何としても抑えなければ!!

「行かせん!」

が、俺は徹底してマークにつかれる。

クソツ、どうしても鬼道達に近づかせないつもりか・・・!

3人がゴール目前まで迫ったその時、風丸を始めとするDF陣が守の周りを囲むように立ちはだかる。

そのまま寺門がシュート。風丸は腹でそれを受ける。

「風丸!」

「お前の調子が悪い時は俺たちでフォローする・・・仲間だろ!」

『何と、雷門DF陣が集結!』

そのままゴールを狙い何度も打ち込む寺門、佐久間、鬼道。

ゴールを割らせまい、守に負担をかけまいと身体を張ってそれを阻止する風丸達。みるみるうちにボロボロになっていく。

こいつらの姿を見て守、お前はまだ迷うつもりかよ・・・!?

『帝国のシュートの嵐を雷門DF陣、身体を張って防ぎ続ける!!』

「うわああ!!」

一際鋭いシュートを栗松が顔面で受け、大きくボールは弾かれる。そのタイミングを狙い、鬼道の指示で佐久間達が高く飛び上がる。回転しながらボールを囲むと、紫の三角形が浮かび上がりボールへエネルギーが集中する。

放たれたシュートが圧倒的威力を孕んでいることは想像に難くなかった。

「『デスゾーン!!』」

「うおおおおお!!」

このシュートにすら守は反応が遅れる。十分な時間はあつたのだ。

それを見兼ねた土門が雄叫びを上げながらボールへと突っ込む。

土門はデスゾーンを正面から顔面で受け、身体をゴールポストに打ち付ける。

『土門防いだー！捨て身のプレイだア!!』

すぐさま土門に駆け寄る。ボールはラインの外。

「土門、大丈夫か?」

「あ、ああ・・・」

「なんて無茶を・・・」

「デスゾーンは、こうでもしなくちゃ止められない・・・ぐツ!!」

土門は見るからにボロボロで、試合続行は不可能だと見た瞬間に分かる。

「円堂、俺雷門イレブンになれたかな?」

「当たり前だ・・・お前はとっくに仲間だ。」

土門が担架で運ばれ、交代で影野がピッチに。
・・・そして豪炎寺がボールを持って守へ近づいて行く。

「豪炎寺。」

「加賀美・・・止めてくれるなよ。」

「・・・ああ。頼む。」

豪炎寺が何をやろうとしているのか、眼を見て感じとつた。あいつは守に分かつてもらうつもりなんだ。俺達の想いを。

目を覚まし、試合へ集中させるために。

「円堂!!」

「なに・・・うツ!!??」

守に向けて放たれた豪炎寺のファイアトルネード。
その炎に、熱い想いを乗せて。

「俺がサッカーにかける情熱の全てを込めたボールだ・・・」

「豪炎寺・・・」

「グラウンドの外で何があったかは関係ない。ホイッスルが鳴ったら試合に集中しろ!!」

厳しい言葉を守に投げかける豪炎寺。俺が言いたいこと、全て伝えてくれたな。

守の目には・・・炎が点った。

「豪炎寺、やるぞ。」

「ああ。」

辺見のコーナーキック。ボールは鬼道へ渡る。
すぐさま佐久間との連携シュート、ツインブーストを放つ。
守はもう、迷わない。

「うおおおお!!」

拳をボールに叩きつける。1度だけでなく、何度も、何度もだ。
次第にツインブーストの勢いは完全に殺され、守のパンチングでは
るか前へ。

戻ってきたか、守。

ボールを追いかけ走る俺、豪炎寺、染岡。

俺達で、必ず1本奪い取る!!

「ドラゴオオンツツ!!」

「トルネエエドツツ!!」

全力のドラゴントルネードが源田へ襲いかかる。源田はパワー
シールドを展開、先程同じようにドラゴントルネードは衝撃波の壁に
阻まれる。

——ここだ。

「轟一閃ツツ!!」

「何!?!」

ドラゴントルネードに轟一閃を上乗せするように蹴りを加える。
パワーシールドと至近距離で。

パワーシールドは衝撃波でできた壁、その弱点は薄さだ。

遠くから飛んできたボールは跳ね返せても、至近距離から押し込め
ば——

「――ぶち抜けるツツ!!雷龍一閃・焰!!」

壁には次第にヒビが入る。さらに力を込め、ボールを押し込むと壁は砕け散り、その先への侵入を可能とする。

押し出されたボールはそのままゴールネットを揺らす。これで1点。

『ゴオオオル!!雷門1点取り返した!!』

「ナイスだ加賀美!!」

「ああ、染岡と豪炎寺もナイスシユートだ。」

「あと2点取って勝ちに行くぞ!」

後ろからやってきた守達にはやし立てられる。

チームの士気が目に見えて高まっている。このまま行けば勝てる。

絶対に。

帝国キックオフを告げるホイッスル。

豪炎寺との連携ですぐさま鬼道からボールを奪い取る。

「何だと!？」

「あれを決めるぞ!!豪炎寺!!」

「ああ!!」

素早いパス回しで2人で前線へと上がっていく。

不思議だ。豪炎寺が何処にパスを出すのか、俺は何処にパスを出すのが最適なのか全て分かる。

今ならあの技も最高の威力で出せる。その確信がある。

「来い!!今度こそ点はやらんぞ!!」

源田が吠える。

それを見て豪炎寺とアイコンタクトを交し――

「行くぞ!!修也アア!!」

「ああ!!柊弥ツツ!!」

気付いた時には互いに名前で呼びあっていた。

修也がボールを高く上げたのを見計らい、2人で火炎を纏いながら飛び上がる。

同じ炎を纏い、同じ意思の元1つのボールへ力を合わせる。

これが俺たちの――

「ファイアトルネード……ダブルドライブD D!!!」

2人のファイアトルネードが源田待ち構えるゴールへと降り注ぐ。爆炎は全てを焼き尽くさんと激しく燃え盛る。

「フルパワーシールドオオ!!」

ライトニングブラスターを止めて見せた技で対抗してくる。

強大な衝撃波の壁は爆炎とぶつかり合う。

が、その衝撃波を持ってしても俺達の炎は消せなかった。

『ゴオオオール!!雷門2点目エ!!残り時間僅かで帝国と並んだぞオオ!!!』

「加賀美!!豪炎寺!!」

手を振って喜ぶ守にサムズアップを向ける。
残り時間はあと僅か。もう1点取って勝利を掴む!!
帝国のキックオフ、鬼道達は鬼気迫る勢いで攻めてくる。

「ツインブースト!!」

「熱血パンチ!!」

「ファイアトルネード!!」

「パワーシールド!!」

「二デスゾーンツツ!!」

「ゴッドハンドオオ!!」

「雷龍一閃ツツ!!」

「フルパワーシールドオオ!!」

繰り広げられる必殺技の応酬。試合はアディショナルタイムに突入した。

会場内は最高潮の盛り上がりを見せる。

もはや全員限界だ。

「負ける訳には・・・行かないんだ!!イリユージュヨンボールツツ!!」

マックスとの攻防を必殺技で切り抜ける鬼道。

「佐久間ツツ!!寺門ツツ!!」

「やるんだな・・・鬼道ツツ!!」

誰も3人を止められない。

もう、まともに動けるものはいなかった。

「皇帝ペンギンイイン!!」

「2号オオオオオ!!」

止めなければ、絶対に止めなければ。
度重なるセーブで守も既に腕は限界。帝国最強の威力を誇るこの
シュートはきつと止められないだろう。
なら、俺が止める。

「うオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

佐久間と寺門がボールを蹴り出す前に割って入る。
発生前のシュートを無理やり止める。勿論掛かる負担はとてつも
ない。全身が痛むし、苦しくて仕方ない。

「馬鹿な!?!」

「何が、何がお前をそこまで突き動かすんだ!?!」

何が俺を動かすか? 見て分からないのかよ?

「——俺はただ、サッカーが楽しくて、好きで堪らないだけだアアア
!!!」

咆哮。

それと共に、身体から力が溢れる。何処にこんな力が隠れていたの
かも分からない。

「何だ……一体なんなんだ、その背中から溢れる力は!?!」

背中から何か吹き出しているらしい。

そうか、この感覚……化身に近い。いや、近いが遠い。
化身に限りなく近い、化身を形作る前の影が溢れ出しているのが自
覚できる。

今この一瞬だけでいい、俺に力を貸せ!!

「負けるかよオオオオ!!」

背中の影が全身へと行き渡る。俺の身体を包み込むように展開されたそれは、爆発的なパワーアップをもたらす。

俺がイメージしたのは化身アームド。化身の力をより効率よく扱う為の技術。

当然、俺のこれはまだ完全な化身ではないから、化身アームドとは言えないだろう。

だがそれでも、この場を凌ぐのには十分だ!

「上がれエエ!!守ッッ!!壁山アア!!」

精一杯の咆哮と共にボールを蹴る脚に力を込める。

すると俺の脚から注ぎ込まれたエネルギーと皇帝ペンギン2号のエネルギーがぶつかり合い、爆発を起こす。

俺と佐久間、寺門は互いに吹き飛ばされる。

何としてでも、前へ送るんだ・・・!!

「いつ、けエエエエエエエエ!!」

全力のロングパス。あの力は既に消えていた。

それでも信じてパスを出す。アイツらなら決めてくれると信じて。

「行くぞ!!豪炎寺、壁山!!」

俺のパスを受け取った守がかなりの高さまでボールを蹴りあげる。

飛び上がった壁山を足場に、守と修也はさらに跳躍。ボールの位置まで跳んでみせる。

「はアアアアアア!!」

イナズマ落としての要領で放たれたイナズマ1号。
光り輝きながらボールは雷と共にゴールへ降り注ぐ。

「フルパワーアアシイルドオオ!!!」

源田も負けじと咆哮。

文字通り全力と全力のぶつかり合い。

その勝負を制したのは――

『ゴオオオオル!!加賀美のパスを受けた円堂、豪炎寺、壁山が決めましたアアア!!』

――守達だ!!

『ここで試合終了のホイッスル!!フットボールフロンティア地区大会決勝を制したのは、雷門中だアアアアア!!!』

「しやアアアアアアア!!!」

その場に倒れ込みながらも拳を高く突き上げ、叫ぶ。

叫ばずにはいられない。

勝ったんだ、帝国に!!

観客の雷門中コールは鳴り止まない。

やがて、キャプテンである守に地区大会優勝のトロフィーが手渡される。

俺達、本当に優勝したんだ――!!

第14話 伝説のイレブン今再び

『俺達帝国も、全国大会へ出場する。』

『そつか、前回優勝校の枠があつたな。』

『じゃあまた全国でも戦えるんだな!』

帝国との試合が終わり、グラウンドに残り話をしていた俺と守、鬼道。

前年度の大会優勝校に与えられる全国大会の枠、それを使って帝国も俺達と同じ土俵へ上がってくる。が、俺の記憶が正しければ同じ地区のチームは違うブロックに入れられるはず……

つまり、帝国ともう一度戦うには互いに決勝まで上がる必要がある。

『無敗であることが帝国、そして俺の使命だった……だが、俺達には新たな目標が出来た。』

『目標?』

『雷門中への雪辱は全国大会で果たす……』

『そつか……じゃあ、全国のてっぺんでまた会おう。』

鬼道と交わした握手は、とても力強く、決意を感じさせるものだった。あいつがあそこまで熱い男だったなんて、最初会った時は考えもしなかったな。

「響木監督、替え玉ください。」

「おう、じゃんじゃん食えよ!」

優勝祝い、ということ雷々軒で打ち上げだ。響木監督の好意でなんと金を払わずに。大丈夫だろうか、食べ盛りの中学生数十名が遠慮

せずに食べるとなると赤字待ったナシなのは・・・

まあ、好意には甘えるのが礼儀みたいなところはあるからな、俺も遠慮せずに頂くとしよう。

「しっかし、加賀美も無茶したよなあ・・・帝国の皇帝ペンギン2号を発生前に抑え込むなんて。」

「しかも何かすっごい力を出していたっすよねえ・・・」

「ま、その結果がその脚に巻かれた包帯なんだけどな。」

「ははっ・・・何も言い返せねえや。」

そう、あの時取った行動のツケで右脚を痛めてしまった。そこまで重いわけでもないが、今サッカーやれって言われたら泣くことになるだろう。間違いなく。

ここであの時の事を思い出す。

あの土壇場で俺の中から溢れ出てきた化身に似た力・・・あの時の俺は無我夢中だった。今あの力を出せて言われても出し方が分からない。

きつとあれは化身のその前段階の力なんだろうな。それを無意識の内に身体全体に行き渡らせ、あの時天馬や優一さん、アルファがやって見せた化身アームドを擬似的に再現した・・・はず。

何にせよ、あの力に関しては分からないことばかりだ。使いこなせれば強いんだろうけどな。

「ほら替え玉だ、加賀美。」

「あ、私が受け取りますよ終弥先輩。」

「ありがとう、春奈。」

そうそう、それから鬼道と春奈のこと。

あの時2人は和解し、連絡を取り合うようになったらしい。あの後唐突に春奈から連絡先を聞いた鬼道がそう報告してくれた。

春奈の相談を俺が聞いたということに関しての礼もしてきた。俺

は当然のことしたままでだがな。そして春奈のことをよろしく頼む、とも付け加えてきた。

大切な仲間だしな。勿論これからも気にかけるさ。

「監督！俺餃子もう1皿！」

「私も追加をお願いするわ。」

「悪いなあ、あと1人前しか残ってない。」

「それじゃ、夏未ちゃんどうぞ。」

「・・・夏未ちゃん？」

夏未が鋭い視線を土門に向ける。土門は「やべ、地雷踏んだ。」みたいな表情。

「悪くないわね、その呼び方。」

雰囲気よ変わりように店内が笑いに包まれる。夏未もだいぶ柔らかくなったもんだな。

最初なんて高貴なお嬢様って感じで絶対に馬が合わないと思っていたものだが・・・人生何があるかわからないな。

けれども、理事長の代理である自分への敬意は忘れないように、と夏未が口にする。それを聞いて響木監督が理事長代理としての言葉を促す。

「今やサッカー部は雷門中の名誉を背負っていると言えるわ・・・必ず全国制覇を成し遂げてちょうだい。」

「おう、やってやるぜ!!絶対に全国制覇だ!!」

「おお!!」

熱気が空間を支配する。本当にこの短期間でいいチームになったものだ・・・かけがえのない仲間達だよ、本当に。

「ふう、食ったな・・・」

「ああ。響木監督には感謝しないとな。」

修也と2人で迎えるの車に揺られる。俺はこんな脚だから態々お手伝いさんが迎える車を回してくれたのだ。感謝感謝。

そしてついでだから、と修也を送っていくことになった。

「俺達、本当に優勝したんだよなあ・・・正直、今でも夢なんじゃないかって思う。」

「まあな・・・だが、直に全国で戦うことになるんだ。現状に満足はしていないさ。」

「そうだな。あー、早くサッカーしたいなあ・・・」

「お前はまず、その脚を治すんだな。」

「耳が痛いな。」

談笑を交わしながら車は先へ進んでいく。

「俺、お前らと出会えて良かったよ・・・自分の気持ちに嘘をつかず、今こうしてサッカーが出来て本当に楽しい。」

「俺もだよ。守と出会って、雷門中に来て。みんなと、そして修也と出会って・・・巡り合わせてのはこういうことを言うんだろうな。」

「かもしれないな。・・・全国、必ず勝つぞ。」

「おう、勿論だ。」

修也としては妹さんへの想いもあるだろう。かつて妹さんの事故をキツカケにサッカーから離れたところを、俺と守が引き込んだようなものだからな。

ならせめて妹さんに勝ちを捧げようとしている修也に倣い、俺達も戦うのが筋だろう。

「送ってくれてありがとうございます。……じゃあな、柊弥。」
「ああ。また明日、修也。」

修也を家まで送り届け、再び車に揺られる。

「柊弥様は、良いお友達に恵まれたようですね。」
「ええ。本当に……」

運転してくれているお手伝いさん……峯^{みね}さんに話し掛けられる。
本当に良い友達、仲間に会えたことに感謝しなければな。

「イナズマイレブンと試合イ？」

「ああ！昨日皆が帰った後にイナズマイレブンの人が監督の所に来て
さ！その弾みで雷門中OB……伝説のイナズマイレブンの人達と練習
試合することになったんだ！」

「へえ……いつ？」

「今日だ！」

「……俺、出れないじゃん。」

タイミングが悪すぎるだろ！いや、脚をやったのは自分の自業自得
だから何とも言えないんだけどさあ……だとしても、あのイナズマ
イレブンと試合が出来るつてのに怪我で参加出来ないなんて……不
幸だ。

「ま、まあまあ……見てるだけでも学べること、あるだろう？」
「それはそうだけどさあ……」

見て学ぶだけなのとやって学ぶのとを並行するのでは全然吸収効率が違うんだ。

そんな貴重な機会を・・・俺は・・・はあ。

「というわけで！今日は河川敷で練習試合だ！胸を借りるつもりで行くぞー！」

「おう!!」

「おー・・・」

春奈に宥められながら河川敷へ向かう。ごめんな春奈、怪我人のサポートに加えてこんなメンタルケアまでさせて。

「しよがないですよ、ね？脚が治るまでは無理をせずに、全国大会でまた活躍しましょう！」

「そうだな・・・」

そんなやり取りを交わしながら河川敷へやってくる。既にグラウンドでは老骨の戦士たちが待ち構えていた。

あれがイナズマイレブン：話には聞いていたが、響木監督はキーパーか。そしていつもと違いジャージに身を包んだ鬼瓦刑事・・・審判やってくれるのか。

ユニフォームに身を包んだ皆も既に準備運動に入っている。

俺も出たかったなあ・・・

「いつまで言ってるんですか！ほら、応援しますよ！」

「はい・・・」

春奈に引つ張られながらベンチに移動する。待って春奈、俺怪我人だってこと忘れてない？

これ以上は大人しくしておかないと本当に怒られそうなので素直

にベンチに着く。

・・・よく見ると、町でよく見る人ばかりだな。夏未の執事さんもいるじゃないか。みんな、地元に残っていたわけだ。

40年振りの伝説の復活・・・一体何が飛び出してくるのか楽しみだ。

「それじゃあ、始めるぞ・・・」

開始のホイッスル。

「小僧共よく見ておけ!!これがイナズマイレブンのサッカーだア!!」

11番がキックオフシュート、かと思いきや盛大に空振りその場ですっ転ぶ。

その勢いに全員あんぐりとしている。

「へへっ、参ったなこりゃ。」

ボールを奪い颯爽と駆け上がる雷門。半田が上がってきた修也にパス、イナズマイレブン・・・雷門OB達は誰も反応出来ていない。まあ、普通に考えれば衰えているか。

修也のループシュート、響木監督は余裕と言った表情を浮かべていたが、5番のクリアミスでボールはゴールへ。

「すまん響木、クリアしようとしたんだが・・・」

その後も雷門の圧倒が続く。

やはり暫くサッカーに触れていなかったであろう、目に見えてプレイにキレがない。しかも諦めの雰囲気すら漂わせている。

・・・この40年で、伝説の牙は抜け落ちてしまったのか。言っちゃ悪いが、これでは練習になりはしないな。

「何か、思ってたより・・・」

「ああ、凄くないな。」

少し遠慮がちにそう口にした春奈の言葉を助長する。そう思うのも無理はないだろう。実際に守達もそう思ってた。そう思うのだ。

試合は続く。雷門OBのDFをいとも簡単に潜り抜けた修也はゴール前でヒールパス。それを受け取ったマックスがボールを高くセンタリング。

「ファイアトルネード!!」

これには響木監督も反応出来ず。

猛火のシュートはゴールを揺らす。

「お前達!なんだそのザマは!!」

響木監督が突如OB達に向かって声を荒らげる。

「俺達は伝説のイナズマイレブンなんだ、そしてここにその伝説を夢に描いた子供たちがいる!俺達にはその思いを背負う責任があるんだ、その思いに答えてやろうじゃないか・・・本当のイナズマイレブンとして!」

OB達の目に炎が点った気がした。

先程とは違う、闘気に満ち溢れている。

「証明しようぜ、伝説は真実だと!!」

攻め上がる雷門OB。そのプレイのキレは先程とは段違いだ。追いかけるばかりだったボールに追いつき、自分達で主導権を握り始め

た。これが、伝説のイナズマイレブン……!

「クロスドライブ!!」

「熱血パンチ!!」

十字状のエネルギーをボールと共に放つ。

それを迎え撃った守は、簡単にゴールを許してしまった。

「円堂君が、あんな簡単に……!?!」

「……あれが伝説のイナズマイレブンの、真の姿……」

誰かがベンチでそう呟いた。

そう、伝説は今ここに甦った。

取られた分は取り返す。そう言わんばかりに染岡が放ったドラゴンクラッシュ。

「見せてやる……これが元祖ゴッドハンドだ!!」

対する響木監督は、拳に力を集中させ、神の手を顕現させる。あれが、元祖元来ゴッドハンド……!

襲い来るドラゴンを完全に押さえ込んでみせた。

「さあ浮島、見せてやれ!」

「備流田ア!」

「おオ!!」

2人同時に走り込み、ボールを高く蹴りあげる。

最高点で2人がボールを蹴り出すと、ボールは花開いたように炎に包み込まれ、ゴールへと襲いかかる。さながら炎の鳥のように。

守は反応出来ずゴールを許す。

その後、タイムを取った守がベンチでお爺さんのノートを開く。

サッカーにタイムは無いんだがなあ・・・

曰く、あの技の名前は「炎の風見鶏」

実物が目の前にある、これを機にものにしてしまおうと意気込む。撃つのは風とくれば風丸、炎とくれば修也だろう。

タイムが終わり、早速試す風丸と修也。が、なかなか成功しない。それを見兼ねたOBがもう一度撃ち込む。守はゴツドハンドで応戦するも、再びゴールを許す。

守のゴツドハンドを打ち破るなんて・・・流石だな。

そしてそれを横から見ていた影野が成功しない原因を2人に伝える。それを受けて2人はゴールへ攻め上がり――

「炎の風見鶏!!」

見事、炎の風見鶏を再現してみせる。

得た力を試すように、その後も点数を奪い取り、この練習試合は雷門の勝ちで終わった。

「さあ、次はいよいよ全国大会だぞ!!」

守が全員にそう呼びかける。俺も全国に向け、早く足を治さなければな。

イナズマイレブンの試合から数日が経過。俺の脚の包帯も取れ、本格的に全国へ向けた調整に入る。何とか間に合ったな。

グラウンドで練習していると、突如黒い車が。あれは・・・夏未が乗ってた車、けれど夏未はここにいない。

ということとは？

「あの人は・・・理事長。」

「やあ、精が出るね。」

この前のイナズマイレブンの練習試合の時もさりげなく見に来ていたよな。

確か・・・理事長はフットボールフロンティアの実行委員長でもあるはず。

こちらにやってきた理事長の話聞く。全国大会出場へのエールを送ってくれた。それを終えてさあ練習再開というところで、もう一つ用事があるのだと言う。

それは新しい部室について。

これから部員が増えることを見越すと、昔のままのあの狭い部室では問題あるだろうとの気遣いだ。

響木監督が部室にあった落書きを見せてくれる。こんな落書きがあつたの気づかなかつたな。

「サッカー部復活のお祝いと、全国大会出場のご褒美だと思ってくれ。どうかね?」

「俺、このままでいい。」

「俺も同意見だな。」

盛り上がる1年達をよそにそう呟いたのは守。俺もこのままでいいな、と思えば乗する。

「この部室は、俺たちが試合できなかつたことの頃も、昔のイナズマイレブンのことも知っている。それにこうして仲間も増えた。この部室は、雷門イレブンの歴史そのものなんだ!俺達の大事な仲間なんだよー!」

良いこと言うなあ・・・さすが守。

理事長とのやり取りを終え、グラウンドへ向かう。

校舎の中からは、生徒達の声援が投げ掛けられる。こんな応援されることになるなんてな。

その時、風丸が陸上部の後輩に声を掛けられどこかへ行ってしまう。積もる話もあるだろうし、まあいいか。

そのまま俺達は練習に入る。

さて、全国大会に向けて俺もさらに磨かなければな。

今の課題はドリブル技、デイフェンス技の開発だ。全国でゴールを決めるためには、ボールをキープしたまま上がっていく技術、ボールを奪う技術も必要になってくるだろう。

さあ、やるぞ！

「すまん！遅くなった！」

暫くして風丸が戻ってくる。その表情はどこか暗い。

これは何かあったな。

「炎の風見鶏!!」

ゴールへ迫る炎の風見鶏。が、そのコースは途中で逸れ、炎の鶏も姿を消してしまう。先程までは完璧だったんだがな・・・？

目に見えて何か悩んでいるな。陸上部に顔を出してからこうなつた・・・さしずめ、陸上部に戻ってきてくれ、とでも言われたか？

見兼ねた修也が声を掛ける。

試合までにその迷いを晴らしてくれればいいんだが。

翌日、明日に全国大会を控えて最終調整だ。

昨日は不安定で終わった炎の風見鶏も、今は昨日以上の精度、威力でゴールに突き刺さっている。

吹っ切れたか、風丸。

よし、俺も負けてられないな。

「——えっ!？」

「ん?」

ベンチから声が上がる。その声の正体は携帯を片手にした夏未。

「どうした?」

「お父様が・・・事故に遭ったって。」

何やら、全国大会の会場の下見に行った帰りに事故にあつたらしい。理事長は意識不明の重体。

病院へ駆け出した夏未を守と秋が追いかけて行った。

「理事長、大丈夫かな・・・」

「心配っス・・・」

思わずグラウンドは暗い雰囲気に含まれる。

だがそれじゃ、何も始まらないだろう。

「皆。俺達に出来ることは1つだ。理事長の想いを背負って全国大会で勝つ。まずは1回戦突破だ。・・・あれだけ俺たちを応援してくれた理事長の想いに答えることが、何よりの見舞いになると信じようぜ。」

「・・・ああ、加賀美の言う通りだ!絶対勝つぞ!」

風丸が後に続く。

それを聞いて皆も意識を切り替える。全国大会では落ち込むばかりで勝てるはずがない。無理にでもプラスに切り替えて行かねばな。

第15話 全国初舞台は忍者と共に

『全国中学サッカーファンの皆様、ついにこの日を迎えました!!』

フロンティアスタジアム。フットボールフロンティア全国大会の会場となる場所だ。

スタジアム内は今まで味わったことのないような熱気に包まれ、声援が肌を打ちつけてくる。小学生の頃の全国大会とは比にならないな。

俺達雷門中が何故ここにいるか・・・それは当然、今から行われる開会式に参加するため。試合を勝ち進んだ代表として晴れ舞台に立つためだ。

「とうとう来たぞ・・・色々あったけど、ここまで来たら思い切り暴れてやろうぜ!!壁山!トイレは大丈夫か!？」

「さつき行ってきたっス!!」

「準備が良くてよろしい!」

『続いて関東ブロック代表、雷門中!!』

「よし、行ってこい!!」

プラカードを持った先導の女性に連れられ、表舞台へと脚を踏み入れる。その瞬間、弾丸のように歓声が浴びせられる。最高だ、この空気・・・!

「ついに来たな、終弥!」

「ああ・・・やってやろうぜ、守!」

『関東ブロックにて惜しくも雷門中に敗れた帝国学園!特別枠による参加にて王者復活を狙います!!』

俺達に続き、帝国が入場してくる。勿論先頭は鬼道。

俺達の横に並び、鬼道達と隣り合わせになる。守は鬼道に話し掛け

だが、俺は目線だけ交わす。

また帝国と戦える時が来るのだと思うと、今から胸が昂ってくるな。

『そして残る最後の1校、推薦招待校として世宇子中の参加が認められております!』

「世宇子……?」

「聞いたことない名だな。」

初めて聞いたその学校の選手達をこの目で確認すべく、入退場口へと目線を向ける。

が、出てきたのは先導の人のみ。どうなってる?・

『世宇子中は本日調整の為、開会式には欠場とのことですよ!以上の強豪達により、中学サッカー日本一が決められるのです!!』

調整中、ねえ。大層なことだ。

俺の記憶が正しければ、初戦は前回優勝校特別枠と推薦招待校……つまり、世宇子中とやるのは帝国だ。

まあ、帝国が勝つだろうし世宇子中とやらをお目にかかる機会は無いただろうな。少し残念だが。

さて、もうそろそろ開会式も終わりだな。そうしたら早速――

『以上で開会式は終了となります!第1回戦最初の試合、雷門中と戦国伊賀島中の試合は明日、この会場にて行われます!!』

……あれ??

「皆も知っての通り、明日の対戦校は戦国伊賀島だ……初陣を飾だが、気張っていけよ！」

「「はーん！」」

開会式終了後、学校に戻ってきて最終調整、その後部室にて明日の確認をする。

・・・俺、今日試合する気満々だったんだけどな。

翌日、再びフロンティアスタジアムへとやってくる。試合前の練習の時間が俺達に回ってきたので、グラウンドを広々と使って体を温める。

豪炎寺と風丸の炎の風見鶏もいい調子、そして俺の新オフエンス、デイフェンス技も——

「うわっ!!加賀美さん早すぎっス!!」

「だろ?だけど壁山、いいデイフェンスだったじゃないか。本番もその調子で頼むぞ。」

——いい仕上がりだ。

これなら実践でも全然使えるな。

突如、俺達が練習するフィールドに侵入者が。

「誰だお前!」

「お前に名乗る名などない。」

突如豪炎寺のボールを奪い、俺達の前に颯爽と着地する。

守が誰だか訊ねるも忍者みたいなノリで返される。

・・・いや、実際忍者か。こいつは――

「――戦国伊賀島の選手だな。」

「その通り、霧隠才次と言う。」

「・・・名乗るんだな、結局。」

そう指摘すると名を名乗る。さつき名乗る名は無いつて言ったのはどこのどいつだよ？

ボールをこつちに蹴り渡してくると同時に、こちらを指差しながら勝負しろ、と言ってくる。

「噂は聞いている。雷の如き神速のストライカーだな・・・本当はそつちの豪炎寺修也でも良いんだが、速さと聞いたら黙ってはいられない。さあ、勝負だ！」

「・・・断る。練習の邪魔だからさっさと失せろ。」

苛立ちを口にする。

実際そうだ。こいつらのアップは俺達の前に済んでいるが俺達は今現在進行形なんだ。

その邪魔をされては困る。

「何・・・逃げるのか!?腰抜けめ!!」

「好きに言え。俺とお前のどちらが優れているか、試合で分かるだろう。」

「加賀美・・・ここは俺が。」

後ろから風丸が肩に手を置いてそう宣言する。

確かに、俺にも引けを取らない、寧ろ上回るレベルの俊足だがこんな喧嘩を買う必要は無いだろう。

・・・面倒だし。

が、結局風丸が勝負することになる。

フィールドの反対側までドリブルで行って先に戻ってきた方が勝ち、というシンプルなルールだ。

いざ始まってみると2人の速さはほぼ均等。なかなかいい勝負をしている。

2人がゴール間際、別の誰かにボールを奪い取られる。

別の戦国伊賀島の選手か。

「霧隠の無礼を謝罪する……」

頭を下げるお仲間。良かった、ネジが外れてるのは霧隠だけか。

「これにて御免。」

と言って姿を一瞬で消す。

マジモンのジャパニーズ忍者かよ？

『さあ間もなく、フットボールフロンティア全国大会1回戦、雷門中対戦国伊賀島との試合が始まろうとしております!!』

そんな一悶着を経て、試合が始まろうとしている。

今日のスタメンは

FW 俺、修也、染岡

MF 半田、マックス、少林

DF 風丸、壁山、栗松、土門

GK 守

となっている。

今日の鍵を握るのは炎の風見鶏。俺はそのサポートに回るとしよう。

風丸は今日の試合に陸上部の連中を招待し、自分のプレイを見てもらうようだ。自分が続ける、サッカーを見せるために。

そのためにも、風丸に花を持たせるとしようか。

「さあ、初陣だ!!」

「「おう!!」」

修也のキックオフからスタート。ボールは染岡に渡り、染岡はサイドから上がってきた半田へパス。

が、そこに霧隠が割り込みボールを奪う。

先程見せた敏捷性で雷門ゴールへ切り込んでいく。確かに早いな。

ボールを奪いにかかる風丸。が、風丸が捉えたのは残像だった。

「これが伊賀島流忍法、残像の術!!」

あつという間にゴール前まで詰めてきた霧隠。そのままシュートを放つが守は正面から受け止める。

「何だ、今のは・・・」

「円堂！こつちだ！」

素早くパスを回し、今度はこちらが伊賀島陣営へ切り込む。

「伊賀島流蹴球戦術、鶴翼の陣!!」

「承知、疾風怒濤!!」

ボールを運ぶ半田とそれに追従する修也を中央へ誘い込む。

そして待ち構える2人の大柄なDF。

「伊賀島流忍法、四股踏み!!」

2人が地面を踏み鳴らすと、衝撃波としてそれが半田と修也に襲いかかる。

打ち損じたボールは相手キーパーの元へ転がり、それをキャッチ。意表を突かれた俺達だったが、次第にそのプレイに順応し始める。これ以上奴らに手綱は握らせない。

マックスが奪ったボールを俺が受け取り、前線に回す。今はまだ新必殺の出番はないな。

ボールを受け取った染岡。その隣には修也。

「決める!!」

「おう!ドラゴン・・・」

「トルネードツツ!!」

全国の場合に紅龍が吠える。

相手ゴールへ襲いかかるドラゴントルネード。さあ、どう出る？

「伊賀島流忍法・・・つむじの術!!」

キーパーが二対のつむじ風を起こす。

ぶつかり合った2つのつむじ風はより強大な風となり、紅龍を内に取り込む。

暴風の前に為す術なく、その勢いは失われてしまった。

ボールは再び相手へ。

「伊賀島流忍法、分身フェイント!」

「残像の術!」

「伊賀島流忍法、蜘蛛の糸!」

連中のトリツキーな必殺技の前に中々こちらは攻めきれない。

正確には、攻めてこそいるがこちらが翻弄されている。

この状況、先に点をもぎ取ることが重要だな・・・

「修也！風丸と炎の風見鶏を狙え！」

「ああー！」

それを見てか、風丸も前線へ上がってくる。この状況を打破するには2人に決めてもらう他ない。

強くなったドラゴントルネードを止めたあのキーパーには俺のシュートが通じるかは分からない。今回の試合はシュート以外の面に重きを置いたからな。

マックスからボールを受け取った風丸が上がっていく。立ち塞がる相手を抜いたと思いきや。

「伊賀島流忍法、影縫い!!」

足元から伸びた影にボールを奪い取られる。

すぐさま攻撃に転じる伊賀島。

「伊賀島流忍法、土だるま!!」

霧隠が放ったシュートは表面に土を纏い、巨大な土の塊に変貌を遂げる。

ゴール目前まで迫ったタイミングでその土の塊を叩き割ってボールが姿を現す。突然の事に守は反応が遅れる。

「熱血パンチ!!」

反応が遅れてしまった、そんな時に役に立つのがこの瞬発力に長けた熱血パンチ。

ボールに叩き込まれた拳。

が、ボールの勢いには勝てず、弾かれたのは拳。

そのまま倒れ込む守、まずいな・・・あの転び方は手を痛めたかも

しれない。

『ゴール！先取点は戦国伊賀島だ!!』

さて・・・先取点を奪われ、こちらは守が負傷の可能性。加えて奴らのペースにまだ対応しきれしていないときた。

こちらのキックオフから試合再開。その直後ボールを奪われ、再び攻め込まれる。

守に無理はさせられないな・・・よし。

すぐさま後陣へ下がる。あいつらはテクニクだけでなくスピードにも長けている。あれを上回れるのは恐らく俺と風丸のみ。だが風丸は反応しきれしていない。なら、俺がやるしかないだろう。

「分身シュート！」

選手自身だけでなく、ボールまで分身する。

それぞれの分身がそれぞれのボールを撃ち込み、途中で合わさると威力は倍増。守へと襲い掛かる。

その間に割って入る。

「させるかツツ!!」

「終弥!？」

暫しの拮抗の後、打ち勝ったのは俺のパワー。

ボールを上弾いたと同時に前半終了のホイッスルが鳴る。

「終弥、脚が治った直後なんだからあまり無茶するなよ！」

「お前が言えることか？手、見せてみる。」

ベンチに戻り、半ば無理やり守のグローブを剥ぎ取る。

そこに晒されたのは、真っ赤に腫れ上がった手。やはりか。

すぐさま春奈救急箱を持ってきて秋が応急手当を行う。このチームにキーパーは守1人。続投するしかない。

「よし、全力で円堂をカバーするぞ!!」

「分かってるでやんす!」

「おうよ、絶対ペナルティエリアに入れさせないぜ!」

意気込むDF陣。頑張ってもらおうしかないな。

さて、問題は攻めだ。

「後半、風丸と修也は積極的に炎の風見鶏を狙ってくれ。風丸が抜ける穴は何か他でカバーしよう。俺も極力つなぎに徹する・・・行くぞ!!」

「「おう!!」」

後半再開。

初手から仕掛けてくる伊賀島。

そうは問屋が・・・俺が卸さないがな!

「疾風迅雷・塞!!」

雷を纏いながら伊賀島の選手の行く手を阻む。すぐさまパスを出そうとするがそのパスコースに先回り。その次のパスコースにも先回り。必殺技を出そうとしたその一瞬の隙に漬け込み、ボールを奪い去る。

「ナイスだ加賀美!!」

「おう! さあ、攻めるぞ!!」

後ろに目線をやり、風丸が上がるのを確認する。

風丸が前に上がりきつてない今、前にボールを運んだところで奪わ

れるのが関の山。ならばここはもう1つ手の内を明かさず、パスを回すのが懸命だろう。

マックスにパスを回す。すると、すぐさまボールを奪われてしまった。仕方ない、相手が強いだけだ。それを見た風丸は再び後ろに。

「伊賀島流蹴球戦術、偃月の陣!!」

陣形を組み、砂塵を巻き上げながら攻め上がってくる伊賀島。クソ、あれでは手出し出来ない!

次々と吹き飛ばされるDF陣。俺もカバーに入らねば。

陣形を飛び出し、ゴール前で睨む霧隠。

風丸がボールを奪いに行くが、残像で躲されてしまった。

まずい、間に合うか?

・・・いや、大丈夫だ。ゴール前には・・・壁山がいる!

「う、うおおおおお!!」

霧隠のシュートを身体を張って防いだ壁山。

今、巨大な壁がそびえ立っていたような・・・もしや、必殺技か!だが、弾かれたボールは再び霧隠へ。

「土だるま!!」

再び放たれた土の塊。

予測できないタイミングで飛び出したボールを風丸と壁山は見逃してしまう。

「ゴツドハンド!!」

ゴツドハンドで応戦する守。が、その顔は苦痛に歪んでいる。

徐々に、徐々に押されていき、やがてゴツドハンドは破られる。

「させるか!!」

ゴールへ突き刺さるその瞬間、風丸がカットする。

ゴッドハンドで勢いが弱まったところを狙って……ナイスだ風丸

!

「風丸上がれ!俺がボールを運ぶ!」

「おう!任せた!」

風丸からボールを受け取り、風丸を先行させ俺も上がっていく。

左からのスライディング……飛んで躲す。

右からのタツクル……ステップで躲す。

左右と上からの同時プレス……使うか、あれを!

「疾風迅雷しつぷうじんらい・巡めぐり!!」

再び身体に雷を纏い、縦横無尽に駆け巡る。

雷の如き速さで、雷の如き軌道で!

抜き去った先には豪炎寺と風丸。

「行けツツ!!」

「炎の……風見鶏イイ!!」

漸く放たれた炎の風見鶏。

炎の鳥と化したボールは一切の抵抗を許さず相手ゴールへと突き刺さる。

『ゴール!!豪炎寺と風丸が放つ必殺シュートが炸裂!!雷門中同点だ!!』

同点からキックオフ。
再び点をもぎ取るべく駆け上がる風丸。それを追いかける霧隠。

「このまま終われるか!!」

「ああ、勝負だ!!」

端の方まで戦いを繰り広げる風丸と霧隠。

サッカーはチームプレイと霧隠に告げる風丸。鮮やかに霧隠を抜いてパスを出した。

そのパスが向かうのは・・・俺の脚元。

「轟一閃・・・改!!」

度重なる激闘、特訓を経て轟一閃は次のステージへと辿り着いた。以前とは比べ物にならない程の威力、速さで相手ゴールへと轟く。

「うわああああ!!?!」

相手キーパーごとゴールへ突き刺さる。

2-1・・・逆転だ!

そして俺の得点を待っていたかのように試合終了・・・俺たちの勝ちだ!

「ナイスシュート、柊弥。」

「ありがとう、修也。」

ハイタッチを交わす。

今回のMVPと言っても差し支えないであろう風丸の方を見ると、霧隠と熱い握手を交わしていた。

これなら、陸上部のあの後輩も風丸がサッカーを続けることを納得するだろうな。

何はともあれ、1回戦突破だ。
帝国との決勝に向けて、もつと気合い入れていくぞ！

第16話 まさかの報せは一度ならず

「あー・・・疲れた。」

戦国伊賀島との1回戦を勝ち抜き、次に向けさらに特訓に励んでいる。

今はイナビカリ修練場にて、超強度のトレーニングに励んでいる。本来キーパーが特訓に使うボールガトリングと、そうではない存在を抹消されそうなレーザーガン。ボールは弾き、レーザーは避けることを並行して行うことで反応、速度、力の3つの面をすべて鍛えることが出来る。

ちなみに言うとかかなりハードだ。少しでも気が緩んだら超高熱のレーザー、超高速のボールが襲いかかってくるからな。

練習時間常に切らさないような極限の集中力も必要になるわけだ。

「そんなわけないだろ!!」

突如、離れたところにいる守の大声が響いてくる。

ここまで聞こえてくるということはかなりの大声なのだろう、何かあったのか？

そう思い、使った器具の片付けを手早く済ませ声の方向へと足を運ぶ。

そこには豪炎寺に染岡、春奈の姿が。

「守の声がしたと思ったんだが・・・本人はいないようだな。」

「柊弥先輩・・・キャプテンは今飛び出して行きました。恐らく、帝国のお兄ちゃんの所へ。」

「鬼道の所に？それまた急だな。何かあったのか？」

「はい、実は——」

春奈の口から語られたのは、”衝撃”の一言に尽きる。

あの帝国が、0―10の大差で敗北したと言うのだ。無名の相手・・・世宇子中に。

それは再戦の約束が果たされることは無くなったことを意味していた。

「・・・帝国が、ねえ。」

「はい・・・私も信じられなくて。」

「それでいても立つてもいられなくなつて飛び出してつたわけだ。守は。」

守らしいと言えば守らしいが・・・下手に鬼道を刺激しないように祈るばかり。

一瞬俺も後を追おうかと考えたがやめた。今は部活中だ。他人を気にかけるよりも、自分達のことを優先すべきだ。

「・・・俺は練習を続ける。春奈、サポート頼めるか？」

「あ、はい。分かりました！」

兄の敗走に何も感じない訳では無いだろう。

されど、あくまで自分のチームとは別のチームの話、それとこれとは別であると割り切っている・・・と言ったところか。

何はともあれ、俺も近いうちに鬼道と接触は図りたいところだ。世宇子中の情報も聞いておきたいしな。そうだ、後で試合映像を見せてもらおう。

「凄いですね、終弥先輩。こんなメニューをこなすなんて。」

「まあな。自慢じゃないけど、これに耐えられるのは雷門に2人いるかないか・・・位だと思う。」

「実際、その通りだと思いますよ。やっぱり柊弥先輩は凄いです！」
「よせよせ、そんな褒めたら調子に乗る。」

もう一度同じメニューこなす。

さすがにフルでやったら死ぬので、時間短縮版だ。機械を止めるのは自分では無理なため春奈を呼んだわけだ。

全身の筋肉が軋んでいるのを感じる。泥臭いことを言うが、この痛みが自分を強くすると考えればなんてことは無いな。

「次の対戦校は・・・まだ決まってないんだっけか。」

「いえ、試合自体はもう終わっているんですけどまだ試合結果がアツプされていませんよ。明日には分かると思います！」

「そうか、引き続きよろしく頼むな。」

「はい！」

2人で器具の片付けを終え、イナビカリ修練場を後にしようと出口へ向かう。すると、後ろから修也がやってくる。

「どうやら修也も追加でメニューをこなしていたらしい。」

「・・・お邪魔だったか？」

「何が？」

ふと修也がそう呟く。が、何のことを言っているのか微塵も理解出来ない。

春奈は何か分かっているようだが・・・俺には教えてくれなかった。

何だ疎外感・・・泣きそう。

「皆！全国大会2回戦の相手は千羽山中に決まりだ！」

「千羽山中は山々に囲まれ、大自然に鍛えられた選手達がいまいます。特筆すべきは無限の壁と呼ばれる鉄壁のディフェンスです。未だかつて得点を許していません。」

今に至るまで無失点でことか・・・これは破るのに苦勞しそうだ。春奈曰く、攻撃はそれほどだがそのディフェンスを持ってしてここまで上がってきたそうなの。

無限の壁かあ・・・1人で打ち破るのは非現実的か。となると、連携重視で行った方が良さそうだ。

相手が鉄壁の守りならこちらはダイヤモンドの攻めと守が意気込む。うん、分からん。

いや、言わんとしてることは分かるが分からない。

「さあ、練習開始だ!!」

グラウンドに出て練習開始。

早速パス回し、連携技など様々な練習に取り組むが・・・何かこう、噛み合わないのだ。

ベストだと思つてパスを出しても相手にとってはベストではない。その逆も然り。相手がベストだと思つて出したパスは俺にとってベストではない。

なんと言うか・・・基盤となるものがズレているような。

しかも、連携面だけではなく個人技の面でもそれが見られる。シュートひとつとっても、タイミングが会わずに不発で終わったりが見られる。はて、何が原因だ・・・？

「柊弥、連携シュートの練習に入ろう。」

「ああ。」

修也にそう声をかけられ、染岡も交えて必殺技の練習を始める。

ドラゴントルネード、雷龍一閃、雷龍一閃・焰、ファイアトルネードDD。

一通り試して見たが・・・やはり噛み合わない。息が合わずに途中でボールは勢いを失う。

だが、シュートの起点となる最初の人の力は明らかに上昇しているのだ。それに対して後続が上手く合わせられていない、と言ったところ。

同時に打ち込むファイアトルネードDDに至っては、俺と修也のキック力は目に見えて上昇しているのに関わらず、ボールを打ち上げの高さ、飛び上がる高さ、ボールを捕える高さ、果てにはタイミングがズレてしまい、かなり強力なシュートだがファイアトルネードDDでは無い、と言った仕上がりになってしまった。

と、ここでようやく気付く。

「・・・個人的な力が短期間で格段に上昇したのが原因だな。」

「と言うと？」

「自分と相手の身体能力の向上の差が掴めていないんだ。ドリブルとか単独のシュートはともかく、単純なパスだけでも相手のスピードがイメージ通りのスピードと違ってイマイチ正確さにかけるし、連携技なんて全く合わない。」

「そうか、そういうことか・・・となると、まずいな。」

「ああ・・・連携どころか、自分の技すらままならないとなると、千羽山の守りを砕くのは難しい。」

全体的な見直しが必要だな。

これは俺達3人の間での共有に留めておこう。下手に不安を煽る必要は無いからな。

「はい、ちょっと休憩！」

「スポーツドリンクで水分補給してくださいね！」

「レモンのはちみつ漬けもあるわよ！」

選手の連携はイマイチでもマネージャーの連携は完璧だなおい。見習わなければ。

それにしても、レモンのはちみつ漬けなんていつの間に用意したんだろうか。有難い限りだ。

マネージャーの熱意に俺達も応えなければなあ……
再び練習開始。

それぞれがそれぞれの課題に取り組む中、ゴール前で修也と秋、土門が何やら話をしている。

なにやら聞きなれない必殺技の名前が出てきたが、それに混ざらず俺は俺で練習に取り組む。

個人間の蟠りを無くすためには、まず自分を正確に把握する必要がある。

そのためにはひたすらに反復練習だ。以前の自分と違うところを徹底的に炙り出す！

「……あれ、柊弥先輩。少しいいですか？」

「ん？ああ。」

メモを取っていてくれた春奈が抜け出して校門を跨ぐ。

……誰か見ていたのか？

春奈が飛び出すような人間……鬼道か。俺も行ってみよう。あいつ俺に連絡返してくれないし。

「よ、鬼道。」

「加賀美……」

「全く、連絡寄越さないとと思ったらコソコソ顔出しやがって。」
「今の俺には、お前らは眩しすぎるんだよ。」

完全にブルーになってるなこれ。

あの鬼道がここまで落ち込むとは誰が想像出来ただろうか。

昨日自分達のこと集中しよう、だなんて決め込んだが・・・少しお節介を焼くでしょうか。

「・・・俺達の練習が終わったら、河川敷で少し話そうぜ。嫌なら来なくてもいい。」

「河川敷で・・・」

「ああ。俺は待つてるぜ・・・じゃ。」

と言って俺は練習に戻る。

思いついたことがある。これは響木監督にも相談しないとな。

夕暮れ時、河川敷の傾斜に腰かけて鬼道と話をする。春奈もいるが。

「帝国のことは・・・残念だった。」

「・・・残念なんてもんじゃない。俺の目の前で仲間があんなことに・・・こんな悔しいことがあるか。」

そう言つて拳を振るわせる鬼道。案外、人間らしい面も持ち合わせているんだな。

これなら、提案する余地がありそうだ。

「・・・よし、少し動こうぜ。その悔しさ俺にぶつけてみる。」

「・・・ああ。」

グラウンドに降りる時、ふと横目に修也の姿を捉えた。何だ、来たのか。

混ざるか？とアイコンタクトをしてみたが首を横に振った。俺に任せるってことだろう。

鬼道は上着を脱ぎ、動きやすい格好に。

それを見計らってボールを蹴る・・・強めに。

そのボールを鬼道は打ち返す。それをまた俺は蹴り返す。

「悔しいかよ、鬼道!!」

「悔しいさ!!俺は、世宇子中を倒したいッ!!」

「だったらやってみろよッッ!!」

「無理だッッッ!!帝国は・・・既にフットボールフロンティアから敗退しているんだ・・・!」

そう力なく呟く鬼道。

夕陽をバックに、悲壮感を漂わせていた。

違うぞ、鬼道・・・お前は、こんな所で終わる男じゃないはずだろ。

「自分から負けを認めるな・・・もう一度、這い上がってみせろオオ!!」

轟一閃を放つ。手を抜くわけでもなく、全身全霊で。

放たれた閃きは鬼道の横を一瞬で過ぎ去り、傾斜に叩きつけられる。叩きつけられたボールはクレーターのように穴を作り、ボールは破裂する。

「・・・1つ方法がある。お前も、守に背中を預けてみる気は無いか？」

「円堂に・・・?どういうことだ。」

「大会規約にこうあった・・・試合前に転入手続きを済ませておけば、チーム間の移籍を認めると。そしてこの話は俺達の監督には通してある・・・」

「それは、つまり。」

「ああ。雷門に來い、鬼道。帝国の無念・・・俺達と晴らしてみろ。」

鬼道に手を差し出す。

それを見て、天才ゲームメイカーは――

「……よろしく頼む。」

「歓迎する、鬼道。」

――差し出された手を取った。

翌日、フロンティアスタジアム。

千羽山との試合当日だ。昨日鬼道と話す前、今一度連携の見直しをしたが……やはり噛み合わない。

その歯車を今からやってくる天才ならば噛み合わせてくれるはず。そんな二重の期待をしつつベンチに腰かけている。

「監督、いい加減にしてください！もう全員揃っているじゃないですか!!」

「そうですよ、誰を待っているって言うんです!？」

「いいや、まだだ……まだ来る。」

「そうだ。だから待て。」

「加賀美まで……このままじゃ、試合放棄で不戦敗になるんだぞ!？」

不戦敗になるまでの時間を審判が刻み始めたその瞬間だった。

「……来たか。」

思わず口を歪ませる。

響木監督、修也も笑みを浮かべる。

全員が大きくなり始めた足音の方、入退場口の方へ向かう。

「「ええええええええええええ!」」

「よっ、鬼道。」

「・・・ふん。」

雷門のユニフォームに身を包み、マントをたなびかせた知将がそこにはいた。

予想だにしなかった登場に全員驚きの声を響かせる。雷門だけでなく、会場にいた全員。

「さて、スタメンを発表する。」

FW・・・俺、修也、染岡

MF・・・半田、鬼道、松野

DF・・・風丸、壁山、土門、栗松。

GK・・・守

鬼道の参戦で穴戸がベンチに下げられたことに、半田の表情が険しくなったのを俺は見逃さなかった。

「半田・・・気持ちは分かるが、ここは鬼道を信じる俺を信じると思っ
て分かってくれないか?・・・あいつなら、俺達を勝ちに導いてくれ
る。」

「加賀美・・・分かったよ。お前がそう言うなら、俺も信じるよ。」

話せば分かってくれた。意識の面でも蟠りがあつてはいけな
いかな。

さあ、千羽山の鉄壁の守り・・・俺達が打ち破ってやるよ。

第17話 壁破るはイナズマ魂

『鬼道を加えた雷門オフENSE陣、千羽山の鉄壁の守りを打ち崩すことはできるか!?!』

「鬼道。」

「む?」

ホイッスル前、全員がポジションに着き始める。俺はその前に鬼道の元へ駆け寄り声を掛ける。

「頼りにしてるぜ。」

「ふっ……任せろ。」

拳を互いに突き合わせ、自分のポジションへと着く。

さて、鉄壁の守りを誇る千羽山中……俺達の”ダイヤモンドの攻め”で打ち砕いてやるよ。

『雷門ボールで試合開始!!』

「攻めてけ攻めてけ!!」

ホイッスルと共に豪炎寺がバックパス。そのボールを受け取ったのは俺。

後ろからの守の声に応じ、FW陣総出で攻め上がる。ハンドサインで染岡、修也の2人は最前線まで上がらせ、俺がボールを運ぶ。

「行かせないッペー!」

「止めてみる!」

立ち塞がる相手7番。1人で俺を抑えきれると思ったら大間違いだ。

すぐさまヒールでボールに触り、ボールの後退と共に身を引く。7

番との距離が空いた所で思い切り左サイドに逸れて駆け上がる。

7番は追いついて来ない。身体能力が大きく向上したのを益々実感する。

「染岡！」

「ぐツ!？」

俺が出したパスは染岡を大きく超えてしまった。強かったか・・・やはり、個人間のこのズレを修正しなければ、この試合は勝てない。そしてその役を担うのは鬼道だ。頼むぞ・・・

染岡が零したボールは相手に奪われる。

「すまねえ加賀美！取り損ねた！」

「いや、俺が強すぎた！すまん！」

俺のミスだ。染岡が謝ることじゃない。

こちらに向かってくる相手。ミスは働いて返す。ボールを奪い取るため距離を詰めていく。が、パスを回され回避された。

そのまま上がっていく千羽山。風丸がそれカットし、栗松にパスを出すも栗松を大きく超えてラインを超える。

相手のスローインからのボールを土門がすぐさま奪い、マックスにパス。しかし強すぎたそのパスはマックスを大きく超えていく。

それを何とか取った半田が修也にパスを出すも繋がらず。

『どうした雷門！パスが回らない！その隙を突いて千羽山カウンターだ！』

「任せろ!!」

「モグラフィエント!!」

迫る風丸に対しボールを脚で挟み大きく跳躍。着地際ボールに体重を乗せて地面に潜り込ませた。

そのボールは風丸の背後で顔を出し、それに気を取られた風丸は相手の攻めを許してしまう。

そのままシュートしたが、守は難なくキャッチ。

ボールを受け取り今度はこちらが攻め上がるが、全然パスは繋がらない。

現在前半8分。・・・まだだな。もう少しだ。

取りこぼしたボールは相手8番から坊主頭のキャプテンへ。

相手キャプテンは独特な走法でこちらゴールに攻め上がる。土門のキラースライドも見事に躲し、ボールはそのままゴールへ。

「ザ・ウォール!!」

壁山が止めに入る。

が、大きくボールは弾かれ後陣へ。壁山が栗松にカットするよう声をかけるが栗松は反応できない。

そのままボールは相手FWへ。

「シャインドライブ!!」

ボールに鋭く蹴り込んだ瞬間、辺りが眩い光に包まれる。

それに守は目が眩み、無抵抗でゴールを許す。

あの必殺技・・・厄介だな。

前半10分・・・よし、頼むぞ鬼道。

「栗松、お前はいつもより二歩後ろを守れ。そして松野、豪炎寺にパスを出す時は三歩、染岡は二歩半、加賀美には四歩だ。」

鬼道が各自に声をかけ始める。始まったな・・・天才ゲームメイカー様のズレ直しが。

キックオフ。ボールはすぐさま千羽山に奪われ攻めあがられる。が、栗松それをカット。

パスが繋がり、前線へ上がることが容易になり始めた。

「二かごめ、かごめ、かごめかごめ・・・」
「何だ・・・？」

マックスが3人に囲まれる。

3人は腕を広げながら等間隔で歩きながら段々とマックスへ詰め寄る。マックスは動きを封じられ、そのままボールを奪われる。が、その奪われたボールをすぐさま鬼道が奪い返す。相手のマークを振り払い、そのボールを受け取りに行く。

「加賀美！」

「ああ！行くぞ染岡!!」

「おう!!」

着いてきた染岡にボールを任せ、更に前へ。

染岡がドラゴンクラッシュをこちらに放ったのを確認し、その場に静止。集中・・・

「雷龍一閃!!」

獯猛なドラゴンに雷を上乗せし、ゴールへと向かわせる。

威力は以前とやはり桁違い。さあ、このボールをどう止める？

「無限の壁!!」

DF2人がキーパーの横に並び立ち、強大な壁を作り出す。

その壁にぶつかったドラゴンはいとも簡単にその勢いを殺される。

・・・まさかここであっさり止められるとは。

ここで前半終了。パスがつながり出した今、次はあの壁をどう崩すかだな。

「あの無限の壁・・・どう崩すかねえ。」

「確かに強大ではあるが・・・弱点ならある。」

「・・・マジ？教えてくれよ。」

鬼道が無限の壁の弱点を語り出す。

曰く、あの技はキーパーと特定のDF2人が揃って成り立つ必殺技。ならばDFをゴールから離し、その隙にキーパー単体で放てる技以上の威力でゴールをこじ開ければいい、という訳だ。

「という訳でだ・・・後半はワントップで行こう。FWで1番速く動けるのは加賀美、お前だ。頼むぞ。」

「分かった。俺が何とか活路を開く・・・点は任せたぞ、修也、染岡。」

「ああ。」

「おう！」

という訳で修也と染岡を下げ、俺のワントップで試合再開。

相手のキックオフ。初手から突っ込んで来ないという相手の思い込みに漬けて一瞬でボールを奪い取る。

鬼道にボールを下げ、俺はすぐさま切り込んでいく。

「やらせないっぺ！」

「ふん、来いよ！」

4番がマークに着いてくる。狙い通りだ！

そのままラインギリギリの辺りまで移動し、4番を引き剥がす。

鬼道は染岡にパス。2人はそのままドラゴントルネードを放つ。

よし、まずは1点・・・

「思いどおりにはさせないっぺよー！」

「は——ッ!？」

何と引き剥がした4番は有り得ない速さでゴール前まで。

馬鹿な・・・これでは、無限の壁を封じることが出来ない！

烈火の龍は無限の壁の前に止められたしまった。次は同じ手は通じない。

つまり、俺達は無限の壁を正攻法で撃ち破る他無くなったわけだ。こうなったら、片っ端から連携シュートをぶち込むしかない。

「風丸！豪炎寺!!」

「炎の風見鶏イイ！」

「無限の壁！」

炎の鳥も阻まれ。

「イナズマー1号ツツ!!」

「無限の壁!!」

上がってきた守と修也のイナズマー1号も壁を破ることは無かった。だが、勢いを殺しきれずボールはゴールラインを超えた。

だが不味いな、イナズマー1号を超える連携技は・・・俺らにはない。

ファイアトルネードDDはイナズマー1号と同等。雷龍一閃・焰はシュートとシュートの間隔があるから実際の所は同時に打ち出す上2つより威力が低い。

クソツ、この状況どう乗り越える？

しかも、それを受けて全員目に見えて士気が下がっている。

このままじゃ勝てないぞ・・・!

「何へこんでんだよ皆！」

「でも、無限の壁が破れないんじゃないや・・・」

その通りだ。

あの壁を破らない限り俺達は点を取れない。それ即ちこの試合に勝てないということだ。

が、あの壁を破る手立ては現在俺達にはない。落ち込むのも分からない訳では無い。

「必殺技ならあるだろ!?俺達の必殺技は、炎の風見鶏でも、イナズマー号でもない!!俺達の本当の必殺技は・・・最後まで諦めない気持ちなんだ!!」

その一言に僅かばかりに皆の心が揺らぐのを感じ取った。

「帝国と戦った時からずっとそうだ!!俺達は今まで、強いライバル達と戦い、その度に諦めない気持ちで打ち破ってきたんだ!!だから今ここににいるんだろ!?!」

「守の言う通りだ。俺達は諦めなかったから今、このグラウンドに立っているんだ!それが俺達、雷門イレブンだ!!やろうぜ皆・・・最後まで、俺達のサッカーを!!」

守の言葉に続いて皆に語り掛ける。

そうだ、俺達は諦めなかったからここにいて。諦めなければ、きつと活路は見出せる。

それが俺たちのサッカーなんだ。

全員の顔に光が戻る。

「よし、行くぞ!!」

「!!おう!!」

俺達のコーナーキックから再開。試合は残り5分・・・大丈夫だ、俺達ならここからでも巻き返せる。

守も前線に上がり、ここからは俺達雷門の超攻撃的サッカーだ。半田のコーナーキックから試合再開。

染岡がヘディングでゴールを狙うもキーパーはパンチング。弾かれたボールはマックスに、そのままゴールを狙うもまた弾かれる。

『攻める雷門!!残り時間は後2分!!』

ボールは鬼道へ。しかしかごめかごめで囲まれる。

「鬼道オオ!!」

上がってきた守が鬼道に叫ぶ。それを受けて鬼道、ボールをセンターリング。

するとどうだろう、蹴り出されたボールは紫のエネルギーを纏い、最高点で雷を纏いながら落下してきた。

それを守、修也、鬼道が同時に蹴り込む。

土壇場で生み出された新必殺技。その超威力はゴールへ容赦なく牙を剥く。

待ち構える無限の壁。

が、放たれたシュートは勢いを失うことなく、徐々に壁にめり込んでいき――

「ぐわッ!？」

――やがて壁を打ち砕く。

このギリギリで、1点もぎ取りやがった……凄い威力の必殺技だ。

「あと1点……もぎ取るぞー!」

相手キックオフから再開。時間は残り1分。

「もらった!!」

「あ——ッ!」

自分達の無限の壁が破られたショックからか、千羽山の反応は僅かばかりに遅れた。そこに潰け込みすぐさまボールを奪い取る。

「行けエエ加賀美イイ!!」

鬼道が叫ぶ。

そんな叫ばれちゃ、応えない訳にはいかないだろうが!!

「疾風迅雷・巡ッッ!!」

立ちはだかる千羽山を次々と抜き去る。この技の強みは単純なドリブル力だけではなく、その速さ。その分消耗はするが超スピードで相手ゴールまで切り込める!

そしてもう1つ・・・この技の強みは——

「ライトニングブラスタアアア!!」

——直接ライトニングブラスターに繋げやすい事だ。

立ち止まらなければならぬ轟一閃に比べ、ライトニングブラスターは止まることなく撃つことが可能だ。

ボールに力を込めるのは蹴りながら可能、エネルギーの放出のステップは俺の裁量次第でコントロール可能、放出を無くす事でボールに秘められるエネルギーは高い状態を保ち更なる威力の向上へ、蹴り出しにドリブルままの勢いが乗ることにより更に強く!

ノンストップで両脚を蹴り込むと、轟音と共にボールから放たれるエネルギーは更に強く。少し離れたMFまでもがその圧力に身を竦める。

解き放たれた雷は空気を焦がしながら相手ゴールへ迫る。

一瞬気圧された相手キーパーはすぐさまチョップの構えを損るも、それより速くボールはゴールへ叩き込まれる。

『ゴ、ゴオオオル!!雷門中加賀美、まさに雷の如く千羽山ゴールへ切り込み試合終了ギリギリでもう一点をもぎとったアアア!!ここで、試合終了!!』

無限の壁を破ったあの技にライトニングブラスター。正しく鉄壁の守りを破ったのは俺達のイナズマと言えるだろう。

「ナイスシュート、加賀美。」

「おう。お前が来てくれて良かったよ、鬼道。」

鬼道と硬い握手を交わす。昨日河川敷で、俺の手を取った時と同じくらい硬く。

ベンチへ戻ると目金がああ技を”イナズマブレイク”と名付ける。相変わらずなかなかのセンスだ。

何はともあれ、かなりギリギリだったが3回戦進出・・・確か、次が準決勝だったはずだな。

全国制覇は目前、か。燃えてくるねえ・・・

「来い！柊弥!!」

「喰らえッツ!!」

試合終了後、守が少し練習したいと言うから鉄塔広場までやってくる。

日が沈み出した空は茜色に染まり、ここから見える雷門町も煌々と照らしている。

「やっぱり来てたか。」

「修也、それに鬼道も。」

木製のベンチに腰掛け、話をする。

「ここではよく練習を？」

「ああ！今日も点入れられちゃったからさ、あのタイヤでキーパー力磨いてるんだ。」

「そうか、程々にしておけよ・・・試合前に怪我されては元も子もないからな。」

「大丈夫さ。守は丈夫だからな。」

夕陽をバックに話は盛り上がる。

鬼道が突如ピッチに現れたこと。それが嬉しかったこと。鬼道が誇るゲームメイク力だけでは勝てないということ。

「考えてみれば、あの時からかもしれないな・・・もつと別のサッカーがあるのかもしれない、と。」

鬼道が言うには、その別のサッカーとは何なのかはまだ見つからないらしい。だが、それがここ、雷門でなら見つけれられるかもしれないと。

「そつか・・・鬼道、これからもよろしく頼むぜ。」

「ああ、こちらこそな。」

守と鬼道が握手を交わす。鬼道の加入でこれからもつと面白いことになりそうだな。

さて、2回戦突破祝いも兼ねて飯食いにも行くか。

第18話 復活のペガサスと次なる相手

「行け！そこだ！」

「おう!!」

今日も練習に精が出る。当然といえば当然か。準決勝を控えているのだからな。次の準決勝に勝つことが出来れば、決勝進出・・・つまり、日本一はすぐそこという訳だ。

思いもしなかったな・・・自分と仲間達が日本一に立つ日が来るかもしれないなんて。けれど、今のこの仲間達とならそれも夢ではないと思える。

本当に、俺はいい仲間に出えたもんだ。

そんな思いを抱きながらボールの行く先に目をやる。染岡が放ったドラゴンクラッシュを守が熱血パンチで弾く。ボールはラインの外へと転がっていく。

そのボールの先には・・・見知らぬナイスガイ。誰だあいつ。

「おーい！ボール取ってくれよ！」

入部希望者か？

なんて思っていると、ドリブルしながらこっちにやってきた。なんだ、サッカー経験者か？

しかもやたらと上手いな。立ちはだかった半田と栗松を抜いてみせたぞ。

次第に注目はその男へ向けられる。

守が打ってこい、と言ったら男は地に手をつき、逆立ちの要領で回転し始めた。周りの空気を巻き込みながら回転の勢いは増していき、やがてボールを蹴り込む。

そのシュートに並々ならぬ力を感じたのか、守はゴッドハンドで対応する。

少し後ずさりしつつも止める。うちのGK様はそう簡単にゴールを割らせてはくれないぜ、ナイスガイさん。

いてもたってもいられないと言った様子で守が話しかけに行く。何でも、アメリカでサッカーをやっているそうなの。

日本にいる友達に会いにここに来たら、サッカーしていたから混ざってみたと。

「で、その友達ってのは？」

「いやー、早い便が取れたから早めに来て驚かせてやろうと思ったんだけど・・・すれ違ったみたいだ。あはは・・・」

「・・・その友達、キレイないといいな。」

せつかく迎えに行ったのに早い飛行機で来ましたーあははーなんて言ったら、1発殴られてもおかしくは無いからな。

しかし、友人ねえ。確か、秋と土門が練習の最初は抜け出させて欲しいなんて言ってたのも友人と会うため、なんて言ってたけど・・・もしかして？

皆がナイスガイをもみくちやにしていると、校門から秋と土門が顔を出す。

するとナイスガイは飛び出し、秋に抱き着いた。

情熱的だねえ・・・じゃなかった。ということやはり・・・？

「一ノ瀬くん!？」

「久しぶり、秋、土門！」

名を一之瀬一哉。俺の推測通り、やはり2人の言ってたやつはこいつらしいな。

思い出話に耽ける3人を横に、俺達は練習再開する。

次の相手はまだ決まっていなかったはずだが、確か上がってくる可能

性がある学校の片方は修也が前いた木戸川清修だったはず。

前の仲間達が敵として立ちはだかることに、きつと修也なら臆することなく立ち向かうんだろうな。あいつはそういう男だ。

「おーい、俺も混ぜてくれよ！」

「もちろん！」

話を終えたのか一之瀬と土門が練習に混ざってくる。秋一人放つたらかしていいのか？と思いつき秋に視線をやると、どこか幸せそうに笑みを浮かべているのできつと大丈夫なのだろうと確信してボールに向かう。

駆け上がる一之瀬の前にたちはだかる。すると一之瀬はヒールリフトを上げてくる。それを読んで飛び上がったが、何とボールの軌道が急に変わり、抜かれてしまう。

俺が出来ないヒールリフトをやって見せた上にヒールで回転を……やるな。技巧派って訳だ。鬼道にも引けを取らない。もしかしたら鬼道以上かもな。

今度は守とPK対決を始める。一之瀬はゴールポストギリギリを狙ってシュート。守は追いつけずゴールを許す。

「凄いつす。あんなギリギリに！」

「ああ……俺や修也とは違う方向性だな。」

本当に凄いやつだな。テクニクだけならこのチームで勝てるやつはいないだろう。

1時間くらいそうしていただろうか。すると唐突に一之瀬が守に提案をする。

「やりたいことがあるんだ。協力してれないか？ 円堂、土門！」

「お前まさか……トライペガサスをやるつもりか？」

噂のトライペガサスか。千羽山の無限の壁を破る時に出てきた3人連携の必殺技。

それを再現しようと思みるとはな。まあ、もしかしたら今後の役に立つかもしれないし良いか。問題は主軸となる一之瀬はいなくなる事だが。

何時間もその練習をしていたが、全然成功の兆しは見えないようだ。

何でも、トライペガサスは同時に3人が交差した一点にエネルギーが集中し、そのボールを打ち出す技。今の状態は一点に交差出来ておらず、三角形のような形になっているそうなの。

なるほど・・・なかなか難しいんだな。

そしてまた3人は一点に向かって走り出す。すると！

「・・・おお。」

一瞬だが、ボールを中心にパワーが集まり、蒼いペガサスのような形を作った。上昇の後霧散してしまっただが、凄いやつがこっちまで伝わってきた・・・確かにこれなら無限の壁ですら破れそうなの。

この失敗でも諦めず、3人は何度も何度も挑戦する。

一之瀬は守と似ているな。諦めが悪くて熱いやつだ。

こんなやつとサッカー出来れば・・・もっと楽しいだろうな。

「一之瀬！今日俺ん家に来いよ！」

「良いのかい？じゃあお邪魔するよ。」

守が一之瀬を家に呼ぶらしい。それにあやかって何人かも守の家に。俺も行こうかと思っただが――

「終弥先輩！今日この後空いてますか？」

「ああ、特にないぞ。」

「そうですね・・・じゃあ、一緒にご飯行きませんか？」

春奈に誘われたのだ。

一之瀬と話をしてみたいが、明日も来るらしいしその時でもいいだろう。

女の子と2人で出掛けることに少し抵抗がないわけではないが・・・まあ、春奈なら悪い気はしないな。

という訳で俺は春奈と一緒に行くことにした。

「・・・ん？どうした鬼道。」

「・・・よろしく頼む。」

「何が？あ、おい待ってって・・・」

唐突に肩に手を置かれて鬼道にそう言われる。なんの事かと聞き返したが無視された。・・・なんだあいつ。

「それにしても、一之瀬さんは凄かったですね！皆驚いてましたもん。」

「ああ。俺も驚いたよ・・・急にあんなやつがやってくるなんてなあ。贅沢言えば、俺達と一緒にサッカーしてくれないかななんてな。」
「あはは、それは難しいんじゃないですか？ほら、アメリカでもサッカーチームに所属しているって言ってましたし・・・」

やってきたのは学生のお財布にも優しい某ファミレスだ。

春奈と2人でこうして楽しく話すのは初めてだが、案外話が弾むものだ。

学年も1つ違うし、何より性別の壁が・・・なんて思ったが、杞憂

だったようだ。

「それにしても、今日はなんで誘ってくれたんだ？」

「え！それは、その・・・」

ふと疑問に思って訊ねる。

いやだって、よく考えたら結構急だったしな。

「その・・・なんとなくです。はい。」

「あ、なんとなくか。なら仕方ないな。」

「はい・・・嫌でしたか？」

なんて不安気に聞き返してくる。

・・・まずい、もし万が一泣かせでもしたら鬼道に合わせる顔がない。よろしく頼むってそういうことかよ!?

「いや、むしろ嬉しいぞ・・・うん。」

「そうですか！なら良かったです!!」

先程までのはどこいった？いや、春奈は笑っている方が似合ってるからこれで良いんだが。

「すごい話は変わるんですけど、柊弥先輩って好きな人とかいないんですか？」

「ほんとにすごい変わったな・・・いないぞ？特には。」

「でもでも、結構学校でモテモテですよね。聞きましたよ？この前も1年生のマドンナって言われてる子に告白されたとか！」

「あの子ね・・・確かに可愛いとは思うけど、初対面だったしなあ・・・」

なんてことを洗いざらい聞かれた。

「じゃあ・・・どんな人が好きとか、ありますか？」

「そうだなあ・・・笑顔が素敵で、一緒にいて楽しい人なんかいいな。春奈みたいな。」

「私ですか!？」

と言うと、急に顔を真っ赤にして固まってしまう。

数秒後、我に返ったように話し始める。

「わ、私なんか柊弥先輩には勿体ないですよ？」

「そう自分を卑下するなよ。春奈は十分魅力的だぞ。」

「——ツ、も、もうお会計しましょうか!長居しちや悪いですし!!」

「・・・?あ、ああ。それもそうだな。」

唐突にここを出ることを促してくる。

一体、どうしたというのだろうか。

「今日は急に誘ったのにありがとうございました!楽しかったです!」

「いえいえ、俺も楽しかったよ。ありがとう。」

「それじゃ、また明日からも練習頑張りましょうね!あ、あと・・・」

別れ際、春奈が寄ってきて耳元で囁く。

「あんなこと言うから、私本気になっちゃいましたから・・・覚悟しておいてくださいね。」

「・・・あんなことって?」

「ふふっ、おやすみなさい!」

と言って家の中に入ってしまふ。

あんなこと言った、本気になった……さてなんのことだろうか。後者は全く分からない。

前者は……もしかして。

やばい、俺結構恥ずかしいこと言ってた……？うわあ最悪だ……春奈に引かれてたらどうしよう。

でもって、それを踏まえると本気になったってことは……？途中の恋愛事情を洗いざらい炙り出されたのを加味すると、自然とその答えが見えてきてしまう気がする。

……やめよう、自意識過剰は良くない。変な気になって空振りしたらもつと恥ずかしいことになる。うん。

翌日、また一之瀬達はトライペガサスの練習に励む。昨日よりはペガサスも鮮明になってきたのだが……上手くエネルギーとしての形を保てていない。途中でエネルギーが発散されてしまっている。すると、秋が唐突に交差する点の近くに立つと言い出す。

危ない、と止める1年達。

が、一之瀬と土門、それにもう1人がその方法で成功させたということを知って実行を決意する。

……失敗したら、確かに秋が危ないな。

「皆、万が一に備えておこう。」

と言うと、皆救急箱や担架を持ってくる。準備がいいな。

1年達に至っては秋の盾になろうとしている。健気だねえ……

「よし、いくぞー！」

秋が立つ一点に向かって走り出す。
さあ、どうなる……？

「いつ、けええええええ!!」

3人は同じスピードで一点を通り過ぎた。
すると、先程とは比べ物にならないエネルギーが巻き起こりペガサスが顕現する。

その際、1年達が秋の前に立って文字通り盾となった。ナイス。
そして3人は飛び上がり、凄まじいエネルギーを秘めたボールを同時にキック。

ペガサスはゴールへと突き刺さった。

「やったああああ!!成功だああああ!!」

ガッツポーズで喜ぶ守。一之瀬と土門、秋も一緒になって喜ぶ。
1年達、そして俺達が万が一に備え、応援してくれていたことに守が気付き、涙を流しながら感謝を述べてくる。全く、暑苦しいやつだよ……それがいい所でもあるんだけどな。

「それじゃあね、皆。」

「おう、またサッカーしような!一之瀬!」

一之瀬は帰りの飛行機に乗るため雷門を去って行ってしまった。
もう少し色んな話をしてみたかったな……アメリカのサッカーチームの話だとか。

まあ、仕方ないか……

「……加賀美。」

「ん?なんだ鬼道。」

ものすごく神妙な顔つきで鬼道が話しかけてくる。
どうしたのお前、試合の時みたいな顔してるぞ……

「春奈を、妹をよろしく頼む……!!」

「……はっ。」

両肩に手を置いて、凄い力を込めてそう言ってくる。

おい、まさか……

「もしかして……春奈から聞いた？」

「……春奈は本気だ。どうかお前も、向き合ってやってくれ……!!」

そういつて手に更に力を込めてくる。

痛い。とにかく痛い。

「……俺は春奈を悪いように思っではない。むしろ良く思っている。
俺はこんな経験は初めてだから……どんな顔すればいいのかわから
ない。けど、真剣な思いには真剣に答えるよ……約束する。」

「ああ……もし真剣に向き合わず、春奈を泣かせるようなことがあつ
たら……分かってるな。」

……お兄様、恐るべし。

けど、本当に春奈が俺に思いを寄せているだなんてな……何がきつ
かけだ？特に何も心当たりはないんだが……

考えても分からない。まずは……自分の心と向き合わなければ。

「——という訳で、今日からこのチームで皆とサッカーすることになりました、一之瀬一哉です！改めてよろしく！」
「・・・どういう訳だよ。」

えー、あれから数十分後。一之瀬が雷門に加入しました。

何でも、俺達とサッカーがしたくなったらいいです、はい。

じゃねーよおい。お前あっちの仲間はどうすんだよ、両親にはどう説明するんだよ。

「あ、それは大丈夫！ちゃんと電話で話したら分かってくれたから！」
「それでいいのか、お仲間とご両親・・・」

あまりの軽いノリに言葉を失う。

ま、まあ・・・図らずとも一之瀬ともつとサッカーしたいという願いが叶ったわけで、少なくとも俺らにマイナスはないから・・・むしろプラスだ。

「皆さん！次の対戦相手が決まりました！」

春奈が走ってくる。さつき鬼道とあんな話をした手前だから結構顔を直視しにくいんだが。

「本当か！それで、どこなんだ？」

「次の対戦校は・・・木戸川清修です！」

「木戸川清修って・・・」

と言って、目線が修也に集中する。

本当に上がってきたか、木戸川清修。

まあ、修也なら心配ないだろう。きつと。

第19話 不死鳥は羽ばたいて

一之瀬の加入で俺達のチームはさらに充実することになった。

パワーの修也、染岡。スピードの俺、風丸。テクニクの鬼道、一之瀬。ガードの壁山、土門、守。

他の皆もメキメキと成長し、それぞれの強みを確立しつつある。頼もしい限りだ。

このチームでなら、本当に全国制覇も夢ではない。いや、出来る。

「ちよつと聞いて！Aブロック準決勝の結果が届いたわ。」

「本当か。それで、勝ったのは……」

「……世宇子中よ。」

やはり来たか、世宇子中。

帝国の無念を晴らすためにも、必ず準決勝を抜けて決勝に行きたいな。全力で戦った以上、俺達もあいつらへの思い入れはあるからな。

悔しいのは鬼道だけでは無いということ。

「よーし皆！頑張ろうぜ!!」

「「おう!!」」

次は木戸川清修。

確か……3つ子のストライカーがいるチームだったな。修也が抜けてなお、その三兄弟のスリートップによる高い攻撃力が売りだとか。

それでもつて確かDFの西垣……だったか？あいつの守りも中々に硬いとの噂。

相手にとって不足なし、と言ったところだろう。

「は？守達が他校の生徒と喧嘩？」

「そうなんですよ！このままじゃキャプテン達が・・・あわわ・・・」

今日の部活は早上がり。

教室で係の仕事を終えて帰ろうとしたら穴戸が教室に飛び込んできてそんなことを言ってきた。

「他に誰かに伝えたか？」

「えっと、木野さんに夏未さん、一之瀬さんに土門さんです。」

「そっか、じゃあ俺行かなくても良さそうだな。」

「ええ!?ほ、本当に大丈夫なんですか!？」

「だって、修也に鬼道もいるんだろ？そんな厄介事にはならないだろ・・・多分。」

「多分って!？」

穴戸がそんな悲鳴を上げるが、俺は帰る。

なぜって？今日は仮面騎士イチゼロの特番なんだよ、リアタイで見れるなら見るに決まってるだろうが。

「で、まんまと挑発に乗って見事打ち破られたと。」

「・・・はい。」

翌朝、教室にて守と話をする。

穴戸が昨日言っていた守達に突っかかってきたのは例の木戸川清修の三兄弟。イチヤモンつけてきたところで守がブチギレてPK勝負を挑んだそう。なぜ止めなかった、と鬼道に聞いたら「いい偵察

になると思って」とのこと。

いやまあ、確かに噂の攻撃力を見るいい機会だったかもしれないが。

でもって相手の西垣？が一之瀬達のアメリカ時代の仲間だったらしい。それはあまり関係ないが。

「……天誅！」

「いてっ!!」

教科書で昭和さながらのツツコミのように頭を引っぱたく。うむ、いい音だ。

頭を抑え、涙目で手加減を訴える守。

「お前は試合で相手に手加減するのか。」

「これは試合でもなんでもないだろ!?話がまるで違うじゃないか！」

「あー聞こえなーい聞こえなーい。」

あーだこーだ言いながらこちらに迫る守の顔面を手で抑えながら言っていることを聞き流す。

勝負でゴッドハンドまで出さなかったのは及第点だな。

手の内全部明かしてたら流石にこの2階の教室の窓から外に放り投げていた。

命拾いしたな、守。

「……これはどういう状況だ?」

「敗者に口無しって状況。」

「……そうか。」

修也がツツコミを諦めたような表情で席に着く。

暴走列車円堂守号もようやく落ち着きを取り戻す。

「にしても、あいつらの攻撃は本物だ・・・ビリビリ来た。」

「トライアングルZ、か。あいつら単体では抑えきれんだろうが、連携されると厄介というわけだ。」

「ああ。それに守りも薄いという訳では無い・・・もしかしたらだが、トライペガサスの出番が来るかもしれない。」

「トライペガサスならまず間違いなく破れるだろうな。問題はどうかやってそこまで持っていくかだが・・・」

そんな話をしていたら先生がやってきたので前を向く。とりあえず、今日の部活でまた調整だな。

『さあ全国中学フットボールファンの皆様、フットボールフロンティア全国大会もいよいよ佳境！本日はAブロック準決勝。木戸川清修対雷門中の試合でございます!!』

本日のスタメンはこうだ。

FW 俺、染岡、修也

MF 鬼道、一之瀬、松野

DF 風丸、壁山、土門、栗松

GK 守

攻守量対応の万全の布陣だ。

対する木戸川は三兄弟のスリートップ。攻めてくる気満々という訳だ。

さて、前回の決闘の時は俺はいなかったからな。こいつらのシュートを見るのが少し楽しみだったりもする。守が止められなければあれだが。

まあ、さらに猛特訓を重ねた守ならきつと大丈夫だろう。

俺は俺の役割を果たすことを考えよう。

『木戸川清修には2年連続の決勝進出、雷門中には40年振りの決勝進出がかかっており熱い戦いになること間違いなしだ!!ここでキックオフ!!木戸川清修のボールからスタートだ!!』

ホイッスルと同時に攻め上がってくる三兄弟。

三兄弟と言うだけあってシュート以外の面の連携も取れている。あつという間に俺達前陣組が抜かれてしまった。

中陣、後陣も抜かれてあつという間にゴール前。

「バックトルネード!!」

高くセンターリング。そのボールに向かってファイアトルネードとは逆回転で跳躍、かかと落としを叩き込む。

蒼い炎を纏いながら迫るボール。

「爆裂パンチ!!」

連続で拳を叩き込む。

が、ボールの勢いは衰えることを知らず・・・

「円堂!!」

「ぐわッ!」

ゴールを許してしまった。

クソッ、こんな早く先制点をもぎ取られるとは・・・相手もやはり伊達ではないということか。

「どうなってんだ・・・この前のバックトルネードとは桁が違う・・・!」

「何驚いちゃってんの？前回の対決はデモンストレーションに過ぎませんよ。」

「試合前に本気出す訳無いだろ？」

と言つて大笑いしてくる三兄弟。

あいつらよくよく見るとムカつくな。絶対試合終わりで吠え面かかせてやる。

その後も木戸川清修の攻めを上手く抑えられず劣勢を許す。あの三兄弟・・・厄介ではあるが少々3人先走りすぎだな。

そこに漬け込むことが出来れば・・・なんてことを既に鬼道なら考えてそうだ。

指示はあいつに任せるか。

「バックトルネード!!」

「ゴッドハンド!!」

今度は止めて見せた守。流石ゴッドハンドだ。

前回の対決では見せなかったゴッドハンドに少しばかり驚いている三兄弟。

だが奴らにはまだ隠し球・・・あの連携シュートがある。油断は禁物だ。まずは1点俺達に取り返さなければ。

攻める三兄弟の内1人を鬼道とマックスが囲む。やむを得ずパスを出したところを土門が空中でクリア。

が、すぐさま取り返して再びバックトルネード。

「爆裂パンチ!!」

今度はバックトルネードを爆裂パンチで弾いてみせる。

段々乗ってきたな。

弾かれたボールを持つ選手は目まぐるしく入れ替わり、やがて相手MFへ。

MF同士でパスを回していると三兄弟が割り込む。やはり、あいつらは3人でサッカーをしているようなものだ。仲間との連携を欠いたプレイなんて、所詮たかが知れている。

「ザ・ウォール!!」

攻め上がる三兄弟を壁山が阻む。いいディフェンスだ。

続くMFのパスミスを一兄弟は責め立てる。FWとしては一流でもサッカープレイヤーとしては三流もいい所だな。

そしてとうとう鬼道の指示が言い渡される。

焦りを見せ始めた三兄弟。俺達が今すべきは攻め。が、修也はじめ俺らFW陣は警戒が強い・・・なら、それを利用してトライペガサスを狙っていいこう。とのことだ。

「豪炎寺、染岡、加賀美。頼むぞ。」

作戦はこうだ。修也と染岡がサイドから上がって囷になる。

その隙に守、一之瀬、土門でトライペガサスを狙う。そして俺は手薄になるディフェンスの補強に入る。

守のゴールキック、ボールは土門へ。

「ちよ、マジ!？」

「わざわざチャンスを一！」

が、それと同時に2人が駆け上がる。俺は後ろへ。

それに気を取られた隙を着いてボールは鬼道へ回り、守、土門は攻め上がる。

そしてボールは一之瀬へ、3人は上がっていきやがて一点で交差する。

蒼く煌めきながら羽ばたくペガサス。凄まじいエネルギーを周囲に放ちながら顕現した。

「「トライペガサス!!」」

ペガサスは相手ゴールへと翔ける。相手キーパーは一切の抵抗が
出来ず、ゴールを許す。まずは1点取り返したな。

『なんとキーパー円堂の加わった攻撃で雷門中同点に並んだアアア
!!』

ここで前半終了。

折り返し時点で同点に並べたのはかなり大きいな。

さて、中陣とあの3人の連携に漬け込めば何とかなるかもしれない
が、恐らく後半からは奴らも修正してくるはず。
その上、まだトライアングルZを隠している。

「大丈夫さ！どんなシュートだろうが、俺が必ず止めて見せる！」

そう意気込む守。頼むぞ。

そして後半が始まる。

「そろそろ見せてやろうじゃん？行くぜ!!」

不敵な笑みを浮かべながら三兄弟が上がっていく。

「まずい、止めろ!!」

そう声を上げたが、3人の見事な連携の前に次々と抜かれていく。

こいつら3人だけで見たらかなりのレベルなんだがな・・・！
誰も止めきれず、3人は気づけばゴール前・・・守を信じるしかない。

「トライアングルZ!!」

シュートの後、変なポーズを取る。ノーコメント。

だがシュートの威力は本物だ。こちらまで凄まじいパワーが伝わってくる。

「ゴッドハンド!!」

輝く神の手で応戦する。

両者しばらくせめぎあい、先に力を失ったのは神の手の方だった。

『木戸川清修!! 武方三兄弟のトライアングルZで2点目を奪った!!』

「あいつらの好きにはさせない・・・!」

修也が静かにそう呟く。その瞳は誰よりも燃えていた。

こちらのボールから試合再開。

修也と染岡が上がっていくがボールを奪われ、また攻め込まれる。が、鬼道がマックスと一之瀬を動かす素早いチェックに着く。それを受け取った三兄弟、ダイレクトで守に打ち込むがそれをしっかりとキャッチ。

そしてそのままトライペガサスを狙う。が、西垣が修也のマークを振り払い3人へ立ち向かう。

「スピニングカット!!」

右脚から放たれた青い衝撃波は地面に刻まれ、そこから衝撃波が噴出。3人は吹き飛ばされた。ボールもラインの外へ。

「ペガサスの羽が折れたな。」

そう呟く西垣。守達は苦い顔をせずにはいられない。これはもしかしてまずいか？俺達の警戒も、トライペガサスの警戒もさされている。点を取れる手段が限られつつある。

「焦るな円堂！俺が必ずゴールを決める！」

焦る守を修也が制する。

修也はやる気だ、どんなに警戒されようともゴールをもぎ取るつもりだ。

よし、なら俺はそのサポートに回ろう。

再びこちらへ切り込んでいく木戸川。三兄弟に出されたパスをなんと後ろまで下がった修也がカット。そのまま上がっていく。が、1人では限界があるだろう。

「修也!!」

「任せた！」

ボールを受け取り上がっていく。突破力なら修也よりも俺の方が上。ボールを前に運んでいくなら俺だろう。

そしてゴール前、修也が俺より前に上がったのを確認して構える。即興ではあるが・・・思い出せ、最初の帝国との試合を。

「轟一闪、改!!」

「ファイアトルネード・・・改!!」

互いに進化した十八番を放つ。

雷を纏ったボールへ炎が吹き込まれる。これは連携シュート、と言うよりはシュートチェインに近い。よく良く考えればドラゴントル

ネードも雷龍一閃も、シュートチェインのようなものだ。
が、高威力を誇る俺達のシュートなら――

「タフネスブロック!!うわッ!?!」

相手ごとゴールへ押し込んだ。

取られた分は取り返した。スコアは2―2のイーブン。

「ナイスシュート、修也。」

「柊弥、ナイスシュートだ。」

互いのシュートを讃え合う。

これで完全に対等・・・残り時間もあと僅か。ここからは地力の比べ合いだな。

「うおおおお!!」

「させるかよ!!」

互いに攻め、互いに守りしのぎを削る。

同点のまま消耗が続く、こつちもあつちも全員息を切らし始めた。

中々に決め手がない・・・このままでは延長突入も視野に入れなければならぬ。

そんな極限状態でも必殺技が入り乱れる。放った側も放たれた側も、それでさらに消耗する。

まさにギリギリの真剣勝負。準決勝に相応しい・・・!

「延長なんて必要ないっしょ!!」

栗松からボールを奪い取り、三兄弟がゴールへ迫る。

まずい、トライアングルZは今の守では止められない。このままで
は・・・!

そんな心配など知ったことではない、と言った風に無慈悲にもシュートは放たれる。

「トライアングルZ!!」

「ゴッドハンドツツ!!」

ぶつかり合ったその瞬間火花が散る。

両者先程以上の出力。力と力のぶつかり合いがこちらにまで伝わってくる。

が、徐々に押し込まれる守。両手で止めにかかるもまだ足りない。このままゴールを許してしまうのか・・・と思った、その時だった。

「キャプテン!!」

「危ないっス!!」

栗松と壁山が守の後ろに飛び込み、その背中を支える。

3人がかりのシュートには3人がかりのキャッチを。

3人の咆哮と共に神の手が放つ光はより強く。

その光が収まる頃には、ボールは煙を上げながら守の手の中に。あいつら・・・最高だ!

「円堂!!」

「おう!!」

フリーの修也がボールを受け取り攻め上がる。それを追いかける三兄弟。三兄弟が修也の前に立ち塞がったところで、修也はノールックでヒールパス。それを受け取ったのは一之瀬だ。

「今だー!トライペガサスを!!」

後ろから守、土門が上がってくる。それをさせまいと再び西垣はス

ピニングカット。

視界を遮られるように展開された衝撃波。だが、3人はそれを突っ切って前へ進む。

3人は一点で交差。蒼のエネルギーに包まれたボールは空へと舞う。最高点にて、そのボールの色は蒼から燃える炎へ。

空中を羽ばたくはペガサスではなく、フェニックス。

不死鳥の雄叫びはスタジアムを包み込む。

「うおおおおおおお!!!」

トライペガサスと何ら変わらないモーションでボールを打ち出す。が、そのエネルギーはトライペガサスとは比にならない。

「冗談じゃないっしょ!」

「僕達はこのままじゃ終われない!!」

「決めさせるか!!」

三兄弟が立ちほだかるも、不死鳥はそれをいとも簡単に薙ぎ払う。キーパーそれに反応出来ず、ゴールネットは揺らされる。

『雷門中ついに逆転!!ここで試合終了!!雷門中が激戦を制し、40年振りの決勝進出だアアアアア!!!』

「いよっしやアアアアア!!!」

「やったアアアアア!!!」

全員喜ばずにはいられなかった。

とうとう決勝進出なんだ、喜ばないはずがない。

待ってる世宇子中・・・お前達に勝って、俺達が全国一になってみせる!!

第20話 神への挑戦、目指せ高みを

「このままじゃダメなんだ・・・！」

教室にやってくるや否や、守はこの落ち込み具合である。後ろからやってきた秋や豪炎寺に理由を訊ねてみたら、次の世宇子中のシユートを自分は止められるのか不安に陥ってるそう。

守にしては珍しいこともあるものだ。まあ、次はどうとう決勝：：加えて相手は帝国を大差で破った奴らだ。少し不安になるのも仕方ないか。

これは部活になっても続く。

部室にて俺と守、修也に鬼道の4人で机のノートを囲む。守のおじいさん・・・大介さんが残したノートだ。

この中にあつたゴッドハンドを超える必殺技・・・マジン・ザ・ハンドのページを開いて頭を抱える。

途中で土門、一之瀬も話に加わってくるがやはり分からない。

胸の辺りがポイントらしいが・・・当事者以外にこれが読み取れるものだろうか。

「キャプテン！早く練習来てくださいでやんす！」
「皆・・・」

悩むこちらの気も知らず、外で練習に励んでいた皆が部室にやってきて練習に来るよう囁し立てる。

全員、決勝に向けて燃えている。目標がもう目の前なんだもんな、俺だって燃えているさ。

けど・・・こうして課題と向き合ってみると、中々に楽観的であるのは難しいというもの。

「よし、やろうぜ!!今さ、作戦会議してたんだよ、な?」
「・・・ああ。」

守は無理に笑顔を作つて誘いに応じる。キャプテンとして、チームの士気を下げまいとしての行動だろう。が、その笑顔はどこか引きつっているようにも感じる。やはり、不安は隠しきれないのだろう。その守の心は無駄にするわけにもいかず、俺達も守に同意する。

「世宇子中なんてぶっ飛ばしてやろうぜ!!」
「おう!!」

問題は山積みだ。

守備面だけでは無い、攻めの面でも同じことが言えるんだ。

鬼道が言うには、今の俺達のシユートでは100%世宇子中のゴールを破れるかは分からないそうだ。

俺達が持つ手札が何一つ通用しないかもしれないんだ。なら、新しい手札を増やすしかない。

新しい個人技、新しい連携技・・・そして俺にはもう1つジョーカーがある。

そう、化身だ。あの力を完璧にモノにすることが出来れば・・・きつと世宇子中だって何とかなる。

だが、それを皆に話さない。元より、本来なら俺が扱えるはずもない力のはず・・・それをイレギュラーとの邂逅をいいことに、身につけようとしているだけなのだから。

それが出来なかつた時、皆に不安を与える訳にはいかない・・・
これは1人で向き合うしかない。

「円堂は大きな壁にぶち当たったな。」

「ああ・・・だが、誰でもレベルアップすればするほど壁にぶち当たるものだ。」

「その通り。なら、俺達で支えてやろうぜ。」

鬼道の呟きを修也が拾い、俺がそう締める。一之瀬と土門もそのつもりのような。

あいつの背中を、仲間である俺達が支えてやらないとな。

そのまま時間は過ぎていく。

次第に守の焦りは募り始め、無茶な特訓に手を出し始めた。

かく言う俺も・・・焦っていないといえば嘘になる。

化身の前提として、帝国戦で見せたあの力・・・あの感覚をまずは掴まなければならぬ。感覚は身体が覚えている。だが、あの力を意図的に再現は未だ出来ていない。

前段階にすら到達出来ていないのだ。・・・こんなことなら、天馬にコツを聞いておくべきだったか。

「よし来い!!」

既に夕暮れ。部活が終わった後も鉄塔広場にて守は特訓に励む。それに修也、鬼道、俺も手を貸す。

俺は自分を優先しても良いのだが・・・不確実な俺よりも、模範例がハッキリとしている守を優先した方がいいだろう。

木にタイヤを吊るし、守自身もタイヤを背負う。

吊るしたタイヤは振り子のように不規則に揺れ、その間を俺達がシユートを通す。

そのシユートを守るは正面から受け止めようとする。

が、そんな簡単に行く訳がなく守はみるみるうちにボロボロになっ

ていく。

途中、秋や夏未が止めに入ってきたが、勿論守がそれで止まるはずもない。

「うわツツ!?!」

とはいえ、限度は弁えなければな。

守が体勢を崩した弾みに頭を強く打ち付けた。

これでは無理だろう。とりあえず、響木監督のところに行くか……腹も減ったし。

「これまた派手にやったな。」

「ええ……泥臭い特訓の賜物ですよ。」

監督と話をしていると、どうやら監督もマジン・ザ・ハンドのことを知っているということが分かる。

が、監督は身につけることが出来なかったという。それでも、守なら身に付けられるかもしれないと励ます。

「おいおい、どうしたお揃いで。」

「鬼瓦さん。」

鬼瓦さんがやってきた。すると夏未が鬼瓦さんと冬海が接触したと言う。

「影山を探す為にな。」

40年前のあの事件、そして雷門対帝国で起こったあの事件。その背中を追うために影山の過去を調べているそうなの。

鬼道が何か知っているのかと訊ねると、鬼瓦さんは険しい表情を浮かべる。

「こいつらも知りたがっている。話してやったらどうだ？」

監督がそう言っただけで水を差し出す。

差し出された水を一口飲むと、鬼瓦さんは話し出す。

影山は、かつてプロサッカー選手の父親を持っていた。が、その父親へ次第に失墜していく・・・守のおじいさん、大介さんを中心とする若手の出現により。

やがて父親は失踪、母親は病死したことで影山は一人になった。その原因となったサッカーを恨みこんなことになったそうだと。

そして修也に、夕香ちゃんの事件にも影山が関係しているかもしれない・・・と話した。

「影山が・・・！」

「修也・・・」

夕香ちゃんから貰ったペンダントを握り締める修也。その表情は怒りに満ちている。

「許せない・・・どんな理由があってもサッカーを汚していい訳がない。」

「影山は今どこに？」

「まだ分からん・・・」

そして、プロジェクトZなるものの存在を話してくれる。そして、影山が空にいるとも。

何か関係があるのだろうか・・・答えは見えない。

俺達にできるのは、影山がバックについているであろう世宇子中を破ること、それだけなのかもしれない。

そのためにはやはり・・・特訓だな。

それからも、守は特訓を続ける。いや、守だけでは無いな・・・俺も、皆もそうだ。

やはり、化身の手掛かりは掴めない。

あの時同じく化身を出した守にも聞いてみようかと思ったが・・・やめた。マジン・ザ・ハンドで手一杯な守に余計なことを言うべきではないと思った。

「みんな！おにぎりよ!!」

悩みつつも練習していると、マネージャー達がおにぎりを作って持ってきてくれた。ありがたい・・・塩分も不足してきたし、何よりエネルギーが足りなくなってきた頃合だった。

「柘弥先輩！どうぞ！」

「お、おう。ありがとう・・・デカくね？」

春奈から他のおにぎりの5倍はあろうかというおにぎりを手渡される。うん、デカくないか？

「音無さん、俺もそのおにぎり欲しいツス！」

「だーめ、これは柘弥先輩にしか作ってません！」

俺を特別扱いしてくれた、という訳だ。

いや、ありがたいことに変わりはないんだが・・・その、周りの視線が少々。ほら、鬼道に至ってはゴーグル越しでも分かるくらいに目

見開いてるぞ。

他の奴らもやたらニヤニヤしながら見てるし……

まあ、悪い気はしないが……

「ちやんと食べて、練習頑張ってくださいね！」

「ああ……ありがとうな。」

何はともあれ、心遣いはありがたい。

これで後半の練習も頑張れる。

……心做しか、鬼道からのパスはいつもより重かった。

守の練習は更に強度を高め始めた。

ドラゴントルネードとツインプーストを同時に撃ち込んでこいと
言うのだ。

熱意に押され渋々修也に染岡、鬼道に一之瀬が撃ち込む。

その時だった。

突如どこからかやってきた男がそのシュートの両方を簡単に止め
てしまったのだ。

長髪で、何処か中性的な顔立ちをしている。女と間違えられてもお
かしく無さそうだ。

が、特筆すべきはそこじゃない……服装だ。

あのユニフォームは……

「世宇子中キャプテン、アフロデイだな。」

「やあ、お初にお目にかかるね……加賀美柊弥くん。」

衝撃が走る。

次の対戦相手のキャプテンが乗り込んできて俺達のシュートを止めて見せたのだ。しかもキーパーじゃないこいつが、だ。

「宣戦布告にでも来たのか？」

「宣戦布告か・・・ふふつ、私は君達と戦うつもりは無いよ。君達は戦わない方がいい・・・それが君達の為になる。」

「俺達の為、ねえ。何故だ？」

「何故なら・・・負けるからさ。」

全員の顔つきが険しくなる。

実際に戦う前にお前らは負ける、なんて言われるのは侮辱以外の何物でもない。

練習も無駄、と吐き捨てるアフロデイ。

「そんなことない!!練習はおにぎりだ!俺達の血となり肉となるんだ!!」

守らしいことを言ったな。それでいて中々の得ている。

それを笑うアフロデイに、笑うことではないと怒りを露わにする守。

「それじゃあ・・・それが無駄なことであると証明してあげよ。」

突如ボールを高く蹴りあげるアフロデイ。気づいたらその姿を消し、ボールと同じ高さまで。

そしてそのまま蹴る。

なんだあのシュート、必殺技でも無いのにこの威力・・・見ているこちらまで寒気がするような威力だ。

守は簡単に弾き飛ばされる。

「守ッ!？」

「大丈夫か円堂!!」

俺達を振り払い立ち上がる守。

もう一度撃つてこい、本気じゃないだろと憤慨する。ダメだ、ムキになっている……

「よせ、守。らしくないぞ。」

「離せよ……さあ、撃つてこいよ!!」

が、そのまま姿を消すアフロディ。

これでいい。これ以上撃ち込まれたら守が持たなかった。

「立てるか、守。」

「ああ……悪い、ちよつと焦っちゃまった……大丈夫、今ので新しい技がちよつと見えた気がするよ。」

守に手を伸ばし、立ち上がらせる。冷静さを取り戻したようだ。

しかし、これでハツキリした。

世宇子の攻撃は俺達よりも強い。遥かに。

やはりマジン・ザ・ハンドの力が必要か……それに、化身の力も。

「合宿をしよう。皆で飯でも作ってな。」

決勝戦2日前、響木監督がそう提案する。

確かに良いかもしれないな……皆の仲をより深めるいい機会だ。試合前に団結力を高めるためにも、いい考えだ。

「でも、そんな呑気なことを言ってる場合じゃ・・・」

「まあいいじゃないか守。気を張りつめすぎても良いことは無いぞ。」

「けど柊弥・・・」

「まあという訳で、17時にまた荷物を持って集合だ。」

合宿をやることと言う方針で固まった。守はどことなく腑に落ちないといった様子だったが、やってる内にその考えもなくなるだろう。

さて、ここで練習は一旦終了だし俺も帰って荷物もってくるか・・・

17時近くになり、皆が集合する。

枕投げをしているヤツら、布団の前にフィギュアを並べてるヤツ、皆気が緩みきっている。

ま、こんくらい緩めておいた方がいいパフォーマンスが出来るかもしれないしな、良いんじゃないか。

夜飯はカレー、早速準備に移るそうさ。

俺は春奈と一緒にじゃがいもの皮むきだそうさ。それを伝えに来た秋の顔がどことなくやけているのを俺は見逃さなかった。

「柊弥先輩、料理も出来るんですね。」

「まあな。趣味の一環としてたまりにな。」

「今度私にも振る舞ってくださいよー!」

「いいぞ、今度家に来るといい。」

何か知らぬ間に家に招待することになってしまった。

まあ、いいが・・・

ある程度準備を終え、火を扱う段階に入った。

役割ごとに割り振られており、ここまで来ると俺のやることは無いため1人外れる。

・・・ここなら、誰も来ないか。

「集中、集中だ・・・」

目を閉じて座り込む。

化身は、俺流に言葉で表すなら内に秘めるエネルギーが見える形として具現化したもの。それを常に出し続けるから消耗も激しいというわけだ。

内なるものを解き放つには、まずはそれを知覚しなければならぬ。

何の音もしない場所で、1人目を瞑り気を巡らせる。

俺の中のエネルギーを感じ取ろうと試みる、が何も感じられない。

・・・この練習法は違うのだろうか。

数十分そうしていると、皆の方向が騒がしくなり始めた。

・・・出来たのだろうか。行ってみよう。

「幽霊？」

「はい、それでみんな校舎の中に・・・」

残っていた春奈に話を聞く。他にも監督や夏未、執事さんやらはいるが。

幽霊ねえ・・・大方壁山辺りが恐怖から幻覚でも見ただけなんじゃないかねえ。

数十分後、見慣れない人達と一緒に皆が帰ってくる。

雷門OBの人達だ。

出来上がったカレーを食べながら何故ここにいるのか話を聞く。何でも、「アレ」を持ってきたらしい。

・・・アレって？

そんな疑問は割と早く解決することになる。

カレーを食べ終え、イナビカリ修練場へと向かう。そこには見慣れない機械が。

マジン・ザ・ハンド養成マシンだそうだ。40年前・・・OBの人達がマジン・ザ・ハンドを身につけるために開発した。

それを使って守が練習を始める。

手動で動く様々なギミックを避けながら、交互に両脚でマークを踏みながら奥まで渡る・・・という機械らしい。

これでマジン・ザ・ハンドに大切なへと尻の使い方マスターできるらしい。これ乗り越え、実際に試してようやく完成するそうだ。

「大丈夫か？」

「少し休憩にするか？」

「だったら、俺達で回すでやんす！」

1年達が俺達の代わりにギミックを動かす役を買って出る。それを見て他の皆も協力すると言い出す。

「・・・何やってんだ俺は。こんな仲間がいるのに、マジン・ザ・ハンドが出来ないからって1人で焦って・・・俺は大馬鹿者だ！」

「そうだぜ守・・・皆ついてる。」

「ああ・・・皆、頼むぜ！」

守が仲間の大切さを認識し、練習再開。

どのくらい経過しただろうか。皆で協力して装置を動かしながら、守はどうとうその機械の奥まで渡りきってみせた。

「よっしやああああ!!」

「よし、次のステップだ!!」

場所を変えて、守に対して俺、修也、鬼道が向き合う。

「へそ、尻に力を入れて止めてみる！さっきの感じを忘れるなよ！」
「はい!!」

「よし、行くぞ!」

鬼道が高くボールを蹴りあげる。ボールは稲妻のようにエネルギーを纏いながら落ちてくる。それを俺ら3人が撃ち出す。

「「イナズマブレイク!!」」

守の代理を俺が務めてイナズマブレイクを放つ。

すると、守には先程まで無かった力が満ち始める。これは・・・完成の兆しか!

が、イナズマブレイクを止めきれずゴールに押し込まれてしまう。

「もう1回!!」

「行くぞ!!」

が、やはり成功しない。

「監督・・・」

「ああ・・・何か一つ、根本的なものが欠けている・・・やはりこれは幻の必殺技なのか?」

思わず暗い雰囲気に含まれる。

が、その雰囲気打破したのは秋だった。

「まだ試合は始まってもないんだよ!?!10取られたら11点、100点取られたら101点、取り返せばいいじゃない!!」

「木野先輩の言う通りですよ!!」

「確かに・・・その通りだ。」

すぐさまそんな雰囲気は熱意へと変わる。

「よし、俺達の底力見せてやろうぜ!!」

「!!おう!!」

決意を新たに、今日はここで練習終了。

風呂を沸かし、全員入ったところで就寝だ。

・・・が、俺は1人抜け出す。

やはり、化身に繋がる何かを手に入れておきたい・・・

「はあ、はあ・・・ダメか。」

思い当たる節は全て試したが、やはりダメだ。

極限の集中力の下、自分を追い込む・・・これが俺の出した結論だったが、これも違かった。

あの時・・・俺は確かに追い込まれていた。だから自分を追い込んでみたが・・・

「あーもう、何が足りないってんだよ・・・」

何が足りないのか、何も分からない。

ダメだな・・・焦りすぎている。一旦思考をリセットしよう。全てを投げ出すようにして芝生に寝転がる。

すると、急に額に冷たいものが触れる。あまりに急なものだから変な声を出してしまった。

「・・・何だ、春奈か・・・驚いた。」

「ふふっ、今変な声出てましたよ、柊弥先輩。」

寝転がる俺の隣に春奈は腰掛ける。

「もう遅いんだぞ。寝なくていいのか?」

「それ、柊弥先輩が言いますか? 折角お風呂にも入ったのにまたこんな汗だらけになって。」

「・・・何も言えないな。」

しばらく沈黙が続く。先にその沈黙を破ったのは春奈の方だった。

「柊弥先輩・・・私の事、どう思ってます?」

「どうって・・・働き者で気も遣えて、いいマネージャーだと思ってるよ。」

「そうじゃなくて・・・その、女性としてどう思われてるのかなって・・・」

・・・まずい、なんて返せばいいか分からない。

変に口説くようなことを言ったら、どうなるか分からない。

もしかしたら鬼道に殺されたり――

「私は、柊弥先輩の事が好きです。」

「――へ?」

「いつもの一生懸命なところも、私に向けてくれたあの優しいところも、全部好きです・・・」

心臓の音が高鳴るのを感じる。かつてないほどに。

「もう一度聞かせてください・・・柊弥先輩は、私の事どう思っているんですか?」

「・・・それは。」

これじゃ、まるで告白されているみたいじゃないか。

この前も春奈と話したように、告白されるのは初めての事じゃない

い・・・けど、今回は違う。

最近、悩んでいたんだ。俺は春奈をどう思っているのかって。鬼道に話した通り、悪くは思っていない。寧ろ良く思っている。一緒にいれば楽しいし、信頼も出来る。他の人とは何か違うって、最近自覚し始めた。

けど、これが好意なのか何なのか・・・俺には分からない。

「・・・それは、今は言えない。なんて言えばいいか分からないんだ。」
「・・・そうですか。」

「でも約束する。決勝が終わった時・・・必ず答えを出すよ。俺は。」

自然にそう口に出していた。

「決勝が終わった時、ですか・・・分かりました。じゃあそれまで・・・私待ってますから。」

「・・・ああ。」

「それじゃあ・・・おやすみなさい。あまり遅くまで起きてちやダメですよ?。」

「心配には及ばないさ・・・おやすみ。」

春奈はこの場を去っていく。

決勝が終わった時・・・か。我ながら勝負を焦ったかもしれないな。明後日には告白の答えを返す。って宣言したようなものじゃないか。

「はあ・・・分かんねえ。」

それは化身の出し方か、はたまた春奈についてか、自分のことについてか。

だが、言ってしまった以上もうあとには引けない。

絶対にこの想いにケジメはつける。絶対に・・・

勝負の日の朝。

洗面台にて自分の顔と向き合う。

あれから、俺の化身は音沙汰無いし、守のマジン・ザ・ハンドも結局未完成のまま終わってしまった。

だが、それでもやるしかないんだ。

・・・俺の結論は、もう決まっている。

「行ってきます。」

戸を開けて外へ出る。

穏やかな朝日が周囲を照らし、これから死闘を繰り広げることになるとは一切感じさせない空気だ。

これから俺が赴くのは戦場。真剣勝負の場だ。

勝たなければならぬ。ここまで頑張ってきた自分達に報いるためも。

だが、忘れてはならない。

勝ちに執着して、焦ってはいけない。

そう、俺がやるべきなのは――

――サッカーを楽しむことだ。

第21話 絶望を前にしても諦めず

「どうなってるんだ、これ。」

会場までやってきた。

が、どういうことだろう・・・目の前には「閉鎖」の張り紙が。

おかしい・・・確かに試合会場はここであっているはず。俺達とはかく、監督や夏未が間違えるとは到底思えない。

「皆聞いてー！」

夏未が注目を集める。

何やら先程電話をしていて、その内容のようだ。

どうやら、この直前で試合会場が変更になったそうだ。その変更先の会場というのが・・・

「あれ・・・なのか？」

突如、姿を現したスタジアム・・・空から。

信じられないが、そのままの意味である。空からスタジアムが降りてきたのだ。スタジアムの周囲には古代文明を思わせる装飾が施されており、神聖な雰囲気を感じさせる。

そのスタジアムの名を・・・ゼウススタジアム。

ゼウススタジアムが着地し、それに従い俺らも中へ入る。

中も外見と同じく神聖な雰囲気を醸し出しており、先程までいた世界とは別の世界に来てしまったのではないかと錯覚させられる。

急な会場変更・・・そしてこんな会場を用意した。こんなことが出来るのは影山しかない。

大会運営に影山の圧力が掛けられたと見て間違いないだろう。

理由は・・・自分の力を知らしめるために、と言ったところか。

「円堂、話がある。」

スタジオアの雰囲気皆が気圧されている中、響木監督が急に守を呼びつける。

そして、その口から飛び出した言葉は・・・今ここで言うべき内容とは思えなかった。

「お前の祖父・・・大介さんの死には、影山が関係しているかもしれない・・・」

「影山が——ッ!？」

なぜ監督が今そんなことを言ったのか分からない。

試合前に選手の不安を煽るようなことをわざわざだ。何か狙いがあるのだろうか・・・その狙いが俺には分からない。きつとみんなにも。

守は激しく肩を震わせながら息を切らす。その顔は見たことないような怒り、焦りに染まっていた。

こうなることは予測できていたはず・・・一体何故。
今の俺に出来るのは・・・これくらいだ。

「・・・柊弥。」

「大丈夫だ。」

守の肩に手を置く。

そうだ、一人で抱え込むな。俺達は仲間だろ？

俺に続き修也も、鬼道も守へ近づく。それを見て皆が守に声をかける。

「監督・・・皆・・・」

守が深呼吸して言葉を紡ぐ。

「こんなに俺を想ってくれる仲間、皆と会えたのはサッカーのおかげなんだ。影山は憎い！けど、そんな気持ちでサッカーをしたくはない・・・サッカーは楽しくて、面白いんだ。1つのボールに皆の思いをぶつけ合っていく・・・最高のスポーツなんだ!!だから、この試合も俺はいつもの・・・俺達のサッカーをする！皆で優勝を目指す！サッカーが好きだから!!」

流石は守だな。

真つ直ぐで、純粹で、馬鹿みたいに素直にサッカーと向き合う。それでこそ、俺達のキャプテン・・・円堂守だ。

「着いていくぜ・・・キャプテン。」

「円堂!!」

「キャプテン!!」

「さあ、試合の準備だ!!」

「二はい!!」

もう心配ないな。

そうだ、俺達はいつも通りのサッカーをすればいい。

ロッカールームへ向かい、ユニフォームに着替える。

皆全身痣だらけで、どれだけ練習を重ねてきたかがよく分かる。

この努力も、想いも全てぶつけよう。

相手がどんな陰謀を抱いていようとも、俺は俺のサッカーを楽しんでみせる。そう誓ったんだ。

着替えを終え、再びグラウンドへ。

観客席は人で満ち溢れ、これまでにない盛り上がりを見せている。

「いよいよ始まるんだな、決勝が!」

ベンチにて守を中心に集まる。

「皆とこの場所に立てて、信じられないくらい嬉しいよ!!俺、このメンバ―でサッカーをしてこれて良かった!皆が俺の力なんだ!!」

そう語る守の眼はいつにないほど闘志に燃えていた。

「よし、まずはアップだ!!」

「「おう!!」」

全員でアップに入ろうとしたその瞬間だった。

一瞬風が吹き荒れ、その風の方向に目を向けると先程まではいなかった世宇子イレブンがいた。

何か異質なものを感じる。

そんな何かを拭えぬままアップに入る。

いつまでも引き摺る訳には行かない。無理やりに思考を切替える。ベストパフォーマンスを発揮する為にも、十分に身体を暖めておかなければならない。

『さあ間もなく試合開始です!!』

アップの時間も過ぎ、試合開始を目前にベンチで円陣を組む。

「いいか皆!全力でぶつかれば何とかなる!!」

「俺達は俺達のサッカーを、思い切り楽しもう!!」

守の言葉に続き、目線を送る。

「・・・勝とうぜ!!」

「「おう!!」」

気合いに満ちた声を発する。

全員で容器に入った水分を摂取している世宇子中を横目に俺達はピッチの中へ。それぞれが中央に整列する。

キャプテン同士である守とアフロデイが握手を交わす。その際に何か言葉を交わしたように見えたがその内容は聞き取れなかった。

「よし、行くか・・・！」

スタメンは

F W 俺、修也、染岡

M F 鬼道 一之瀬 少林

D F 風丸 壁山 栗松 土門

G K 守

ベンチは半田、松野、影野、穴戸、目金だ。

そしてとうとう・・・

『試合開始だ!!キックオフは世宇子中から!!』

始まった。

ボールはすぐさま後ろのアフロデイへと渡る。

それを奪わんと俺ら前陣組は襲い掛かる。先手必勝だ。

「君達の力はわかっている・・・僕には通用しないということがね！へ
ブンスタイム!!」

アフロデイが指を鳴らした、その瞬間だった。

気づいた時にはアフロデイの姿は俺達の前に無く、俺達の背後にアフロデイは立っていた。

「・・・えっ？」

そんな声を漏らした瞬間、突風が巻き起こり高く打ち上げれる。そのまま地面に叩き付けられるが、何とか受け身を取る。

何だあの技は・・・!?

後ろの皆もその技の前に手も足も出ず、全員抜かれてしまった。

アフロデイは余裕綽々といった様子でゆつくりと歩きながらゴールへと迫っていった。

そしてシュート体勢へ。

「——あいつにシュートを撃たせるなツツ!!」

「ふふ・・・天使の羽ばたきを聞いたことはあるかい？」

そう叫びながらアフロデイへと向かっていった。

が、遅すぎた。

アフロデイの背中からは左右3枚ずつの天使の様な翼が生え、アフロデイは光と共に空へ舞う。

腕を開くモーシヨンと共に、ボールには凄まじいエネルギーが集約する。

ダメだ、あんなシュートは——

「ゴツドノウズ!!。これが神の力!!」

守はゴツドハンドで迫るボールを押しさえ込もうと試みる。

が、その抵抗も虚しく神の手は一瞬で砕け散る。

俺達は、1度もボールに触れることなく失点を許したことになる。

「ゴツドハンドが・・・!」

「やはり、通じないのか・・・!?!」

マシン・ザ・ハンドは完成せず。つまり、今の守には単体であるシュートを止める手段は無いという事だ。

守の手は震えている。たった一度でこれ程までのダメージが・・・

「点を取られたのなら、取り返そうぜ！」

一之瀬と風丸の呼び掛けに俺達は意気込む。

そうだ、取られたなら取り返す・・・そしてそれは俺達の仕事だ。
やってやるさ・・・！

「行くぞ、修也、染岡!!」

3人でキックオフと同時に攻め上がる。

が、世宇子は誰1人もして俺たちの行く手を阻もうとしない。

余裕で止められるってことか？面白い・・・その余裕、後悔させてやるよ・・・!!

ゴールを前に、染岡へボールを渡す。

染岡と修也のドラゴントルネード、それに俺の轟一閃を上乘せして

「――雷龍一閃・焰!!」

雷を得た炎龍が相手の大柄なキーパーへと襲い掛かる。

「ツナミウォール!!」

キーパーが両手を地面に叩きつけると、巨大な津波が地面から吹き出して来た。その津波に包まれた龍はその姿を消し、ボールはキーパーに驚掴みにされていた。

「俺達3人の連携シュートが・・・!?!」

そしてキーパーは俺達にボールを投げ渡してくる。

・・・何度でも撃ってこいってことかよ。

いいぜ、やってやろう・・・!!

「行け！」

「おう!! 皇帝ペンギン!!」

「2号!!」

鬼道、修也、一之瀬によって帝国の皇帝ペンギン2号が放たれる。だが、同じように止められる。

またボールをこちらに投げ渡してる。ならば――

「「ザ・フェニックス!!」」

「ギガントウオール!!」

上がってきた守、土門と共に一之瀬がザ・フェニックスを放つ。

が、巨大化したキーパーが拳をボールに叩き付けると、フェニックスはいとも簡単に潰されてしまった。

これが意味する事は1つ。俺達のシュートは何一つ、こいつには通用しない・・・つまり、点を取れない。

まさかここまでとは・・・

キーパーの豪快なスローでボールは一気に前線。

駆け上がる世宇子の行く手を風丸、壁山、少林が塞ぐ。

「ダッシュストーム!!」

走行と共に暴風が3人は襲い掛かる。

風に卷かれた3人は高く打ち上げられ、地面へと落ちる。

「リフレクトバスター!!」

そのままシュートを放つ。

気合いを発すると共に、岩の塊が現れる。

ボールをそれに向かって蹴ると、何回も岩の塊の間を反射し威力が

何倍にもなったボールがゴールへと襲い掛かる。

「ゴッドハンド!!」

再び神の手が顕現するも、いとも簡単に打ち破られる。

これで2点の失点を許してしまったことになる。

開始早々、これはまずすぎる。しかもこちらのシュートは何一つ通じなかった・・・絶体絶命もいところだ。

しかも、少林が負傷。続行は不可能とみてマックスと選手交代。

こちらボールから試合再開。が、すぐさまボールは奪われ先程と同じくFWへ渡る。

「好き勝手させるかよ!」

「全員サッカー・・・」

「それが雷門でやんす!!」

土門、マックス、栗松が同時にボールを奪いにかかる。

「ダッシュストーム!!」

が、先程と同じ技で抜かれる。

ボールはまた別のFWへ。

「デイバインアロー!」

ボールに向かってムーンサルト。そこから連続蹴りでエネルギーを注ぎ込み、最後に思い切り蹴り抜いた。

凄まじい速さで迫るボールに守は爆裂パンチで応戦。

何度も、何度も何度も拳を叩き込むが、無情にもそのままゴールに押し込まれる。

これで、3点の失点。

何か、何か手立てはないのか・・・!?

「う・・・ぐッ・・・!?」

交代したばかりのマックス、そして栗松が負傷。半田、影野と交代する。

交代こそしていないが、さっきこの技を食らった風丸や土門もかなりボロボロだ。相手に技を撃たせないようにしなければならぬ。

が、それは至難を窮めた。

「メガクエイク!!」

こちらボールから攻め上がる。何とか突破口を切り開かなければ・・・!!

が、ボールを持ち共に上がって行った染岡と半田は相手のディフェンス技によつて傷を負わされる。

3度目の選手交代・・・目金と穴戸が入る。

もう、これ以上の交代は出来ない・・・

「クソッ・・・!」

「終弥、俺達で何とかするぞ・・・!」

再びこちらから再開。修也と共に駆け上がるがコースを全て潰され、止むを得ず後ろの目金へ。

しかし、目金の背後には先程のDF。しまった――

「目金エエ!!避けるオオオ!!」

「え――」

「メガクエイク!!」

無情。

そんな言葉が今の状況にはピッタリだろう。
先程と同じように目金は地面に打ち付けられ、ベンチへ下がる。
もう交代出来るやつはいない。つまり、俺達は10人で戦わなければならぬ。

自身の中に、ドス黒い感情が渦巻くのが分かった。

怒りだ。何も出来ない自分と、仲間を傷つけられたことへの。

このまま、何も出来ずに終わっていいのか？皆と勝つって約束したんじゃないのか？

そうだ、このままじゃダメだろ。

「——こんな結末、認められるかアアアアア!!」

「柊弥!!」

これ以上奴らの好きにはさせちやダメだ。

そう思いボールを奪うべく、修也の静止を振り払って駆け出す。

「ふっ・・・ダッシュストーム!!」

「ぐアアア!!」

高く身体を浮かされ、為す術なく地面に叩きつけられる。
が、立ち上がる。

再び地面に叩きつけられる。それでも立ち上がる。

「・・・っひんぐ!!」

鋭いチャージで数メートル吹き飛ばされる。

その内に世宇子は皆を必殺技で徹底的に痛めつけ始める。

やがてボールは雷門ゴール前にまで進む。全員、地面に蹲っている。

軋む身体を奮い起こす。

痛みが何だ、このまま黙って仲間を傷付けさせるか。

「ぐツ!？」

ゴール前では守がアフロデイによって何度も打ち込まれていた。あのキック力で放たれるボールを何度も受け、既に満身創痕。俺は何とか守へ放たれたボールを胸で受け止め、自分のものにする。

「ほう．．．まだそんな余力があるとはね。驚いたよ．．．だが。」
「うぐツ!？」

目にも止まらぬタツクルでボールを奪われる。吹き飛ばされたところに守が寄ってきて声を掛けてくる。

「終弥ツ!!お前、こんなボロボロに．．．」
「お前が人の事言えるかよ．．．!俺はこのチームの副キャプテンだぞ?こんな所で．．．這いつくばってられないんだよ!!」

立ち上がる。

身体を支える脚は既に悲鳴を上げているし、その他の部位だって動くことを拒否しているようにすら思える。

そんな身体の静止をも無視し、俺はアフロデイを睨みつける。

「キャプテンである君が決めたまえ、円堂君。棄権するか、棄権しないのか。これ以上仲間を傷付いても良いのかい?」

アフロデイはそう守に問い掛ける。

守はボロボロになった皆を見て言葉を失う。

「このままじゃ皆が．．．」

守がそう言葉を零す。

皆の危険を最大限考慮しているんだろう。

だが、違うぞ。

俺達のことを思っているなら、お前がとるべき行動はそれじゃない。

「守、諦めんのかよ……!?」

「そうだぞ、円堂……!!」

守にそう問い掛けると修也が前からやってくる。

「俺は戦う……そう誓ったんだ!」

「豪炎寺の言う通りだ……まさか、俺達のためと思っているなら……大間違いだ!!」

風丸がふらつきながらも立ち上がり、守にそう声を掛ける。

「最後まで諦めないことを教えてくれたのはお前だろう!」

「俺が好きになったお前のサッカーを見せてくれ!」

「円堂!!」

「キャプテン!!」

皆が後続く。

「立てよ守……俺達は、まだまだ戦えるぞツ!!」

守に手を伸ばす。すると守は力強くその手を握り、立ち上がる。

「俺は……俺達は、諦めない!!」

よく言った、守。

それを聞いてアフロデイは自陣へと戻っていく。
俺達のスローインからの試合再開だ・・・まだまだ前半。

「修也!!」

修也へボールを投げる。それを受けて修也と数人が駆け上がる。

「ディフェンス陣は攻撃陣を徹底的に狙え!!」

その指示でDFがメガクエイクで上がっていったヤツらに揺さぶりをかける。オフエンスは守備陣を、キーパーは重点的に痛めつけるようにアフロデイが全体に指示を出す。

それを受けて容赦の無い暴力が吹き荒れる。

先程以上に全員ボロボロに。

守はマジン・ザ・ハンドを狙うもやはり未完成のまま。

ボールがアフロデイに渡り、このままでは・・・と思ったらだ。アフロデイがボールをラインの外に出し、試合を止めた。

何が狙いだ・・・?

ベンチに戻って行ったゼウスは全員同時に水分補給を始める。

・・・何か妙だ。さつきも同じような感じで水分をとっていた。

相手がボールを出したため、こちらからのスローインで試合再開。

ボールを出した瞬間、容赦の無いタックルでボールを奪われる。先

程よりも、その力が強くなっている気がする。

それは気の所為ではなかった。

俺達に向けられる必殺技の威力も、確実に先程より強くなっている。
俺達は更にボロボロになっていく。

これは・・・最初の帝国の時よりもボロボロかもな。

「限界だね・・・主審。」

「試合続行不可能の為、この試合世宇子中——」
「——まだだ。」

主審が試合終了の合図を出そうとした瞬間、それを遮る。守と同時に。

身体を起こし、よろめきながらも主審の方へと歩いていく。

「まだ試合は終わっていない……！」

「そうだ、誰が棄権するなんて言った……!!」

「しかし、君達だけでは。」

「そいつらだけじゃない……」

その一言を皮切りに、地に伏せていた雷門イレブンは全員立ち上がる。

身体がどれだけ痛めつけられようとも、その目に宿る闘志は未だ燃やし続けながら立ち上がる。

「俺らは、何度でも立ち上がる……倒れる度に、強くなる。お前らなんかは……負けるかよ!!」

「では試してみよう……」

そうアフロデイに声を荒らげると、アフロデイは翼を展開し空高く舞い上がる。

ゴツドノウズだ。

来いよ……どれだけ無様晒しても、俺と守で止めてやる……!

「ゴツドノウズ!!」

文字通り必殺のシュートをアフロデイが撃とうとした瞬間、ホイッスルが鳴り響く。

ボールに込められたエネルギーは消えてなくなり、アフロデイと共に

に着地する。

「命拾いしたね。」

そう言つてアフロデイはベンチへ戻つていく。

・・・実際その通りだ。命拾いした。

あんな心の中で啖呵をきつたものの、無策であんなシュート止められるはずがなかった。

救われたのは・・・俺達の方だ。

「守、立てるか?」

「ああ、悪い・・・」

守に肩を貸しながらベンチへ下がる。

全員がベンチに下がってもおかしくないほどの傷を負っていた。

何とか戻つてきて座り込むと、夏未が全員に話を始める。

「神のアクア?」

「ええ。神のアクアが世宇子の力の源よ。」

「・・・ドーピング剤、というわけか。」

腸が煮えくり返りそうになる。

影山・・・どこまでサッカーを侮辱すれば気が済む。

「絶対に、俺達はそんなものに負けはしない・・・!」

そう呟くと、後ろから手を握られる。

春奈だ。

「もう、終弥先輩が、皆が傷付く所を見ていられないです・・・!」
「春奈・・・」

春奈が泣く泣く訴えてくる。

「・・・それでも俺らはこんな所で止まってられないんだ。何としてでも勝って、アイツらが間違ってることを証明してやらなければならぬ。何より・・・優勝することが俺達の悲願だから。」

「・・・でも、でも!」

「大丈夫だ。俺らは必ず勝つから。」

強く、それでいて傷つけないよう春奈の手を握り返す。

涙を流しながらこちらを覗き込む春奈。その不安を少しでも取り除こうと笑みを浮かべる。

「俺達を・・・信じて待っていてくれ。」

「・・・はい。待ってますから。」

そう言つて手を離してくれる。

全員の視線が集まっていた。それを良いことに、俺は腹の底から声を絞り出す。

「皆ア!!絶対に・・・諦めねえぞオオ!!」

「「・・・。。。。。。おオオ!!」」

その心からの叫びに皆が答えてくれる。

俺は、俺の大好きなサッカーを最後までやり遂げてみせる。

決めたんだ、誰よりもサッカーを楽しむんだって。

その為にも・・・この試合には絶対に勝つ。

勝ってアイツらに教えてやる・・・サッカーはこんなスポーツじゃない。楽しいものなんだと。

絶対に証明してやる・・・!

第22話 光り轟け仲間と共に

『フットボールフロンティア全国大会決勝、後半戦開始!! さあ雷門反撃なるか!?!』

「行くぞ!!」

後半開始。ホイッスルと同時に俺は修也、鬼道と攻め上がる。立ちはだかる大柄な相手5番。

「神には通用しない。」

ボールを介してぶつけ合う脚にそう言っただけ相手は力を込める。後ろから修也、鬼道が力を合わせてくれる。だがそれでも目の前の壁を突破するには足りなかった。

「無駄だ・・・メガクエイク!!」

5番が大地を踏み鳴らす。それと同時に地面が砕け、盛り上がる。空中に身を投げ出された俺らは抗えずに地面に打ち付けられる。

前半の時点で何度もこうして傷付けられている・・・今更こんなので、立ち止まれるかよ。

雷門ゴールへ向かうボールを追いかける為、覚束無い足取りで進み続ける。

時に大地が、時に暴風が俺達に牙を剥き、更に追い詰められて行った。いくら心は折れずとも、身体に蓄積させられた負担は時に残酷なまでに正直だ。

それでも、それでも歩みを止める訳には行かない。

もはや歩いているのと大して変わらないスピードでしか走れていない。情けないな・・・後半はまだ始まったばかりだと言うのに。

必死に前に視線を送ると、守とアフロデイが睨み合っていた。

アフロディはわざと守にボールをぶつけ、執拗に痛めつける。

「——させるかア!!」

「何・・・?」

守目掛け放たれたボールを頭で受け止める。衝撃が頭の中を跳ね回り、視界が歪んで見えた。

それがどうした。

「・・・もはや、狂っているね。」

「何とでも言えよ。」

舌を噛み、神経を駆け巡る痛みで失神を耐えた。

口の中には血の味が充満する。それが寧ろ気つけになる。

「柊弥・・・ッ!!」

「いい加減・・・諦めたまえ!!」

「断るッ!!」

放たれたボールを守の代わりに身体で受ける。

腹に、脚に、顔面に。

幾度となくボールが撃ち込まれたがそれでも俺は倒れない。否、倒れる訳にはいかない。

「ふッ!!」

「——ッ!?!」

突如、身体が無意識に右に逸れた。いや、逸らされた。

守に横から突進されるようにぶつかられ、予想してなかった衝撃に身体が踏ん張りきれず倒れ込んでしまった。

アフロディが放ったボールを守がパンチングして弾く。

「守・・・!？」

「来いよ・・・ボールを止めるのは、キーパーである俺の仕事だ!!」
じゃあお構いなく、というようにアフロデイが守へボールを容赦なく撃ち込む。

再び立ち上がろうとするも、1度倒れた身体は中々言うことを聞いてくれない。そうしている間にも守はもつと傷付いていく。

どれくらい経ったか分からない。ふとしたタイミングで守もとうとう倒れ込んでしまう。

「サッカーを、大好きなサッカーを・・・汚しちやいけない。」

掠れた声が聴覚に飛び込んでくる。

それを聞いて俺は、もう何度目か分からないが身体を奮い起こす。守と俺は、同時に立ち上がる。

アフロデイが信じられない、と言った表情をこちらに向けてくる。大きく目を見開き、俺達を認めまいとアフロデイは再びボール撃ち込んでくる。それでも俺たちは折れない。

倒れても、また立ち上がる。

試合はまだ終わっていない。

「そんなことは・・・そんなことは!」

「許しちやいけないんだ・・・!」

守の言葉に続く。アフロデイを真っ直ぐ見据えて。

その言葉に、アフロデイの表情が曇り、身体が震え出したのを俺は見逃さなかった。

更に、倒れていた仲間達も再び立ち上がる。

「——そんなことが、あるものか!!」

アフロディは声を荒らげる。
全身に更に力を漲らせ、こちらを睨み付けてくる。
これは、来るな。間違いなく全力で撃ち込んでくる。

「これは・・・大好きなサッカーを守る為の戦いだ!!」

「ああ・・・俺達は、絶対に負けない!!」

「円堂!!」

「加賀美!!」

感じる、皆のサッカーへの想いも、情熱も。

「神の本気を知るがいい・・・!!」

「来るぞ、守!!」

「ああ!止めるぞ、柊弥!!」

アフロディが翼を展開する。その翼は先程よりも大きく、そして神々しい。正しくその様は”神”と言える。

そんな神にも俺は・・・いや、俺達は立ち向かう。

サッカーが・・・好きだから!

「真、ゴツドノウズツツ!!!」

先程とは比べ物にならない力がこちらへ襲い掛かる。
それでも、俺達は止めてみせる。これ以上点はやらない。

「柊弥!!時間を稼いでくれ・・・必ず、成功させるから!!」

「おう!任せろ!!」

圧倒的な光が降り注ぐ。

俺はそれを迎え撃つべく飛び上がる。

迫る神の怒りを真正面から受け止める。

「お、おオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「柊弥!!」

「柊弥先輩!!」

「加賀美!!」

俺は負けない・・・必ず、このボールの勢いを少しでも殺してみせる・・・!

そうすれば、必ず守が止めてくれる。あいつは嘘をつかない! 脚に激痛が走る。それでも抗う。

「——絶対に、諦めるかアアアアアア!!」

刹那、全身に力が満ちる。

身体の表面を影が包み込む。

いける、これなら——

「うおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

獣のような咆哮と共に力を込めると、ボールの威力が弱まっていくのを感じる。

これ以上は無理だと脚が叫ぶ。これだけ時間を稼げば、後は守が——!!

「止めてくれ・・・守ツツツ!!」

頃合いを見てボールから離れる。

すぐさま溢れる力を塞ぎ止める。俺には、まだやるべき事がある。

守の方へと目を向ける。

迫るボールに対して守は背を向けていた。

「今更怖気付いても無駄だ!!」

いや違う。守は怖気付いてなんかいない。

心臓の辺りに添えた手に、力が流れ込んでいるのを俺は確かに見た。

「いけエエエエエ!!」

「これが俺の・・・マジン・ザ・ハンドツツ!!」

守の気迫に答えるように守の背後には魔神がその姿を現す。

凄まじい力と頼もしさを感じさせる魔神は、神の怒りを真正面から受け止める。

眩い光が収まる頃には、ボールも守の手に収まっていた。

「頼んだぞ、柊弥ツツ!!」

「任せろ!!」

守からボールを受け取り前線へ駆け上がる。

目の前にはアフロデイが立ちはだかり、ボールを俺の脚と挟み込むように蹴りを放つ。

拮抗状態から力は徐々にアフロデイ優勢へと傾き始める。

「負けるかアアアア!!」

「何ッ!？」

自分の背中から何かが溢れ出すのを感じた。

それを見てアフロデイが驚きの声を上げる。

やがて、ボールに注ぎ込まれたエネルギーが爆発したように溢れ出し、アフロデイを吹き飛ばす。

俺の背中から溢れ出したモノは段々と形を作る。

それが完全な仕上がりと化したのを知覚し、その名を叫ぶ。

「星王、ネビユラス!!」

ようやく出てきてくれたか。

全身に先程とは比にならない力が満ちていくのを感じる。

「何だ・・・何なんだその力はッ!?!」

「俺の・・・サッカーへの想いの結晶だッッ!!」

驚きへたり込むアフロデイを余所に駆け上がる。

立ち塞がるDFを全員薙ぎ払いながらゴールを見据える。

化身を出した状態で必殺技なんて出したら、この後動けなくなるだろう。だがまだ点は取らなければならない。

なら――

「――喰らえエエエエ!!」

そのままシュートを放つ。

ノーマルシュートといえど、化身の力が乗ったそれは並の必殺シュートの比ではない威力を誇る。

先程のアフロデイのゴッドノウズにも勝るとも劣らないだろう。

「ツナミウオール!!」

放ったシュートは津波に包まれる。

が、数秒も競り合うことなくボールはゴールへと突き刺さった。

『ゴ、ゴオオオオール!! 円堂のマジン・ザ・ハンドで止めたボールを、加賀美が魔神に似た何かと共にゴールへ叩き込んだアアア!! あれは何なのでしょわか?! 雷門中、1点を返したアアア!!』

「よっしやアア!!」

走って寄ってきた皆にもみくちやにされる。

だがまだ油断は大敵。これでも2点差なのだから。

世宇子キツクオフで試合再開。

アフロデイが単身攻め上がり再びゴツドノウズを放ったが、疲労と焦りからか先程より威力がない。

「マジン・ザ・ハンド!!」

それを守はマジン・ザ・ハンドでしつかりと受け止める。

守がボールを前線に投げる。それを受け取った鬼道が高くセンターリング。その先には修也。

「行けッッ!!」

「おオ!!」

ファイアトルネードをほぼ真下に撃つ。そこに待ち構えていた鬼道がツインブーストの応用でボールをゴールへ叩き込む。

キーパーは再びツナミウォールを展開するも、そのシュートは津波を貫いた。これで2―3だ。

「神の力が・・・負ける・・・?」

青ざめた表情のアフロデイからボールを奪い、再び鬼道と修也に。先程と同じシュートを放つと、キーパーは反応出来ず無抵抗にゴールを許した。3―3、同点だ。

「皆!!決めるぞ!!」

「「おう!!」」

残り時間はあと僅か。延長になんか持ち込ませない!!
キックオフ後、すぐさまボールを奪いバックパス。

受け取ったのは一之瀬。そのまま守と土門と共に駆け上がる。

3人は一点で交差、炎に包まれたボールは空中で不死鳥として羽ばたく。

「最後の1秒まで諦めない!!それが俺達のサッカーだ!!」

「ザ・フェニックス!!」

放たれたザ・フェニックス。

不死鳥が羽ばたくその先には・・・俺と修也が。

「修也アアア!!!」

「柊弥アアア!!!」

2人同時に跳躍。

迫る不死鳥に更に炎を吹き込む。

「ファイアトルネードDD!!」

燃え盛る不死鳥は更にその炎を激しく燃やした。

不死鳥はグラウンドを包み込むほど巨大に。

「う、うわあああああああ!?!」

それを見て相手のキーパーは逃げ出す。

さらけ出されたゴールに不死鳥が突進する。

4-3・・・俺達の、逆転だ。

『ついに雷門勝ち越しイイ!!ここで試合終了、フットボールフロン

ティア決勝戦!!勝ったのは雷門ツツ!!劇的な大逆転勝利だアアア
!!!」

「・・・勝った、のか?本当に。」

思わずそう呟く。

「・・・ああ、勝ったんだよ俺ら!!全国一だ!!」

「・・・・・・・・やったアアアアアアアアア!!!」

全員が1箇所に集まり喜びを分かち合う。

喜びは冷めることを知らない。

「・・・僕達は。」

「アフロデイ。」

皆から抜け出し、唾然とするアフロデイはじめ世宇子中へと近づ
く。

「これがサッカーだ・・・忘れるなよ?」

「・・・本当の、サッカーか・・・」

手を差し出す。その手をしばらく見つめて、アフロデイは力強く握
り返してくる。

「完敗だ。優勝おめでとう・・・雷門イレブン。」

「ありがとう・・・また、サッカーしようぜ。」

そう言うと、少し意外そうな表情を浮かべるアフロデイ。が、すぐ
さま笑みを浮かべ、「また必ず」と言って去っていく。

「柊弥!!何やってんだよ、こっち来いって!!」

「悪い悪い・・・今行くわ。」

身体を引きずりながら守達の元へ行く。

観客からの声を一身に受けながら、自分達は優勝したんだという事実に震える。

俺達、本当に優勝したんだな・・・！

国内某所にて。

「急に呼び出してすまないね、グラン。」

「いえ・・・それで、用とは何でしょうか・・・お父様。」

グランと呼ばれた少年は自分呼び出した者・・・自分の父へと要件を問う。

「これを。」

「これは・・・？」

手渡されたのは何かの機械。

全体的に黒く、機械的な風貌をしておりその中心には紅く煌めく寶石のようなものが埋め込まれていた。

「それを使えば、どんな人間でも洗脳し、支配下に置くことが出来ます・・・それだけじゃない、高精度の計算を行い、想定通りの結果を得るために必要な行動を行うことだってできる。」

「これを俺に渡して、一体何を・・・」

「・・・取り込むのです、我々の計画をより完璧に出来る人間を・・・
例えば、彼とか。」

と言つてリモコンを操作する。

そこに映し出されたのは・・・凄まじい威力のボールに対し、全身に影を纏つて立ち向かう1人の少年。

「・・・彼を。」

「もう間もなく、各地への攻撃が始まる時間でしょう。とうとう始まるのです、私の計画が・・・それをどう使うか、最終的な判断はお前に任せます。グラン。」

と言つてお父様と呼ばれた男はその場を去る。

残されたグランの前に映る少年は、自分と同じ歳。それを無理やり操り、自分達の仲間にすることに僅かばかり躊躇わないはずがなかった。しかし。

「全ては、お父様の為に・・・」

知らない人間を不幸に陥れるのと、自分の愛するお父様から失望されること。

どちらの方が自分にとって重いことか、その少年は確かに把握していた。

決勝戦の帰り、俺はそのまま親の車に揺られていた。
疲れて瞼が重い……それもそうか、あんなに無茶したからな……

「……んあ？あれは……」

ふと窓の外に目を向けると、紫色の物体が揺らめくのが見えた。
その物体が急降下し、しばらくすると……

「うわッ!」

眩い輝きと共に、轟音と揺れが襲いかかってきた。
しかも、あれは雷門中の方向じゃ——!?

「父さん、降りるわ!!」

「えっ、何を——」

父さんの問いに答える前に車を飛び出す。

あちこちが痛む身体に鞭を振るって走り出す。

だって、雷門には……皆が。

俺は焦りを感じつつ、走る速度を上げた。

エイリア学園編

第23話 宇宙人の襲来

「——なんだよ、これ。」

目の前の凄惨な現状にそう呟く。

愛する母校は瓦礫の山へと姿を変え、見る影も無くなってしまった。

どうしてこうなった、と何度も心の中で問い掛ける。やがてその答えはごく自然に浮かんできた。そう、あの紫色の浮遊物のせいだろう。

あれが隕石のように急降下したことで雷門中はこんな有様になってしまったのだろう。その余波が音と衝撃波として遠くまで伝わってきた。

本当に隕石なのだろうか。だとしたら、なんで俺達がフットボールフロンティアで優勝したような日にわざわざ落ちてきたのか。

隕石ならば自然現象だろう。だが、そう齒軋りせずにはいられなかった。

「加賀美君、ですか？」

「校長先生!! ご無事ですか!？」

突如声を掛けられる。その方向に目をやると校長先生がいた。

その姿はどこか汚れており、少なからずこの余波に巻き込まれていたことが分かる。

「一体何があったんですか、どうしたこんなことに!」

「——宇宙人が、攻めてきたのです。」

”宇宙人”

常識的に考えたら出てくることない単語に、普段ならば笑い飛ばしていただろう。

だが、そんな状況ではない。何より校長先生の表情かそれを現実なのだと言語っている。

校長先生曰く、やってきた宇宙人は突如として勝負を挑んできたそうだ・・・サッカーで。

が、俺達は世宇子中との決勝戦で不在。代わりに雷門OBの人達はその宇宙人を名乗る連中と勝負した。

しかし、その宇宙人はあまりに強かった。雷門OBの人達を軽く蹴散らし、大差で打ち負かした後に黒いサッカーボールで後者を破壊したようだ。

黒いサッカーボール・・・おそらく、俺が見たあの紫色の物体だろう。

そんなことよりも、気になることがある。

「――皆は、皆は無事ですか!?雷門中に帰ってきたはずです!」

「雷門サッカー部の皆は隣町の傘美野中に向かいました。そこにまた宇宙人が現れたとか・・・」

傘美野中・・・隣町だから走ってもすぐ追いつけるだろう。

あいつらはサッカーで勝負を挑んでくるという。なら、皆はきつと逆に勝負を挑むはずだ。これ以上の好き勝手を許さないために。

「ありがとうございます。・・・俺も、皆と一緒に戦ってきます!」

「・・・本当は行かせたくありません。危険だと分かっていますから・・・でも、君は行くのでしょうか?皆が行っているのだから。」

「はい。・・・失礼します。」

そう話を区切り、全速力で駆け出した。

「勝負だ!! エイリア学園!!」

雷門町の隣に位置する傘美野中にて、雷門イレブンは宇宙人達：エイリア学園と対峙していた。

学校を守るために勝負を棄権した傘美野イレブンの代わりに、エイリア学園との勝負に身を投じる。

当然、激しい決勝戦を乗り越えた直後の出来事であるため疲労が身体に残っている。それでも闘志を燃やし立ち上がる。

「でも円堂君、一之瀬君に土門君、豪炎寺君に加賀美君だっていないのよ? 大丈夫なの!」

「大丈夫だ! 染岡のワントップになっても皆でカバーすればいい! 頼むぞ、皆!!」

「「おう!!」」

普通のボールを用意し、様式に則り試合前の整列を行う。

エイリア学園が名乗ったチーム名は“ジェミニストーム”

目の前の敵が宇宙人とはにわかには信じられないだろう。だが現に目の前の敵は自分達の前で凄まじい力を振るった。認めざるを得ない。だからこそ戦う。

「やあ、やるぞ!!」

意気込む雷門イレブンは裏腹に、待ち受けていたのは“蹂躪”だった。

先制攻撃で仕掛けた染岡のドラゴンクラッシュは相手キャプテンであるレーゼに膝でいとも簡単に止められ、ダイレクトで放たれたシュートはソニックブームを伴いながら真っ直ぐに雷門ゴールへ突

き刺さる。

試合開始1分も経たずに起きた出来事だった。

そこからもジェミニストームの蹂躪は続く。

ボールはいとも簡単に奪われ、何度もゴールを許す。

円堂のマジン・ザ・ハンドはその発生すら許されなかった。

あまりに次元が違った。先程戦った世宇子中ですらも、こんなに強くはなかった。

本当にこいつらは宇宙人なのだ、と思わなければ突き付けられた力の差に領くことが出来なかった。

やがて、その点差は10点以上に。

雷門イレブンには一切の抵抗が許されなかった。

「うツ・・・!?!」

「穴戸、半田!!」

そんな中、穴戸と半田が脚を抑えてうづくまる。

世宇子中戦でダメージが蓄積された身体に更に上乘せされる形で与えられた負担は、その身体に重くのしかかった。

身動きが取れない。選手交代する他ないだろう。

しかし、控えの選手は目金のみ。この驚異的な相手に、1人欠けた状態で挑まなければならぬ。あまりに非現実的だ。

が、そこに救いの手が差し伸べられる。

「その勝負、ちよつと待った!!」

「選手交代だ!!」

「——柊弥、豪炎寺!!」

雷門の面々に希望の風が吹き込んだ。

雷門が誇るエース、そのエースに引けを取らない副キャプテンがここにその姿を現してくれたのだ。

「——来たか。」

それを見てレーゼは不敵に微笑む。何に向けられた物かは分からない。

豪炎寺は穴戸、柊弥は半田と選手交代しグラウンドに入る。

（やはり、世宇子中戦の疲労は抜けきってはいない。が、やるしかないだろう。）

雷門キックオフから試合再開。点数は0―15。

豪炎寺は鬼道、円堂と共に相手ゴールへ駆け上がる。

「「イナズマブレイク!!」」

無限の壁をも破った必殺技が放たれる。

その一撃に雷門イレブンは得点を確信した、が。

「ふああ・・・」

ジェミニストームのキーパーは、それを欠伸しながらノールックでいとも簡単に止めた。

絶望が走る。

投げ出されたボールはジェミニストーム11番、ダイヤモンドへ。

空中でボールを受け取り、そのままオーバーヘッド。先程のイナズマブレイク以上の威力で雷門ゴールへ襲いかかる。

「ザ・ウォール!!」

壁山が巨大な壁を展開し立ちはだかる。が、その壁はいとも簡単に突き破られ、壁山ごとボールはゴールネットを揺らす。

0―16。

ボールは再び雷門から。

「修也!!」

「おう!!」

豪炎寺からボールを受け取った柊弥はジェミニストームのゴールへと駆け上がる。

途中、お遊びと言わんばかりにジェミニストームは軽いプレスをかけるが柊弥は全て躲す。

軽いプレス、といっても並のプレイヤーならボールを奪われてもおかしくないが。

「ファイアトルネードDD!!」

双炎が1つになって襲い掛かる。

が、2人の必殺シュートは最初と同様にレーザーにダイレクトで打ち返され、そのまま真っ直ぐ雷門陣営へ。

「うわッッ・・・」

しかも、影野を巻き込みながらだ。

「俺達の必殺技が・・・通用しないのか？」

「必殺技、か。」

柊弥の眩きにレーザーが反応する。

「必殺技と言ってもこの程度。お前達の力の限界というわけだ。」

「俺達に限界はない!!」

「諦めの悪い。その遠吠えは破滅を招く。」

「諦めの悪いのが俺達の必殺技でね。」

「雷門イレブンは・・・いつだってそうやって勝ってきたんだ!!」
「宇宙人なんて怖くないでやんス!!」

レーゼの言うことに雷門イレブンは総出で反論する。
それを背中で嘲笑いながらレーゼはポジションへ戻っていく。

(身体が軋む・・・けど、こいつらに一泡吹かせてみせる。)

柊弥は決意する。自身に秘められた力の解放を。

雷門キックオフ。だがすぐさま吹き飛ばされるようにしてボールはレーゼに奪われる。

その時だった。柊弥の身体は影のような力を纏う。

そう、柊弥はこの化身の前段階とも言うべき力をモノにしていた。
世宇子中戦にて顕現させた化身の力は未だ扱えていないが。

「させるかッツ!!」

雷門イレブんに暴力のように振るわれるボールを途中でカットしてみせる。

「・・・ほう。」

「これ以上好き勝手にさせるかよ!!」

先程とは比較にならないスピードで柊弥は単身上がっていく。
着いてくるものは誰もいない。否、誰も着いていけない。

度重なる疲労、加えて自分達の力を大きく超えた柊弥に着いていけない気がしなかった。

ただただ、柊弥の背中に希望を願うことしか出来なかった。

「好き勝手出来るのは強者の特権。貴様のような弱者には何も与えられていないと知れ。」

「が——ツツ!?」

が、その希望はすぐさま潰えることとなる。

自分達を大きく超えた柘弥のスピードをさらに大きく超えたスピードでレーゼが柘弥に激しいタックルを仕掛けた。

あまりの速さに瞬間移動したようにすら思えた。

そこからは”蹂躪”の再開。

ボールはゴール、と言うよりも雷門イレブンに向けられ、徹底的に痛めつける。

コート外から悲鳴が上がるも、それをジエミニストームが止める理由にはならなかった。

ごく自然にゴールも奪われ、得点は0―20。

雷門イレブンは誰一人例外なく地に伏せ、立ち上がれずにいた。

やがて、審判がホイッスルを鳴らす。

試合終了だ。

「地球にはこんな言葉がある。”雉も鳴かずに撃たれまい”」

そう言つて、レーゼは黒いサッカーボールを手取る。

そこから何が起こるか、想像に難くなかった。

「やめろオオオオオオオオ!!」

始まったのは傘美野中の破壊。

美しい校舎は次第に無惨な瓦礫へと姿を変える。

それを地に這いつくばりながら見ることにしか出来ない雷門イレブン。次第に、身体に蓄積された負荷と目の前の悲惨な光景によるショックで気を失い始めた。

が、ただ1人だけ立ち上がった者がいた。

「させるかアアアア!!」

柊弥である。

悲鳴に似た声を上げながらも身体に力を漲らせてレーザーの前に立ち塞がった。

このままでは引き下がれない。このままでは終われないと自身に発破をかける。

「柊………弥………！」

薄れる意識の中、円堂守が最後に見たのは――

「ぐアアアアアア!?」

――血を撒き散らしながら宙へ舞う親友の姿だった。

「柊弥先輩ツツ!!」

グラウンドに響き渡ったのは、校舎を破壊される傘美野イレブンの恐怖、蹂躪するジェミニストームの嘲笑、そして想いを寄せる人が傷付けられるのを目の当たりにした音無春奈の悲鳴だった。

「で、お父様にその機械を手渡された訳だ。」

人知れず、3人の少年がやり取りを交わしていた。

燃えるような赤い髪の少年、冷たさを感じさせる白髪の少年、そしてどこか表情に憂いを浮かべる赤髪の少年。

「ああ。」

「誰に使うのかはもう決めているのかい？」

「うん、決めているよ。」

「・・・豪炎寺修也か？それとも・・・加賀美柊弥か？」

挙げられた2人の名前。

どちらも雷門イレブンにおいて大きな存在である。

「それはね——」

魔の手が迫っていることを、かの少年は知る由もなかった。

その空間には、悪意に満ちた赤い輝きだけがあった。

「——うっ・・・」

気がついたら、そこは知らない天井だった。

そして俺が横になっていたのは1人用にはあまりに大きすぎるベッド。

そのベッドからはみ出した手を、温もりが包んでいたのを感じた。

「・・・春奈。」

俺の手を握り締めていたのは春奈だった。

その目元を真っ赤にして、俺の手を半ば抱えるようにしてうずくまって眠っていた。

「気がついたようだな。」

「鬼道。ここは？」

「俺の家だ。傘美野中から近かったんでな、お前の両親の許可を得て運び込ませてもらった。」

「そうか・・・あれから、どうなった？」

身体を起こそうとすると、鬼道に「いい」と言われ制される。

そのまま鬼道は語ってくれる。

俺達が敗北した後、雷門中のように傘美野中の校舎も破壊され尽くした。全国の中学校で同じようなことが起こっていることを。

「・・・俺達、負けたんだな。」

「・・・ああ。」

「世宇子中に勝って、優勝したのにな。」

「・・・ああ。」

片方の手が自然と握り拳を作り、震えているのを感じた。

ふと鬼道に目をやると、歯を食いしばり、全身を震わせているのが見えた。

「——柊弥先輩？」

「春奈・・・ごめん。心配かけたな。」

遅れて目を覚ました春奈に声をかける。

その直前に、春奈が付きつきりで俺の看病をしてくれたことを聞いたため礼を言う。

「俺と春奈はこれから雷門中に行く・・・お前はどこうする。」

「俺も行くよ・・・見たくないけど、見なきや。」

そう言っつてベッドから身体を起こす。

未だ全身は軋んでいたが、動かせない程では無い。

痛みを怒りで押さえつけ、身体を動かす。
向かうは雷門中。悲惨な光景が待ち受けるのを知っているながらも。

第24話 地上最強を求めていざ

「やはり酷いな・・・」

隣で鬼道がそう呟く。

昨日、目にした時はまだ夢なんじゃないかと思っていた。が、目を跨いで明るい日光に照らされた雷門中はやはり惨い姿だった。

つい先日まで自分達がここで勉強、部活に励んでいたとはとても思えない。

ここに来るまでに、半田やマックス、影野、宍戸に少林の怪我が酷く入院しているというのを聞いた。俺が、もつと強ければこんなことにはならなかったのかも知れない。

その自責の念を拭いきれぬまま雷門中の中を散策する。

校舎、体育館、校庭。何もかもがグチャグチャにされている。

そんな中でも、僅かな希望を持って俺達の部室へ向かう。

もしかしたらあそこだけは・・・なんてことを思っていた。が、やはりと言うべきか。例に漏れず部室も粉碎されていた。

その部室の前には先客がいた。守と秋だ。

そして俺の視線の先には修也が。更に夏未も。

「やっぱり皆ここに来た。目茶苦茶とはわかっていても気になるものね。」

そうやって、部室の看板を手に取り汚れを払う。

「俺は、エイリア学園を許さない。」

守が部室の中から引っ張り出したサッカーボールを抱えてそう呟く。その周りに俺、鬼道、修也も寄る。

「サッカーは何かを壊したり、人を傷つける為にやるものじゃない。」

「その通りだ。サッカーは・・・熱く、楽しいものだ。」

「おう！宇宙人に本当のサッカーを教えてやる!!」

「俺もだ。やろう、円堂。」

「俺もそのつもりだ。もう一度奴らと戦おう・・・そして勝つんだ。」

「よっしゃ。やってやろうぜ・・・皆!」

その声に皆反応してくれる。

俺がその声を向けた3人だけじゃない。気付かぬ内にやってきた染岡や壁山達も後ろからその声に反応してくれる。当然、秋や春奈、夏未達マネージャー陣も。

「全くお前は・・・相手は宇宙人だぞ?いつもの調子でやろうぜ!はないだらうよ。」

「まあまあ染岡、それが俺達のキャプテンみたいな所はあるだろう?」

「加賀美の言う通りだ。どんな相手でも1歩も引かない、それが円堂だ。」

「雷門イレブンの新しい挑戦だね!」

「入院しちゃった半田やマックスのためにもな!」

「うう、俺達本当に宇宙人と戦うんでやんスね!」

「壁山、またトイレか?」

「これは武者震いっス!俺も雷門イレブンっス、やるっス!!」

「ふうん、宇宙人に勝利となると、これは歴史に残りますね。僕も力をお貸ししましょう!」

それぞれがそれぞれの決意を口にする。

壁山なんかはブルってるが・・・それでもまあ、やる時はやる頼もしいやつだ。

「けれど、時間が無いわ。怪我している皆の回復を待てるの?戦えるメンバーは11人ギリギリなのよ?」

「だけど、やらなきゃ・・・」

「そうだ、やらねばならん！」

そう横から声を掛けてきたのは響木監督だった。隣には校長先生。校長先生に着いてくるように言われ、全員でその後ろを追う。

連れてこられたのはイナビカリ修練場。早速特訓でもするのかと思ったがそうでは無いようだ。いつも特訓に使う場所とは違う場所に案内されると、エレベーターが合った。

そのエレベーターに乗り地下深くへ進んでいくと・・・

「あれは・・・理事長！」

「やあ。君達だけでも無事で何よりだ。」

いつの間に回復を・・・

そんな疑問は置いておいて、理事長の話聞く。

「もはや一刻の猶予もない。ヤツらはこれからも破壊活動を続けることだろう・・・何としてでも地上最強のイレブンを作りヤツらに対抗する必要があるのだ!!」

”地上最強のイレブンを”・・・か。」

「理事長、俺達にやらせてください！いや、俺達がやります！皆、日本一の次は宇宙一だ!!」

「二よっしやあ!!!」

気合十分。リベンジは必ず果たしてみせる。

「準備が出来次第出発する。円堂、加賀美。皆を頼むぞ。」

「頼むぞ・・・って響木監督はどうするんですか？」

「俺は行かん。」

「響木監督には私から頼んでいることがあるんだ。これもエイリア学園と戦う為に必要なことだな。」

まさかの監督不在を嘆く俺達。

うーむ、普通に考えて監督不在で宇宙人と戦える気がしないんだが・・・どういうつもりなのだろうか。

という疑問は次の瞬間に晴れることになった。

「紹介しよう。新監督の吉良瞳子君だ。」

「「ええ!」」

後ろのエレベーターから姿を現したのは少し冷たい雰囲気を感じさせる女性。

新監督、ねえ。

「ちよつとガツカリですね理事長。監督がいないと何も出来ないお子様の集まりだとは思いませんでした。本当にこの子達に地球の未来を託せるんですか?」

開口一番で言ってくれるじゃないか。

一に落胆、二に侮辱。三に疑問とオンパレードってやつだろうか? 大人だからって随分と言いたい放題なものだ。

ほら見た事か、染岡なんか額がピキピキ言ってるぞ。

「現に彼らは既に敗北しているんですよ?」

「だから勝つんです! 一度負けたことは、次の勝利に繋がるんです!」

よく言った守。

俺達は結成当時からそうやってのし上がってきた。相手が宇宙人だろうが何だろうが、やることは同じだ。

負けたら分析、分析を受けて特訓して次は勝つ。これでいい。

「頼もしいわね・・・でも私のサッカーは今までとは違うわよ? 覚悟しておいて。」

望むところだ。

とまあこんなところで一旦解散となる。

各自荷物をまとめ、少し経ったら集合しすぐ出発だ。

「よし、こんなもんか。」

「日本一の次は宇宙人と戦うのか・・・頑張れよ、柊弥。」

「私達の息子ならきつとやれるわ。」

父さんと母さんの励ましを背中に受ける。

信じてくれる両親の為に、必ず宇宙人を倒さなければな。

と、ここで携帯が鳴る。

メールだ。内容に目を通してみると、どうやら奈良に例の宇宙人が現れたようだ。予定を少し繰り上げて出発というわけだ。

「それじゃ・・・行つてきます。」

家を出てすぐさま駆け出す。

校門を潜り抜け、すぐさま修練場から地下理事長室へ。

ある程度揃ったところで大きなモニターにてニュースを眺める。

奈良にて宇宙人の痕跡と見られる黒いサッカーボールが発見され、連中は何とこの国の首長・・・財前総理を連れ去ったらしい。

総理を連れ去るなんて・・・何が目的だ。

「修也。」

「遅れてすまん。」

「揃ったな、諸君。情報によれば宇宙人は謎の集団に連れ去られたと言う。その謎の集団はエイリア学園と関係があるようだ。」

「出発よ。エイリア学園とすぐに戦うことになるかもしれないわ。」
「瞳子君、皆を頼む。情報は随時イナズマキャラバンに転送する。」

イナズマキャラバン？

聞き慣れない単語に疑問を覚えると、響木監督に別室に案内される。

そこにあつたのは青を基調とした真新しい風貌のキャラバン。これを使って俺達は移動することになるらしい。運転は古株さんが担当してくれる。

そして。

「看板じゃないか。」

「ここは言ってみれば新しい部室だ。だったらこいつは必要だろうか。」

と言って響木監督は親指を立ててニカツと笑う。

眩しい・・・眩しいぜ響木監督!!

「しつかりな、皆。」

「はい、監督!」

「お前達はきつとエイリア学園に勝てる。俺はそう信じている!」

「はい!行くぞ皆!!」

「!!おお!!」

キャラバンに乗り込む。俺の隣には鬼道。

全員がシートベルトを着用すると、突如天井が開き、床が動いて隙間から除く地上へとキャラバンは顔を出す。

ここから俺達の新しい旅が始まる訳だ。

そして奈良にやってきた。

道中行き止まりにぶち当たるハプニングがあつたが夏未が理事長に電話したらなんか通れるようになった。理事長。パワーすげえ・・・。どっだけ顔広いんだよ。

目の前に広がるのはかの有名なシカ公園。

が、美しいその風景は目茶苦茶にされている・・・無論、宇宙人の仕業だろうな。

「あ、あつたっス!!」

散策しながら例の痕跡とやらを探していると、壁山の一際でかい声が響いてくる。

声の方向にやってくると、あの黒いサッカーボールが。

試しに持ってみると、有り得ないくらい重かった。恐らく金属製だろう。それをエイリア学園の連中は軽々と操っていた、という訳だ。

益々謎だ。どうやってあんなレベルに・・・

「全員動くな!!」

ボールに触れていると、突如人を怪しい人間のように扱う警察みたいなことを言われた。

失礼な・・・と思つてその声の方向を見ると、黒い服に身を包んだ屈強な大人達がいた。

・・・もしかして、本当に警察の方？

「もう逃がさんぞ、エイリア学園の宇宙人！」

「俺達のこと・・・か？」

「財前総理をどこへ連れ去った！」

「あの、ちよつと——」

「黙れ!!その黒いサッカーボールが何よりの証拠だ!!」

なんと、宇宙人扱いされてしまっている。

しかしそうだよな、黒いボールを持って寄って集ってたら、宇宙人に見えなくもないよな。

あの宇宙人達・・・見た目年齢俺達に近かったし。

話を聞いてみると、この人達は総理直属のSPの人達らしい。本当にそっち系の方だったようだ。

だからって宇宙人扱いは心外だが。

「宇宙人はどこだ！」

声の方向に目をやると、ピンク髪で帽子を被った俺達と同年齢くらいの少女がいた。SP同様黒服に身を包んでいるが。

段々と状況が混乱してきたな。

その後は守とその女の子の宇宙人だ宇宙人じゃない論争が白熱し、何故かサッカーで証明することになった。

何で？

「向こうが大人だからって怯むなよ?」

「そうだ。俺達はいつも通り俺達のサッカーをすればいい。」

相手のチームの情報を春奈が探し出す。

チーム名は”SPフィクサース”

大のサッカーファンである財前総理のボディガードでもあるサッカーチーム・・・だそうだ。

総理、サッカー好きだったんだ・・・というのは置いておこう。

「監督、何か指示はありますか？」

「いえ、特にないわ。とりあえず君達の思うようにやってみて。」

ま、そうなるか。

監督はこのチームのサッカーを見るのは初めてだろうからな。指示を出そうにも出しようがないだろう。

だったら尚更自分達のサッカーをやってみせようじゃないか。

相手が大人？そんなことは関係ない。

むしろ思い切ってやれるね。

「鬼道、フォーメーションはどうする？」

「そうだな・・・」

鬼道が考案したフォーメーションはこうだ。

F W・・・俺、修也、染岡

M F・・・鬼道、一之瀬、風丸、目金

D F・・・壁山、土門、栗松

G K・・・守

いつものスリートップに加えて、本来D Fだが攻撃も出来る風丸を中陣へ押し上げること攻撃的な布陣を展開する。

こんな時こそ攻めが肝心。俺達F W陣の働きもより大事になってくるという訳だ。

ふと、マネージャー陣のどよめきが耳に入ってきたから視線を向けると、何と角間がいた。実況するためにキャラバンの後ろを着いてきたらしい。

お前、サッカーやれるんじゃない・・・？

『間もなく試合開始だアア!!』

「よし、早速攻め上がるぞ。」

ボールを下げ、単身攻め上がる染岡。

それに対し相手は3人係で立ちほだかる。2人が大柄な1人の背中を支えると――

「『ボディシールド!!』」

――気合いと共に衝撃波が発生し、染岡を弾き飛ばした。なるほど、ボディガードと言うだけあって防御面はかなり固められているようだ。

外に出たボールをスローインで修也が受けとりあえず攻め上がるも、相手のデイフェンスの前に攻めあぐねる。

入り乱れる攻防。

やがてボールを持って染岡がゴール前に。

「ドラゴンクラッシュ!!」

「セーフタイプロテクト!!」

相手キーパーが腕を掲げると、特殊部隊の盾のようなものが横並びに展開され、ドラゴンの侵入を阻んでみせた。

攻め上がる相手。こちらも負けじと守りを固めるがイマイチ対応しきれずペナルティエリアへの侵入を許す。

「トカチエフボンバー!!」

「爆裂パンチ!!」

流石守、完璧に防いでみせた。

大きく弾かれたボールを受け取り、再び染岡がドラゴンクラッシュの構えに入るが、例のピンク髪が立ちほだかる。

「ザ・タワー!!」

突如として塔のように地面が隆起し、その頂上から雷を染岡に落とす。

雷か・・・いいセンスだ。

弾かれたボールをそのまま奪い、駆け上がる。

「貰うぜ。」

「何!?!」

焦って追い掛けてくるがもう遅い。俺は既に準備出来ている。

「轟一閃改!!」

万全の状態で放たれた俺の十八番とも言うべきシュートは雷光の如くゴールへ襲い掛かる。

あのキーパーの必殺技・・・かなり磨かれてはいるがその弱点は発動しきるまでに時間がかかること。

なら、それより速く撃ち込んでしまえば――

『ゴール!!加賀美が先制点を奪いました!!』

新しい戦いの初得点は貰ったぜ。

修也や染岡とハイタッチを交わし、自陣へ戻る。

と、そこで前半は終了。ベンチへ戻り水分補給。

「皆聞いて、後半の作戦を伝えるわ。」

瞳子監督が手を鳴らしながら注目を集める。

早速指示を出してくれるようだ。

「染岡君、風丸君、壁山君。貴方達はベンチに下がって。」

11―3―8。つまりこの監督は俺達に本来よりも少ない人数で試合をしろと言っている訳だ。

・・・この監督も馬鹿じゃないはず、ならきつと何か狙いがある。人数が欠けると反論する3人を何とか落ち着かせ、後半へ臨む。

鬼道も反論しか無かったようだが・・・あいつのゲームメイクならこれでも何とかなるだろう。

まあ何より、俺達前線でボールを、点を取って相手を突き放してしまえばいいだけの話だ。

『おっと、これはどういうことだ!?雷門中は8人しか出ていないぞ!』

「ちよつと、どういうつもり!?!」

「勝つための作戦だ。」

ピンク髪が鬼道に詰め寄るがそれを流す。

ピンク髪って呼んでるけど、相手チーム背番号がないからこう呼ぶしかないんだよな。名前知らないし。

さて、人数を欠いたこの状況での後半戦。

どうなるかと思ったが案外何とかなっている。

あの3人が抜けたことで、むしろ鬼道のゲームメイクが円滑に出来ているような・・・

「加賀美!そこだ!」

「おう!」

やはり間違いない。

確実に指示が通るようになってる。何故だ?あの3人が足でまといなはずが・・・と思い目線をやると、3人は手当を受けていた。なるほどな、怪我が回復しきっていなかったわけだ。

それで鬼道が考える理想値を出せず、中々上手くゲームを動かせなかった。

しかも、これにより相手が前に誘い出されて裏を突けるようになって

た。

「ここまでが筋書きなのか？だとしたら、あの監督中々に・・・

「修也！決めろ！」

「おう！ファイアトルネード!!」

灼熱を帯びた火炎が屈強なガードを突き破る。

2点目だ。

後半も残り僅かとなり、相手はキックオフと同時に攻め上がる。しかも、こちらのDFを抜き去り先程よりも強力なシュートを放つが。

「マジン・ザ・ハンド!!」

俺達の守護神はそう簡単には破れない。

守はしっかりと止め切り、前線へボールをパス。受け取ったのは修也。

「終弥！もう一本行くぞ！」

「了解！」

再び火炎を纏って修也は飛び上がる。俺も同時に同じモーションで空中へ。

回転と共にボールを蹴り、火炎を注ぎ込む。

「ファイアトルネードDD!!」

「セーフティ——」

ガードを展開途中のキーパー諸共ゴールにぶち込む。

3—0。人数的不利を背負っても何ら問題はなかったな。

「負けたよ、流石は日本一の雷門イレブンだ！」

「いやー・・・え？今なんて？」

・・・こいつ、知っててイチャモンつけてきやがったのか。

ピンク髪・・・財前塔子は父である財前総理を助けるためにエイリア学園を倒したいそうさ。そのために俺達と共に戦わせて欲しく、そのために力を見定めたという訳だ。

「私と一緒に戦って欲しいんだ!!パパを助けるために！」

「もちろんさー！な、皆!!」

「・・・ありがとう!!」

こんな形で一件落着・・・とはいかなかった。

公園のモニターが突如ジャックされ、そこに映し出されたのはレーゼの姿。

SPの人曰く、この発信源は奈良シカTVだそうさ。

早速キャラバンに乗り込み、塔子と共に現場へ向かう。

その場所に到着し、屋上のサッカー場まで階段を駆け上がる。

屋上の扉を乱暴に開けると、そこにはジェミニストームの姿が。

「探したぜ、エイリア学園!!」

「探した？我らに適わぬことが分かり降伏の申し入れか？」

淡々とレーゼは語る。地球人は自分達の力を思い知らなければならぬと。

その後は守が「お前たちを倒す」と宣言し、試合の準備に入った。こちらは塔子を迎え、新体制。

図らずとも、宇宙人達との再戦はかなり短い期間で果たされることとなった。

「よし、今回も決めるぞ・・・修也？」
「・・・ああ、すまない。」

修也の顔色はどこか優れない。

体調が悪いのだろうか・・・だが、こいつら相手となると修也に出
てもらわない訳にはいかない。こいつらに勝つには俺達の全力をぶ
つけなければダメだ。

修也への心配は拭えぬままポジションに着く。

さあ、再戦だ・・・！

——この時の俺は、この試合を境に運命の歯車が大きく狂うことを
知らなかった。

第25話 悪意に満ちた策略

エイリア学園、ジエミニストームと2度目の対面。

前回は世宇子戦の疲労のせいもあって思い出したくないくらいに圧倒されたが・・・今回は万全の状態だ。

前のようにさせない。

今回のフォーメーションはこうだ。

FW・・・俺、修也、染岡

MF・・・鬼道、一之瀬、風丸

DF・・・壁山、土門、塔子、栗松

GK・・・守

塔子の加入によりDFの層が熱くなったので攻守両方を柔軟にこなせる風丸をMFとして起用した。早い話がこの前のSPフィクサーズの時と同じようなものだ。

何度見ても異質な雰囲気を漂わせるジエミニストームの面々。余裕を感じているのだろう、その表情には薄ら笑いが浮かんでいる。

「終弥、実は・・・」

「ん？どうした？」

修也が試合開始直前話し掛けてくる。が、「何でもない」と誤魔化された。

・・・嘘だ。何でもないはずがない。自分から話そうとしてきたのが良い証拠だ。

けど、修也本人が語らない以上は何を悩んでいるのか分からない。

まさか修也に限って「不安だ」など行ってくるはずが無い。

本当のことを言えば、今すぐに肩を揺らしてでも問い正したい。だが、それをしては目の前の敵に集中出来なくなる・・・そんな気がする。

きっとそれを考慮した上で修也は口から零れかけた言葉を呑んだらう。

その思いを無下にする訳にもいかない。黙ってやるべき事をやろう。

「さあ皆！気合い入れていこうぜ!!」

「おう!!」

いつもは守のその声にハッキリと応じるはずだ。今回はやはりと
言うべきか、その声色すらも暗い。

・・・切り替えろ。集中するって言ってるのにいつまで引きずつて
るんだ、俺は。

俺はこのチームの副キャプテンだ・・・俺がしっかりしなくてどう
する。

『さあ、豪炎寺のキックオフで試合開始!!』

修也からボールを受け取り、染岡へ。

中陣は全員攻め上がる。それを見て染岡は風丸へ、風丸は鬼道へパ
スを回す。そして鬼道はフリーの修也へパスをだすが――

『おつと雷門中、ボールを取られた!!』

――修也がボールを受け取ることは無かった。

相手が想像も出来ない挙動でボールを奪いに来たのもあるが・・・
敢えて見逃したようにも見えた。いや、まさかな。

相手のパス回しに追い付けず、あつという間にゴール近くまでボー
ルを回される。やはり速いか・・・!

守と対面するのは相手11番。

ボールをかけたその瞬間、そのボールは視界から消える。

必殺シュート・・・いや違う。単純に速すぎて消えているように見
えるだけ。

その証拠に守はボールごとゴールへ押し込まれた。ボールが守に

触れたタイミングでようやくボールを視認出来たのだ。

『なんとという速さ、エイリア学園開始30秒で1点先制だ!!』

実況のその声に思わず絶句する。

開始30秒、と言ったのだ。そんな短時間で無抵抗のままゴールを許した。

万全の状態でも、ここまでの差があるってのか・・・!?

「・・・まだまだ1点、取り返していくぞ!!」

その声に皆が応じる・・・ただ1人を除いて。

こちらのキックオフ。しかし気付いた時にはボールは奪われていた。走行、跳躍どの動きを取っても異次元の速さだ。俺達は全く反応出来ない。

そしてゴールは1点、また1点と奪われていく。

あちらからしたらただドリブルしているだけでも、こちらにとっては驚異となりうる。ドリブルの際に巻き起こった旋風が俺達の身体を打ち上げる。時折意図的と思えないボールが腹にめり込んでくる時もある。

身体の奥から嫌な音が鳴るのを聞いた。

「よし、今度こそ・・・」

酷にも、そう意気込む守はボールに自分から触れることすら出来ない。

ボールに触れられるのは反応出来ないところにボールを撃ち込まれた時だけ。

1点、また1点とジェミニストームに加算されていく。

『エイリア学園が更に追加点！既に得点は0―10!!』

無論、10点を取っているのはヤツらで俺達は0点。

シュートを撃とうにもボールの支配権を握ることすら出来ない。

それだけヤツらのドリブルは、パス回しは速い。

俺にはまだ奥の手はある・・・だが、消耗が激しすぎるこの試合で更に消耗する手段を取ればどうなる？消耗し切ったところを痛めつけられ病院送りが関の山だ。

そう思いながらも迫る敵の前に立ち塞がる。そしていとも簡単に抜かれる。

何か反撃の糸口はないのか・・・と、その時だった。

「ふッ!!」

鬼道がパスをカットしてみせた。

あのバカみたいな速さのパス回しを見切ったのか・・・!?

前線でフリーの修也へパスを出す。そのまま修也はファイアトルネードの構えへ。

「ファイアトルネード!!」

が、そのシュートはゴールポストに掠り、相手を動かすことすらなかった。

”ミスキック”

鬼道が作り出したチャンスを、修也は逃してしまった。

普段の修也ならそんなことはないはずだ。

「加賀美、次に俺が取ったら上がってくれ。」

その指示を風丸、修也にも出した。

やはり何かを掴んだのか、鬼道。

だが、今の修也に撃たせるのは少々不安だ。俺が積極的に最前線に

上がろう。

そしてその期待に鬼道は行動で答えてくれた。

またもやパスをカットして見せた。そしてボールは風丸へ。

「風丸！」

風丸にも声を上げてパスを求めるも、風丸は近くにいた修也と同時に上がっていった。

ボールを同時に蹴り上げ、高く飛ぶ。

「炎の風見鶏!!」

放たれた炎の風見鶏。

だがボールはまたゴールを逸れた。そして修也は受け身に失敗し地面と衝突。

・・・やはり。

『ここでホイッスル!! 0-13と、エイリア学園が大きなりードで前半終了です!!』

前半終了。ベンチへ戻る。

そこで鬼道はパスカットの種を明かす。

単に鬼道は相手の攻撃パターンを見抜いただけだという。相手が決まった行動を取るのなら、そこに潰け入るだけ。

全員で情報を共有し、次の攻めの一手に活かすことにした。

「修也。」

「・・・何だ？」

「理由は聞かない。だが、何かあるのなら・・・この試合は俺に回してくれ。頼む。」

汗を拭う修也の元に歩み寄り、耳元でそう呟く。

修也は拒むことなく、小さく頷いた。

言い方はどうかと思うが、今の修也ではゴールを奪うことなど到底出来ないだろう。なら俺、あるいは他の皆に任せてもらった方がまだ可能性はある。

「皆聞いて。確かにジエミニストームの攻撃には一定のパターンがある。けれどあなた達、自分がどんな状態か分かっているの？」

「・・・状態？」

そう首を傾げる。

状態・・・大きく点差をつけられているとか、そんなことでは無さそうだ。

「今のあなた達じゃ敵のスピードに着いていけない。攻撃パターンが分かったくらいで倒せる相手じゃないのよ。」

「じゃあ、どうすればいいんですか？」

「こちらのディフェンスを前線まで押し上げて、全員で攻撃するのよ。」

そう言って瞳子監督が示した場所は、俺達FWと同じくらいのラインだ。それが指し示す事実はただ一つ。守りを捨てての全員攻撃。

「ですがそれじゃ、相手に抜かれでもしたらお終いじゃないですか！」「なら、抜かれないようにすることね。」

そう監督は言い切る。

どんな意図が・・・ダメだ分からない。鬼道なら分かるだろうか・・・いや、怪訝そうな表情を浮かべている。ゴーグルで目元が見えなくてもそれが分かるのだから相当だろう。

「まあまあ、SPファイクサーズに勝てたのも監督の作戦だったしさ。やってみようぜ！皆！」

そう守に言いくるめられる。

確かに、前の試合では監督の手腕が光ったが・・・今回に至っては本当に読めない。

そんな疑問に満ちたまま後半を迎えることになった。

『後半戦が始まりました！』

開始のホイッスルと同時にキックオフシュート。

前線まで押し上げられた全員反応出来ずボールはゴールへと襲い掛かる。

当然のように守も反応出来ず、ゴールネットは揺らされた。

「・・・皆！ボールをキープして攻めるんだ!!」

すぐさまキックオフ。

鬼道の指示で全員で上がる。

が、ボールはすぐ奪われゴールへ叩き込まれ。

無情にも相手の点数だけが増えていく。

このままでは守が持たない、このままではダメだと次々鬼道に指示を求める皆。

が、鬼道は黙りこくつたまま監督を見つめていた。

そうしている間にも試合は動く。

ボールは奪われまたも守へ迫る。が。

「ゴッドハン——」

力を溜める余裕も無かったが、一瞬守がボールを捉えた・・・そんな気がした。当の俺は全く捉えられていないが。

が、これでジェミニストームは31点目・・・どう足掻いても覆すことの出来ない点差だ。

この試合、勝つことから意識を変えるのが吉だろう。

・・・ん？勝つことから意識を変える、つまり勝つことを目的としない。

そこに監督の意思が・・・？

ダメだ、考えても分からない・・・とにかく、1点でも取ることを考えよう。

「皆、1点だ・・・何がなんでも1点取りに行くぞ！」

「「おう!!」」

が、そんな意気込みはすぐさま潰されることとなった。

ボールはもはや当たり前のように奪われ、ゴール前のレーザーへと渡る。

「地球にはこんな言葉がある。”井の中の蛙大海を知らず”・・・己の無力さを思い知るがいい!!」

レーザーが足を引く動作でボールに回転を掛けたその時、凄まじいエネルギーがボールに集中する。

恐らくは、アフロデイのゴッドノウズよりも、俺の化身シュートよりも高い威力を誇るだろう。

エネルギーの収束が空気を揺らす。そして放たれたシュートは大地を揺らす。

「アストロブレイクッ!!」

地面を削りながらレーザーの必殺シュートは守へと迫る。

守は、ここで初めてボールを見据えた。

「マジン・ザ・ハンドオ!!」

光に満ちた魔神が咆哮を上げる。

凄まじい力を秘めた腕を迫るボールに向ける。

が、ようやく顕現した魔神はボールに触れた瞬間に砕け、その姿を消す。

魔神を打ち砕いたシュートはゴールネットを突き破り、後ろの壁にまでクレーターを作った。ボールはその負荷に耐えきれず弾けて消えてしまった。

あまりの威力に誰しもが言葉を失った。

『ここで試合終了!!エイリア学園、32―0で圧勝です!!』

その実況の一言で我に返る。

ゴール前に倒れる守。その姿を視界に入れた瞬間に俺は駆け出していた。

「守ッッ!!」

それに着いてくるように皆も守を囲む。

肩を揺するが何も反応はない。気を失っているのか・・・?

紫色の光が辺りに満ちたと思ったなら、エイリア学園はその場から既に姿を消していた

あの数分後目を覚ました守を連れ、俺達はキャラバンに乗りシカ公園まで戻ってきていた。

木々の間に射し込む夕陽に照らされながら、俺達はさっきの試合を

振り返っていた。

「ごめんよ皆、あたしが一緒に戦おうなんて言わなければ……こんなことにはならなかったんだ。」

「塔子のせいじゃない。俺達にも力が無かったんだ。」

その風丸の言葉を聞いて、思わず拳を握りしめる。
さっきの試合、俺は何も出来なかった。

鬼道のようにボールを奪うことも、守のようにゴールを守ること
も、修也や染岡のようにシュートを撃つことすら出来なかった。

自分の無力さを嫌でも痛感させられる。

「円堂、大丈夫だろうか……」

「かなりシュートを喰らっていたからな……」

0―32と言う点差が守の負担を物語っているだろう。

少なくとも32本、あんなシュートを受けたんだ。大丈夫なはずがない。

「クソツ、納得いかないぜ……今日の監督の指示は。ディフェンスを
あんな所まで上げて、どうぞ点を取ってくださいって言っているよう
なもんじゃないか！折角鬼道が攻撃パターンを見抜いたつてのによ
！」

「結果としては前よりも惨敗と言えますね……」

監督に対する不信感を募らせる皆を落ち着かせようと声を上げる。
が、皆聞き入れてくれない。

ここで鬼道が助け舟を出してくれた。

前半で既にボロボロだった俺達が後半あのまま試合を続けていた
らどうなったか皆に問う。

「・・・俺達も病院送り、つてところか。」

「加賀美の言う通りだ。確実にな。」

「じゃあ、監督は俺達を守るために・・・?」

一之瀬が漏らした声に、監督の評価は持ち直しかけた。が。

「けどよ、本当にそれでいいのかよ。どんな状況でも全力で戦う。それが俺たちのサッカーだろ!？」

土門の一言でそれも振り出しに戻る。

それを受けて染岡が再び否定を述べる。

「それは違う!!」

そこで守がキャラバンから降りてきて口を挟む。

監督はヤツらのシユートを止めるため、守に実際に受けさせることで特訓させたのだという。

・・・確かに、それなら俺が試合中に抱いた疑問にも納得出来る。

今回は捨て、次を見据えた采配だと。

そして最後の最後、少しだけシユートが見えたという守の一言に浮つく皆。そこに監督がやってきた。

そして、その口から飛び出したのは予想できるはずもない一言だった。

「豪炎寺君、貴方にはチームを離れてもらいます。」

「待ってくださいよ監督、この先修也無しで・・・宇宙人達に勝てると思っんですか!?!」

「私を作る地上最強のチームに、豪炎寺君はいららないということですよ。それ以上の説明は必要ありません。」

「納得出来ません!もしかして、今日のミスが原因だって言うんですか!?!修也は、修也は今日たまたま調子が悪かっただけです!!次の試合では、きつとゴールを決めます!!」

「加賀美君。何度も言わせないでちょうだい。これはもう決まったことなの。」

瞳子の言葉に真っ先に食いついたのは柊弥だった。

柊弥とて、瞳子が豪炎寺にチームを離れろと言った原因が分からないわけでも無かった。今日のミスの数々・・・あれは豪炎寺の調子云々の話ではなく、何かの圧力によるものなのではないかと薄々勘づいてはいた。

試合中にふと目に入った怪しい3人組・・・その3人組を試合中に豪炎寺が幾度も見ていたことから、何かしたのはその3人組だと容易に理解出来た。

だがそれでも、同じストライカーの・・・親友の脱退を領くことは出来なかった。

「ですが監督——」

「いい加減にしなさい。副キャプテンの貴方がそんな聞き分けのないことを言つて、チームの皆にいい影響があると思う?聞き分けなさい。これは監督命令ですよ。」

「——ツツ!!」

「・・・良いんだ、柊弥。」

そう言つて、豪炎寺は雷門イレブンに背を向けどこかへ歩き始めた。

その背中を追いかけたのは、柊弥と円堂だった。

「豪炎寺！お前、本当に行つちやうのかよ!?!」

「そうだ、あいつらに負けたまま……このままどこかへ行くつて言うのかよ!?!」

「……」

豪炎寺は何も答えない。

3人の間には沈黙が流れる。

その沈黙を破つたのは豪炎寺だった。

「すまない円堂、柊弥。俺は……お前達と一緒に戦えない。」

「修也……」

そう言つた豪炎寺の瞳は、夕陽に当てられたせいが潤っていた。

そして顔を前に向ける際に、雫が舞つたのを円堂と柊弥は見逃さなかつた。

2人には、もうその背中を引き止めることは出来なかつた。

その涙に隠された何かを感じ取ってしまったが為に。

「豪炎寺!!絶対帰つてこいよ!!」

「俺達、待つてるからな……修也!!」

その言葉に豪炎寺は何も答えない。

その背中が小さくなり、見えなくなるまで2人はその場から動かなかつた。

「・・・柊弥、皆のところに戻ろう。」

「悪い、守・・・ちよつと一人にしてくれ。」

円堂はそう言っつてうづくまつた柊弥を連れていくことが出来なかつた。

幼い頃からの付き合いである柊弥がここまで落ち込んでいるのを、円堂は見たことがなかつた。

円堂が、雷門のメンバーが知る加賀美 柊弥という男は、誰よりも仲間を大切にするような男だ。

だからこそ、その仲間が欠けた今・・・誰よりもショックを受けているのだと円堂は理解した。

「・・・分かつた。先、行つてるな。」

そう言つて円堂は柊弥に背を向け、待っている皆の元へと戻つて行つた。

柊弥は、1人沈み行く夕陽をぼんやりと眺めていた。

数十分、柊弥はそうしていた。

そしてその柊弥に、声を掛ける者が現れた。

「加賀美 柊弥君、だね？」

それが悪魔の囁きであることを、その時の柊弥は理解していなかっただろう。

不意に投げ掛けられた声に柊弥は不可抗力で顔を上げる。

そこにいたのは、オレンジのジャケットに身を包んだ自分と同じくらしいの歳であろう赤い髪の少年だった。

「……誰だ？」

「俺は……グラン。」

一瞬、グランが見せた迷いを柊弥は見逃さなかった。

が、それを追及する気力など無かった。

明らかに日本人離れしたその名前に疑問を抱く気力すらも。

「……何の用だ。」

「実はね、君に協力して欲しいと思って……俺達エイリア学園に。」

その一言で柊弥の表情は無気力なものから一気に険しいものへと変わった。

すぐさま立ち上がり、目の前の男への警戒を強めた。

「凄いな、あんな項垂れた状態からそんなにピリピリ出来るなんて。」

「……何故俺に近付く？俺が雷門とは知らないなんて言わせないぞ。」

「よく知ってるからこそだよ。君のその力を貸してほしいと思って。」

そう言つて笑みを浮かべながらグランは柊弥へと近付く。

それに対して柊弥は後ずさり。

そして気付く。

後ろにも誰かいる。

「——ッ!?!」

「何だ、気付かれてしまったか。」

「そんな所に立っていたら気づくんじゃない？ガゼル。」

振り向いた先にいたガゼルと呼ばれた白髪の少年とグランに挟まれていたことに気づくと、瞬時に双方から距離を取ろうと柊弥は動いた。

が、その瞬間、何者かが自分の肩に腕を乗せていることに気づいた。

「つたく、めんどくさいことしないでさっさと連れてつちまえばいいんじゃないか？」

「そう言うなよバーン。折角お喋りしてたんだから。」

自分の肩に腕を乗せたその男の名はバーンだと柊弥は理解したが、そんなことは半ばはどうでもよかった。

明らかにグランの仲間・・・エイリア学園が3人も現れた。自分の前に。

その現状に頭が追いついていなかった。

「何が、目的なんだ――？」

「言ったじゃないか。」

グランが柊弥の視界から姿を消す。

いや、柊弥のすぐ目の前に移動しただけだった。

「協力して欲しいだけだった。」

そうやってグランは柊弥の口にハンカチを押し当てる。

するとたちまち柊弥の意識は朦朧とし始める。

(誰か、誰か呼ばなければ。)

「んだよ。自分でお喋りとか言いつつ、結局強行手段かよ。」

「手っ取り早くて良いじゃないか。」

「そういうこと。彼には無理矢理にでも来てもらわないとだからね……豪炎寺修也と違って。」

親友の名を呼ぶ声に反応せずにはいられなかった。

身体に力を込めるが、意識がはつきりせず身体が言うことを聞かなかった。

（春奈——）

柊弥が意識を失う間際、心の中で呟いたのは……知らず知らずのうちに惹かれ、想いを伝えようとしていた人の名だった。

「柊弥先輩！いつまで——って、あれ？」

円堂から状況は聞いたものの、あまりに遅い柊弥を呼びに来た音無。

が、そこには柊弥の姿は無かった。

不思議に思っ少し歩くと、足元に落ちている物体に気が付いた。

「これは……柊弥先輩の携帯——!？」

刹那、音無の脳裏には最悪の予想が過った。

その瞬間に音無は駆け出していた。

第26話 失われた雷と炎

「――柊弥が、いない・・・?」

息を切らしながら走ってきた音無が告げた事実は、雷門イレブンにとって衝撃以外の何でもなかった。

普段の彼らならない、と言われても少し離れたところまで行っているだけだと認識しただろう。

が、その直前に起こった突然の豪炎寺の脱退。この事が残された者達の不安を駆り立てた。

「もしかして、豪炎寺さんの後を追って行っちゃったでやんスカ!？」

「いや、そんなはずがない・・・こんな時だからこそ自分が欠けてはならないと、加賀美なら理解できないはずがない。」

「とりあえず、探しに行きましょう!!」

各々が散らばり、柊弥の姿を探す。

搜索は、日が沈みきるまでの数時間にも及んだが、遂に柊弥は見つからなかった。

『――分かった。豪炎寺の件と併せて鬼瓦刑事とも話をするから他の皆のことはくれぐれも頼むぞ。』

「はい。よろしく願います。」

(加賀美君・・・一体何処に行ったの?まさか既にエイリアの手が――)

吉良瞳子は焦っていた。

豪炎寺が離脱した今、この雷門の得点源となるはずだった2人の内

片方、なおかつ副キャプテンである柊弥が突然を姿を消したのだ。

その上、柊弥が帝国、世宇子戦にて見せたあの理解の及ばない謎の力は、エイリアとの戦いにおける切り札とも呼べるものだった。

それが失われたとあれば、焦らないはずが無かった。

(柊弥、どこ行っちゃたんだよ。)

円堂守は憂いていた。

もし自分がある時、無理にでも柊弥を連れて戻っていたならこんなことにはならなかったのではないか、と思えてならない。

幼い頃からの付き合いである柊弥、チームのエースである豪炎寺が同時にいなくなったことが先への不安を煽る。

試合の最後で敵のボールが見え、一步前進と思ったその矢先のこの出来事。

だがそれでも、自分はキャプテンなんだと己に喝を入れる。

いつかまた再会できると信じて。

(豪炎寺に加えて加賀美まで……クソツ!!加賀美の件を置いておいたとしても、豪炎寺の件は許せねえ……!俺がストライカーとして、もっと強くなんねえと……!)

(このタイミングでの加賀美の離脱……間違いなくエイリアによるものだろう。監督への不満で豪炎寺の後を追うなんてあいつがするはずがない……ヤツらめ……!)

染岡竜吾、鬼道有人は憤っていた。

その怒りは何に向けられたものだろうか。

理解の出来ない指示を出した自分達の監督へ向けてか、仲間を陥れた敵へ向けてか。はたまた無力な自分へ向けてか。

或いは……自身の妹を悲しませた男に対してか。

(柊弥先輩・・・私、まだ答えてもらってませんよ・・・?)

音無春奈は嘆いていた。

柊弥を呼びに行きその姿が見えなかった時、まさかと思った。

声が枯れるくらいに名前を呼びながら捜しても、答えてくれる声はなかった。

自分の告白への答えを出してくれるというその約束が守られなかったことを悲しんでいるのではなく、ただ想い人が自分の前から姿を消してしまったことを悲しんでいた。残された物をその手に握りしめて。

「皆聞いて頂戴。さつき響木さんから連絡があつて、次の目的地が決まったわ。北海道よ。」

「北海道・・・次のエイリアの襲撃予告でもあつたんですか。」

「そうじゃないわ。そこにいるストライカー、吹雪士郎をスカウトしろ・・・との事よ。」

豪炎寺と柊弥の脱退により、このチームの攻撃力が劇的に下がっているのは誰しもが理解していた。

だが、全員の頭の中ではこのチームのストライカーは残った染岡と姿を消した2人である。

その想いが1番強いのは他でもない、残された染岡だった。

「待てよ監督・・・豪炎寺を抜けさせ、加賀美は行方知れず。だからってそんな簡単にストライカーを補充していいのかよ?このチームのストライカーは、アイツらを差し置いていないだろうが!?!それに、ま

だ加賀美が戻ってくる可能性だって——」

「だとしても、豪炎寺君の穴は埋めなければならぬわ。」

そうやって瞳子は再びどこかへと姿を消す。

自分の声を聞こうとしない瞳子に怒りを隠せず、染岡は地面を蹴り飛ばす。

「吹雪士郎……か。一体どんなストライカーなんだ。」

「待てよ鬼道、簡単に認めていいのかよ!？」

「落ち着け染岡……そんなことを言っても、2人は戻ってこない。」

その一言に染岡は制される。

一際シヨックが大きい春奈に代わり、夏未が吹雪士郎の情報を調べ、提示する。

別名、熊殺しの吹雪、ブリザードの吹雪。

1試合で10点叩き出したとか、熊より大きいとかいう話を一同は簡単に信じられない。

「でも、吹雪士郎が所属する白恋中はFFにも出ていないから……あまり記録がないのよ。」

「噂ばかりで未知数、という訳だ。」

「とにかく、行ってみるしかないな……監督の言うことも一理ある。」

「そうだな。よし皆、次は北海道だ!!」

円堂がその声を張るも、反応は悪い。かくいう円堂の声も、どこかいつもより曇っている。

出来た穴は、あまりにも大きいのかもしれない。

「柊弥が・・・!?!」

豪炎寺は知らされた親友の行方不明に驚愕した。

つい先程、別れる際に「待っている」と言ってくれた柊弥はその後間もなく姿を消した・・・誰にも知らせずに。

「ああ、恐らくエイリアの仕業だろうが・・・」

豪炎寺を乗せ車を走らせている鬼瓦はそう呟く。

エイリア学園から妹である夕香を人質に協力を迫られ、一時的なチームの離脱を選んだ豪炎寺を回収しに来た鬼瓦は、先程電話でそう知らされた。

部下に周囲の搜索をさせたが、やはり見つからず。

その痕跡の無さからエイリアの仕業であると断定することにした。いや、もはやこの時期にそう思わない訳がなかった。

(柊弥・・・無事でいろよ。)

豪炎寺は心の内で親友の無事を願う。

が、その願いは知らぬところで既に裏切られていた。

「・・・それで、その男はどう使うんだい？グラン。」

「今のままじゃ使いもんにならねえだろ？セカンドランクにも劣るよ
うなヤツが。」

「その通りだ。だからまずは訓練させるよ・・・俺達と同じように。」

そう訊ねられたグランの頭の中には、既に目の前の男をどうするか
明確なビジョンが固まっていた。

（まずは使わなくなったあの施設で基礎を固めて、その次にセカンド、
ファーストランクを相手させる。そして頃合いを見て俺達マスター
ランクとやらせようかな・・・勿論実戦も挟んで、ね。）

「しかし、お父様を疑う訳では無いが・・・本当に洗脳なんて出来るの
かい？」

「さあ？その答えは・・・もうすぐ出るんじゃないか？」

手渡されたあの機械を用いて無理矢理に目の前の敵を自分達の仲
間に引き込む。

グランとて抵抗が無いわけではなかった。だが、愛するお父様の期
待を裏切ることと比べたら”そんなこと”と一蹴できた。

ガゼルが言う通り、”洗脳”など出来るのだろうか・・・と疑問に
思う部分もあった。

しかし、その答えは今しがた自分で言ったように目の前で示され
た。

「・・・」

「なあ、これ本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。おはよう——」

そう目の前で起き上がった男の名前を呼ぶ。

その目元には例の機械が取り付けられており、その中心では宝石の

ような何かが赤く煌めいていた。
そしてその男は無機質な声で答える。

「——問題無い。」

「じゃあ、行こうか。」

(ごめん。そしておやすみ・・・加賀美柊弥。)

そう心の中で呟き、新たな仲間の手を取る。
胸の内に僅かな躊躇を秘めて。

「え、パパが見つかった!？」

移動するキャラバンの中で塔子の声が響く。

飛び込んできたその知らせは、誘拐されていた財前総理を発見した
との事だった。

キャラバンは停車。その中で全員ニュースが流れる音無のノート
パソコンを囲む。

宇宙人に攫われていた財前総理は保護されたが、その動向は明らか
になっていない。画面に映し出されたニュースキャスターはそう
言った。

「良かったじゃない。これでお父さんに会えるね!」

「・・・東京には戻らないよ。あんなヤツらは絶対に許せない・・・だ
から、皆と一緒にサツカーで戦う!ほら、このままじゃ人数も少ない
からさ。」

木野のその声に塔子のはつきりと意志を述べる。
それを円堂は拒むことなく、互いにグータッチを交わした。

翌朝、円堂の気遣いで父と再会した塔子は雷門イレブンと共に戦うことを改めて父の前で誓った。

「君が円堂君か。」

「はい！」

「いい目をしている・・・私は私で、出来るだけのことをする。だから君達も力を貸してほしい。」

「分かりました。あんな連中には負けません。」

そう言っつて円堂はキャラバンに乗り込む。それに塔子も続く。

そしてイナズマキャラバンは進み出す。行き先は北海道。

新たなストライカー・・・吹雪士郎を求めて。

第27話 新たなるストライカー、吹雪士郎

「着いたぞ、白恋中だ!!」
「ここが・・・」

数日かけて漸く北海道に到着した雷門。

道中の自然の中での特訓などを経て、漸く豪炎寺と柊弥の脱退による気分の落ち込みが晴れつつあった。

ここへやってきた目的は1つ。熊殺し、ブリザードとも称されるストライカーである吹雪士郎を仲間に引き入れるため。

「それにしても、さっきのアイツは無事に帰れたかなあ・・・」

「自分で大丈夫って言ってたし無事だと思うけど・・・」

”アイツ”とは、白恋中へ到着する少し前に雪道で凍えていた少年のことである。

円堂が少年をキャラバンに乗せ先へ進むと、大柄な熊に襲われるというトラブルに見舞われたが、サッカーボールを持ったその少年が外に出て少し経つと、その熊はノックアウトされていた。

この少年がやったのか・・・?という疑問を抱えつつもキャラバンは進み、吹雪が止みこそすれど周囲には雪だらけの場所でその少年とは別れた。

「まあまあ。とにかく、吹雪ってやつを探そうぜ!」

円堂がそう言ってキャラバンを飛び出す。

それに全員が着いていき、白恋中へ足を踏み入れると雷門の面々は凍えるような気温に反し熱烈な歓迎を受けた。

全国大会で優勝したというその実績の恩恵を実感しつつも、吹雪士郎の所在について訊ねる。

「吹雪君なら今頃スキーじゃないかな？」

「いや、きつとスケートだよ。」

「オイラはボブスレーだと思ふなあ。」

吹雪を知る者達から飛び出た単語はどれもサッカーからはかけ離れたもの。

それでいて熊殺しという異名を持つことに風丸は首を傾げる。すると、一同が話していた教室の外から物音がする。

「あ、帰ってきたんじゃない？」

笠のようなものを被った少女、荒谷が教室の外を覗く。

「吹雪君！お帰りなさい！お客さんが来てるよ。」

「お客さん・・・？」

聞こえてきた新たな声に円堂達は驚きを隠せなかった。何故なら、先程聞いた声と同じだったから。

「あれ、君達か。」

「さっきの・・・!?ってことは・・・吹雪士郎ってお前だったのか？」

「うん、そうだよ。」

「お前が熊殺しか!？」

染岡が食ってかかるように吹雪にそう訊ねると、吹雪はよく誤解を招くんだと頭を掻きながら笑って答える。

吹雪が染岡に手を差し出すと、そのイメージに幻滅した染岡は教室を飛び出していく。それを追おうとした円堂を引き止め、木野が染岡の後を追っていった。

「吹雪君、少し時間いいかしら？」

「ええ。えっと……」

吹雪が浮かべた疑問符に反応するように瞳子は自己紹介をする。

「お話ですか。それなら折角北海道に来ていただいたんですし、雰囲気を感じられる場所でしょうか？……かまくらとか。」

「私はどこでも構わないわ。」

「監督！俺達少し雪遊びしたいっス!!」

「……話をしている間、許可するわ。」

ということ全員外へ出る。

後ろから外に出ていった染岡とそれを追った木野も着いてきた。

一面雪が降り積もる開けた場所に続く階段を降りている時、屋根から雪が滑り落ちる。

その音を聞いて蹲ってしまう吹雪。ただ雪が落ちただけ、と荒谷が声を掛けると吹雪は立ち上がる。

それを見えますます吹雪の印象が分からなくなる一同だったが、雪原を目の当たりにした瞬間そんなことはどうでも良くなったのか、各々が雪だるま作りや雪合戦など、積雪ならではのレジャーに勤しみ始めた。

数人が入れる規模の大きなかまくらで瞳子、円堂、木野、音無は吹雪と話を始める。

「仲間を？」

「ええ。音無さん。」

そうやって音無はエイリア学園によって破壊された校舎の写真を吹雪に見せる。

音無は柊弥を失ったことに対する悲しみは未だ晴れ切ってはいないが、他の者同様に前を向き始めた。

「エイリア学園は数日前から、この北海道で校舎を破壊しているわ。」

「でもうちは大丈夫ですよ、狙われる訳ありません。やっとサッカー部として活動できている弱小チームですから。」

「白恋中だけの問題ではないわ。これ以上エイリア学園のすきにさせる訳にはいかないの。」

「俺達はエイリア学園を倒す為に地上最強のサッカーチームを作ろうとしているんだ。だから吹雪、お前を誘いに来たんだ！」

「貴方の噂は聞いているわ。私達と一緒に戦って欲しい……貴方の実力を見せてくれるかしら？」

それを吹雪は快諾。かくして、雷門中と白恋中の試合が行われることとなった。

「監督、作戦は？」

「好きにしていよいよ。吹雪君の実力を見たいだけだから。」

（誰も、豪炎寺と加賀美の代わりにはなれやしないんだ。）

逆側のベンチでメンバーを鼓舞する吹雪を見て、染岡はそう心の内で吐き捨てる。

「吹雪さんって凄いストライカーって感じがしませんよね。」

「え？」

「ほら、豪炎寺さんや柊弥先輩っているだけで点を取ってくれそうな雰囲気あったじゃないですか。」

「そうね。確かにあの2人と比べたら彼には凄みを感じないわね。」

なんて話をマネージャー陣が交わす。

その発言はもう間もなく覆されることになるとは知らずに。

各々がポジションにつき、試合開始のホイッスルを待つ。

そこで雷門イレブンには衝撃が走る。

ストライカー、と聞いていた吹雪はなんとDFのポジションに着いているのだ。

「吹雪はFWじゃなかったのか!？」

「FWだよ。今はまだ違うんだ。」

後半からポジションチェンジして来るのか、はたまた何なのかという疑問は拭えぬまま。結局は試合の中で確かめればいいと鬼道は思考を切り替える。

『鬼道のキックオフで試合開始!!』

そうして試合が始まった。

揶揄われているのだと憤慨した染岡は、その怒りに身を任せてゴールへ突撃する。染岡の凄みに怯んだ白恋は簡単に染岡の全身を許す。

そしてゴール前にて、染岡と吹雪は一対一。

「そういう強引なプレイ、嫌いじゃないよ——アイスグラウンド!!」

フィギュアスケートのようなアクセルをして着地。着地際、吹雪の足元から氷が広がっていき染岡は為す術なくボールを奪われる。

(何てディフェンス、あれを破るのは大変だぞ。)

鬼道は吹雪のディフェンスを目の当たりにし驚愕した。

ストライカーと聞いていた男が、全国でも通用するであろうディ

フエンスを披露して見せたのなら無理もないだろう。

吹雪は喜多海にパスを出すか、そのパスは風丸がカットした。

（他のプレイヤーは吹雪程の実力ではないな・・・）

風丸は内心そんなことを思いつつも染岡にパス。再び染岡は吹雪と対面するも、無理矢理にゴールを奪おうと己の必殺技を放つ。

「ドラゴンクラッシュ!!」

染岡の煮え滾るような怒りに呼応するように、蒼い龍は咆哮と共にゴールへ、その前に立つ吹雪へ襲い掛かる。

が、吹雪は避けようとはせずにそのままボールへ蹴りを入れると、蒼い龍は姿を消してしまった。

『なんと！吹雪がドラゴンクラッシュを止めてしまったアア!?!』

雷門イレブンに衝撃が走る。豪炎寺と柊弥なき今、染岡がチームの中で一番のキック力を誇っていた。が、その染岡のシュートを意図も簡単に目の前の男は止めて見せたのだ。

必殺技を止められた染岡は、吹雪がキープするそのボールを奪おうとスライディングを仕掛ける。

「——出番だよ。」

吹雪が誰にも聞こえないくらいの声でそう呟き、愛用のマフラーに触れる。

その瞬間だった。

吹雪を中心に雪を舞い上げながら風が巻き起こる。

ボールを奪いに来た染岡を逆に弾き飛ばして見せた。

風が止み、包み込んでいた雪から姿を現した吹雪の眼は先程の眼と

は変わって黄色に染まり、その口元には先程の吹雪からは想像出来ないほどの獰猛な笑みを浮かべていた。

「この程度かよ？甘っちょろいヤツらだ！」

「雰囲気が変わった・・・!?」

別人のように変貌した吹雪を前に驚嘆。

そのまま吹雪は単独で駆け上がる。

一之瀬が仕掛けたシオルダーチャージをそれ以上の力で押し退け、鬼道と風丸のボールを挟み込むようなスライディングも――

「うらアアアアアアアア!!」

――獣のような咆哮を上げながら弾き返す。

土門のキラースライドも軽やかに跳躍して躲し、あつという間にゴール前へ。

(感じるぜ吹雪、お前のシュート・・・絶対凄いはずだ!!)

吹雪は軽く上げたボールを、両脚で挟み込み回転を掛ける。するとどこからか冷気が漂い始め、ボールを包み込む。

どンドンその出力を上げていくボールを、吹雪は一切の躊躇無く撃ち出す。

「エターナルブリザード!!」

永遠の吹雪、と名を冠するそのボールは凄まじい勢いで吹雪かせながらゴールへ迫る。

あまりの速さに溜める余裕がなく、円堂はゴッドハンドでそのシュートを受け止める。が、ボールに触れた瞬間ゴッドハンドは凍りつき、薄氷のように砕け散る。

『ゴオオオル!!吹雪の必殺シュートが雷門ゴールに炸裂!!なんと先制したのは白恋中だアア!!』

「ゴツドハンドがあんな簡単に・・・!?」

「これがブリザードの吹雪・・・」

ベンチからそれを眺めていたマネージャー陣が驚きの声を漏らす。当然、驚いているのは選手達も同様だった。

自慢の必殺技を破られた円堂は、未だ手に残る感触を噛み締める。

「いいかよく聞け・・・俺がエースストライカー、吹雪士郎だ。」

そう言つて吹雪は自陣へと戻っていく。

「あのスーパーデイフェンスに素晴らしいシュート力・・・噂以上だ。」

「どんなにシュートが凄くても・・・豪炎寺と加賀美の代わりはいねえんだ・・・!」

吹雪の背中を見送りながら、鬼道と染岡は呟く。

ボールを拾い、このままじゃ終われないと意気込む染岡の声に反し、瞳子は試合終了を言い渡す。

「このまま終わらせてたまるか・・・!」

その指示に従うことなく、染岡は吹雪にボールを蹴る。それに反応した吹雪はボールを高く蹴り上げる。

「お前に負ける訳にはいかねえ!!」

「やる気か・・・おもしれエ!!」

落ちてきたボールに互いに蹴り込む染岡と吹雪。それに打ち勝ったのは吹雪だった。

「その程度か、話にならねえ。」

と、地に伏せる染岡を見下しながら吐き捨てる吹雪。

「こんなもんじゃ満足できねえ・・・もつと楽しませろオ!!」

と、戦意が収まることを知らない吹雪は叫ぶ。そしてその場で自分の象徴とも言える必殺技の構えに入る。

「エターナルブリザード・・・らアアアアアア!!!」

コート中央から再び放たれたエターナルブリザード。暴風を伴って突き進むそのシュートに塔子と壁山が立ちはだかる。

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

そびえ立つ塔と壁。が、荒れ狂う吹雪はそれら全てを突き破ってゴールへ迫る。

離れた位置からのシュート、それに加えて2人のシュートブロック。これにより余裕が生まれた円堂は自身の最強技の構えを摂る。心臓に手を近付け、エネルギーを一切の無駄なく注ぎ込む。

「マジン・ザ・ハンド!!」

突き出された魔神の手。しかし、シュートはその手に触れることなく明後日の方向へと飛んで行った。

「チッ！あれでコースが変わったか・・・！」

倒れ込んだ塔子と壁山に駆け寄り、立ち上がらせる円堂。
吹雪のシュートの凄さを語る塔子。その言葉に円堂は閃く。

「円堂！どんな強力なシュートもこの方法なら・・・！」

「うん、エイリア学園を倒せるかも！」

同じ閃きを得た鬼道に同調し、更なる希望を見出した。
そこで瞳子が割り込み、完全に試合を止める。

「吹雪！俺、お前と一緒にサッカーやりたい！」

「僕もさ！君と、君達となら思い切りサッカーをやれそうな気がするよ！」

互いの健闘を讃えあつた後、円堂が吹雪に勧誘の言葉を掛ける。それに吹雪も頷く。

「吹雪君、正式にイナズマキヤラバンへの参加を要請するわ。一緒に戦ってくれるわね？」

「ええ、良いですよ。」

「・・・雷門の新しいストライカー、誕生よ！」

吹雪の正式な加入。

そして放たれた瞳子の一言に染岡は齒ぎしりし、その場を走り去る。そしてその後を追いかける円堂。

「おい染岡！待てよ！」

「円堂・・・お前は良いのかよ!?豪炎寺と加賀美の代わりがあんなヤ

ツで！」

「そんなに吹雪のことが嫌いか？俺は面白いヤツだと思った！あんな凄いシュートを撃てるヤツに悪いヤツはいないよ。」

吹雪への嫌悪を隠そうとしない染岡に円堂が自分の感想を述べるが、それでも染岡の不満は治まらない。

「アイツらはいつだってサッカーと真剣に向き合ってきた・・・それをアイツは楽しませてくれただど？ふざけるな!!」

「・・・別に、それでいいんじゃないか？」

染岡の言葉を円堂は遮る。

「サッカーを楽しむ。うちのチームでそれを誰よりも心掛けていたのは・・・柊弥だぞ？アイツはどんな時だって、サッカーは楽しむものだって言っていた。なら、それでいいんじゃないか？」

「・・・だけどよ！」

それを聞いても、染岡は吹雪を認めようとしなない。

「俺だって、アイツらがいなくなって寂しいよ。こう考えようぜ！柊弥と豪炎寺が戻ってきた時が地上最強のメンバーが集まる時なんじゃないかって。だったら、俺達にできることは・・・その地上最強のメンバーになっっていることじゃないか？」

それを聞いてようやく染岡は自分の言葉を呑み込む。

「分かった。でもまだ、仲間と認めたわけじゃねえからな！」

「うん、それでいいさ。」

「大変です!!」

そう声を上げた音無の周りに雷門、白恋の全員が集まる。

音無のパソコンに映し出されたのは・・・レーゼを始めとするジエミニストームの姿。

『白恋中の者たちよ。お前らは我々エイリア学園に選ばれた。サツカーに応じよ！断ることは出来ない・・・負ければ破壊が待っている。助かる道は勝利のみだ。』

そういつて映像は途切れる。

突きつけられた襲撃予告。それに白恋のメンバーは恐怖を覚えるが、円堂がその不安を祓う。

「大丈夫さ！俺達雷門が、必ずエイリア学園に勝つ！この学校は破壊させない！」

「うん。僕も雷門の皆と戦う。大丈夫だよ。」

その言葉に吹雪が便乗する。

が、今の雷門では力不足とあることは歴然としている。

その為に更なるレベルアップを図るため、雷門イレブンの闘志は更に燃え上がるのだった。

第28話 速さを求めて雪国特訓

瞳子が鳴らしたホイッスルと共に、違う色のユニフォームに身を包んだ雷門イレブンがボールへ向かっていく。

新たに吹雪を迎え、来たるジエミニストームとの再戦に備え、連携の確認に励む雷門。

が、そんな中でも一悶着があった。

「お前なあ！鬼道も一之瀬もこっちに回せて声掛けてんだろーが！」

「だって・・・僕いつもこうしてたし。」

「白恋じゃ通用してもうちじゃ通用しないんだよ！お前は雷門イレブンに入ったんだから、雷門のやり方に合わせろ!!」

「そんなこと急に言っちゃって・・・」

白恋は言ってしまったえば吹雪のワンマンチーム。

控えめな性格のメンバーに囲まれていたが故に、吹雪の個人技が光るチームであった。

それが裏目に出てしまい、雷門に加入した今吹雪は”連携”という概念に戸惑いを覚えているのであった。

「やっぱり、こいつに加賀美と豪炎寺の代わりなんて・・・！」

「・・・それはどうかな。」

土門に抑えられながらも怒りを露わにする染岡の言葉を遮ったのは風丸だった。

「俺は吹雪に合わせてみるよ。俺には・・・あのスピードが必要なんだ。エイリア学園からボールを奪うにはな・・・そうでなきや、また前の繰り返しだ・・・」

悲痛な表情をでそう語る風丸。

風丸の脳裏に浮かぶのは2度に渡るジェミニストームとの試合。自分のスピードが相手に及ばなかったがために、目の前で大切な仲間が痛ぶられた。その光景に耐え難いものを風丸は感じていた。

「・・・だったら、風になればいいんだよ。」

「風・・・?」

「うん。おいで、見せてあげるから。」

その空気を払拭するように吹雪が口を開く。

そう言って吹雪が一同を案内したのは白恋中裏のゲレンデ。

そして吹雪に指示された白恋イレブンは、その背丈にも並ぶほどの巨大な雪玉を何個も携える。

「スノーボードか!」

「それでどうやって?」

「まあ見ててよ。雪が僕達を風にしてくれるんだ。」

姿を消したと思ったら、吹雪はスノーボードの用意に身を包んで再び姿を現した。

見ていろ、と言って間もなく。吹雪は勢いよく飛び出し、滑り落ち始める。

「皆!よろしく!」

スピードに乗り始めた吹雪は、傾斜の上で待機していた白恋イレブんに声を掛ける。

すると、白恋イレブンは用意しておいたその巨大な雪玉を滑る吹雪目掛けて転がす。

デフォルメ的なダンジョンのトラップのように吹雪に向かって転がる雪玉。円堂達は吹雪に心配の声を掛けるも、その心配とは裏腹に

吹雪は迫る雪玉を舞うようにして回避する。

それを見た一同は、吹雪の動きに感嘆の声を漏らす。

「すげえな、雪玉のメチャクチャな動きを完璧に見切ってるぜ。」

「吹雪君が言うには、速くなればなるほど感覚が研ぎ澄まされて、自分の周りのものがはつきり見えてくるんだって！」

それを聞いて雷門イレブンからは頷きの声上がる。

やがて自分もやってみたい、という意識を持ち始める。

「ほお、大したものですね・・・」

「目金さん！前！」

「うわあああああ!!？」

傾斜を登ってきた雪玉が目金と栗松を巻き込み、再び転がり始めやがて傾斜に激突する。

その弾みに、木々に降り積もる雪が音を立てて落ちていく。

その音を聞いた吹雪は、昨日屋根から滑り降ちる雪の音を聞いた時のようにその場にうずくまる。

「吹雪!?大丈夫か!？」

「あ、うん・・・ごめんごめん。」

顔を真っ青にしながらも、駆け寄ってきた円堂にそう返す吹雪。

誤魔化すように立ち上がった吹雪は、スノーボードの用具を持ってきて試してみるように促す。

「それにしても、いつからこの特訓を?」

「特訓ってわけじゃないんだ。」

そう言って、吹雪は幼い頃を思い出す。

1人感傷に耽ける吹雪に向けてか、染岡が否定的な言葉を口にする。

「なんだ、結局遊びの延長じゃねえか。俺達雷門イレブンの特訓は遊びとは違う！苦しい特訓を乗り越えて強くなることに意味があるんだ！」

「やっぱり、そういうの疲れるなあ。」

「何イ!？」

「同じ特訓なら、楽しく力をつけたいな。」

吹雪のその言葉に一之瀬も後ろから同調する。

一之瀬が指さした先には、やる気に満ちた円堂がいた。

「俺、スノボ初めてなんだ！教えてくれ——ん？あ？うわあああ!？止めてくれええええ！」

勢いよく立ち上がり、吹雪に近づこうとしたその弾みにバランスを崩しそのまま滑り落ちてしまう。

その姿を見て他のメンバーも後に続く。

鬼道や塔子、一之瀬辺りは器用に乗りにこなしてみせるが、円堂や壁山、栗松辺りはボードに遊ばれているようにも見える。

(見えない。スピードに慣れていないせいなのか・・・?)

1人滑る風丸。

風丸が思った通り、自分自身でそのスピードに対応出来ておらず、迫る雪玉と正面から衝突してしまう。

「くっそお！絶対に風になってやる！」

「キャプテン！楽しむんだよ。楽しめば、身体の方が着いてくるから！」

吹雪に倣ってスノーボードによりスピードを強化しようと試みる一同を、染岡は1人腑に落ちない表情で眺めていた。

「今日は助かったよ。吹雪と染岡がぶつかった時、お前吹雪に合わせるって言ってくれたろ？」

「ん？ああ、そうだな。」

凜々と煌めく星の元、キャラバンの上で円堂と風丸は2人並んで空を見上げていた。

「それで俺気付いたんだ。誰かに変われって言う前に、まず自分から変わらなきゃ強くなかなれないってさ。」

「そうだな・・・なあ、円堂。」

「ん？」

「俺、力が欲しいんだ・・・神のアクアがあれば、すぐにパワーアップできるだろう？世界を救うためなら、使っても許されるんじゃないか？」

「何言ってるんだ！神のアクアなんか頼っちゃダメだ！それじゃ影山と同じじゃないか！」

予想だにしなかった風丸の呟きに、思わず声を荒らげて否定する円堂。

「エイリア学園はサッカーで人を傷つける！だからこそ俺達は正々堂々戦って、絶対に勝たなきゃいけないんだ!!」

血迷ったのであろう友人の発言を、思いつく限りの言葉で取り消さ

せようとする円堂。

それを聞くと、風丸はフツと笑みを浮かべて再び口を開く。

「・・・悪かった。何焦ってるのかなあ俺。忘れてくれ。」

「特訓特訓！なろうぜ、風に！」

立ち上がり、月を見上げる風丸。その背中を叩いて円堂は、後ろ向きな風丸の気持ちを少しでも押しやろうとする。

が、心の内にヒビが入り始めたのを、本人もその隣にいる者も気付けてはいなかった。

翌日、早朝から円堂と風丸はボード片手にゲレンデへ向かう。

その途中、雪の上を何かが滑る音を聞いた。誰だろうかと思いきや急ぐと、そこに居たのは昨日は取り組もうとしなかった染岡だった。

「染岡！」

「ん？おお。」

勢いのまま倒れ込んだ染岡の腕を引っ張りあげて立たせる円堂と風丸。

「あんなに吹雪に文句言ってたのに、どういう風の吹き回しだ？」

「身体の方から着いてくるって、あいつ言ってただろ？だからとにかくスピードに慣れようと思ってな。」

円堂達に背を向け、コースに目を向ける染岡。

「あいつには・・・吹雪には、絶対に負けられねえからな。」

染岡の目には、吹雪に対する嫌悪感と言うよりも闘争心が強く浮き出ている。

それを感じ取って円堂、風丸は何も語らず染岡と共に位置に着く。

3人同時に滑り出す。冷たい風が頬を撫で、次第にそのスピードは増していく。

「うわっ!？」

迫る雪玉を避ける円堂。それを避けたらまた次の雪玉が迫ってくる。

それに対する回避は間に合わない判断した円堂は、掌を雪玉に突きつける。

すると、ゴツドハンドに似たエネルギーが掌から放出され、襲い来る雪玉を粉々に砕いて見せた。

「円堂！どうした!？」

「今のは・・・初めての感触だ。今の腰のひねり、身体中にビシツと力が伝わった気がしたんだ！鬼道が全身のバランスが大切だと言ってたけど、この特訓は気を溜める特訓に役立ちそうだ!」

そう言ってまた滑り出す。時折、衝突されてはその仕返しに雪玉を投げあつて。

その光景を、吹雪は誰にも気付かれずに眺めていた。

目の前の光景に、自身の記憶を照らし合わせて。

それからも特訓は続く。

吹雪の方法でスピードを磨き、実際にグラウンドで成果を確認し、その後はマネージャ陣の徹底した管理の元で食事をし、休息を摂る。

そのサイクルが徐々に雷門イレブンの力を伸ばして行った。

「皆、様になってきたんじゃない？」

「うん。想像以上だよ！」

休憩がてら瞳子とマネージャー達がいる場所へ滑り昇ってきた吹雪にそう声をかけた夏未。吹雪もそれに頷く。

「私も、彼らを率いてまだ日が浅いけど……彼らは打てば響く選手達よ。それも、こちらの予測を遥に上回ってね。」

そう横から言葉を零した瞳子。

最初は疑問を持っていた雷門イレブンの実力も、段々と認めつつあった。

そこに染岡がやってくる。

「吹雪、俺と勝負しようぜ。」

「勝負？」

「ああ。俺の特訓の成果を、お前相手に試そうと思ってな！」

その染岡の提案に、少し黙った後に口を開く。

「それは……どっちが雷門のエースストライカーか決める。ってことでいいのかな？」

「そう思ってくれていいぜ。」

そう言って染岡は戻っていく。

一通りの特訓を終えた後、グラウンドにて2人は向き合う。

「ルールは簡単。センターからボールを蹴りあって、先にゴールを決めた方の勝ちだ！それじゃ始めるぞ？」

他のメンバーが見守る中、円堂の合図で2人は動き出す。

先にボールを取ったのは吹雪。流石とも言えるそのスピードですぐさま奪った。

だが染岡も負けていない。必死に食らいつき、どれだけ避けられようとも諦めずに立ち向かう。自分の中の意地にかけて。

激しいボールの奪い合い。

それを制して染岡がボールを奪い、ゴールへ向かっていく。

「やるじゃねえか！ちよつと嘗めてたぜ・・・こうじゃなきや面白くねエ！」

目をギラつかせた吹雪が猛スピードで染岡の背後に着く。

吹雪の激しいチャージを耐え忍びながら、染岡はゴール目掛けてシュート。が、捉えたのはゴールポスト。

弾かれたボールを吹雪が奪う。そのままシュートの構えを摂るが

「——ッ!？」

——そのボールが蹴られることは無かった。

吹雪の目に映ったのは、染岡の背後にいた小さなリス。

このまま撃ち込めば、そのリスが危険な目に合うことは目に見えていた。

それを瞬時に判断し、シュートを躊躇う。その隙に染岡がボールを奪う。

「もらったッ!!」

撃ち出されたシュート。

染岡の想いに呼応してか、そのボールには蒼く輝くエネルギーが点っていた。

それを染岡本人も、ギャラリも見逃していなかった。吹雪に追いつけたこと、さっきのシユートのパワー。特訓の成果を自覚できないわけがなかった。

「今日は僕の負けだね。」

そう吹雪は、リスと目を合わせながら呟く。

確かな成長に打ち震える雷門イレブン。今ならば戦える・・・そんな自信が根付き始めた。

その翌日、雷門イレブンはいつものようにグラウンドで練習に励んでいた。

その時だった。

グラウンドは突如暗雲に包まれ、不穏な空気が漂い始めた。

「・・・来たか。」

雷門イレブンは確信とともに視線を移す。

そこに居たのはエイリア学園、ジェミニストーム。

3度目の対決が今始まろうとしていた。

「さて、どうかな？」

そう呟いて、隠し扉のロックを外し中に入る。

目の前に広がるのは何やらメルヘンチックな落書き。

・・・明らかに誰かの所有物だつて分かるのに、こんな改装するものなんだね。

まあいい、さて。彼はどこに・・・

「あ、いたいた。」

「・・・グラン。」

彼は、水溜まりが作れるほどの汗を撒き散らしながら鎮座していた。

彼を迎え入れて約1週間。エイリア学園としての実力には到達していなかった彼にこの修煉場にて特訓を積ませ、時折俺が相手することで実力向上を図った。

はつきり言つて、期待以上だった。

驚異的な成長スピードでその実力を伸ばし、今やジェミニストームのメンバーよりも仕上がっているだろう。

・・・しかもエイリア石なしで、ね。

そう、彼にはエイリア石を使わずに特訓させ、俺達マスターランクと同じ次元まで登ってきてもらうつもりだ。

お膳立てはもうしてある。後は彼がどこまで成長するかだね。

「さ、見てあげるよ・・・おいで。」

ボールを彼に向かって蹴り渡す。

普通のサッカーボールではなく、俺達エイリア学園が使う黒いサッカーボールを。

彼はそれを簡単に胸で受け止める。

最初は持ち上げることすらままならなかったのにね。そしてそのボールを蹴り返してくる。シュートの威力も申し分無しだ。

「よっ、と。」

「行くぞ。」

そうやって彼は雷鳴の如くこちらに向かってくる。

パワー、スピード、テクニク。全てが見違えるほどに向上している。

ある程度加減して対応していると、簡単にボールを奪われてしまった。

そしてそのまま俺を追い抜き、ゴールへ向かっていく。

ボールに回転を掛けると、その回転の勢いがどんどん強くなっていくと同時に、ボールが雷を纏い始める。

凄まじいエネルギーを感じさせるそのボールに蹴り込むと、轟音と共にゴールネットが揺らされる。

流石、と言うべきか。

「いい仕上がりだね。じゃあそろそろ・・・実戦といこうか。」

そうやって空間に映像を映し出す。

そこに映っているのは、試合の真つ最中であるジェミニストームと雷門中。

「レーゼに話は通してあるよ。存分に試しておいで。」

「了解。」

「ああそうそう。必殺技は新しいやつだけ使ってね。」

バレたら何かと困るかもしれないからね。

少なくとも、今はバレていい時期じゃない。

黒のサッカーボールを手に取り、光に包まれていく。

「行ってらっしゃい——ネビュラ。」

ネビュラは、目元の黒い機械の中心に埋まる紅を煌めかせながら光に包まれ、姿を消した。

さて、どうなるかな・・・？

第29話 星雪の嵐が吹く頃に

「またお前たちか。何故ここにいる？」

「俺達が代わりに戦う！」

「フツ、地球人は学習能力がないようだな。2度も我々に敗れてなぜ分からない？我々には適わないと。」

「宇宙人の想像力も大したことないね！私達がパワーアップしたとは思わないの？」

白恋中にととうその姿を現したジエミニストーム。

レーゼが本来ここにいるはずではないであろう円堂達に疑問を投げかけるが、円堂や塔子は怖じけることなくレーゼに言葉を返す。

それを聞いたレーゼは不敵な笑みを浮かべる。

「良いだろう。地球にはこんな言葉がある・・・」二度あることは三度ある！」

といて、強烈なカーブを掛けながらボールを蹴り飛ばす。

途中何度も曲がりながら、ボールは円堂目掛けて突き刺さる。

以前ならば取れなかったであろうそのボールを、円堂はしっかりと止めてみせる。

レーゼに笑みを返す円堂。が、レーゼがそれに反応することは無かった。

『凍てつく北の大地を溶かすほどの熱気!!テレビ中継も行われる注目の雷門イレブン対エイリア学園!!まさに世紀の決戦が今行われようとしています!!』

地球の命運が掛かっているその試合を発信すべく、幾つものテレビ局がグラウンドを囲む。

冷気と緊張感が空間に満ちる。

「私達の学校、壊れちゃうの?」

「大丈夫だよ、絶対に宇宙人なんかには負けないから。」

「吹雪! 頑張ろうぜ!」

不安に耐えかねた白恋イレブンが吹雪を囲む。それに対し吹雪は安心するように声を掛け、後ろから円堂も同調する。

「——良いわね、鬼道君。」

「分かりました。」

少し離れたところで鬼道に今回の試合の指示を出した瞳子。

聞き終えた鬼道が雷門イレブン全員を集める。

「吹雪。最初はセンターバックに入ってディフェンスに専念してくれ。俺が指示を出すまで攻撃は禁止だ。」

その言葉に驚きの声上がる。

「何故だ鬼道!? 吹雪のスピードを活かした攻撃で点を取るんじゃないのか!」

「まあ聞け・・・俺達は吹雪の助力もあって確かにスピードを身につけた。だが、ヤツらのスピードに慣れた訳ではない。これはそのため監督が出した指示だ。」

「なるほど・・・スピードに慣れるまでは失点する訳にはいかない。慣れない内にヤツらに追いつけるのは吹雪だけってことか。」

「吹雪の出る幕はねえよ・・・俺が点を取ってやる。」

最もな疑問に対するその回答に一之瀬は頷かざるを得ない。

吹雪が攻撃に参加しない、と言われても染岡の闘志は依然として燃え続けていた。

「よし！絶対にヤツらに勝って、入院している半田達にも勝利の報告を届けてやろうぜ！」

円陣を組み、手を重ね合わせる。

試合前に改めてチームの想いは一つに。

「やるぞ・・・今度こそエイリア学園の侵略を終わらせるんだ!!」

「!!おう!!」

気合いに満ちた声がグラウンドに響き渡り、雷門イレブンは動き始める。それを見ていたジェミニストーム達。

「レーゼ様・・・ヤツら本当にパワーアップをしているようですが。」
「我々が地球人に遅れを摂るなど有り得ない。それに・・・あの方も来る。」

「・・・ですが、あの方は未だ調整の真っ最中のはず。我々に着いてこれるとは・・・」
「そう言うな。グラン様が付きっきりで調整しているのだ・・・問題ない。」

雷門の様子を見て、その実力が以前より向上していることを的確に把握したジェミニストーム。

だがそれでもレーゼの余裕は揺らがない。

話を終えてジェミニストームもグラウンドに入る。それを見て雷門もポジションに着く。

『さあ両チーム気合十分！運命は人類に味方するのか、それとも見放すのか!?!』

「本気で我々に勝てると思っているのなら、愚かとか言いようがない。」

「何だと!？」

「言わせておけ! 黙らせればいい・・・俺達のサッカーで。」

『さあ雷門のキックオフで試合開始だ!!』

染岡が鬼道にボールを渡し、染岡、鬼道、一之瀬、風丸が駆け上がる。

そしてボールは染岡に戻される。

「さて、少しは——!？」

レーザーは驚愕した。

目の前の地球人達は、自分達の予想を遥かに上回るスピードを得ていたのだ。

そしてさらに、それが自分達よりも上であることを察してしまった。

それに驚いたのはレーザーだけではなく、他のメンバーも同様だった。そのせいか反応が遅れる。

気を取り直して雷門の行く手を阻む。が、動揺が残っている故にイマイチボールを捉えきれない。

「いけ染岡!」

「おう!!」

風丸からフリーの染岡にパスが出される。

そのボールを染岡は天高く蹴り上げる。すると、地面を突き破り姿を現した羽根を得た蒼龍。

蒼龍と共に降りてきたボールを染岡は全力でゴールへ叩き込む。

ドラゴンクラッシュとは比にならないエネルギーを秘めたそのシュートは、スピードも段違いだった。

ジエミニストームのキーパー、ゴルレオがボールに触れることは無かった。

「これが俺の・・・ワイバーンクラッシュユだ!!」

「馬鹿な・・・!?!」

『ゴ、ゴオオオオル!!なんと雷門!開始間もなくジエミニストームから1点をもぎとったアア!!』

ジエミニストーム以外から歓声が湧き上がる。

以前は1点を取るどころか、何十点もの失点を許していた相手に対して先制点をもぎ取ったのだ。反応を許すこと無く。

「我々が・・・圧倒された?」

レーゼが顔を真っ青にしながらそう呟く。

「へっ、これが俺達のサッカーだ!」

「地球人如きが、調子に乗るな・・・!」

染岡の挑発気味なその一言に、レーゼは眉間を震わせる。

予想だにしていなかったこの展開。レーゼは先程の己の余裕を後悔することになる。

(――ここで負けたら、我々ジエミニストームの立場が・・・!!)

仮に自分達が負けようものなら、自分達の上に控えるチームからどんな扱いを受けるか想像に難くなかった。

失望の目線を向けられ、用無しとして扱われるのが目に見えている。

その認識が、レーゼを奮い立たせる。

そしてそのレーゼを見て、ジエミニストームのメンバーも今一度気

を引き締め直す。

失点によりキックオフはジェミニストームから。

ボールはリームからダイヤモンドへ渡り、ダイヤモンドは前線へと駆け上がる。
る。

その目の前に立ちはだかったのは塔子。

隙のないそのディフェンスを抜くのは困難とみたダイヤモンドは、後ろのイオへバックパス。

「もらった!!」

が、そのボールは風丸によって奪われる。

奪い返そうと風丸に飛びつくイオ。

「疾風ダツシュ!!」

その速さは正しく”疾風”

目にも止まらぬドリブルでイオを抜き去り、再びボールを前線へ運ぶ。

様子を伺い、マークにつかれていない鬼道へパスをだす、が。

「何!?!」

そのボールが鬼道に渡るよりも早く、レーゼが空中でカットする。

そのまま駆け上がるレーゼを止められるものはいなかった。

・・・ただ1人を除いて。

「アイスグラウンド!!」

吹雪の舞うようなディフェンスにボールを奪われてしまうレーゼ。

「ナイスだ吹雪!!」

吹雪が風丸にボールを回す。

だがすぐボールはジェミニストームに奪われる、そしてそれを吹雪がゴール前で奪い返すことの繰り返し。

最序盤に先制点を決めたものの、ジェミニストームの全力の前にはイマイチ追いつけない雷門イレブン。

が、それも時間の問題となりつつあった。全員が段々とそのスピードに慣れつつある。

ボールは真ん中にてジェミニストーム、パンドラがキープ。

それを鬼道と一之瀬は2人がかりで抑えにかかる。

以前の試合で掴んだジェミニストームの攻撃パターン。それに則つてのこのマークだったがその予想をジェミニストームは上回る。

サイドから上がるイオにパスを出したパンドラ。

予想していなかったそのパターンに驚く鬼道。

「何だこのパターンは!？」

ボールを受け取ったイオはそのままレーゼへとパスを出す。

そのままダイレクトでレーゼはボールに回転をかける。

紫色のエネルギーが収束、それに空気が揺らされる。

ボールはそのエネルギーを周囲に纏い、圧倒的パワーを感じさせた。

「アストロブレイクツツ!!」

放たれたアストロブレイク。

その威力を少しでも減衰させるべく、壁山と塔子が立ちはだかり技をぶつける。

が、いとも簡単にそれを打ち破りボールはゴールへ迫る。

「させるか！爆裂パンチ!!」

ボールに向かって連続で拳を叩き込む。

特訓を経て一撃の威力、連撃の速度も増した爆裂パンチ。
だが。

「うわッ!？」

レーゼのアストロブレイクを破るには至らなかった。突き刺さったそのシュートにゴールネットは揺らされ、ホイッスルが鳴り響く。
得点は1―1。振り出しに戻った。

「円堂!!大丈夫か!？」

「ああ・・・大丈夫だ！今は反応が間に合わなかったただけだ！もうあのシュートも目で追えるようになった・・・次はマジン・ザ・ハンドで止めてやる!!」

そう宣言する円堂。

シュートを目で追えるようになった。それはあの1本でジェミニストームのスピードへの対応が出来るようになったということ。

そして、それは他のメンバーも同じことだった。

1点を取られたものの、雷門の自信は未だ衰えてはいなかった。

「・・・よし、ポジションチェンジだ!」

その一言で雷門の陣形が切り替わる。

吹雪を前線に押し上げ、守備重心から攻撃重心へ。

吹雪を抜きにしても、今ならばジェミニストームのオフセンスにも追いつけると確信があった。

「吹雪、染岡・・・任せたぞ。」

「おう！任せとけ！」

「うん。頑張るよ。」

体制を整えて試合再開。

染岡がボールを持って駆け上がる。

先制点を決めたこともあり、染岡には重点的な警戒がなされるが、むしろそれを利用してみせる。

染岡は一旦後ろの一之瀬にボールを戻す。

マークに着かれた染岡には出せず、一之瀬からなら出せるパス。

一之瀬の視線の先には吹雪がいた。

「吹雪!!」

「・・・行くよ、アツヤ。」

こちらに来るパスを見て、吹雪はそう呟いてマフラーに触れる。

その瞬間、吹雪の纏う雰囲気ガラリと変わる。

高く上げられたそのパスを、イオがトラップしようとして待ち構えるが、背後からそれ以上のスピードで吹雪が飛び上がり、ボールを受け取る。

「ハッ・・・遅セエよ！」

そのまま吹雪は駆け上がる。誰もそのスピードには追いつけない。

あつという間にゴール前まで上がった吹雪は、必殺の構えを摂る。

「吹き荒れる・・・エターナルブリザード!!」

吹雪の気迫に呼応して吹き荒れる暴風。

その暴風にゴルレオは身体を奪われ、その巨体を浮かされる。

ゴールネットを凍り付かせたそのシュートが示す事実は一つ、更なる。

る得点。

2―1というアドバンテージを得た雷門。そのまま前半終了のホイッスルが響いた。

『ここで前半終了だアアア!!雷門イレブン、2―1のリードで後半へ持ち越したアアア!!』

ベンチへ戻っていく両チーム。

勝利へ王手をかけた雷門とは裏腹に、ジエミニストームには焦りが走る。

「レーゼ様、ヤツら・・・!」

「分かっている!」

ディアムの口添えにレーゼは声を荒らげる。

この危機的状況を乗り越える手段を得るため、レーゼは頭をフル回転させる。

その時だった。

ジエミニストームのベンチ付近に、黒いサッカーボールが飛来する。

着弾と共にボールから紫色の光が滲み出て、周囲を包み込む。

その光が晴れると、先程までいかなかったはずの人物がそこには立っていた。

ジエミニストームのユニフォームに身を包み、黒い髪を後ろへ流した男。

特筆すべきは、目元に携えた重々しい黒い何か。

「――ネビュラ様!!」

「・・・状況を。」

試合に突如姿を現したイレギュラー。

それを目にした雷門イレブンには動揺が走る。

「・・・何だ、あいつ。前まではいなかったよな？」

「それにヤツら、”様”と呼んだぞ・・・」

雷門イレブンは彼の者の正体に気づくことは無い。

ネビユラの襲来に一番驚きを隠せていなかったのは瞳子だった。

(あの子は一体・・・私は、彼を知らない。)

瞳子は記憶にない少年の登場に困惑する。

目の前のジェミニストームの正体・・・他人に話せずにいたものの、瞳子はそれを知っていた。

その正体は、この事件の主犯である自分の父が運営する孤児院の子供たち。そしてこのチームの次にも控えているチームがいることを知っていた。

誰も知らないその事実を知っている瞳子ですらも、ネビユラの正体を把握してはいなかった。

嫌な胸騒ぎを感じずにはいられなかった。

(あの人、どこかで・・・?)

そんな疑問を音無は浮かべていた。

だが、宇宙人の知り合いなどいるはずもなく、直ぐにその疑問を払拭することになった。

知らぬ内に果たされた再会を、誰も知る由もなかった。

第30話 イレギュラーの参戦と決着

『さあ間もなく後半開始だ！1点リードのまま後半を迎える雷門に対し、ジェミニストームはグリーンゴと突然の乱入者ネビュラを交代する模様!!何のデータもないネビュラがどう試合に影響を与えるのか!!』

グリーンゴと交代し、ネビュラがグラウンドへ足を踏み入れる。

ジェミニストームのメンバーと比べてもどこか異質な雰囲気漂わせるネビュラに、雷門イレブンは警戒を強める。

(あの男……一体どんなプレイをするんだ)

その中でも一際強く警戒していたのは鬼道。自身のゲームメイクに影響を及ぼすかもしれないその要素に警戒しないはずがなかった。

だが、過去2回のジェミニストームとの試合にはいなかった選手であるため、どう警戒すべきかが分からない。

結局は、実際にどの程度の選手なのかを見定めるしか無かった。

やがて開始のホイッスルが響く。キックオフはジェミニストームから。

ダイヤモンドはすぐさま背後に控えるレーゼへ、そしてレーゼはネビュラへとパスを出す。

「ネビュラ様！」

ボールを受け取ったネビュラはすぐさま駆け上がる。

それを見たジェミニストームのメンバーは驚きを隠せない。

彼らが最初で最後に見たネビュラは、自分達より圧倒的に格下……それこそ、目の前の雷門達の最初に対面した時と同程度だった。

それがどうしたことだろうか。雷門同様に自分達に匹敵する、或いはそれ以上のスピードを身につけていたのだ。

圧倒的、という程でもない。だが、この短い期間でここまでの成長を遂げたということが問題だった。

当然、それを雷門は知る由もないが。

「ディフェンス囲め!!」

呆気にとられた鬼道はすぐさま指示を出す。それを受けて壁山、土門、塔子がネビュラを囲む。

「キラースライド!!」

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

全員同時に必殺技で行く手を阻む。

が、そのスピードを増したネビュラにより、土門のキラースライドは軽い跳躍で躲され、塔子のザ・タワーは発生前に追い抜かれ、壁山のザ・ウォールはその壁よりも高く飛ばれ、尽く避けられた。

(速い！恐らく吹雪と同レベル……！)

「……来い!!」

ディフェンス陣を追い抜いた際のスピードは、吹雪に匹敵するものだろうと鬼道は察する。

吹雪は現在FW……どう抑えるかが問題となった。

そしてディフェンス陣を抜いたネビュラは、早速円堂と向かい合う。

「……」

「な——ッ!?!」

無言のまま放たれたのはノーマルシユート。

必殺技が来るかと思っていた円堂は、一瞬反応が遅れてしまう。そ

のタイミングのズレを補完するため、発生が早い技で対応する。

「爆裂パンチ!!」

数十秒にも渡る競り合いの後、ボールは弾かれる。

弾かれたそのボールを見送り、円堂は自分の手に目を向ける。

(ただのシュートなのにあの威力……もう少しで爆裂パンチが負けるところだった。あいつ、すつげえ強いぞ……!あれ、あいつは——!?)

飛んでくるボールを受け取ろうとする風丸。

が、それを阻むものがいた。

「何ッ!？」

ネビユラである。

ネビユラはノーマルシュートを撃った後に、すぐさま体勢を立て直して次の行動に移る準備を整えていた。

結果、弾かれたボールをすぐさま追いかけ、そのボールが相手に渡る前にカットするという荒業をやつてのけた。

空中でボールを奪い着地。すぐさま駆け上がりまたもや円堂と一対一。

シュートを撃った後すぐさまボールを追いかけて行つたネビユラを捕捉していた円堂は、迫るネビユラに対して構える。

対するネビユラは、ノーマルシュートではなく今度は必殺技を解禁する。

高くまで蹴り上げられたボール。そしてそのボールが昇る先には既にネビユラが待ち構えていた。

そのボールはネビユラは明後日の方向へ蹴り飛ばす。そしてそのボールの向かう先へ先回りしまた蹴り飛ばす。そしてまた先回りし蹴り飛ばす。

それを何度も繰り返してボールにエネルギーを注ぎ込む。
パワー、スピード共に最高潮に達したそのボールを更に高くへ蹴り上げる。

「ザ・エクスプロージョン」

そしてそのボールに蹴りを叩き込む。

その瞬間、爆発したかのようにエネルギーを放出しながらボールはゴールへと襲いかかる。

発生までが長いいため、円堂だけでなく壁山に塔子もそのシュートに対応する余裕があった。

「ザ・タワー!!」

「ザ・ウォール!!」

が、そのシュートは一瞬で塔を崩し、一瞬で壁を貫いていった。
倒れ込む2人に心配を向けながらも、円堂は十二分に力を溜める。

「マジン・ザ・ハンドツツ!!」

凄まじい力を秘めた魔神がその掌をボールへと向ける。

だが、2人のシュートブロック同様、そのボールに触れた瞬間に魔神は砕け散ってしまう。

「うわアアア!!」

「円堂オオオオ!!」

ボールは円堂ごとゴールに突き刺さった。

勢いを失うまで暴れ続けたそのボールは、円堂のユニフォームを軽く焦がしていた。

当然、それを身体で受けた円堂はかなりのダメージを受ける。

『ゴ、ゴオオル!!ジエミニストーム、ネビュラ!凄まじい威力のシュートで雷門の守護神円堂ごとゴールネットを揺らしたアアア!!』

「円堂…大丈夫か!？」

「あ、ああ……すげえシュートだ……!」

駆け寄ってきた鬼道の肩を借りて立ち上がる円堂。

ボールを受けた腹部の辺りを抑えながら、自コートへ戻っていくネビュラの背番号15を見送る。

(強くなった2人のブロックとマジン・ザ・ハンドでも止められないなんて……一体どうすれば)

内心円堂は焦っていた。

次またあのシュートを撃ち込まれたら……自分はまた得点を許すのではないだろうか。

そんな不安が頭をよぎる。

(……ダメだ!こんな弱気になっちゃ!次は絶対に止めてやるんだ!力を貸してくれ……柊弥、豪炎寺!!)

脳裏に浮かべるのは自分の前から去ってしまった頼れる仲間達。

だが現実残酷である。

その片方が、今まさにシュートを撃ち込んできた選手なのだから。雷門のキックオフから試合再開。

ボールを受け取った吹雪は全速力で駆け上がる。

「行かせん」

「邪魔だア!!」

ジエミニストームの中で唯一吹雪のスピードを抑え込めるネビュ

ラが立ち塞がる。

徹底的なディフェンスに吹雪は為す術ない。

「吹雪！後ろだ!!」

「——おオ!!」

後ろから投げかけられた言葉に従ってヒールパスを出す。

その声の主は鬼道。

それを確認した瞬間、ネビユラは標的を吹雪から鬼道へと切り替える。

「イリユージョンボール」

「……ほう」

(よし、通じる！)

ネビユラがボールを奪おうと足を伸ばしたその瞬間、鬼道はボールを3つに分裂させてネビユラを躲す。

そのまま駆け上がる鬼道は周囲を見渡し、指示を出す。

「ボールを前線でキープしつつ得点を狙うぞ！」

先程のシュートを見て、ネビユラに撃たせるのはかなりの悪手と判断した鬼道。

ボールを渡さないようにキープしつつ、この五分の状況を覆すために更なるゴールを狙う腹積もりだ。

その声を聞いて中陣の風丸、一之瀬も上がってくる。

そしてボールは染岡へ渡る。ワイバーンクラッシュで更なる得点を狙うが……

「フォトンフラッシュユ!!」

DF、カロンの必殺技によりそれは阻まれる。

回転と共に発光し、周囲を眩い光で包み込む。視界が奪われた染岡は為す術なくボールを奪われる。

カロンはパンドラへパスを出す。それを一之瀬と鬼道が囲む。

(ここだ!!)

パンドラがサイドから上がるイオにパスを出したが、それを一之瀬がカットする。

「ナイスだ一之瀬!!」

「おう！吹雪!!」

そして吹雪へパスが出される。

それを吹雪は待ち構えていたが……

「させると思うか？」

「何!？」

吹雪が受け取るよりも早く、ネビュラが高く跳躍し空中でボールを奪う。

そのまま着地したネビュラは駆け上がるが、鬼道、一之瀬、風丸の3人から集中マークを受ける。

(こいつに上がらせてはダメだ!)

全員がその意識だった。

少しの間もないその囲みに痺れを切らし、ネビュラはパスを出そうと試みる。

「リーム」

「えっ——」

ネビユラが出したそのパスを、リームは取りこぼす。そこを鬼道は見逃さなかった。

そのボールをイオが受け取る。

「イオ、こつちだ」

「は、はい！」

イオがネビユラにパスを出す。

が、そのパスはネビユラを僅かにオーバーしてしまう。そこに待ち構えていた鬼道がボールを奪う。

(やはり……このネビユラという男を起点とした動きにムラがある。まるで、チームに急に投入されてきた選手と関係を図ろうとしているような……よし！)

「15番の動きに常に注意しろ！ヤツが絡むボールはこちらのチャンスでもある!!」

ネビユラにボールが渡れば確かに脅威だが、そのボールが渡るまでに付け入る、或いは渡つたとして無力化してしまえばどうということは無いついことに気付いた鬼道。

そのまま攻め上がるとする鬼道に、ボールを目の前で奪われたネビユラが立ち塞がる。

「イリユージョンボール」

「その技は既にラーニング済みだ」

先程ネビユラを抜いたそれと同じ技で突破を試みる。

が、ネビユラは分裂したボールの中からの確に本体を捉えて奪い取る。

(きつきの1回で見きつたというのか!?)

「一之瀬!! 風丸!!」

鬼道からボールを奪い、駆け上がるネビユラに対して一之瀬と風丸が立ちはだかる。

(あの男が先程言った通り、私と^{鬼道}ジェミニストームとの間の連携は穴がある。このまま無理やり抜き去るか、パスを出すか……)

あらゆるパターンを想定し、最適なものを選択しようとするネビユラ。が、それを黙ってやらせるほど目の前の敵は優しくはなかった。

「風丸下がれ! フレイムダンス!!」

炎を纏い、ブレイクダンスのような動作でその炎を操り、ネビユラにぶつける。ネビユラはそれにボールを絡め取られてしまう。

「吹雪!!」

「おうよ!!」

ボールを受け取った吹雪は再び全速力で駆け上がる。

その先に待ち構えるのは先程吹雪を止めて見せたカロンとまた別のDF、ガニメデ。

「フォトンフラッシュ!!」

「グラビティシヨン!!」

「かかったな……!」

迫る吹雪に対し、閃光と重力をぶつけようとする2人のDF。

が、その技が自分に向けられたのを察知した瞬間、吹雪は逆サイドの染岡にパスをだす。

「染岡アアア!!」

「吹雪……任せろ!!」

フリーの染岡はゴルレオと一対一。

蹴り上げられたボールと共に地面を突き破り、その姿を現したのは煌々たる蒼き翼龍。

ボールは蒼の輝きに満ち、翼龍は咆哮と共にそのボールをゴールへ押し込めんと羽ばたく。

「させん!!ブラックホール!!」

ゴルレオの手の中に発生したのは光すらも逃れられない超重力の檻。

そこに吸い込まれていくボールと龍だったが……

「いつ、けエエエ!!」

「バ、バカなツツ!」

染岡の咆哮に同調し、再び龍が吠える。

その瞬間、シュートの威力は高まり、その勢いは増す。

やがてそれはブラックホールを突き破り、ゴルレオの手を弾いてゴールネットへ突き刺さった。

「よっしやアアア!!」

鳴り響くホイッスル。それが示すのは更なる雷門の得点。すなわち有利は雷門に傾いたということ。

現在3―2、雷門リードである。

「へっ、やるじゃねえかよ」

「ナイスパスだ」

拳を突き合わせる染岡と吹雪。
残り時間はあと僅か。

「このままでは……!!」

「レーゼ」

「ネビュラ様……」

焦るレーゼを試合再開前に呼び、耳打ちするネビュラ。
勝負が決まろうとしていた。

ホイッスル早々にボールはネビュラへ。
キックオフと同時にパスならば、ネビュラへのパスといえど鬼道達
は干渉できない。

そのパスを受け取ったネビュラは単身雷門ゴールへ駆け上がる。

「させないっス!!」

当然、その行く手を阻む雷門DF陣。

集中包囲されたネビュラ。が、狙いは別にあつた。

「決めろ」

「ダイヤモンド!!」

「了解!!」

バックパスを出すネビュラ。

それを受け取ったのはレーゼ。その後ろに追従するのはダイヤモンド。
レーゼとダイヤモンドはその場でエネルギーを込めたボールを高く蹴
りあげる。

最高点にてそのボールを包み込む紫色のエネルギーが展開。そこ
に作り出されたのは宇宙空間。

その真ん中に座するボールに2人で蹴りを叩き込む。

「ユニバースブラストオオ!!」

展開された宇宙空間を巻き込みながらそのシュートはゴールへと向かう。

先程のネビュラのシュート程ではないが、明らかに強力なシュート。

DF陣はすぐさまシュートブロックの体制に入った。

「行かせないよ!ザ・タワー!!」

「させないっス!ザ・ウォール!!」

僅かにシュートの威力は減衰する。が、その勢いは未だ健在。ブロックを突き破って円堂待ち構えるゴールへ。

「絶対に、もう点はやらないんだ……!」

心臓から手へエネルギーを無駄なく伝える。

そのエネルギーはやがて魔神を形作る。

「マジン・ザ・ハンド!!」

ぶつかり合うシュートと魔神の手。

火花を散らし、辺りには閃光がフラッシュする。

「うおおおおおオオオオオオオオ!!」

数十秒の拮抗。

獣のような雄叫びを上げた円堂は、その手に込める力をより強くする。

その時だった。

ボールの勢いは次第に失われていく。

閃光が止む頃には、円堂はしっかりと押さえ込んでいた。

「馬鹿な……!?!」

「止めたぞおおお!!」

湧き上がる歓声。

円堂のナイスセーブに雷門の気持ちは浮き立つ。

だがまだ試合は終わっていない。ごく僅かな時間を精一杯戦い抜くため、ボールは高く蹴りあげられる。

「よし、もう一本決めてやるぜ!!」

「そうはいかない」

パス回しの末ボールを受け取ったのは染岡。

最後にもう一度得点を狙うが、それを阻んだのはネビュラだった。

一瞬でボールを奪い取り、一瞬で上がっていく。

その速さまさに雷鳴の如く。雷門は誰も止められない。

「まだこんな余力が……!」

「円堂オ!!」

高く蹴り上げられたボール。力を込めながら何度も蹴られたボールが宙に何本もの線を描く。

更なる高さへ至ったそのボールに、ネビュラが重々しく蹴りを放つ。

「ザ・エクスプロージョン……!」

蹴り込まれたボールは爆発、そして圧倒的破壊力を秘めてゴールへ

と降り注ぐ。

それはさながら全てを粉碎する隕石のよう。

最後のあがき、のようにも取れるそのシュートを、円堂は単身迎え撃つ。

「円堂!!」

「キャプテン!!」

「このゴールを許してしまえば、恐らく延長戦……勝負はここで決めるんだ!!」

先程と同じように心臓から溢れるエネルギーを行き渡らせる。

が、そのエネルギーの質も量も、先程とは段違いだった。

そして顕現した魔神が放つ輝きも、比較にならないほどのもの。更なる高みへと至ったその瞬間である。

「マジン・ザ・ハンド”改”!!」

突き出された掌が破壊力とぶつかり合う。

その際に発生するのはもはや閃光どころではなく、小規模な爆発のようなもの。

激しいエネルギーとエネルギーのぶつかり合い。

それを制したのは――

「……………ふう」

――円堂だった。

「どうだ!!」

「…………やるな」

止めたボールを自慢げにネビュラへと突き付ける円堂。

それを見たネビユラは、胸の辺りに違和感を覚える。が、その違和感の正体に気付く前にホイッスルが鳴り響いた。

試合終了の合図。

雷門が遂に、エイリア学園に勝利した。

第31話 新たな敵と次なる目的地

「やったああああ!!」

「俺たち勝ったんスね!!」

白恋中グラウンドは歓喜の声に包まれていた。

先程まで行われていた雷門中对エイリア学園、ジエミニストームとの試合。

3度目のこの対面で、とうとう雷門が勝利を収めた。

破壊行為を止めて欲しければサッカーで勝ってみろと言ったのはエイリア学園の方。その条件に則って勝ったとあれば、これから先も起こるかと思われた破壊は阻止されたこととなる。

「我々が、負けた……!!」

「あら、地球にはこんな言葉があるのよ?三度目の正直”ってね”
「何……!!?」

驚愕するレーゼに対し、サッカーで戦えないもどかしさを晴らすように夏未が煽りを入れる。

それを受けたレーゼは怒りの表情を浮かべたが、すぐさまその表情は青ざめたものに切り替わった。

「監督!俺達勝ちました!ありがとうございます!!」

「ええ……おめでどう」

自分達を勝利へ導いた瞳子に対し、例を述べる円堂。

各々が歓喜に震える中、1人胸の辺りに手を当て、呆けている者がいた。

ネビュラである。

(あの感覚は……一体?)

ネビュラの脳裏に浮かぶのは、試合終了直前の円堂との一対一の光景。

自身の全力の必殺シュート。1発目よりも高い威力を誇るそれを、1発目すら守れなかったキーパーが捕れるはずがないと高を括っていた。

が、現実はどうだろう。

そのキーパーは、土壇場で進化して自分のシュートを止めて見せた。1発目のように仲間の力を借りることも無く、完全な独力で。

その姿を目にした時、ネビュラは言葉に出来ないか何かに支配された。

その答えを探すかのように、ネビュラは円堂の元へと歩み寄る。

「円堂ー」

「ん……？」

当然、突如としてこちらに歩いてくる敵に警戒をしないはずがなく、最初にそれを視認した風丸が声を上げる。

それに反応して円堂も後ろを振り返る。

「……」

「えっと……どうかしたか？」

ネビュラは数秒の沈黙の後に口を開く。

「……分からない」

「へ？」

「先程のお前との攻防。敗れたのは私だが……言葉に表せない高揚感に包まれている。それが分からないと言っている」

そのネビュラの言葉を聞いて、円堂は呆気に取られたような表情を

浮かべる。

が、すぐさま溢れんばかりの笑顔でネビュラに向ける。

「それは、お前もサッカーが好きだったって事じゃないか？」

「サッカーが、好き……？」

「そうさ！あんな凄いシュートを撃てるやつが、サッカーを嫌いな訳ないさー！」

そう言つて、円堂はグローブを外した手をネビュラに差し出す。

グローブから顔を出したその手は、所々が黒くなっており、掛けた負荷の重さを物語っていた。

その手をネビュラは黙って見つめる。

「……この手は」

「握手だよ握手！……本当に凄いシュートだった。またサッカーやろうぜ!!」

そう言つてまた笑顔を向ける円堂。

それを見てネビュラは、更に理解の及ばないモノに包み込まれた。

まるで、以前もこの目の前の男と会ったことがあるような感覚。何度も触れてきたように思えるこの熱意。

が、ネビュラの記憶にあるのは、エイリア学園のソルジャーとしての自分。

円堂との記憶など、存在しているはずがなかった。

それでも、不思議と差し出されたその手は悪く思えなかった。

握手に応じようと手を伸ばした、その時だった。

「無様だぞ、レーゼ」

「何だ……？」

どこからともなくそう声が聞こえたと思ったら、次第にグラウンド

に黒い霧が立ち込める。

そして雷門イレブンの背後、グラウンドより少し高くなっている場所から赤い光が溢れる。

レーゼはそれを確認して、さらに青ざめる。

全員がその方向に視線を向けると、赤を基調とした、ジェミニストームのユニフォームと何処か似た造形の服に身を包む集団がいた。その真ん中には、それとは打って変わって黒い服に身を包む男。

「デザーム様……！」

「覚悟は出来ているな？……ネビュラ様、こちらへ」

前者はレーゼ達ジェミニストームに向けられたものだろうと分かった。

そしてその後に、ネビュラだけはまるで違う扱いかのような言葉を続ける。

「……さらばだ」

「え？おい！」

円堂の手を握ろうとしたその手を引っ込め、ネビュラは現れた集団の元へと一瞬で移動する。

真ん中の男がネビュラにボールを手渡すと、そのボールは赤いスパークを纏い始める。

そして無言のままにそれを蹴る。そのボールの向かう先はジェミニストーム。

そして一際強い光がそのボールから発せられ、その光が止む頃にはそこにいたはずのジェミニストームは姿を消していた。

「なっ!？」

「我らはエイリア学園ファーストランク、イプシロン。地球の民達よ、貴様らはやがてエイリア学園の真の力を知るだろう」

そう言つて、イプシロンと名乗つたその集団も光に包まれ始める。

「……また会おう、円堂守。そして雷門イレブン」

そのネビュラの眩きは誰の耳に届くこともなかった。

イプシロンを包み込んだその光が止むと、ジェミニストーム同様にその場には誰もいなくなっていた。

「……イプシロン、か。あの口ぶりから察するに、ジェミニストームよりも強いチームなんだろう」

「やつと倒したと思ったら……まだいやがったのか」

「ああ……」

勝利への歓喜から一転、姿を現した更なる敵に気分が落ち込む雷門イレブン。

その空気を払拭したのは円堂だった。

「暗くなつてもしょうがないさ！次の敵が現れたなら、また倒せばいいだけだ！」

「……それもそうだな」

「宇宙人になんて負けないでヤンスよ!!」

「でもちよつと怖いっス……」

その一言にいつもの調子を取り戻した雷門イレブン。

それを他所に、円堂は一人思慮に耽る。

（あいつ……何だったんだろう。他のエイリア学園のヤツらとは何かが違うような……）

ネビュラと対面した際に感じた違和感。どうしてもそれが拭えず

にいた。

が、いくら考えても分からないので思考を切り替え、大人しく仲間達の輪に混ざることにした。

そして、違和感を感じていたのは田堂だけではなかった。

(あの人、やっぱりどこかで会ったような……何なんだろう、この気持ち。……もしかして、柊弥先輩なの?)

音無である。

ネビュラが姿を現した最初も同じようなことを思った。

そして、有り得るはずのないその結論をすぐさま否定する。

(……って、そんなはずないよね。声も髪型も違うし、あんな変な機械付けるはずが無いもの。早く会いたいな……柊弥先輩)

柊弥への想いからそんな考えに至ってしまったと結論づけ、自分の考えを嘲笑う。

知らぬ内に再会が果たされ、知らぬ内に再び離別したことを知るはずはなかった。

「……お疲れ様でした。ネビュラ様」

「ああ」

「私はレーゼ……緑川達の後始末に向かいます」

「いやいい。私がやろう」

ネビュラの隣に並び立つその男……デザームはそうネビュラに話

しかけた。

「デザームが零した”緑川”というその名は、レーゼの本来の名である。」

「エイリア学園は元々、普通の少年少女である。」

「エイリア学園として戦い、万が一破れるようなことがあれば”追放”と称して、エイリア学園としての役割を剥奪し、計画が終了するまで軟禁に近い状態に置く方針だ。」

「ですが……」

「良いと言っている。下がれ」

「……失礼致します」

ネビュラがそう圧を掛けると、デザームは大人しく引き下がる。

「マスターランクとして扱われているネビュラの言葉に、反論する筈もなかった。」

「ネビュラ様……」

「……エイリア石を回収する」

”エイリア石”

それは、ジェミニストーム、そしてイプシロンの力を増幅させる力を持つ石である。代償と言うべきか、その力に心酔して精神に悪影響を及ぼす効果もあるが。

このエイリア石による力の増幅こそが、力の正体である。

だが、マスターランクと呼ばれる3チームの選手達と、ネビュラはその石の加護を受けていない。

エイリア石を持たせたジェミニストームとイプシロンを相手にし、地力を高めた。それがマスターランクである。

ジェミニストームからエイリア石を回収したネビュラは、メンバーを自室へ戻るように促す。

ジェミニストームの後ろ姿を見送るネビュラに、声を掛ける者がい

た。

「やあ、ネビュラ」

「グランか」

「見てたよ。特訓の成果が出ていたようで何よりだ」

しばらく黙りこくるネビュラ。

「……十分とは言えないだろう。事実、私の介入があつた上でも雷門に敗北した」

「仕方の無い事じゃないか？元々、彼らは異常な程の速さで成長を遂げていた。加えて君は、ジェミニストームのメンバーとして練習をしていた訳でもない。連携が取れないというのは当然のようにも感じるよ」

「……そうか」

そう言つてネビュラはグランに背を向ける。

が、グランはネビュラにまだ話しかける。

「そうだ。どのチームに入るかは決めてくれたかい？俺達ガイアか、ガゼルのダイヤモンドダストか、はたまたバーンのプロミネンスか」
「……まだだ」

「そうか。まあ焦らなくても良いよ。俺達マスターランクの出番はまだだからね。それに……どのチームがザ・ジェネシスを襲名するか。それが決まってからそのチームに入るのも構わない。そう父さんは言っていたから」

伝えるべきことを全て伝えたのか、グランはそれ以上口を開くことはなかった。

ネビュラは自室へと向かう。

その心は、先程の試合を忘れられていなかった。

時を同じくして、北海道の雪道を進む車があった。

乗用車……と言うには、あまりに重々しい風貌ではあるが。

この車は護送車。犯罪者を刑務所へと運ぶ車である。

そしてこの車に運ばれているのは、長身で長い髪を纏め、サンングラスを掛けた一人の男。

影山零治、その人だった。

「何だ……っこの音」

護送に当たっていた警察官が呟く。

地を鳴らすような音。それは段々と大きくなっていることから、音の原因がこの護送車に近づいてきていることが分かる。

やがてその音が護送車を包み込んでもみくちやにする。

その音の正体は雪崩。豪雪に包み込まれた護送車は転倒し、見るも無惨な姿へと変貌を遂げていた。

「あらよつと」

突如、車の外からそんな声がして扉が開かれる。

外から顔を覗かせたのは、モヒカンの少年。その少年は影山の腕を掴むと、一気に引っ張って外に出す。

「お迎えに上がりましたよ、総帥サン」

「…………ご苦労」

「素っ気ないですねエ、まあ良いけど」

「無駄口を叩くな、行くぞ」

「はいはい」

影山はその少年と共にどこかへ姿を消した。
更なる陰謀を胸の内に秘めて。

「えっ、イプシロンから襲撃予告？」

「ええ。予告先は京都の漫遊時中よ」

ジエミニストームとの試合の翌日、次のエイリア学園からの襲撃予告に備え、北海道から本州へと戻っていた雷門イレブンは、途中のサービスエリアにてイプシロンの情報を耳にする。

「漫遊時中……？聞いたことないな」

「確か、フットボールフロンティアにも参加してなかったわよね」

「漫遊時中は、学校のモットーが心と体を鍛えることで、サッカー部も対抗試合はしないのよ。でも、フットボールフロンティアに出場していたら間違いなく優勝候補の一角と呼ばれるような学校よ」

その情報に声を合わせて驚く。

仮に出ていたなら、優勝していたのは自分達ではなく、その漫遊時中だったのかもしれないという事実。

「厳しい修行で鍛え抜かれた身体と、研ぎ澄まされた心を持つ漫遊時中のサッカーはスピード、パワー。何をとつても超一流。イプシロンは、無差別に学校を襲っていたジエミニストームと違い、隠れた強豪校に照準を定めているようね。イプシロンを倒せば、エイリア学園の本当の目的が分かるかもしれないわ。直ぐに漫遊時……京都へ向か

「うわよ！」

「はい！」

「イナズマキヤラバンは京都へ向かう。
更なる戦いへ身を投じるために。」

第32話 漫遊時の問題児

「……何か、のんびりしてるな」

「襲撃予告なんて全く気にしてない感じだね」

京都、漫遊寺中へ、数日かけてやってきた雷門イレブン。

ここに来た目的は、この漫遊寺中に突きつけられたエイリア学園、イプシロンからの襲撃予告だ。

漫遊寺中のサッカー部と協力し、イプシロンへと立ち向かうために遠路はるばるここにやってきた。

キャラバンから降りると、漫遊寺中の敷地内に巨大なクレーターが見えた。恐らく、襲撃予告の際にイプシロンが作ったものだろうと推測できた。

が、それが見えていないかのように、あちこちで会話をし、拳法の練習のようなことをしている生徒が殆どだ。

「とにかく、サッカー部を探してみようぜ」

「サッカー部なら、奥の道場みたいだよ。どうもありがとう、また何かあったらよろしくね」

「はーい!!」

円堂のその声に反応するように答えを示したのは吹雪。

その両脇には漫遊寺中の女子生徒を連れており、彼女らから情報提供してもらったのだと分かる。

特筆すべきは、その女子生徒達の顔色。どこか朱色に染まっており、目の前の吹雪に惚れ惚れしているようだ。

吹雪の天然の女たらしな面を見て少し引いた一同は、その情報に従って進んでいく。

「道場道場……」

瞳子が漫遊寺に許可を取り、校舎内へと足を踏み入れる。
和を基調としたその校舎の中を進んでいく一同は、やがて”蹴球道場”と看板を掲げた建物を見つける。

「あれじゃないかしら？」

「そうみたいだな」

「間違いない！よし行くぞみんな！！」

駆けていく円堂の後ろにマネージャーと鬼道、瞳子以外のメンバーが続く。

が、その途中で円堂は見事なまでにすつ転び、それに引つかかって後ろのメンバーも全員倒れ込む。

「重い重い重い！！」

「あ、ごめんなさいっス」

壁山の下敷きになった目金が悲鳴を上げ、壁山に猛抗議する。

「なんでここだけツルツルしてんだよ……」

「……これ、ワックスじゃないかしら」

「うっしっし！フットボールフロンティアで優勝したからっていい気になって！」

「お前！良くもやったな！！」

ワックスを片手に持った小柄な少年が、雷門イレブンの前に姿を現す。

それを見た塔子が飛びかかろうと策を飛び越えたが、着地点に落とし穴が仕掛けられており、物の見事に引つかかってしまう。

「うっしっし！！引つかかってやんの！！」

「木暮!!」

「やっべー!」

木暮、というのがその少年の苗字なのだろう。

苗字を呼ばれた瞬間、明らかに焦った表情を浮かべて木暮は軽やかな身のこなしでその場を走り去った。

数秒後、サッカーボールを抱えた男子生徒がやってくる。

「全く、しょうがないやつだ……少し目を離れた隙に」

「いてて……」

「大丈夫ですか?」

落とし穴から立ち上がる塔子に駆け寄って声を掛けるその男。

木暮とは真反対のように礼儀正しいその男は、塔子を始め雷門イレブンに謝罪の意を示す。

「申し訳ございません!うちの部員がとんでもないことを……」

「うちの部員?……ってことは、サッカー部!」

「はい。木暮と言うんですが、困ったやつでして……周りを全て敵だと思っていると云いますか……」

「敵?」

「ええ……それで私達も、練習させるより先に、まずは精神を鍛え直すのが良いと思い一から修行させているのですが……いくら説明しても、木暮にとっては自分がいじめられていると感じているようで……仕返しのもりなのでしょう」

木暮の悪戯の数々を思い出し、苦い顔をする。

「か、かなり性格歪んでるな……」

「同じサッカーをするものとして恥ずかしいですね。ああ壁山くん、もつと右」

先程の件を逆手に取って、壁山を顎で使っている目金の言葉に全員苦笑い。

「でも、どうしてそんなにみんなのことが信じられないのかしら？」

「木暮は小さい頃、親に裏切られたみたいで……」

「えっ、親に……？」

その言葉に強い反応を示したのは音無。

幼い頃に両親を亡くし、捨てられたと思い込んでいた時期があった音無にとっては他人事のように感じられない。それは鬼道も同じことだが。

話を切り替えて、雷門イレブンを要件を訊ねる。

「それで、私達に何か御用が？」

「実はこちらに、エイリア学園の襲撃予告が来たとお聞きしまして」

「襲撃予告？ああ、あのことですね」

「俺達も一緒に戦おうと思ってるさ！」

「……そうですか、ではどうぞ、ご案内させていただきます」

と言って雷門イレブンを案内する。

その道中、音無は掃除に勤しむ木暮の姿を目にする。

木暮は、雑巾をボールのように蹴りあげ、屋根を滑らせて雑巾がけをしていた。そして落ちてくる雑巾をさらに蹴りあげ、また往復させる。

その光景を眺めていた音無だったが、夏未に呼ばれて先を急いだ。

「なるほど、お話はよくわかりました」

通された広い場所で、漫遊寺イレブンと対面する雷門イレブン。
一連の流れを話し、協力を仰ぐ、が。

「ですが、私達は戦うつもりはありません。私達がサッカーをしているのは、あくまで心と身体を鍛えるため。争うためにやっているわけではありませんので。彼らには私達から話をし、お引き取り願います」

「おい！そんな話が通じる相手じゃないって言ってるだろ!？」

「それは、貴方の心に邪念があるからです。心を無にして話せば、伝わらないことはありません」

戦う意思はない、と言い切ってその場を去る漫遊寺イレブン。

「で、どうする?」

「どうするって言われても、漫遊寺があれじゃあな」

「全然わかってないだもんなあ」

夕食の準備中、円堂を始めとしたメンバーで今後の動向について輪になって話していた。

戦うつもりのない漫遊寺に、不平不満を募らせる。

「考えたって仕方ないさ！俺達には俺達の出来ることをしよう！」

「出来ること……特訓か」

「そうさ！相手はエイリア学園のファーストランチーム。こっちももつと特訓して、強くなんないとなー！」

「そうだな！じゃあ早速練習場所を探そう！」

「練習場所ならあるよ」

と言って声を掛けてきたのは吹雪。その両脇にはまた漫遊寺の女子生徒。

完全にたらしこんでいる吹雪にドン引きしつつも、練習場所として
使えそうな場所の話聞く。

「……」

キャラバンの外で、一人体育座りで考え込んでいたのは音無。
昼間の木暮の1件についてだ。

「……眠れないのか？」

「お兄ちゃん」

「……少し、着いてこい」

キャラバンから出てきた鬼道を声を掛けられ、音無は歩き出す。

「木暮のことか」

「うん……あの子の気持ち、ちよつとわかる気がして。……お父さん
とお母さんが事故で亡くなったっていうのは分かっていた。わかっ
ていた気がしてたけど……」

思い出されるのは、孤児院で2人きりとなってしまった時、鬼道に
対して当たり散らしていた自分の姿。

「もしお兄ちゃんがいなかったら……私もあの子みたいになつてたの
かな」

「それはない。春奈は俺と違って、この雷門で負けずに一人でやって
きた。お前は強い人間だ。俺なんかよりずっとな」

「お兄ちゃん……」

「それと加賀美のことだが……大丈夫か？」

「うん。最初は悲しかったけど……きつとまた会えるって、信じてるから」

「そうか」

そのまま沈黙が流れる。

「……そろそろ戻ろう」

「私、まだここにいます。お兄ちゃんは先に帰ってて?」

「そうか……あまり遅くなるなよ」

そう言って鬼道はキャラバンへと戻っていく。

残された音無は、夜空に浮かぶ月を見上げながら一人思う。

(……大丈夫、きつと会えるよね)

鬼道の一言で、また大きくなり始めた柊弥への想いを抑え、気持ちを切り替える。

そんな時、建物の中で光が動くのを見た。

気になってその中に入ってみると、そこにはイタズラのための罫を仕掛ける木暮がいた。

「木暮君、なんでこんなことするの?」

「……なんだ、雷門中のやつかよ……お前には関係ないだろ!」

昼間に聞いた話を木暮に伝える。

木暮が意地悪されていると思っていることは、木暮の為にやっていること。だからこんな仕返しはやめるように、と。

「そんなの信じられるかよ。……うしし、これでアイツら水浸しに……」

「いい加減にしなさいよ!ちよつと練習させてもらえないからって隠

れてこんなことして!!だから練習させてもらえないんですよ!」

「なんだよいきなり!お前に何が分かるんだよ!俺は決めたんだよ、俺をバカにしたヤツらを見返してやるって!!」

「じゃあサッカーで見返せばいいじゃない!!それとも、サッカーに自信がないんじゃない?違うって言うなら、貴方の本気のサッカーを見せてみなさいよ!!」

「……望むところだ!!」

日本国内の何処かにて。

ボールを追いかける人影があった。

片や11人の、チームとしてフルメンバー。片や1人だけの不釣り合いな対面である。

1人ボールをキープするのはネビュラ。それを相手するのはイプシロンの面々である。

「行かせない……!」

「マリシヤスアサルト」

11番FWであるゼルを筆頭とした前陣、中陣組がネビュラの行く手を阻む。

悪意ある突撃、と銘打たれたその必殺技を用い、赤と黒の禍々しいオーラを纏って圧倒的スピードで軽々と抜き去ってしまうネビュラ。続いて立ちはだかるのは後陣。必殺技を用いて前進を阻止しようとするも、それより早く突風を伴ってネビュラが駆け抜ける。

あつという間にゴールまで前進したネビュラはデザームと一対一。

高く蹴り上げられたボールを全力で何度も蹴り、溢れんばかりのエネルギーを込める。そのエネルギーがキャパオーバーで爆散する寸

前にボールをゴール目掛け放つ。

「ジ・エクスプロージョン」

地上にまで余波が伝わる程の大爆発。

その凄まじいシュートにデザームは自身の最強の技を持ってして立ち向かう。

「ドリルスマッシャー!!」

手元に集中したエネルギーがドリルを形成し、回転と共にシュートへ突き刺さる。

火花を散らし、僅かに押されながらもデザームは何とかそのシュートを止める。

「流石ですネビュラ様。短期間でここまで……」

デザームがネビュラに掛けたその声は本心だった。

ジェミニストームとして雷門と戦ってからだか数日。その時はジェミニストームより僅かに強い程度だったはずのネビュラは、その数日間でデザームに本気を出させ、なおかつ拮抗するレベルまで成長していた。

「……違う」

その眩きはネビュラが漏らしたものだだった。

あの試合の最後に感じたあの感覚、それをもう一度掴むためにひたすらに特訓に励んできた。

自身の全力をぶつけ、止められたあの場面。シチュエーションとしては同じはずなのに、今はその感覚がない。

「次だ」

そう言ってデザームからボールを受け取り、再び最初から始める。傍から見れば、イプシロンはネビュラに付き合わされているようにしか見えないが、イプシロンとしても、連携を用いて相手を抑え込むいい練習になっていた。

その証拠として、段々とネビュラの攻めは上手くいなくなる。

やがてその特訓を終え、片付けている中ネビュラはデザームに話し掛ける。

「デザーム。確か明日だったな」

「はい」

「俺も……いや、何でもない。忘れてくれ」

それだけを言っただけでネビュラはその場を去る。

デザームは、それを聞いてきたネビュラの意図に疑問を持つ。

が、考えたところで分かる訳では無いし、分かったところで差程利点もない為思考を放棄した。

「おい！水飲んでないで早くしろよ！」

漫遊寺中にて、木暮は早朝からサッカーグラウンドにいた。

木暮が声をかけた先には、音無と頼まれて木暮の相手をしている古株。

昨日の夜、木暮に力を見せてみると言ったものの、雷門のメンバーはそれぞれ特訓のためそれを遮るわけにはいかず、サッカー経験者である古株に相手を頼んだというわけだ。

これは早朝から続いている。

木暮のプレイははつきり言つて、稚拙と言う他なかった。

経験者なのかすら疑う有様。年老いた古株でも余裕であしらえる程度だった。

「しかし凄いねあの子は、2時間こうしているのに全く疲れてない」

古株がそう呟く。

その言葉の通り、2時間という長時間ボールに向かっているというのに木暮の動きは一切衰えていない。

木暮に催促され、古株は再びグラウンドに入る。

そして再開されたプレイを見て、音無は先程の古株の言葉と同じ感想を抱く。

(あの動きどこかで……もしかして、昨日みたいに廊下や天井を拭いている内にああして力が着いたの!?)

音無は驚愕を隠せない。

仮にそれが本当なら、木暮のセンスは天性のものとする言える。

2人のやり取りを夢中で眺めていると、周囲に黒い霧が漂い始めるのが分かった。

「——もしかして!?!」

まさかと思い、音無は古株と木暮を連れて正グラウンドへと走っていく。

道中で他のメンバーとも合流し、先を急ぐ。

そして到着した正グラウンドで見たのは、イプシロンのメンバーと

漫遊寺イレブンが対面している光景。

「何度言われても同じです。私たちに戦う意思はありません」
「そうか、ならば仕方ない」

そうやってデザームは、黒のサッカーボールを掲げる。
すると、後ろからゼルがそれを全力で蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされたボールは、凄まじい威力で漫遊寺中の校舎へと突き刺さり、破壊する。

漫遊寺イレブンに対し、不敵な笑みを浮かべるデザーム。
それに怒りが沸き立つのを感じた漫遊寺イレブンは――

「――やむを得ません、その勝負……受けてたちましょう」

自分達の学校を守るため、誓いを破って戦うことを選択した。

「お許してください。一時の激情に負けてしまった私達を……」

自分達の理念に対してそう言ったのか、はたまた崇拜する仏にそう言ったのか。

瞑想を済ませた漫遊寺イレブンは、ポジションに着く。
そして、開始のホイッスルが鳴り響く。

「遠慮はいりません！邪悪なる魂に天罰を下すのです！」

その一言で漫遊寺イレブンは颯爽と駆け上がる。

目にも止まらぬ速さでパスを回す。それを見ていた雷門イレブンは感嘆の声を漏らす。

「愚かな……6分で片付けてやる」

「竜巻旋風!!」

デザームはそう呟く。

漫遊寺6番は、ボールを脚で挟み込んで回転をかける。その回転は竜巻を起こし、イプシロン7番、クリプトにぶつける。

が、その竜巻の中からクリプトは涼し気な表情で顔を出した。

そのままボールを奪って上がる。

中陣に囲まれたが、ヒールでボールを高く上げる。そのボールを受け取ったのはマキュア。

「四股踏み!」

地面を踏み鳴らすと、砂塵を巻き上げつつ衝撃波がマキュアに襲いかかる。

が、それを意に介さずマキュアは進み続け、シュートを放つ。

四股踏みを放ったDF諸共、そのボールはゴールへ突き刺さった。

イプシロンの先制。

「クンフーアタック!!」

キックオフと共に駆け上がった漫遊寺は、1点を取り返すべく必殺技を放つ。

それに対してデザーム、余裕の表情で片手でそれをキャッチした。

「火炎放射!!」

ゼルが放ったシュート。

火を吹いてその勢いを殺そうとするも、太刀打ちできずにゴールへ押し込まれる。

イプシロンの加点。

そこからもイプシロンの蹂躪が続く。

漫遊寺イレブンは1人、また1人と立てなくなっていく。そして残った漫遊寺のキャプテンも倒れる。

点数は15―0。言わずもがな、15点がイプシロンである。

「アイツら、本当に6分で決めやがった……」

「これがファーストランクの力……」

「ジェミニストームとは比べ物にならないくらい強いでヤンス！」

漫遊寺イレブンにもう戦う力は残っていないと判断したデザームが、再び黒いサッカーボールを掲げる。

「待て!!」

それを阻止すべく、大声を上げたのは円堂。

「まだ試合は終わっちゃいない！俺達が相手だ!!」

「お前達が……?ふん、いいだろう」

「でもキャプテン、目金先輩が……」

「だったら、10人で戦うまでだ！やらない訳にはいかないだろ！」

「11人目ならここにいます!!木暮君が!!」

その声の主は音無だった。

突如の指名に木暮だけでなく、雷門イレブン全員が驚く。

「木暮君なら大丈夫です！お願いします!!」

「……分かったぜ、音無！」

「キャプテン!!」

その願いを円堂は快諾する。

だが、それとは裏腹に木暮の表情は優れない。

「で、でも俺……」

「何怖気付いてるの！皆を見返すチャンスじゃない！！」

それでも木暮は震えたまま。

それに音無は声をかけ続ける。

「ああもう分かったよ！やればいいんだろ！」

音無の熱意に押し負けた木暮が参加を宣言する。

こうして、雷門イレブンは11人フルでの試合が可能となった。

雷門とエイリア学園ファーストランク、イプシロンの最初の試合の火蓋が切って落とされようとしていた。

第33話 3 minutes later

「ねえ、あんた本当に大丈夫な訳？」

フィールドに入ってきた木暮にそう声をかける塔子。

塔子の疑問は最もだ。雷門イレブンが知る木暮はただのイタズラ小僧。それが急に自分達の仲間として戦います、と言われてもはいそうですか、とはならないだろう。

「どう思う？」

「俺は春奈の信じるアイツを信じる」

「とはいっても、実力には疑問を持っているんだろ？」

「実力の分からないやつが入るってのは、意外性があって面白いかもよ？」

勿論、そう思うのは塔子だけではない。

妹である春奈の推薦があつたとはいえ、このチームの司令塔である鬼道はしっかりと実力を把握しておく必要がある。

とはいえ、もう試合が始まる。実力は試合の中で見定めるしかない。

当の木暮は、イマイチ浮かぬ表情を浮かべている。

宇宙人、エイリア学園に対する恐怖と、急に試合に駆り出されたことへの不安。その他諸々が加味されてのことだ。

吹雪や円堂が楽しんでやるよう声を掛けるが、その表情が変わることとは無かった。

「雷門中。ジェミニストームを打ち破った唯一のチーム。たったそれだけの事で我らに勝てると思うなど、我々も随分舐められたものだ」

そう高圧的に言い放つたのはエイリア学園ファーストランクチーム「イプシロン」のキャプテン、デザーム。

それがただの傲慢でないことは、先程のイプシロン対漫遊寺の試合で知れていた。

試合終了までの時間経過を待たずして、漫遊寺側の棄権による試合終了。それまでにかかった時間は6分。イプシロンの実力が本物であることは疑いようもなかった。

だが、雷門中とて簡単に負けるつもりはない。

ここで負けたら、目の前の敵が破壊行為に勤しむであろうということとは想像に難くなかった。それを簡単に許すはずはなかった。

全員が軽いウォーミングアップを済ませ、臨戦態勢に入る。

「なんだよコイツら、本気で宇宙人に勝つ気なのかよ……？信じられねえ……」

木暮は肩を震わせながらそう呟く。無差別に破壊を行うエイリア学園。恐怖の対象である敵に平然と立ち向かおうとしている雷門中。どちらも木暮にとつては“異常”でしかなかった。

「諸君。キックオフといこうか」

「暴れ足りねえな……レーゼに勝ったってなら少しは手応えあるんじゃないかねえか？」

「お手並み拝見といきましょう」

「ぶっ潰す」

「命知らずって、マキユア大好き」

獰猛な笑みを浮かべるイプシロンの面々。まるで獲物を前にした狼のようだった。

「聞け雷門中よ！破壊されるべきは漫遊寺中にあらず。我らに齒向かい続けるお前達雷門中と決まった！」

「また勝手に決めちゃってるよ」

「漫遊寺中は6分で片付けた。ジェミニストームを破ったその功績を

讚え、お前達は3分で決着とする！光栄に思うが良い」

「3分!？」

「だから、勝手に決めるなつての」

「本当に腹立つなあ……」

「だったら、僕達も3分で片付けちゃおうよ！」

「へっ、面白え」

雷門中の面々の反応を意に介さず、デザームは言葉を続ける。

「エイリア学園ファーストランクチーム、イプシロンの力……思い知るがいい」

「3分だなんて……」

「それだけ私達に対して本気なのよ」

「ええ。先程の漫遊寺との戦いでイプシロンがどんな戦い方をするか分かったわ」

ベンチにてそう瞳子が宣言する。

ジェミニストームはスピードで押してくるチーム。それと比較してイプシロンは、的確に相手チームのFWを封じ、相手の攻撃を削いでいく。言わば、緻密な連携が取れているチームだ。

『それでは！雷門中对イプシロン、雷門中のボールからスタートです!!』

開始のホイッスルが鳴り響く。

残り3分。

染岡のキックオフから始まり、早速素早いパス回し。目まぐるしく移り変わるボールの所在に、木暮は戸惑いを隠せずに棒立ち状態。そんな様子を、音無は不安気に見つめていた。

「戦闘……開始!!」

その一言で、得点源である染岡と吹雪にマークが着く。

染岡にはクリプトとファドラ、吹雪にはスオームとメトロンの子。雷門のツートップを封じること、雷門へのプレッシャーを掛けることも目的の内だ。

ならば、と風丸が駆け上がる。ケンビルとタイタンのタツクルを高く跳んで躲す。

「流石にジエミニストーム以上のスピードだ……塔子!!」

空中でボールを塔子に渡す。そのボールは塔子から鬼道に渡る。鬼道は早速得点を狙いたいが、吹雪と染岡はマークされて動けない。

(ならば!)

鬼道はそのままボールをキープしながら駆け上がる。鬼道は自分で点を取る腹積もりである。

ボールと共に高く跳躍し、指笛を鳴らす。それを聞いて地中から顔を出したのは数羽のペンギン。

そのペンギンがボールに突き刺さり、ドリルのように回転を始めると、紫色のエネルギーが輝き始める。

「オーバーヘッドペンギン!!」

オーバーヘッドキックを叩き込むと、ペンギンと共に紫色に煌めくシュートがデザーム待ち構えるゴールへと襲いかかる。

が、鬼道とデザームの間に1人。

「一之瀬エ!!」

「おう!スピニングシュート!!」

シュートチエインだ。

凄まじい回転と共にボールに蹴りを叩き込んだ一之瀬。そのシュートの威力は目に見えて上昇。

”オーバーヘッドペンギン”この技は、フットボールフロンティアにて雷門と帝国が戦った時に鬼道が円堂からゴールを奪ったシュート。

雷門に加入してからは、終弥に豪炎寺、染岡。前者二人が脱退してからも吹雪と、自身より強力なシュートを撃てる人間が何人もいた為、ゲームメイクに集中していたが、吹雪と染岡が封じられている今、自分も積極的に攻撃するべきだと判断した。

が、それでイプシロンのゴールを割れるとは思っていなかった。そして思いついたのがシュートチエイン。

「ほう……だが」

そのシュートに対し、モールとケイソンがツインシュートの要領でキックを加える。

シュートの威力は減衰。すぐさま2人はその場から退く。

衰えたシュートはそのままゴールへ向かうが、デザームは摂っているのはキャッチの構えでは無い。

「ふんっ！」

「何!?!」

シュートの構えだった。

進行方向とは真反対に力を加えられたボールは、すぐさまその行き先を変える。

打ち返したボールはそのままシュートとして突き進む。

「壁山！塔子!!」

2人がシュートブロックに入る。

数秒の拮抗の後に、ボールは勢いを殺されきらず空高く弾かれる。そのボールを取らんと吹雪が飛び上がるが、その背後からスオームとメトロンも追従する。

「吹雪!!」

「——ハッ、もらったぜ!!」

人が変わったように獰猛な笑みを浮かべた吹雪は、自分より僅か下にいるスオームとメトロンの背中を踏み台にさらに高く跳ぶ。

それにより2人は落下するが、吹雪はボールへと届く。

「エターナルブリザード……いけエエエエ!!」

遙か上空より放たれた超ロングレンジシュート。猛吹雪を纏いながら凍りついたボールがゴールへ降り注ぐ。

それに対し片手を差し出すデザーム。地面を削りながらシュートに押されゆく。

やがてシュートのエネルギーが爆発を起こし、ゴールが白煙に包まれると同時に吹雪が着地、ゴールに目を向ける。

「なッ……!?!」

『エターナルブリザード得点ならず!!イプシロンのキャプテン兼GK、デザームによってがっちり止められてしまった!!』
(この滾るような感覚……何だ?)

吹雪のシュートを止めたデザームは妙な感覚を覚える。胸の内に燦るような何かだ。

「敵ながらいいシュートを撃つ。見事だ」

「褒めてくれてありがとよ……!」

「お前達はエイリア学園にとって大きな価値がある。残り時間、存分に戦ってもらおう」

残り時間2分20秒。

デザームの豪快なスロー。そのボールをカットするよう指示を受けた一之瀬と染岡だが、2人の前にはそれぞれ新たなマークが。

行く手を阻まれた2人はボールを取り損ね、イプシロンへボールの支配を譲ることとなった。

始まったイプシロンのカウンターアタック。

ジェミニストームより速く、なおかつ正確にボールを繋いでいく。

「木暮、お前も!!」

「無理!絶対無理!!」

木暮は両手を前に突き出して拒否する。

そんなやり取りはお構い無しにゼルがボールを受け取り、シュートの体制に入る。

ボールに片手を翳すと、ボールは紫のエネルギーに包まれて浮かび上がる。

両手を後ろに構え、それと同じエネルギーを十分に溜めた後にボールへと叩き込む。無論、ボールに直接触れていないためハンドではない。

「ガニメデプロトン!!」

エネルギー砲のように放たれた必殺シュート。

それに対しゴッドハンドの構えに入る円堂だが……

「間に合わん!!」

「クソツ、爆裂パンチ!!」

目にも止まらぬ高速殴打。拳が何度もボールに叩き込まれるが、その勢いは一切衰えない。

ついに、その拳がボールの行く手を遮ることは出来なかった。

「ぐあッ!？」

「ふッ……開始より1分。まだまだ楽しませてもらうか」

予想を遥かに上回るシュートの威力。未だ痺れる自身の両手を見つめ、齒軋りをする円堂。

予想通りの得点。残る時間はより自分達にとって有意義なものになると確信し、微笑むデザーム。

残り2分。

「……」

その光景を遠くから眺める、赤い髪の少年に気付く者はいなかった。

(ダメじゃん。雷門もデカイ口ばっか叩いて、やっぱ信じられねえよ)

次々と叩き伏せられていく雷門イレブン。

他のメンバーと同じように狙われる木暮だが、自分に迫るボールは全て回避していた。

「逃げ足だけは天才的ね」

「木暮君すっかりして!逃げちやダメよ!」

「……木暮君って、見えているからこそ完璧に躲すことが出来るのかも」

秋が核心を突いた一言を呟く。その言葉を聞いて納得しような表情を浮かべるベンチ陣だが、それと同じことに気付く余裕はフィール

ド内の選手達にはなかった。

全員がボロボロになっている中、木暮だけは未だ無傷のままだった。

「む……」

ここでデザームが視線に気付く。

漫遊寺の校舎2階からこちらに向けられたそれを確認し、口を開く。

「間もなく3分。我々は次の一撃をもってこのゲームを終了する」

「何イ……!?!」

「また決めてるし……!」

「聞けい人間共!!我らは10日の後にもう一度勝負をしてやろう!!」

「10日……?」

「だが、お前達は勝負のその日まで、生き残っていられるかな……?」

「何……どういうことだ!!」

残り20秒。

鬼道のその問い掛けに応じることなく、デザームは思い切りシユートを放つ。

灰かに赤く煌めきながらボールは一直線に走り出す。

「ふざけるなアアア!!」

それに対して真っ直ぐに突進する吹雪だが、難なく吹き飛ばされてしまう。

凄まじい風圧を纏い、砂塵を巻き上げながら突き進むそのボールに誰も触れることが出来ない。

「え」

ボールの進行方向に立ち尽くす木暮。

避けなければ、そう思ってはいるが恐怖のあまり身動きが取れない。

が、すぐさま我に振り返りボールに背を向けて走り出す。

「木暮!!伏せてろ!!」

「うえええええ!!あつ!!」

その場に横たわっていた壁山の脚で躓き、転倒する木暮。

が、その拍子にボールが木暮の脚に振れ、その勢いのままに木暮を独楽のように回し始める。

あまりの勢いに旋風が巻き起こる。

それが止むと、無傷の木暮と勢いを完全に殺されたボールがその場に残っていた。

「……あれ?」

「消えた……!?!」

と、同時にイプシロンのメンバーも全員姿を消していた。

夏末が手元の時計を確認すると、試合開始からちようど3分が経過していた。

「……木暮君凄い!あれが木暮君の実力なんですよ!!」

「ちよつ、褒めすぎですよ音無さん!あんなものは所詮ビギナーラック——」

木暮についての言い争いをする音無と目金を横目に、瞳子は漫遊寺の校舎の2階辺りに視線を向ける。

秋にどうしたのか、と訊ねられても何でもないと返す瞳子。

その行動の意図が明かされることはなかった。

「やったね木暮君!!」

「お前、アイツらのシュートをカットしたんだぜ？」

「へ……？」

なんの事だか分からない、と言った様子で呆けている木暮に次々と賞賛の言葉が掛けられる。

だが、段々と木暮の口元には笑みが見え始める。

「見事だったそ木暮!!——ぐわっ!？」

木暮に駆け寄ってきた漫遊寺イレブンが悲鳴と共に姿を消す。

その犯人は、木暮によって以前仕掛けられていた落とし穴。

照れるような笑みからいつものイタズラ小僧のような笑みに切り替わった木暮は、音無に追われその場を去ろうとする。

が。

「待ちなさい」

「監督……！」

木暮の行く手を阻んだのは漫遊寺の監督。僧侶のような風貌をしている。瞳子に今までどこにいたのか訊ねられる。

「この子達が我が校を守るために如何にするか。その決断もまた修練。勝つも負けるも人生において無駄にはならぬと、何も言わずに見守っております。それはあの木暮とて同じです……」

といって、音無に対して例を述べる漫遊寺の監督。

「監督、木暮を仲間に入れなくていいんですか？」

「俺も、あいつは戦力になると思うんです」

「……彼が、自分の意思で私達についてくるならね」
「つたく……しょうがねえやつだな……なあ吹雪？」
「……」

「吹雪？」

染岡の言葉に対して、薄い反応しか示さない吹雪。その表情はどこか固く、暗い。

「僕、役に立たなかった……」

「んな事言ったら俺だって」

「何も役に立たなかったんだ!!こんなんじやダメなんだ……完璧にならなくちや……!」

「……やっぱり、ヤツらと戦うにはもっとパワーが」

吹雪の嘆きにも似たそれに、風丸がふと呟く。

ジェミニストームに勝利を収めた矢先、ここまで圧倒されてしまつてはこうなるのも無理はない。

3分後に残ったのは、大きな悔恨だった。

イプシロンが漫遊寺を襲撃したのと同時刻。

エイリア学園の本拠地……富士の樹海の基地にあるサッカーグラウンドに脚を踏み入れたネビュラ。

その者の目線の先にはまた別の者が。

「……緑川」

「あつ……ネビュラ様……」

ジエミニストームとしての任を解かれ、髪を降ろして私服に身を包んだレーゼ、もとい緑川リュウジの姿がそこにはあった。

ネビュラが話しかけたのは、緑川がリフティングをしていたタイミングであり、掛けられた声に驚いた緑川はボールを零してしまった。

「も、申し訳ありま——」

「構わない。それと敬語も必要ない」

そんなことを言われるとは思っていなかった緑川は、呆気に取られたような表情を浮かべる。

こちらに転がってきたボールを拾い上げ、緑川の元へ歩み寄るネビュラ。

「サッカー、してたのか」

「……うん。誰かに見つかったらまずいつて分かってはいたけど、身体を動かしたくて……」

「そうか……」

イプシロンは漫遊寺へ。その他のチームはこの施設内にいるが、今ほどのチームも練習していない。それを分かっているの行動だろう。

2人の間に沈黙が流れる。

気まずそうにしている緑川を見かねて、ネビュラが提案を持ち掛ける。

「……少し相手をしてもらおうか」

「え？でも……」

「お前は私に命令されて練習相手をするだけだ。他の者に見られても問題はないだろう」

「……分かったよ」

「はあ、はあ……」

「こんなところか。そろそろ切り上げるぞ」

1時間ほど、ネビユラと緑川は2人でボールを追いかけていた。

ジェミニストームの最後の試合からボールに触れていなかった緑川と、今やイプシロンすらも上回ろうとしている程のネビユラとでは実力差があまりに大きかったが、緑川はどこか満足そうな表情を浮かべている。

「あの、ネビユラ様……」

「敬語はいいと言ったはずだ」

「あっ……えっと、ネビユラ。また相手してくれたら嬉しいなあ……なんて」

「……良いだろう。次はジェミニストームの他のメンバーも誘ってみるとしよう」

「本当か!?よし、じゃあまた!」

と行って緑川はその場を去る。

グラウンドには再び静寂が戻るが、ネビユラが不意に口を開く。

「見ているんだろう……グラン」

「ははっ、バレてたか」

物陰から姿を現したのはグラン。

いつものユニフォームではなく、私服に身を包んでいる姿だ。

「……それで、何か用か」

「いや、特にそういう訳ではないよ……ただ、そういう所は変わらない

んだなって」

「そういう所、とは？」

「仲間想いなところだよ。君のその身体の持ち主……加賀美柊弥。彼と変わらないなって」

「……私は加賀美柊弥ではない、ネビユラだ」

そう言つてネビユラはその場を去ろうとする。

が、それを引き止める声が響いた。グランとは別の声だ。

「おいおい喧嘩か？みつともないねえ」

「ふん……」

ネビユラの進行方向から姿を現したのはバーンとガゼル。ネビユラの行く手を阻むように物陰から出てきた。

「何の用だ」

「別に？お前がセカンドランクの役立たずと遊んでたことをとやかく言おうってんじゃねえよ」

「……なら何だ」

「そんなことする暇があるならよ……俺のところに来いよ、ネビユラ」
「待てバーン……抜け駆けは許さないぞ。ネビユラ、君は私のチームに来い」

「2人共随分とネビユラに熱心だね」

バーンとガゼルが同時に自分たちのチームに来るようにネビユラに言う。

それに対してグランが茶化すように口を挟む。

「この短期間でイプシロンの連中にも負けねえくらいに成長してんだ……興味を示さねえ方が可笑しいってもんだろ？」

「その通りだ。私達よりも遥かに上の成長速度……マスターランクの

チームに混ざって特訓を重ねれば、すぐに私達と肩を並べることが出来るだろう」

「心配はいらないさ……ネビュラは俺達、ガイア」がもらうから」

ネビュラを除いた3人の間に険悪な空気が流れ出す。

そこで口を開いたのはネビュラ本人だった。

「エイリア皇帝陛下は、どのチームに所属するも私の自由だと仰った。お前達がどれだけがみ合ったところで、全ては私の意志に基づく」
「はっ！いいから領いとけよ。悪いようにはしないぜ……副キャプテンの座を用意してやっても良いぜ？」

「……そんなものに興味はない」

そう言っつてネビュラはその場を後にする。

後ろから聞こえたのは3人の喧騒だけだった。

第34話 陰謀と暗躍

巨大な紫色の石。

怪しく光るそれが放出するエネルギーは、周囲のものに不思議な感覚を与える。

今この場で話をする2人も例外ではなかった。

「——何か御用でしょうか。エイリア皇帝陛下」

そう先に無気質な声を鳴らしたのは黒光りする機械をバイザーのように身につけた男。ネビュラである。

そして、エイリア皇帝陛下と呼ばれた老年の男。

彼は吉良星二郎。

吉良財閥という大規模な財閥の社長にして、日本を騒がせるエイリア学園の首領。

「今回貴方を呼び出したのは他でもありません……貴方の身の振り方についてです」

「……と、言いますと」

「先日部下よりある報告がありました。マスターランクのキャプテン3人が何かを言い争っている。理由は分かりますね」

「……私の所在について、でしょうか」

吉良は無言のまま頷き、目の前の石……エイリア石の原石。見上げる。

「そうです。あの3人は、貴方がどのチームに入るかを頻繁に争っているのですよ。1度や2度ではなく」

「それは」

「誤解はしないように。私はそれが悪い事だとは言っていません。寧ろ良いと思っっているのです。マスターランクチームのキャプテン

たるあの3人が貴方を巡り争うのは、エイリア最強のチーム・・・”
ザ・ジエネシス”の称号が欲しいがゆえ。その争いを経て更に力をつけてくれれば万々歳です」

「・・・」

「単刀直入に言いましょう。貴方はこのまま、いや、もつとあの3人が争うように仕向けなさい。口喧嘩だけではなく、チームとして衝突するように。それが私の目的のためとなります」

吉良は堂々と言いきった。”私の目的のため”と。

この言葉を部外者が聞いたらどう思うだろうか。高々中学生程度の少年少女を、私利私欲のために利用すると明言しているようなこの言葉を。

だが、この場においてこの言葉を聞いているのは、吉良の忠実なマシーン。

「エイリア皇帝陛下の御心のままに」

全肯定の言葉を残し、ネビュラはその場を去る。

「父さんと何を話していたんだい？ネビュラ」

エイリア原石が保管されている部屋から伸びる通路を歩いていると、ネビュラにそう話しかける声があった。

その声の方向から顔を出したのはグラン。

「・・・私の身の振り方についてだ」

「そうか。どのチームに籍を置くかの催促でもされたのかい？」

「違う。その話については私の自由にしていいことになりはな
い」

「なら、どういうことだい？」

「・・・もつと力を付けろ、ということだ。お前達も、私も」

その言葉を聞いて満足したような表情を浮かべるグラン。

最後の一言で、ネビュラの、吉良の意思を感じ取ったのだ。

力を付け、それを示したものがネビュラを、ザ・ジエネシスの称号を手に入れることが出来るのだと。

「そうか・・・まあその話は後々。少し付き合わないかい？」

「・・・良いだろう」

そう言つて、グランはエイリア学園の黒いサッカーボールを取り出して踏みつける。

辺りが眩い光に包まれて、グランとネビュラの視界も次第にホワイトアウトする。

次に2人が視覚を取り戻した時に目の前に広がっていたのは――

「ここは？」

「真・帝国学園だよ。ほら、見てごらん」

グランが指さした方向に視線をやると、複数の存在に気付く。そしてネビュラは声を漏らした。

「・・・雷門」

京都を出発した俺達の元に飛び込んできたある一つの知らせ。

” 影山零治が真・帝国学園を設立した”

途中で合流した影山の手先、不動明王ふどうあきおの案内に従ってやってきた所で目にしたのは、帝国の校舎を彷彿とさせるような重々しい雰囲気きふいの潜水艦。

「久しぶりだな、鬼道」

「——ッ、影山アアアアア!!!」

その姿を目にした瞬間、自然と喉が張り裂けんばかりの声で影山の名を呼んだ。

鮮明に蘇る影山の悪事。

影山の手招きに乗って俺は真・帝国学園の内部へと足を踏み入れる。自分でもらしくない行動だとは思う。煮えたぎる怒りが俺から冷静さを取り上げていたのだろうか。

そして、導かれるがままに進んでいく俺を待ち構えていた人物を目にして唾然とした。

佐久間と源田。

FFにて世宇子中に大敗を喫し、その試合の中で怪我をした2人は入院していたはず。

が、目の前の2人は怪我をしているような様子はない。

俺の中では完治したのか、という安堵よりも何故ここに、という困惑の方が膨れ上がっていた。

「強さが、勝利が欲しかったんだ」

「お前だって同じだ鬼道、だから俺達を見捨てたんだ」

”俺達のサッカー”は・・・負けたじゃないかツツ!!」

そう激昂した佐久間が叩き込んだシュートの感触は未だに残っている。

あの勝利への執念・・・いや、俺への復讐心か。それが佐久間を、恐

らく源田も強くしたんだろうか。

2人の言う通り、俺は自分が世宇子中に勝ちたいがために雷門に来たのかもしれない。帝国の仇を取るといふのは大義名分だったのかもしれない。

だが、それでも――

「影山のやり口は間違っているんだ……!!」

歯を食いしばる。やり場のない怒りを自分に向けてるように。すると、肩の辺りに何かの感触があった。その正体を確かめるべく後ろを向くと、そこには円堂、そして雷門の仲間達。

「佐久間と源田を助けてやろうぜ、鬼道」

「……ああ!!」

瞳子監督は、この試合の全てを俺に任せてくれると言った。

俺の手で、佐久間と源田の目を覚ますんだ。

皆の後を追い、グラウンドへ足を踏み入れる。真・帝国学園のメンバーと正面から向き合い、一人一人を観察する。

その時、不敵な笑みを浮かべる佐久間と目が合った。

「俺達には秘策がある」

先程佐久間が口にしたその言葉が頭から離れない。

秘策、そして影山。どうにも嫌な予感がする。

まさか、あの”禁断の技”を……?

不安は拭えぬまま試合開始のホイッスルが鳴る。開始直後、佐久間と不動が駆け上がる。

予想を遥かに上回るそのスピードに、俺達は誰も反応ができなかった。

「見せてやれよ佐久間！お前の力を！」
「……」

無言のまま佐久間は動かない。ボールを奪うチャンスだが、徹底的なマークのせいで誰一人身動きが取れない。

「うおおおおおおお！！！！」

佐久間の咆哮が木霊する。

嫌な”予感”は”確信”へと変わった。俺はそれを止めるべく無我夢中で駆け出した。

「やめろ佐久間!!それは——」

佐久間が指笛を鳴らす。それは真紅の使者を呼び出すための合図。地中から姿を現したのは血のように真っ赤なペンギン。縦横無尽に宙を舞い、やがて佐久間が振り上げた脚を啄む。

「——禁断の技だッツツツ!!」

「皇帝ペンギン、1号!!」

ペンギンを介して脚に集中した全てのパワーを佐久間はボールへ叩き込む。

その瞬間、佐久間は激痛に悶えるようにしてその場に蹲る。

「ゴッドハンドツ!!」

困惑しつつもゴールは割らせまいと円堂が黄金の手を突き出す。が、拮抗する間もなくボールはゴールネットを揺らす。

「佐久間……お前何故……!!」

「見たか鬼道オ・・・！俺の皇帝ペンギン1号を・・・！」

「二度と撃つな!!あれは禁断の技だ！お前を分かっているだろう!?!」

「怖いのか？俺ごときに追い抜かれるのが!!」

「違う!!分からないのか、お前の身体が持たないんだぞ!?!」

「敗北に価値はない・・・勝利の為なら・・・俺は何度でも撃つ」

脂汗を滲ませながら佐久間は自分のポジションへと戻る。

このままでは・・・

「禁断の技か。なかなか面白いことするね」

「・・・勝利への執念は大したものだ」

グラウンドを見下ろせる位置で私とグランはその試合を眺めていた。

真・帝国学園の佐久間が放った”皇帝ペンギン1号”は凄まじい威力だ。だが使用者の身体へと莫大な負担を掛ける。故に禁断の技。

「あの男・・・あそこまでの力は無かったはずだが」

「彼だけじゃないよ。真・帝国学園は皆この短期間でパワーアップしているんだ」

「それほどまでのポテンシャルが?」

「いや・・・答えは簡単だよ。彼らには”エイリア石”を渡しているんだ」

「・・・成程」

「あ、また試合に動きがありそうだよ」

グラウンに促されてグラウンドに視線を戻す。
鬼道、染岡、一之瀬がボールを持って駆け上がる。あの技は・・・
皇帝ペンギン2号か。
ネーミングと技の形から察するに、皇帝ペンギン1号を3人で分担し、負担を少なくしたのが皇帝ペンギン2号。その分威力も落ちているようだが。

「皇帝ペンギン2号!!」

対する真・帝国学園キーパー源田。

不敵な笑みを浮かべた後、必殺技の構えを取る。獣を彷彿とさせる構えだ。

「ビーストフアング!!」

狼が獲物に食らいつくように源田は迫るシュートを受け止める。確かにシュートは受け止めた。

その後まもなく、源田はその場に倒れ込んだ。

「・・・あれもか」

「そのようだね」

ビーストフアングも、皇帝ペンギン1号と同じく禁断の技なのだろう。あの源田の様子と鬼道の焦りが何よりの証拠だ。

その後の試合は大した動きがなかった。

佐久間にシュートを撃たせないように、源田にシュートを撃たないように常に雷門がボールをキープする。

時折奪われるが、すぐに奪い返してまた拮抗状態。

このまま試合が進めば、先制点を取った真・帝国学園の勝ち。

「うおおおお!!」

鬼道と不動が雄叫びを上げながらボールを奪い合う。

果てには、2人同時にボールに蹴りを叩き込む。ボールに力が集中していき、行き場を無くした力は花火のように打ち上がる。

ここで前半終了のホイッスル。

「途中からは全然試合が動かなかったね。ギャラリーのことも考えて欲しいものだよ」

「・・・ギャラリーがいるとは思ひもしないだろう」

両者がベンチに戻って後半に向けてあれやこれやと話をしている。

真・帝国学園の方はお構い無しに佐久間と源田に禁断の技を使わせるだろう。

「ネビュラ、どうなると思う?」

「・・・鍵は吹雪と染岡、だろうな」

「ふうん・・・」

私の予測に間違いはない。

後半、必ずこの2人を軸にして流れが変わるだろう。

第35話 狂気の代償

「本当にお前達は変わってしまったのか……」

息を切らしながら佇む佐久間と源田に俺は問いかける。返事はない。あるのは途切れ途切れの息と噴き出す汗。

皇帝ペンギン1号とビーストフアング……強大なパワーと引き換えに1回使うだけでここまで身体に負担が掛かる。それゆえに禁断の技とされていたんだ。

それをあの男は分かっていないはずがない。それなのに、それなのにヤツは2人にこの技を使わせた。

佐久間、源田……何故なんだ？

「鬼道、自由に動いてくれ。他のことは俺達に任せてさ」

「すまない一之瀬、皆……」

雷門の皆には迷惑を掛けてしまう。ならば必ずそれに報いなければならぬ。

この試合に勝って、影山を倒して必ず2人を助ける。それしかない。

しかし、どうすれば源田にビーストフアングを使わずに点を取れる……

”相手に反応する間も与えなければ良いんだよ”

ふと、その言葉が頭の中に浮かぶ。

そうだ。その通りだ。ヤツは……加賀美はそんなことを言っていた。そして加賀美がない今、その芸当が出来るのは……

「吹雪」

「んあ？」

吹雪に作戦を告げる。それを実行するためには染岡の力も必要であるため、染岡にも話をする。

「なるほどな。いいぜ、乗ってやるよ!」

「へっ、加賀美みたいなこと言いやがるじゃねえか」

「実際、あいつの知恵だからな」

そんな軽口を交わしてポジションに着き直す。今は加賀美との思いに耽っている暇はない。

『さあ後半開始だ!』

ホイッスルが鳴り響くと同時に、吹雪がボールを持って駆け上がる。

「そう簡単にさせるかよ!!」

「どけエエエエエエ!!」

不動のスライディングなどお構い無しに吹雪は突き進む。ボールを取られこそしなかったが、ボールは弾かれてしまう。

だがそのルーズボールを後ろから上がってきていた染岡が拾う。

「よく拾ったじゃねえか!」

「ふん!」

現雷門のツートップが颯爽とゴールへと向かう。DFが染岡の行く手を阻むが、不動がシュートを撃たせるように指示する。あの男、源田のことを微塵も気にかけていない……!」

だが状況は深刻だ。シュートチャンスを作ったとして、シュートを撃てば源田はビーストフアングを使う。

が、不意にサイドから上がる影に目がいった。吹雪だ。
よし、作戦通り……

「ワイバーンクラッシュ!!」

蒼の翼竜を携えたボールが一直線へゴールへと向かっていく。

源田の正面、もちろんそれを止めるべく源田は構えを摂る。だが、その直前でボールの軌道は大きく逸れ、サイドから上がってきた吹雪へ。

「ビースト——」

「遅せえよ!! エターナルブリザード……ラアアアアアアアアアアア
!!」

吹き荒れるブリザード。

吹雪に蹴りを叩き込まれたボールは源田の反応を許さずしてゴールネットを揺らす。

予想だにしていなかったのだろう。これには源田も不動も啞然としている。

「すげえ……本当にビーストフアングを出させずにゴールを決めちま
いやがった!!」

「あの連携……使えるんじゃないか？」

「名付けて……ワイバーンブリザード！」

吹雪と染岡。

最初は水と油のような関係だったが……よくここまで連携が取れるようになったものだ。

視線を向けると拳を突き合わせている。よし、この方法ならば……

「まだ同点だ!! もう一点取って勝つぞ！」

「おう!!」

真帝国のキックオフから試合再開。すぐさま染岡がボールを奪い、吹雪と共に駆け上がる。

「もう一度決めてやるぜ!」

「喰らえエエエ!!」

不動のスライディングが染岡の脚を捉える。

染岡は大きく宙を舞い、二、三回転がった後にその場で脚を押さえ、てうずくまる。

ホイッスルが鳴り響き、審判が高く掲げたのは「イエローカード」

「染岡アアア!!」

「ぐううう……………!」

急いで染岡の元に駆け寄る。今の入り方は……………かなり不味い。

「悪い悪い、こんなのも避けられないとは思わなくてよ」

「テメエ……………今のわざとだろ!?!」

吹雪が不動に食ってかかるが、染岡がそれを制する。

「殴ったらお前が退場になるぞ……………吹雪!!」

「そうだ……………抑えろ」

気持ちは分かる。

俺も今すぐこいつに殴り掛かりたい。だが……………この場において取るべき行動はそうではない。

俺は冷静に立ち回らなければならない。

仮にも俺はこのチームの司令塔。ここで崩れるわけにはいかない。

吹雪と俺で染岡をベンチまで運び、木野の応急処置を受けさせる。

「これ以上は無理ね……」

「そっか……目金！ 交代だ！」

「すみません！ まだ脚の怪我が治りきっていません！」

脚の怪我。

漫遊寺で壁山の下敷きになった際に負った怪我だろう。

しかし、このままでは染岡の交代先が……

「交代はなしだ……！」

「染岡!? 無理はするな！」

立ち上がりよろける染岡の肩を支える円堂。

額に汗を滲ませつつも、円堂の肩を掴み返し、必死に自分をピッチに残すように頼む染岡。

ここまで来るとお願いと言うよりはもはや懇願。

続行不可を言い渡されようと、周囲に止められようと、この男は止まるつもりはないだろう。

しかし、染岡はこのチームの大事なストライカーの1人。吹雪の力を疑う訳では無い。だが、染岡が欠けるということは攻撃力の低下に直結するのだ。

……加賀美に豪炎寺、あの2人がいれば話は別だが。

いけないな、ないものねだりをした所で何も変わらない。

俺も染岡を説得しようと声を出しかけたその時。

「影山なんか……負けたくねえんだよ!!」

その言葉を聞いた瞬間、身体を銃弾で撃ち抜かれるような衝撃が走った。

こんなことになったのは、俺の影山への大きすぎる怒り故のことだと決め込んでいた。

しかし、ヤツにたいして怒りを覚えていたのは俺だけではなかったのだ。

染岡もまた、俺と同じように影山を倒したいと、こんな所で負けたくないと切望している。

そんな男の意志を遮ることは……俺には出来なかった。

「……円堂、染岡を続投しよう」

「鬼道……？ でも」

「いいんじゃないの？ その分俺が動いてやらあ……アンタの作戦に乗ってやったんだ！ それくらいはいいだろう？ 監督」

吹雪が監督に声を投げかける。

監督は何も言わない。ただ頷いた。

「鬼道、吹雪……すまねえ」

「気にするな……だが、無理だと思ったらすぐに退け。お前も佐久間や源田と同じ大切な仲間なんだ」

「……おう！」

「野蛮だねえ……まあ、邪魔者の排除には一番効果的だけど。ねえ？
ネビユラ……」

不動が染岡に怪我をさせたのを上から見てそう述べたグラン。

隣にいたネビユラに同意を求めて視線を送る。

その視線の先にいたネビユラは、立ち上がってグラウンドの方を見

下ろしていた。

機械のせいで目元が隠れているネビュラだが、それ以外の情報からグランはネビュラが置かれている状況を察知した。

”怒り”だ。

「…………ネビュラ、どうしたんだい？」

「…………分かん」

(ふむ…………この所ネビュラの行動が妙だな。今のもそうだけど、俺が最もそう感じたのはレーゼ…………緑川のことをやけに気にかけていたこと。一切の感情なく任務を遂行するだけの人格に塗り替えるって話だったけど)

グランとて鈍くはない。

その行動がネビュラの身体の持ち主…………柊弥の影響あつてこそそのことなんだろうと推察できた。

仲間想いな柊弥ならば、任務に失敗しその役目を解かれた仲間であろうと相手するだろう。

あるいは、仲間が悪意を持って傷付けられたとあれば大人しくはしていないだろう。

そんな柊弥の人格と、冷たい機械のようなネビュラの人格。2つが混濁して曖昧な状態となっている。どちらかと言うと柊弥寄りな気もするが。

(けどまあ…………今のところお父様の邪魔になるようなことはしてないし。いいか)

グランは保留と結論付けた。

何事もなければ柊弥…………ネビュラは自分達に大きな利をもたらす存在であると思っっているからである。

わざわざ積極的に排除する必要は無いと判断した。

「さて、試合の方は……」

再びグラウンドに目線を戻す。

染岡がグラウンドに戻って試合は再開。残り時間はあと僅かである。

ボールを奪った不動。そして佐久間にボールを渡すまいと立ち塞が一之瀬、土門。

障害物を取り除くが如く乱暴に突っ切る不動により、一之瀬、土門の両名はボールによつて弾き飛ばされる。

勢いを失ったボールが転がる先は……佐久間の脚元。

「やめろオオオオオオ!!」

「皇帝ペンギン……1号!!」

狂気。

一度の使用で絶叫するに至ったその技を佐久間は躊躇うことなく繰り出す。

狂気に眼を爛々と輝かせる深紅の魔獣が姿を現し、食い破るが如く佐久間の脚に喰らいつく。

そして放たれる禁断のシュート。目指すは円堂待ち構える雷門ゴール。

「ぐああああアアアアアアアア!!??」

佐久間の絶叫がグラウンド内に響き渡る。その痛みは佐久間自身にしか分らないものだろう。

が、そんな痛みに見舞われてもなお、佐久間は己の力に満足したような表情でボールを目で追う。

「ぐ……オオオオオオオオオオ!!」

圧倒的破壊力とスピード。

恐らく、円堂のマジン・ザ・ハンドを持ってしても止められるか分からない。

それ以前に、シユートが早すぎるせいで技の溜めが間に合っていない。

このままでは無防備なまま円堂は皇帝ペンギン1号の毒牙に掛かることになる。

が、それをさせまいとシユートとゴールの間に割り込む影。

鬼道である。

無謀にも、皇帝ペンギン1号に対してシユートブロックの形を取る。

だが、鬼道とて皇帝ペンギン1号を止めるには至らないのは自覚している。

だからこそ、鬼道は引き際を間違えない。

シユートの威力を減衰させ、なおかつ円堂の溜めの時間を稼ぐ。その上自分の身体が壊されぬタイミング。それら全てを考慮して鬼道は自ら身を引く。

「マジン・ザ・ハンド」改!!!」

黄金の魔神が顕現し、深紅の魔獣を正面から受け止める。

鬼道の尽力あってか、円堂の消耗は避けられた。痛みを歪ませるようなことはなく、シユートを止めて見せた。

「次こそ……次こそ決めるウウ……!!」

息も絶え絶え。全身から汗が吹き出す佐久間。

しかし、未だ彼の戦意は潰えていない。戦意というより、只の狂気だろう。

鬼道の説得もやはりと言うべきか聞き入れるつもりなく、ポジションに戻ろうと足を踏み出す。

その瞬間、佐久間の顔は苦痛に歪む。
それでもやはり佐久間は止まらない。

世宇子戦にて味わった無力感。そこから発現する力への渴望。

それが第三者の手により増幅させられ、呪いのように佐久間の心を蝕む。

その様を見て、悲痛な表情を浮かべる1人の少年。

それは誰に悟られることもなかった。

試合再開。

ボールを受け取った塔子に不動が苛烈なスライディング。一瞬でボールを奪い、雷門のマークを潜り抜けてパス。

それを受け止めるのは……佐久間。

「これで決めるツツ!!」

「やめろ佐久——」

鬼道は佐久間の妨害に間に合う位置にいた。

当然、皇帝ペンギン1号を撃たせないために動かないはずがなかった。
た。

だが、無情にも佐久間は皇帝ペンギン1号を発動する。

何故鬼道の妨害が間に合わなかったのか。それは鬼道が動くのを止めたからではない。

妨害を目論む鬼道を、不動が妨害したからである。

「皇帝ペンギン1号オオオオ!!」

三回目。

皇帝ペンギン1号の使用に身体が耐えられるのは、二回。

佐久間はそのボーダーラインを超えた。

どうなるかは……他ならぬ佐久間がその身を持って証明していた。

染岡を運び出す間もなく試合は続行。ボールはラインを越えては
いない。

「もう一度だ佐久間ア！」

佐久間にボールを渡す不動。

が、佐久間は小刻みに震えたまま動かない。いや、動けない。
そして倒れ込んだ。

同時に、試合終了のホイッスルが響く。

「染岡、佐久間!! ……………ん？」

ポジションを離れ、2人に駆け寄ろうとした円堂は、何処からか視
線を感じた。

グラウンドを取り囲む無人の観客席を見回す。
だが、そこには誰もいない。

「……………戻ってきたのか」

「君があのままグラウンドに飛び込みそうだったからね」

グランとネビュラは富士の樹海の基地へ戻ってきていた。

染岡が気絶した辺りで再び立ち上がったネビュラ。今度は観客席
からの転落を防ぐ囲いの部分に手を掛けていた。

頃合と見たグランがエイリア学園お手製の黒いサッカーボールの
ワープ機能により帰還した。

(保留かと思ったけど……………やはり1度研崎さんに相談してみるか?)

と、ネビュラに懐疑の視線を向けた時には、既にネビュラはその場にはいなかった。

ネビュラは、頭を抑えながら自分に与えられた部屋へと急いでいた。

(何だ、何だと言うのだこれは……先程から頭痛が酷い。あの試合が進むにつれてだ……意味が分からない)

ネビュラは何処か困惑していた。

正体不明の頭痛。

コンピュータにも引けを取らないその頭脳を持つてしても、原因は解明できない。

「染岡、おい！ 染岡!!」

「佐久間、佐久間!!」

倒れた兩名を雷門のメンバーが囲む。

その内の1人……風丸は焦りにも似た感情を抱く。

(俺に力があれば……染岡も、佐久間も倒れることはなかったんじゃないか……?)

自身の掌を見つめ、風丸は思案する。

自分もつと速ければ、強ければ、力があれば。

染岡が不動に怪我をさせられる所に割り込め、佐久間の皇帝ペンギン1号を阻止し、こうはならなかったのではないか。

倒れた染岡と佐久間を心配するその場の一同は、誰も表情を曇らせる風丸に気付くことは無かった。

そして。

「ぐッ——」

胸を抑え、苦悶の表情を浮かべる者が1人。

此方も風丸同様、周りに気づかれることは無かった。

人知れず、歯車は狂い始めている。

第36話 懐かしき雷門町にて

真・帝国学園との戦いから数日。

イナズマキヤラバンは雷門町へと戻ってきていた。

イプシロンとの再戦まで残り1週間である。

その間の休息も兼ねて、メンバーの大部分の故郷であるここへ戻ってきているという訳である。

「よ、戻ってきたぜ」

そう呟いたのは円堂。

1人サッカーボールを抱え、自らの原点とも呼べる鉄塔広場へとやってきていた。

円堂が自分で作ったタイヤによる特訓装置も、聳え立つ鉄塔も円堂の中の記憶のまま。

懐かしみを感じつつ、吊るされたタイヤと向き合う。

タイヤを引いて、思い切り投げる。

縄で木と吊るされたタイヤは、振り子のようにその勢いのまま円堂にぶつかってくる。

それを真正面から受け止める。

のしかかるその重みがより懐かしさを彷彿とさせる。

ここでは自分だけではなく、他のメンバーが特訓することもあった。

現在のイナズマキヤラバンのメンバーも、先程見舞いに行った入院中の半田や宍戸達も。そして、行方不明の柊弥に豪炎寺も。

特に、円堂と共にここで過ごした時間が長いのは柊弥だ。

サッカー部に入部する前から、幼い頃から2人でここ、或いは河川敷でボールを追いかけていた。

どこか感傷にふけっていると、円堂は視線を感じて振り返る。

もしかしたら、という期待を込めて。

「柊弥——」

「やっぱりここにいた」

「——秋か、家に帰ったんじゃないのか？」

振り返ったところにいたのは思い描いた人物とは違かった。それを態度に出す訳でもなく、円堂は木野へと声をかける。

「さつき半田達の見舞いに行ってきたんだ。皆元気になって、早くエイリア学園と戦いたいって意気込んだ。やっぱり仲間は良いよなあ、仲間の元気は俺の元気だ」

「円堂君らしいね。皆も同じ気持ちみたいよ？」

「へ？？」

「河川敷に皆集まってるの」

「吹雪、やろうぜ」

「良いけど・・・脚は大丈夫なの？」

河川敷にて、円堂を除くメンバーと杉森、そして円堂達が旅立ったと同タイミング、ジェミニストームによつて校舎が破壊されたタイミングで転校してきたシャドウがボールを追いかけていた。

先日の試合で怪我をした染岡は、吹雪に連携シュートをやるぞと声を掛ける。

吹雪から見ても染岡の怪我は決して軽いものではない。言っしまえば今こうして動いてるのも不思議なくらいだ。

「お前、以外と心配性なんだな・・・おい杉森！今すげえもん見せてやるぜ！」

染岡は吹雪の心配を一蹴し、シュート体勢に入る。

高くボールを蹴り上げて地中から姿を現したワイバーン。空中でぐるりと一回転し、染岡の脚元へとボールが戻ってくる。

それを撃ち出すと、その後ろから咆哮と共にワイバーンが追従する。

そしてそれを受け取るのは吹雪。

自身の十八番、エターナルブリザードと同じようにそのシュートに更に勢いを乗せる。

「ワイバーン・・・!」

「ブリザアアアド!!!」

「ぐおッ!?!」

来ると分かっているにも杉森は反応しきれず、ゴールに押し込まれる。

真・帝国学園との戦いで見せた兆しを完璧にモノにしていたのを見て、周囲からは賞賛の声が浴びせられる。

「吹雪と言ったか? お前、立派に豪炎寺と加賀美の代わりを務めているじゃないか!」

「あん?」

「豪炎寺でも加賀美でもねえよ。吹雪は吹雪、あいつらはあいつらだ」

「へっ・・・会ってみてえもんだな、その豪炎寺と加賀美によ」

その後も練習は続く。

染岡と吹雪は何度もワイバーンブリザードを放つが、それが仇となったのか、元々ダメだったのか。

徐々に染岡の様子に異変が感じられるようになってきた。最も、それを察する者は誰もいない。

「お、やってるな！俺もやるぞ！」

「おう円堂！見てろよ、染岡！もう一度だ！」

が、その吹雪の呼び掛けに対する反応がない。

吹雪は染岡がバテたのだと思い、発破をかける。

染岡は当然のように、それに対して強気に返事をし、再びポジションに着く。

心做しか、それを見ていた木野には皆の調子が良いように感じられた。

このままの調子でイプシロンとの戦いにも勝てれば・・・そう思っていた矢先だった。

「染岡！」

「おう！ワイバーン・・・ぐツツ!？」

ボールを吹雪に向かって撃ち出すために脚で触れた瞬間、激痛が走り前のめりに倒れ込む。

額に滲む脂汗と染岡の苦痛の表情、呻き声。

その時誰もが確信した。

あの怪我はやはり深刻だったのだ、と。

即座にベンチに運ばれる。

剥ぎ取るようにしてソックスを降ろし、患部を確かめる。

異常なまでに真っ赤に腫れ上がった右脚。誰がどう見ても骨折のそれである。

「真・帝国戦の後、ちゃんとケアしなかつたんだろう」

「こんなの気にする程じゃないですよ・・・！」

「強がってもいいことは無いぞ」

「・・・イプシロン戦はあと1週間後なんです。それまでに治るんでしょうか」

「1週間やそこらで治る怪我ではないわい。入院が必要になるだろう」

染岡の悲痛な訴えを退けるかのように古株は諭す。

その場にいた全員が深刻な表情で黙りこくっている中、その言葉は告げられた。

「染岡君、貴方にはチームを外れてもらいます」

「監督……」

その宣告に真っ先に噛み付いたのは風丸だった。

「本人がやるって言うてるんです！やらせてやってもいいじゃありませんか！今の俺達に必要なのは自分の身体がどうなっても勝つという気迫です!!」

「風丸……」

「円堂、お前も分かるだろ?!染岡は最初から雷門サッカー部を支えてきた仲間なんだよ!!」

「仲間だからこそよ。彼は仲間のためなら無理をするわ。その結果、皆が彼を気遣って十分な実力を発揮できなくなる」

「でも!!」

その時、鈍い音が鳴り響き風丸の言葉を遮った。

それは染岡がベンチを殴りつけたことよって発した音だった。

余程強い力で殴ったのだろう、染岡の拳の表面は赤く変色し、僅かに出血している。

よく見ると、歯を食いしばり、肩を震わせていることも分かる。その行動の意図を汲み取れないほど、仲間達は鈍くはなかった。

「悔しいけど……監督の言う通りだ、仕方ねえよ……吹雪、雷門のストライカー、任せたぜ？」

「あ、うん・・・」

「・・・なんだよ皆、そんな顔すんな！一時撤退つてやつだよ、またすぐに戻つてくる」

そう強がる染岡は、未だ小刻みに身体を震わせていた。

そして暫くの静寂。それを最初に破ったのは円堂だった。

染岡の肩を掴み、必ず戻つてこいと告げる。それに対して染岡も力強く返事を返す。

依然として空気は重い。

それを見兼ねてか、音無が木暮に注目を集める。

雷門中敷地内にあるイナビカリ修練場での特訓により、イブシロン戦で見せたあの必殺技をマスターしたのだと。

その言葉を皮切りに、周囲の雰囲気徐徐に変わり始めた。

木暮の実力を試すべくグラウンドに入る一同。

木暮を中央に据え、木暮を除く全員が木暮を取り囲む。所謂「鳥かご」のような陣形をとる。

そして合図を持つて塔子が木暮に向かってボールを蹴る。

対する木暮は、地に手を着け逆立ちのような構えをとり、その後間もなく独楽のように回転し始める。

回転する小暮に触れたボールは一瞬で弾かれ、鬼道の足元に。塔子と同じようにボールを蹴ると、木暮はまたそれを弾く。

その勢いは、最後の円堂の番まで衰えることは無かった。

「素晴らしい技ですね、”スパイラルレッグス”とでも名付けましょうか？」

「ダサイ」

「ダサイ!?!?」

「俺の技の名前は・・・”旋風陣”だ!!」

次々に木暮へと賞賛の声が浴びせられる。自身のネーミングセンスを否定された目金はひねくれた声を掛けるが。そして、風丸に支えられて染岡が木暮に近寄る。

「すげえ技じゃねえか木暮、この調子で頑張れよ」

「俺、このチームに来てよかったよ」

そう言つて2人は握手を交わす。

その直後、染岡は顔を青くして震え上がる。

染岡の手の中に握られていたのは、毛虫を模したやけに質感のリアルな玩具。

穏やかな表情から一転、顔を憤怒一色に染めて木暮に怒声を浴びせる。怪我のせいで追いかけて回すことは不可能である。

「よし皆！木暮に続いて俺達も強くなるぞ!!」

「「おう!!」」

全員の顔を見渡すようにして視線を送り、円堂はこう言葉を続ける。

「俺、サッカーやって良かったよ。こんなに仲間が増えてさ、やっぱりサッカーは面白いんだ。それを宇宙人にも教えてやろうぜ!!」

イナズマキャラバン一同はその一声に続き、ボールを追いかける。

エイリア学園をただ倒すのではなく、自分達が感じているこのサッカーというものの素晴らしさを伝えようと、そう決意して。

「どうした？一之瀬、行こうぜ」

「・・・ああ、今行くよ」

立ち止まって一点を見つめていた一之瀬に対し、土門は促すように声をかける。

土門はほんの一瞬、一之瀬が浮かべた表情に気づくことは無かった。

そして一之瀬は背中を追い掛けて進み始めた——胸を抑えて。

「ぐあああああ!?!」

悲鳴に似た叫びが響き渡る。

その悲鳴の主、ゼルは宙を舞った後に地面に数回バウンドしてその場に蹲る。

辺りを見渡してみると、ゼルと同じようにして倒れている者ばかりである。

立ち上がっているのは2人。

方やボロボロで、方や平然としている。

(この数日間ですらやってここまでレベルアップを……!?)

そう思案するのはデザーム。

息を切らしながら目の前の男……ネビュラに視線を向けている。連携の確認をしていたイプシロンの元に現れたネビュラは、自分も参加させて欲しいと頼んできた。

上の立場にあたるネビュラの頼みを断る訳にもいかず、キャプテンであるデザームはそれを承諾した。

高い能力を誇るネビュラ相手を、イプシロン全員を相手する。その結果がこれだ。

ボールを奪おうと襲いかかった者は尽く返り討ちにされ、全員もれなく這い蹲うことになった。

(分からん・・・不愉快だ)

雷門と真・帝国の試合を観戦している中で突如自分を襲い始めた頭痛。

単に体調不良から来る頭痛ではないと分かっていた。

何かが引つかかる、気になる際に生じる頭痛。

だがその”何か”が理解できない。

デザーム達イプシロンに半ば憂さ晴らしのような形で相手をさせたが、いくら蹂躪したところでその頭痛が晴れることはなかった。

もちろん、ネビュラがこのような惨状を作り出すに至った動機が憂さ晴らしなどと、デザーム達は知るよしはない。

「ネビュラ様、これ以上は——」

デザームがそう懇願したが、無情にもネビュラはシユートの構えに入る。

その直後だった。

ネビュラの背後から微弱な炎を纏ったシユートが飛来する。

迫る危険を感じ取ったネビュラはすぐさま向きを反転、真正面から迎え撃つ。

ボールに脚がめり込み、来た道を引き返すように真っ直ぐ飛んできくと、何処からともなく燃えるような赤い髪の男が姿を現し、ボールを胸でトラップした。

「随分と荒れてるなあ？おい」

「何の用だ・・・バーン」

受け止めたボールを指でくるくる回しながらバーンがネビュラに近付いてくる。

目的がはつきりしないバーンの行動にネビュラは身構える。

「あーあーこんなボロボロにしちまって、今はイプシロンが表立って動いてんだから加減してやれよ?」

「もう一度聞く、何の用だ」

バーンの茶化すような口調に若干の不快感を覚えつつ、ネビュラはバーンに問い直す。

その瞬間、指先でつつくようにして浮かせたボールをバーンが至近距離からネビュラに撃ち込んだ。

ネビュラは至って冷静にそれを受け止めた。

「なあに、簡単なことよ。こんなヤツらとの特訓で燻ってないで、俺達プロミネンスとやろうぜってだけだ」

「お前には何の強制力もないが」

「まあな、けど考えてもみろよ。お前はイプシロンの連中をボロ雑巾に出来るくらいにレベルアップした。つまりそんだけ力の差が開いてるってこった。そんな環境で数重ねても、これ以上のレベルアップは見込めねえんじゃねえの?」

「・・・」

バーンの発言は的を得ていた。

だが、バーンの見え透いた魂胆がネビュラを警戒させ、簡単に頷くには至らなかつた。

マスターランクチームの間で見られる、ネビュラを引き入れたものが“ザ・ジエネシス”の称号に近付くという風潮。

ネビュラはそのこと自体には何も思わない。

引つかかるのは、絶対的な忠誠の対象である吉良の言葉。

3人が争うように仕向け、更なるレベルアップをさせる。ここでネビュラがバーンの誘いにのれば、なし崩し的にプロミネンスに所属する運びとなるだろう。

ネビュラからしてみれば、それは吉良の言葉に背く行為。簡単に領けない訳である。

「沈黙は肯定と見なすが・・・構わねえな？」

「・・・」

「よし、じゃあ他のヤツら呼んで——」

「待ちたまえ」

ネビュラでも、バーンのでも。はたまたデザームの声でもない声が響き渡る。

声の方向から姿を現したのは白い髪の何処と無く冷たい雰囲気を感じさせる男。

そう、マスターランクチームが一角、ダイヤモンドダストのキャプテン、ガゼルである。

「勝手がすぎると、バーン」

「なんだよガゼル。邪魔すんじゃないか」

「君の勝手にネビュラを付き合わせるな。ネビュラもだ。何か言ったらどうだ？例えば・・・プロミネンスなんかよりダイヤモンドダストの方が良い、とかね」

「あ？何寝言ほざいてんだ？」

「事実だろう」

徐々に2人の口喧嘩はヒートアップしていき、やがてネビュラは蚊帳の外となる。

2人の口から飛び出るのは罵詈雑言のみ。

その隙に助かった、という表情でイプシロンの面々がグラウンドを出ていった。

「面白いことになってるね」

「グラン」

残された最後のマスターランクチームのキャプテンも顔を出した。今にも殴り合いに発展しそうなバーンとガゼルを面白そうにグランは眺めていたが、やがて2人の間に口を挟む。

「そこまで言うなら試合をしたらどうか？ここでは力を持つ者が全てだよ」

「・・・たまには真つ当なこと言うじゃねえかグラン」

「全くだ。構わない？ネビュラ」

「・・・」

何が、とは敢えて聞かないネビュラ。

「決まりのようだね・・・明日、ここでプロミネンスとダイヤモンドダストの試合を行う。忘れないように」

「へっ、直前で逃げ出すんじゃねえぞ」

「精々強がっているといいさ」

そう捨て台詞を吐いて互いにその場を去る。大方メンバーに明日のことを伝えに行つたのだろう。

「さて、特訓の途中だったら付き合うよ。チームとしてじゃなく、俺個人としてね」

「・・・助かる」

ネビュラの狙いを見透かしたように笑みを浮かべながらボールを転がす。

その後間もなく、グラウンドからは砲撃のような音が何度も、何度

も、鳴り響いたと言う。

第37話 衝突する紅と蒼

「ダイヤモンドダストの連中に分からせてやる……いくぞテメエら!!」

「分かっているなお前達……プロミネンスなど軽く捻り潰すぞ」

「盛り上がってるねえ」

予定通り、グラウンドにプロミネンスとダイヤモンドダストの両チームのメンバー全員が姿を現した。

言葉や態度で敵対することは多々あれど、実際に勝負をする場面は少ない、あるいは無いせいか、両者いきり立っている。

それを傍らで眺め、他人事のようにどこか楽しそうな様子のグラウンド。それに対して何か言う訳でもなく沈黙を貫くネビュラ。

「ネビュラはどつちが勝つと思う?」

「……さあ」

「つれないなあ。もしかして君をダシにしたこと怒ってる?」

「……」

付き合う必要無し、と判断したネビュラは適当に返事を返し、再び黙る。

それを察知したのか、グランもネビュラに対してそれ以上言葉を投げかけることはなかった。

実際、プロミネンスとダイヤモンドダストのどちらが勝つかは予測出来ていなかった。

チームとしての持ち味は違えど、総合的な実力としてはほぼ拮抗にあるこの2チーム。位置づけで言えばガイアもそれに当てはまるが。

競った試合になるだろうな、とは容易に予測できた。

「さ、そろそろ始めようか」

グランが試合開始を指示すると、横に待機していたデザームがグラウンド内に入っていく。

審判をやらされるためだけに呼び出されたのである。

「ただいまより——」

そうして、紅き炎と蒼き氷の決戦は幕を開けた。

コイントスにより、プロミネンスのキックオフから試合は始まる。バーンを中心とした前衛が意気揚々と攻め上がる。

それを大人しく見逃すはずもなく、ダイヤモンドダストは総出で止めにかかる。

ボールを持ったバーンは取り囲まれ、今にもボールを奪われそうなその時、一瞬の虚をついてネッパーがすれ違いざまにバーンからボールを受け取る。

そのまま単独で駆け上がるネッパー。ゴツカやクララといったダイヤモンドダストDF陣がそれを阻止にかかる。

それを受けたネッパーは、誰もいないゴール前へ高くセンタリング。

それは”パス”だった。

そう、ネッパーに意識を集中させ、裏をかいて前進してきたバーンへの。

「紅蓮の炎で焼き尽くしてやる……アトミックフレア!!」

高所から降り注ぐようにして放たれた獄炎のシュート。

ダイヤモンドダストKP、ベルガは必殺技”アイスブロック”を用いて応戦する。

が、その氷は紅蓮の炎の前には無力だった。触れた瞬間にボールごとベルガはゴールに押し込まれる。

先制点はプロミネンスだ。

1—0

プロミネンスの先制を受けて、ダイヤモンドダストは特に焦る様子はない。

むしろこの展開は想定内、とも言わんばかりの落ち着きようである。

至って冷静なパス回しでみるみるうちに前線へとボールは運ばれ、ボールはガゼルへ。その周りを複数のDFが囲んでいるが、ガゼルの顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

1人、また1人と個人技で躲す。そしてそのままの勢いでシュート体勢に入った。

「ノーザンインパクト！」

周囲一帯が冷気に包まれる。

軽くボールを蹴りあげたガゼルは一瞬で姿を消し、一瞬で姿を現す。

その一瞬の内に得た加速を全て脚に乗せ、ボールへと突き刺す。

バーンのアトミックフレアが”パワー”だとしたら、ガゼルのノーザンインパクトは”スピード”である。

ボールは一直線にゴールへと向かっていく。

あまりの速さに、プロミネンスKPのグレントは反応出来ず、必殺技を出す間もなくゴールネットは揺らされた。

流れるようにダイヤモンドダストが1点を取り返した。

1—1

プロミネンスのボールで試合再開。

これまでとは打って代わり、試合は膠着状態へと陥る。

ボールを片方が奪えば、もう片方が奪い返す。互いに攻められればDF陣がそれを阻止し、攻めれば阻止される。

これが繰り返されて前半は終了かと思われたが、前半終了間際に状況は動いた。

「寄越せー！」

ヒートが奪われたボールを強引にバーンが奪い返し、そのままゴールへと駆ける。

ボールは高く蹴りあげられ、炎を纏う。

「アトミックフレア!!」

流れるようにバーンは必殺シュートを放つ。

先程完膚なきまでに叩きのめされたベルガは、再び身構える。

「アイスブロック!!」

止められない、そう予測していたベルガは、シュートを真正面から受け止めるのではなく、逸らすことへと意識を集中させた。

圧倒的な威力に身体が悲鳴を上げながらも、必死にベルガはシュートコースを上を逸らし、ゴールポストへとシュートをぶつけ無理やり守りきる。

しかし、それは悪手だった。

「へっ、甘いんだよー! アトミック……フレア!!」

ボールが弾かれ、飛んでいった先にはバーンだった。

そのまま連続してアトミックフレアを放つバーン。

ベルガは三度アイスブロックで応戦するも、やはり止めきるには至らない。

ベルガを押し付け、ボールはゴールへと吸い込まれていく……と思われたその時だった。

「させない!!」

後退してきていたガゼルが間一髪でゴールを阻止する。

ガゼルがボールを蹴り返したその瞬間にホイッスルが鳴り、1―1で前半は終了となった。

ハーフタイム終了後。

両チームがポジションに着くが、前半と明らかに変わった様子が見られる箇所がある。

ダイヤモンドダストのゴールだ。前半でゴールを守っていたのはベルガだった。

だが、今ゴールの前にいるのはベルガではなく、先程DFだったクララである。

「へえ……ポジションチェンジか」

(……本当なら、ジエネシスの称号を賭けて戦う時の切り札だったんだけどな)

グランがそれを興味深そうに眺め、ガゼルはそのグランに対して不快の視線を向ける。

(バーンのシュートはパワーだけで見たら私やグランよりも上……そんなヤツの全力のシュートを3回も正面から受けてはベルガが持たない。今後を考えると欠員を出すわけにはいかない……つまるところ

ろ、苦渋の選択だ)

そう、前半のうちに3回もグランの必殺シュートを受けたベルガは既に潰れる寸前だった。

ダイヤモンドダストには、というよりエイリア学園のチームには基本的に控えのメンバーはいない。

ここで欠員を出すくらいなら……と、隠し球であるクララをGKとして投入してきたのである。

「頼んだ」

「ええ」

ベルガとクララはそう短いやり取りを交わす。ベルガのポジションは先程までのクララのポジションだ。

そうして、後半戦が始まる。キックオフはダイヤモンドダストから。

ガゼルを中心としたパスワークで深く切り込んでいく。

やがてガゼルは徹底的にマークされ、もう片方のFWであるフロストが単身ゴール前まで駆け上がる。

「イグナイトステイル!!」

が、プロミネンスのDFの要であるボンバによってボールは容易く奪われた。

ボンバのロングパスを受け取ったのはヒート。

そしてヒートからネッパーへ、ネッパーからバーンへとボールが渡る。

ゴツカやベルガがシュートを阻止せんとバーンに詰め寄るが、それより早くバーンはシュート体勢に入る。

(ポジション変えようが何だろうが、俺のシュート前には無意味だったの！)

「アトミック……フレアツツ!!」

4度目。

獄炎のシュートがダイヤモンドダストのゴールへと襲い掛かる。

それを正面に見据えたクララは、重心低めに腰を捻り、力を溜め、やがて拳が氷に包まれる。

それはベルガの必殺技と全く同じ、アイスブロックの構えだった。

(へっ、同じ技かよ……もらった!!)

「アイスブロック……!」

迫る獄炎に対して、クララは真っ直ぐに拳を突き出す。

ボールと拳が触れた瞬間、火花が散り、水蒸気が巻き起こる。それらがゴールを包み込んで姿を隠してしまった。

「ふん、追加点は頂きだぜ」

「……それはどうかな?」

バーンが不敵な笑みを浮かべる。

それと同時に、ガゼルも同じような笑みを浮かべる。

やがて水蒸気が晴れ、その中身が姿を現す。

「なッ……!?!」

バーンは驚愕する。

そう、そこにあつたのは、シュートを完全に受け止めたクララの姿だった。

声にならない驚きを浮かべ、バーンは固まったまま。

他のプロミネンスのメンバーも、自分達のキャプテンのシュートが

止められるなどとは思っていなかったらしく、各々が驚きよ表情を浮かべている。

「ガゼル様!!」

「……教えてあげるよ、凍てつく闇の冷たさを」

「ッ、止めるオオオオ!!」

クララからのパスを受け取り、ガゼルが単身で攻め込む。

我に返ったバーンが声を荒らげるも、動揺が晴れないプロミネンスは思うように動けず、ガゼルを止めることは出来ない。

「ノーザン……インパクト!!」

最後の最後までガゼルの独走を止められる者はいなかった。

呆気にとられたグレントごとボールはゴールに叩き込まれる。

後半はダイヤモンドダストの先制、1―1のイーブンを自分達の優位へと押し上げた。

「ネツパー……ホイッスルが鳴ったらすぐボールを寄越せ」

「……了解」

見るからに不機嫌なバーンの気に触れぬよう、ネツパーは一つ返事で了承する。

もはや命令の域である言葉通り、ホイッスル直後にボールはバーンに。

そしてバーンは、先程ガゼルがやったように独走状態へと陥る。

「どけエエエ!!」

「くっ……まるで暴走機関車だな……」

力任せの突撃。

ガゼルでさえもバーンのそのプレイを止めることは出来ない。
誰に遮られることもなく、バーンはゴール前へと一瞬で駆け上がり、高く飛ぶ。

「アトミッククウウ……フレアアアア!!」

その必殺技の宣言はもはや咆哮。
力任せにボールは蹴り出される。

(俺が、俺が最強なんだ!!)

(……問題ないな)

ガゼルはそう判断し、ゴールに佇むクララへと視線を向ける。
クララは先程と同じ構えをとっている。

「アイスブロック!!」

この試合の中で最も希薄に満ちていたであろうバーンのシュート。
が、それとは裏腹に、そのシュートはこの試合の中で最も簡単に止められた。先程のような拮抗もなくである。

「……限界か」

「そのようだね……バーンは既にこの試合で全力のシュートを4回。
それに加えてあの力任せな前進。そんな状態で万全のシュートを撃
てるかって聞かれたら……そうじゃないよね」

バーンは肩で息をしながらその光景を目の当たりにしていた。
自身の全力が何度もこうも簡単に止められ、バーンの中では焦りが
大きくなり始めていた。

「クツ、ソがアアアアアアア!!」

バーンを待つことなどなく運ばれ始めたボールをバーンは必死に、食らいつくように追いかけた。

ゴールから少々離れた距離で、フロストがシュート体勢に入る。

「フリーズショット!!」

ノーザンインパクトと同じような初動から、辺り一面が凍り付く。そのままボールは凍り付いた地を滑るように蹴り出される。

滑るよう加速するそのシュートはやがて地を離れ、ゴールへと向かっていく。

「させるかよオ!!」

ゴール前にバーンが立ちはだかった。

GKのグレントがこのシュートを止められないと判断しての行動ではない。

今バーンを突き動かしているのは“意地”。

シュートを2度も止められたことによりガタついている自尊心を取り繕う為の無我夢中である。

「なッ!？」

バーンは何度目かの驚愕の表情をそこで浮かべた。

何故なら……

「ふっ……ノーザンインパクト!!」

ガゼルがシュートチェインの体勢に入っていたからだ。

フロストのシュートにガゼルのシュートが上乘せされ、この試合の中で最も威力が高いシュートへと変貌する。

それから逃げることなく、バーンは胸で受け止める。
が、抵抗虚しくそのままボールと共にゴールに吹き飛ばされ、グレントごとゴールネットを揺らした。

と、ここでホイッスルが鳴り響く。

試合終了。

1―3、2点の差をつけてダイヤモンドダストは勝利した。

「さて、これで証明されたね。私達ダイヤモンドダストの方が君達プロミネンスよりも優れていると」

「……チツ」

ここで噛み付いては余計に煽られるだけであると、珍しく冷静に判断したバーンは舌打ちだけに留める。

それを意に介さず、ガゼルはネビュラの元へと歩み寄る。

「さあ行こうかネビュラ、ようこそダイヤモンドダストへ」

「……お前は何か勘違いをしているようだな」

その言葉を聞いてガゼルは眉をしかめる。

ネビュラの言葉の意味が理解できなかったからだ。

「お前達は私の所有権を巡って争っていたようだが……そもそも私は勝った方のチームに着くなどと言も言っていない」

「……待て」

「ネビュラの言う通りだね。第一、俺達ガイアが除け者じゃないか。つまり君達はただただ試合をしたただけだよ。……まあ、互いの優劣を付ける位は出来たんじゃない？」

「……」

そう言われてガゼルは黙り込む。

確かに、自分達が勝つたらネビユラを引き入れるなどとハッキリ名
言していないことに気づいてしまったからだ。

「ふん……まあいい。やがてネビユラを手に入れ、ザ・ジエネシスを名
乗るのは私達ダイヤモンドダストであることに変わりはない」

そう言つてガゼルはその場を去っていった。 必死の抵抗にも似
た強がりをつき捨てて。

その様子を見て少し気を取り直したバーンも続いて去っていく。

「……まあ、ネビユラもそろそろちゃんと考えてみなよ……どのチー
ムに所属するのか、ね」

そう言い残してグランもその場から姿を消した。

「私は……」

1人残されたネビユラが何を思うか。
それを察するものは誰もいなかった。

第38話 再び相見える為に

「ここにエイリア学園のアジトがあるのか……?」

”大阪にエイリア学園のアジトがある”という情報を元に大阪へやってきたイナズマキヤラバン。

が、指示された場所にあったのはいかにもな森などではなく、客で賑わう遊園地、ナニワランドであった。

「間違いないわ。再度確認してもらったけど、このナニワランドのどこかにアジトがあるはずよ」

「理事長の言うことなら間違いないんだろうけど……本当に?」

「あら、パパを疑うの?」

「そういうんじゃないけど……なあ?」

「ま、まあとりあえず探してみようぜ? ほら、何人かに別れてさー」

3, 4人程でグループを作り、各自手分けしてアジトを探すことになった。

露天に突っ込もうとする壁山、現地の女子に囲まれる吹雪、アトラクションを回り続ける木暮。

順調とは程遠い状況でアジト搜索という名の遊園地観光が進んで行った。

数時間後。

「ええ!?!」 一之瀬が結婚する!?!」

「せや、このお好み焼き食べたら結婚せなあかん決まりやねん」

一之瀬がThe・ギャルと言わんばかりの風貌をした浦部リカに拉致られ、なんやかんやあつて結婚させられる流れとなつてしまった。それを聞き付けた円堂達がリカの説得を試みるも、当の本人は聞く耳持たず。

拳句の果てにはリカがキャプテンを務めるサッカーチーム、大阪ギャルズCCCのメンバーが集い、それを囓し立て始めた。

「では、ここはサッカーで決めましょう。勝った方が一之瀬君を連れて行ける……どうです?」

「ええで、ほな試合しよか」

仲裁案を出したのは目金だった。

その顔にはでかかど”相手は女子チーム、楽勝だ”と書いてある。

しかし、これを相手側が思いのほか快く受け入れたため、ここに一之瀬を取り戻す為の戦いが始まった。

「ネビュラ様。全員集まりました……お願いします」

「ああ」

グラウンドに集められたイプシロンの面々とネビュラ。

デザームに頼まれたネビュラは、雷門との再戦を控えたイプシロンの調整に付き合うために駆り出された。

といっても、このところネビュラはグラノー人と特訓するか、イプシロンと特訓するかばかりだったのでいつもとそう変わらないが。

「俺も混ぜておくれよ」

「グラン」

「ネビュラ、そろそろ君は他者との連携を覚えた方がいいんじゃないかな？ まだどのチームに所属するか決まっていなはいえ、身につけておいて損は無いよ」

「……いいだろう」

「それに、1人を相手するより複数を相手した方が練習になるだろうし、ね？」

グランの言うことは至極もつともであつた。それゆえにネビュラはその提案を拒まない。

一方デザームはと言うと、自分がマスターランクに意見できるとも思っていないため口を開かない。

「じゃ、始めようか」

特に合図もなく練習は始まつた。

ネビュラとグランの糸乱れぬ連携を前に、イプシロンの面々は圧倒されかけているが、後方からのデザームの指示を受けて必死にくらいつく。

2人はというと、特に声で意思疎通を図ることも無く、相手の動きや視線を見て最適な手段を取っている。

（ああは言ったけど、散々雷門で連携なんかしてただろうし……問題ないか）

まさにその通りだった。

ネビュラが柘弥であつた時、何よりも重んじていたのは仲間との連携。

人格が変われど、そんな経験を積んできているネビュラにとってそのくらいはお手の物だろう。

流れるように全員抜き去り、あつという間にゴール前まで進んできた2人。

グランからネビユラにボールは渡り、ネビユラはそのまま必殺シュート、”ジ・エクスプロージョン”をデザームが待ち構えるゴールへと撃ち込む。

「ぐッ……!?!」

デザームもキャッチ技、”ドリルスマッシュヤー”で対抗するが、拮抗する間もなくゴールにぶち込まれてしまう。

ゴールを皮切りに、ネビユラとグランはイプシロンへの指摘を始める。

「ゼル、一人で走りすぎだ。周りが追いつけずに結局君1人になっているよ」

「それとは逆にマキユア、お前は遅い。もっと早く回り込まねばすぐに抜かされる」

次々と修正点を示す2人。それを一切反論せず受け止めるイプシロン。

その様子はさながら軍の上官と訓練兵。

一通り指摘を終えたら再び実際に動く。そしてまた指摘の繰り返し。

こうして時間は過ぎていく。

イプシロンの面々が汗にまみれて地に伏せることができるのは、そこから5時間ほど後のことだった。

「ネビュラ様、グラン様。ただいま報告が……」

「何だ」

「それが……我々が廃棄した特訓施設を、雷門が使用しているとの事で……」

「へえ……雷門が」

” 廃棄した ” とは言うが、実際のところはネビュラがネビュラになつてからしばらくの間、あそこの施設を使っていた。

その時から何やら大阪ギヤルズ部外者がその施設を使用していたことは分かっていたが、大きな問題ではないとして放置していた。

それが今度は雷門が使い始めたという。

「いいんじゃない？ 俺達エイリアの為にも、彼らには強くなつてもらわなければ困るしね」

「異論ない」

「そ、そうですか……それならば良いのですが」

成長した雷門をザ・ジエネシスの名を冠したチームが潰すことにより、エイリアの力の有用性を知らしめるのが目的であると心得ている2人は、その現状すらも自分達にとって都合が良いと気にとめなかった。

「ネビュラ、こうして俺達はイプシロンを鍛え上げた訳だけどどう思う？」

「どう思う、とは」

「そのままの意味だよ。雷門はイプシロンに勝つか？ それとも負けるかな？」

「……さあ。ただ1つだけ言えるのは、ヤツらの成長は留まることを知らないということだろう」

「ふふ、同意だよ」

以前両チームが対決した際は、イプシロンの圧勝と言うべき結果で終わった。

が、さっきの報告もあり、雷門が以前より成長してくるだろうというのには火を見るより明らかなことだった。

2人が雷門に寄せるのは”期待”

雷門がどれだけ自分達の刺激となりうるか……関心が向くのはその一点のみである。

「ここに秘密が……？」

「さっき来た時は行き止まりで何も無かったぞ……？」

「と、思うやろ？」

ギヤルズとの試合に勝ち、一之瀬の結婚を何とか阻止することが出来た雷門一行。

試合後、リカ達に連れられて城のアトラクションへとやってきた。リカによると、ここに自分達が強くなった秘密があるという。

リカが何やら機械を操作すると、隠し扉のようなものが開き、下へと通ずるエレベーターが姿を現した。

「これが……？」

「せやで。ここにアタシらは強なったんや」

地下に広がっていたのは、いかにもな特訓施設。中には、雷門中に地下に存在するイナビカリ修練場を思い出した者もいるだろう。

試しに何人かが挑戦してみるが、最初の方の段階で根をあげてしまう。

3日後のイプシロンとの戦いに備え、ここを使って特訓してもいいとのことだった。

「よし皆、やるぞ!!」

各自、自分が伸ばしたい能力に応じた設備へと向かっていく。

時間が経てば経つほど、目に見えてボロボロになっていく雷門イレブン。

それでも止まることはない。全ては再び相見えるために。

「……ぐッ」

突如胸の辺りを襲ってきた痛みに、僅かばかりの苦悶の声を漏らし
てしまう

この痛みに襲われるようになってきたのはつい先日……真・帝国学
園との試合の直後くらいからだっただか。

きつと、事故の後遺症が再発してきたんだろうと思う。

幼い頃に交通事故で重体になった俺は、一命を取り留めこそしたも
の、昏睡状態が長すぎて後遺症を患った

自分を死んだことにしてまで受けた長い期間の治療で、それも治っ
たと思ったけど……こうして再発してしまった。

「……あれは」

ふと、キャラバンの窓から外を覗くと、円堂と秋がどこかへ向かう

のが見えた。

ナニワランドの方向……特訓でもしに行くんだろうか？ 円堂らしいや。

できるだけ物音を立てず、皆に迷惑がかからないようにして外に出る。

少しひんやりとした空気が頬を撫で、肺を満たすのを感じる。心地良いな。

……俺がこのチームから抜けたら、どうなるんだろうか。

目金がいるけど、こう言っちゃ罪悪感に苛まれるけど俺の代わりは務まらないと思う。

彼は選手としてプレーするよりも、相手を分析、いわばサポートに向いている気がするからね。

実際そのおかげで助けられた場面だってある。彼も立派なチームメイトであることには変わりないさ。

「はあ……」

柄にもなく溜息をついてしまう。

もし明日の試合中に、どうしようもないほどの痛みに襲われたら……？

きつと俺は耐えられなくて、ベンチ行き。その後は病院送りだろう。

けどせめて。明日の一試合だけは、戦いたい。

明日勝って、エイリア学園の目論見を終わらせる。そうすれば、俺も安心して入院でも何でもできる。

それでも、またサッカーが暫く出来なくなるのは……嫌だな。

お知らせ

皆さんこんばんは。作者のあーくわんです。

当小説、「雷鳴は光り轟く、仲間と共に」を閲覧頂き、誠にありがとうございます。

さて、今回は最新話の更新ではなく、サブタイトルの通り、お知らせがあつて投稿させて頂きました。更新を楽しみに待つてくださった方々、申し訳ございません。

そのお知らせというのは、この作品の今後についてです。

当小説は約2ヶ月程前から多忙につき、現在に至るまで更新出来ない状態です。

言い訳にしかありませんが、2ヶ月という時間は中々に長いもので、私はこの小説を、イナズマイレブンの原作には存在しない”加賀美 柊弥”の物語をどのようなものにしたのか、ということが分からなくなっていました。何をどうやってどのように書けばいいのかは一切分からない、そんな状態でした。

実を言うと、1週間と少しくらい前から更新を再開できる状態だったのですが、そんなことがあつて最新話の執筆が進まなかった次第です。

最初はこのまま執筆を辞めてしまおうか、人知れずこの小説を消してしまおうかなんてことも考えました。

ですが、多くの人に見ていただき、評価していただき、楽しみに待っていた以上、そんな無責任なことはしたくないと思えました。

それに加え、私はイナズマイレブンという作品が大好きで、その作品の中で、自分が生み出した”加賀美 柊弥”が生きていくのを最後まで見届けたいと、こんな中途半端なところで投げ出したくはないと、そう思いました。

そうして、私はこの数日間を物語の”再構想”に費やしました。

中途半端な構想のまま更新を再開し、面白みに欠ける物語を読者の

皆様に届けるくらいならば、いつそのこと最初からやり直してしまうと決心しました。

つきましては、当小説の更新を停止し、新たに「Re:雷鳴は光り轟く、仲間と共に」を明日（7月10日）より投稿します。

元は無かった展開もあれば、本来とは少し違った展開になっている部分もあります。

ですので、当小説とはまた別の小説として閲覧していただいた方がお楽しみいただけるかもしれません。

更新停止前、散々口にしていた「失踪するつもりはない」という心意気は変えるつもりはありません。

責任を持って、この“加賀美 柊弥”の物語を絶対に完結まで持つていくつもりです。

お知らせは以上です。自分勝手かつ自己満足な決定ですが、どうか今後ともお付き合いいただけるととても嬉しいです。

では、明日の投稿でお会いできることを楽しみにしています。

しかしいつまで経っても吹雪が弾き飛ばされることはなかった。

「……」

「なッ!?」

シュートと吹雪の間に立ったのはジェネシスであるネビュラ。敵のはずのネビュラが吹雪を守るような行動に出たことに雷門イレブンは勿論、ジェネシスの誰もが衝撃を受けた。

真正面からシュートに対して蹴り込むネビュラ。深紅のエネルギーがボールに対して徐々に注がれていくと、元々シュートに込められたエネルギーと反発しあってやがて爆発を起こす。

爆風によって巻き上げられた砂塵に誰もが視界を隠す。それが晴れる頃にはボールを足蹴にするネビュラの姿があった。

「ネビュラ……なぜ邪魔をしたんだい？」

「お前、吹雪を……俺達を守ってくれたのか!?」

グランが、円堂がネビュラに問い掛ける。

しかし返ってきたのは返答ではなく、苦悶の声。

「が、がアアッ!?」

頭を抑えながらのたうち回るネビュラ。その異様としか呼べない光景に誰もが言葉を失う。

（なぜ私はこんなことをした!?なぜ敵であるコイツらを守らねばと思っただけ!?なぜ私は——）

直後、ネビュラの脳裏に過ぎつたのは雷門イレブンのまるで仲間として一緒にいたかのような記憶。

『柊弥！サッカーやろうぜ！』

『行くぞ！柊弥アア!!』

『加賀美先輩！いつも頼りにしてるっス!!』

『私は、柊弥先輩のことが好きです』

「アッアッアッアッアッ ツツツツツツ!!?」

その時、ネビユラの目元に取り付けられた機械がバチバチと音を鳴らし、煙を上げる。顔を襲う灼熱感。それに耐えきれずネビユラは外れないはずのその機械を力づくで剥ぎ取る。

ガシヤリと重い音が辺りに木霊する。

そして、とうとうその内側に隠されていた全てが晒される。

「——柊、弥?」

「おい……嘘だろ?」

「……マズイな、これは」

頭を抑えていたネビユラ……いや、雷門中副キャプテン加賀美 柊弥は、やがて立ち上がって周囲を見渡す。

頭の中に残る最後の記憶は奈良の公園でのこと。止まった時間が動き出した柊弥は今のこの状況を呑み込めない。

「ここは……何処だ? 何で俺はこんなユニフォームを着て……?」

「——柊弥先輩ツツ!!」

誰よりも早く動き出したのは音無だった。ベンチから飛び出すようにしてフィールド内に入り込み、柊弥の元へと走り出す。

しかし突如として巻き起こった突風によりその途中で動きを止める。

「予想外の事態だ……ここで撤退する」

「がッ……誰だお前、離せッ……!」

その正体はグラン。手早く後ろに回り込んで身動きを制限したグランはすぐさま他のメンバーを集め、エイリア学園の黒いボールを起動する。

再び柊弥の元へ走り出そうとした音無だったが、鬼道によって止められる。

「離してお兄ちゃん!」

「ダメだッ!!危険すぎる!!」

「それじゃあね円堂君、またそのうち」

「守、鬼道、皆ッ!!」

このままでは皆と離れ離れになる。そう理解した柊弥は手を伸ばして助けを求める。力の限り抵抗するが、グランの拘束は振り解けない。

やがて辺りを光が包み込む。

「春——」

柊弥が春奈の名を呼ぼうとしたその瞬間、一際強く発行して柊弥が、ジエネシス達がその場から姿を消す。

「嫌、嫌あああああ!!!」

身を裂くような慟哭だけが、その場に残された。